国立国語研究所学術情報リポジトリ

Texts of tape-recorded conversations in Japanese dialects (Volume 3)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-10-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002272

方言談話資料(3)

—青森・新潟・愛知—

国立国語研究所資料集　10-3

国立国語研究所

1980

国立国語研究所資料集　10-3

方言談話資料（3）

――青森・新潟・愛知――

国立国語研究所

1980

刊　行　の　こ　と　ば

国立国語研究所では，昭和49年度から51年度にかけて，「各地方言資料の収集および文字化のための研究」という題目の下に，全国各地で方言による談話を録音し，その文字化（標準語訳・注つき）を行った。この研究は，急速に失われつつある方言を現時点で録音・文字化し，国語研究の基本的資料とすることを目的としており，当研究所地方研究員の協力を得て実施された。

その成果は，機を得て，順次刊行する予定であり，昨年度までに，『方言談話資料(1)—山形・群馬・長野—』『方言談話資料(2)—奈良・高知・長崎—』を刊行した。本年度は，その第三集（本書）および第四集を刊行する。

本書に収めた録音・文字化資料は，もっぱら，松本宙（青森県担当地方研究員・宮城教育大学助教授）・佐々木隆次（同協力者・青森県立郷土館研究員），剣持隼一郎（新潟県担当地方研究員・長岡工業高等専門学校講師），山口幸洋（愛知県担当地方研究員）の四氏の尽力によるものである。また，話者もしくは司会者として，桜田鉄彌，棟方トミ，八木沢千代三郎（以上青森県），高橋鹿之助，高橋清治，高橋孝宣，高橋チエノ，高橋初枝，高橋真，高橋マツノ，高橋ミサノ(以上新潟県），武田初夫，武田ふさ，武田やすゑ，田辺正一，堤ふじよ（以上愛知県）の各氏の協力を得たほか，有志の助力があった。記して深く感謝の意を表する。

昭和55年１月

国立国語研究所長　林　　大

方言談話資料作成のための担当者

国立国語研究所言語変化研究部長

飯豊毅一

国立国語研究所言語変化研究部第一研究室

徳川宗賢（現在，大阪大学教授）　佐藤亮一（室長）　真田信治（研究員）

沢木幹栄（研究員）　白沢宏枝（研究補助員）

国立国語研究所地方研究員（五十音順）

秋山正次	愛宕八郎康隆	五十嵐三郎	井上章	井上史雄
今石元久	岩井隆盛	上野勇	遠藤潤一	大島一郎
大橋勝男	岡野信子	奥村三雄	筧大城	加治工真市
加藤信昭	加藤正信	金沢直人	川本栄一郎	神部宏泰
剣持隼一郎	後藤和彦	小松代融一	斎藤義七郎	迫野虔徳
佐藤茂	佐藤虎男	清水茂夫	杉山正世	田尻英三
種友明	玉井節子	近石泰秋	土居重俊	日高貢一郎
日野資純	広戸惇	廣濱文雄	北条忠雄	本堂寛
馬瀬良雄	松本宙	三浦芳夫	虫明吉治郎	村内英一
室山敏昭	谷開石雄	矢作春樹	山口幸洋	山本俊治
和田實				

「方言談話資料」（３）編集担当者

飯豊毅一　佐藤亮一　真田信治　沢木幹栄　白沢宏枝

収録・文字化担当者（協力者）

青森…松本宙（佐々木隆次）　新潟…剣持隼一郎　愛知…山口幸洋

目　　次

刊行のことば…… 3

ま え が き…… 7

凡　　例…… 10

I　青森県青森市大字牛館

解説…… 13

1．田打ちの頃…… 21

2．繩綯(なな)い…… 28

3．つらい農作業…… 35

4．堆(にお)と小作米…… 45

5．牛館橋(うしたてばし)…… 61

6．川のさかなとり…… 82

7．お山(岩木山)の参詣…… 91

8．ボサマ…… 113

9．青森空襲…… 119

II　新潟県柏崎市大字折居字餅粮

解説…… 139

1．昔の労働…… 163

2．冬の仕事…… 197

3．養　蚕…… 219

4．雪の中の生活…… 242

5．冬の楽しみ…… 279

III　愛知県北設楽郡富山村中の甲

解説…… 303

1．身辺雑事…… 311

2．うわさ話など…… 335

3．盆唄のこと，亡き夫のこと…… 366

ま　え　が　き

研究の経過

この研究は，昭和49年度から同51年度にかけて行った。

昭和49年度は準備期間とし，全国47都道府県で各種の実験的録音・文字化を行い，その結果に基づいて，次年度以降の計画を立案した。

50年度は，全国的視野のもとに重点地域を定め，23の府県から各1地点を選定して，老年層の男性と同女性との対話，もしくは，男女を含む老年層話者3人の会話を録音し，文字化することとした。

録音・文字化を実施した府県は次の通りである。

青森,* 岩手，宮城,* 山形，群馬，千葉，新潟，石川,* 福井，長野，静岡，愛知，京都，奈良，鳥取，島根，広島，愛媛，高知，長崎，宮崎，鹿児島,* 沖縄

51年度は収録地点を4地点減らし(*印の県を割愛した),19の府県について，原則として50年度と同一の地点で，(a)目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話，(b)老年層の男性と若年層の男性との対話，もしくは，両者を含む3人の話者の会話，(c)場面設定の会話，の3項目についての録音・文字化を行い，なお，このほかに収録可能な地域では，付録として，民話の収録・文字化も実施することとした。(c)については,「品物を借りる」「(旅行などに)誘う」「新築の祝いを述べる」「隣家の主人の所在をたずねる」「けんかをする」「道で知人に会う」「道で目上の知人に会う」「うわさ話をする」の八場面を，全地点共通の場面として設定した。

以上の録音・文字化資料は，すべて国立国語研究所で整理し，保管しているが，当研究所では，このうち，50・51両年度分について逐次刊行していく予定である。本書は，50年度に収録・文字化を行った老年層話者による談話資料のうち,「青森県青森市大字牛館」「新潟県柏崎市大字折居字餅粮」「愛知県北設楽郡富山村中の甲」の3地点分についてのものである。

話者の条件

話者には次の条件の人を選ぶこととした。

1．老年層話者による談話（50年度）

その土地で生まれ育ち，よその土地に住んだことのない，あるいは，その期間が比較的短い人で，日常の生活ではもっぱら方言を用い，また，録音機を前にしても方言色豊かなおしゃべりが可能な人。したがって，よその土地から嫁入り，婿入りした人は採らない。ただし，女性については，他に適当な人が得られないときには，近隣地から嫁入りした人でも，収録地点との間に大きな方言の違いが認められない場合は可とする。話者の年齢は，原則として収録時において60歳以上とし，やむをえないときは，55歳以上も可とする。発音その他の障害がなければ，高齢者で

も差し支えないが，話者相互の年齢が離れすぎるのは好ましくない。また，話者相互の地位・身分関係も，ほぼ対等であることを原則とする。

2．目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話（51年度）

話者の年齢は上記1に準ずる。この項は，改まった表現や種々の敬語形式などを得ることをねらって設定したものであり，対話の具体的な人物像として，たとえば，旧地主階層の人物対旧小作階層の人物，僧侶対その壇家にあたる人物，その土地出身の教員（校長など）対その土地の一般的職業（農業・漁業など）に従事している人物などを候補として示したが，地域の事情もあると思われるので，この点は各地の担当者（地方研究員）に一任した。なお，目上にあたる人物として，在外期間の比較的長い人物を登場させなくてはならない場合もあると考えられるので，在外歴に厳しい条件はつけないことにした。

3．老年層男性と若年層男性との談話（51年度）

老年層については原則として60歳以上，若年層については原則として20～30歳台とする。話者相互の地位・身分関係は，ほぼ対等であることが望ましい。職業は老若ともにその土地における一般的なものであること。在外歴については1に準ずる。

4．場面設定の会話（51年度）

上記1に準ずる条件を備えた老年層の男女に，場面に応じて，種々の演技的対話をしてもらった。

5．民話

特に条件はつけず，その土地で生まれ育った民話の語り手であれば可とした。

司会者

主たる話者のほかに，話の引き出し役としての司会者が同席することとした。司会者はこの研究の主旨を理解し，かつ，司会役としての能力を有する地元方言の話し手が望ましい。司会者の年齢・居住歴等に，特に条件はつけなかった。

録音量・文字化量

50年度・51年度ともに各約60分程度の録音量（51年度については，各項目平均20分，合計60分程度）について文字化を行うこととした。また，内容の豊かな文字化資料を得るために，文字化すべき録音量の数倍を録音し，その中から適切な部分（話がとぎれず，しかも発言が特定の話者にかたよっていないこと。話の流れ，話題の展開が自然であること，など）を選択して文字化することとした。

文字化原稿の作成・表記

1．将来のオフセットによる複製印行に備えて，一定の様式の文字化用紙を作成し，担当地方研究員に配布した。

2．文字化は原則として表音的カタカナ表記によることとした。これは，利用者の便宜，文字化作業の能率などを考慮してのことである。ただし，対象とする方言の性格によって，カナ表記

では特殊な字母を多数必要とし，かえって煩雑になると判断される場合は，国際音声字母による表記も可とした。なお，それぞれのカナで表わす具体的音声の範囲・内容については，各担当者が「解説」の中で説明することとした。

3．アクセント，文末イントネーションの記述の有無は，その表記法を含めて担当者の判断にまかせた。

4．聴き取りが困難な箇所や，言いよどみ，言い重なり，言い直し，笑い声などについては，これらを一定の符号で表わすことにした（凡例参照）。

文字化には，標準語訳，および，場面，文脈，特徴的音声，方言形の意味・用法などについての注をつけることとした。なお，標準語訳はあくまでも内容理解のための手がかりの一つと考え，訳が問題となるような箇所については，できるだけ詳しい注をつけることを担当者に求めた。

収録方言・表記・収録内容についての解説

文字化原稿とは別に，収録方言・表記・収録内容についての解説を担当者に求めた。解説には，原則として次の事項を記すこととした。

A．収録地点とその方言について

1．地点名

2．収録地点の概観（位置・交通・地勢・行政区画の変動・戸数・人口・主な産業など）

3．収録した方言の特色

①方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

②音声・音韻上の特色

③文法上の特色

B．表記について

それぞれの符号（カナ・音声符号）で表わす具体音声の範囲，特殊な表記についての説明など。

C．収録内容の概説

1．タイトル

2．録音年月日

3．録音場所

4．話し手の氏名・性・生年・職歴・役職歴・居住歴・言語的特徴など

5．録音環境（同席者・話の進行状況・場の雰囲気など）

凡　　例

1．場面，文脈，特徴的音声，方言形の意味・用法などについての注は各章の末尾にまとめて記し，該当箇所を本文のそれぞれの位置に番号（かっこつき）で示した。

2．発言や録音が不明瞭なため聴き取りが困難な箇所には～～～線をつけた。

例　タエデ　ハー〈50ページ10段〉

3．最終的に聴き取り不能の箇所には～～～線のみを記した。

4．言いよどみは，その末尾に……線をつけた。

5．複数の発言が重複した場合には，重複部分に＿＿線をつけた。

例　A　アマテ　マタ　ヤヅヨ。（Bアマテ　マタダ）

6．言いかけて，それを言いなおした場合には，言いかけた部分にxxxxxxxxをつけた。

例　カネ　カネ　トルアダエ。〈53ページ11段〉
　　xxxx

7．笑い声，咳ばらいなどは，（笑），（咳）のように示した。

8．同席者の短い発言や突然の訪問者のことばなどは文字化していない場合がある。その際や，録音テープを編集して談話内容の一部を削除した際には，該当箇所に＊の符号をつけた。

Ⅰ．青森県青森市大字牛館（うしたて）

収録・文字化担当者　松　本　　宙
〃　　協力者　佐々木　隆　次

A　収録地点とその方言について

1．地点名

青森県青森市大字牛館　　（収録場所　大字牛館字松枝73 桜田敏光氏宅）

2．収録地点の概観

位置　青森市の中心部から南方に位置し，青森駅から約6km。

交通　青森駅から南方へバスで約20分，荒川十文字停留所下車。東へ徒歩で15分。

地勢　青森平野のほぼ中央部にあり，北側は荒川が流れ，それを隔てて，大字「八ッ役（ゆみあざやくや）」の家並み（ほとんど農家）が続いている。東西南側は田園がひらけている。

行政区画の変動

古記録では室町時代から人が住み，専ら農業を営んできた。明治初期から行政区画上，東津軽郡横内村の一支村となったが，横内村は昭和30年に青森市に編入することとなり現在に及んでいる。

戸数・人口・主産業

青森市の人口は，昭和53年9月30日現在で，男136,100人　女144,991人　計281,091人。世帯数86,838。

収録地の牛館の人口は，昭和53年9月現在で，約100人　世帯数22。この牛館は，米作りがほとんど，他に野菜等の主産がいくらかで出稼者は一人もいない。なお，一家の主たる父はほとんど勤め人（つとめにん）であり，その妻が農業に従事している家庭が多い。

3．収録した方言の特色

①　方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

北奥方言区に属する。青森県は津軽方言地区と南部方言地区に西東に二大別する。この調査地点は津軽方言地区にある。津軽地区は四市五郡から成り，この青森市は江戸時代後期から港町として急速に発展した，いわば新興都市である。しかし，収録地「牛館」は海沿いに発展した青森市中心部から約6km離れた後背の地であり，記録では室町時代から村落のあった歴史の古い地である。現在，周辺が住宅地等造

成で開発されている中で、戸数の増減も少なく閑静な場所である。従ってことばも古老間には青森の在郷としてかなり古態が保たれている。

青森市は陸奥湾岸沿いに平内町（東津軽郡）を隔てて南部地区にそれ程遠くない位置にあるが、南部方言の影響はまったくないと言ってよい。津軽方言地区は互いにほとんど差はないが、この地点は内陸部の弘前市や南津軽郡に比して一般に話調が早く乱暴な感じがある。

② 音韻上の特色

音韻一覧とそれに応ずるカタカナを記す。

ア	イ	ウ	エ	エ$_{ア}$	オ	ヤ		ユ		イ$_{ア}$	ヨ	ワ	エ$_{ア}$
a	ï	ü	e	ɛ	o	ja		jü		jɛ	jo	wa	wɛ
カ	キ	ク	ケ	ケ$_{ア}$	コ	キ$_{ヤ}$		キ$_{ユ}$			キ$_{ヨ}$	ク$_{ワ}$	ク$_{エア}$
ka	kï	kü	ke	kɛ	ko	kja		kjü			kjo	kwa	kwɛ
ガ	ギ	グ	ゲ	ゲ$_{ア}$	ゴ	ギ$_{ヤ}$		ギ$_{ユ}$			ギ$_{ヨ}$	グ$_{ワ}$	グ$_{エア}$
ga	gï	gü	ge	gɛ	go	gja		gjü			gjo	gwa	gwɛ
ガ	ギ	グ	ゲ	ゲ$_{ア}$	ゴ	ギ$_{ヤ}$		ギ$_{ユ}$			ギ$_{ヨ}$	グ$_{ワ}$	
ŋa	ŋï	ŋü	ŋe	ŋɛ	ŋo	ŋja		ŋjü			ŋjo	ŋwa	
サ		ス	セ	セ$_{ア}$	ソ	シ$_{ヤ}$		シ$_{ユ}$	シ$_{エ}$	シ$_{エア}$	シ$_{ヨ}$		
sa		sü	se	sɛ	so	ʃa		ʃü	ʃe	ʃɛ	ʃo		
ザ			ゼ	ゼ$_{ア}$	ゾ	ジ$_{ヤ}$		ジ$_{ユ}$	ジ$_{エ}$	ジ$_{エア}$	ジ$_{ヨ}$		
za			ze	zɛ	zo	dʒa		dʒü	dʒe	dʒɛ	dʒo		
タ			テ	テ$_{ア}$	ト	チ$_{ヤ}$		チ$_{ユ}$	チ$_{エ}$	チ$_{エア}$	チ$_{ヨ}$		
ta			te	tɛ	to	tʃa		tʃü	tʃe	tʃɛ	tʃo		
ダ		ヅ	デ	デ$_{ア}$	ド								
da		dzü	de	dɛ	do								
ツ$_{ア}$		ツ	ツ$_{エ}$	ツ$_{エア}$	ツ$_{オ}$								
tsa		tsü	tse	tsɛ	tso								
ナ		ヌ	ネ	ネ$_{ア}$	ノ	ニ$_{ヤ}$	ニ	ニ$_{ユ}$			ニ$_{ヨ}$		
na		nü	ne	nɛ	no	ɲa	ɲï	ɲü			ɲo		
ハ			ヘ	ヘ$_{ア}$	ホ	ヒ$_{ヤ}$		ヒ$_{ユ}$			ヒ$_{ヨ}$		
ha			he	hɛ	ho	ɕa		ɕü			ɕo		

		フ	フェ	フェァ		フィャ				
		ɸɯ̈	ɸe	ɸɛ		ɸʲa				
パ	ピ	プ	ペ	ペァ	ポ	ピャ		ピュ		ピョ
pa	pʲi	pɯ̈	pe	pɛ	po	pʲa		pʲɯ̈		pʲo
バ	ビ	ブ	ベ	ベァ	ボ	ビャ		ビュ		ビョ
ba	bʲi	bɯ̈	be	bɛ	bo	bʲa		bʲɯ̈		bʲo
マ	ミ	ム	メ	メァ	モ	ミャ		ミュ		ミョ
ma	mʲi	mɯ̈	me	mɛ	mo	mʲa		mʲɯ̈		mʲo
ラ	リ	ル	レ	レァ	ロ	リャ		リュ	リェア	リョ
ra	rʲi	rɯ̈	re	rɛ	ro	rʲa		rʲɯ̈	rʲɛ	rʲo
ン	ッ	ー								
N	Q	:								

ア) 「イ」と「エ」が混同する。あるいは「イ」は「エ」に吸収されやすい。例、「息」「駅」は〔ïgï〕か〔egï〕であり「犬」「杭」は〔ïnɯ̈〕〔kɯ̈ï〕か、〔enɯ̈〕〔kɯ̈e〕である。そして、どちらかといえばいずれも後者を多く発音する。

イ) 連母音の「-アイ〔-ai〕」「-アエ〔-ae〕」「-オイ〔-oi〕」「-イエ〔-ie〕」「-ウエ〔-ue〕」は「-エァ〔-ɛ〕」になることがある。例「暗い」は〔kɯ̈rɛ〕、「お前」は〔omɛ〕、「おもしろい」は〔omosɯ̈rɛ〕、「消える」は〔kɛrɯ̈〕、「食え」は〔kɛ〕。

しかし、変化しないこともあり、まえ〔e〕になることもあり、かなり恣意的である。

ウ) 「シ」と「ス」は区別がない。例「獅子」「寿司」「煤」は〔sɯ̈sɯ̈〕であり、「腰」「越す」は〔kosɯ̈〕である。

エ) 「チ」と「ツ」は区別がない。さらに語中語尾の「チ」は有声化して「ヅ〔dzɯ̈〕」となることが多い。例、「乳」は〔tsɯ̈tsɯ̈〕、「力」は〔tsɯ̈kara〕、「内」「勝ち負け」は〔ɯ̈dzɯ̈〕〔kadzɯ̈mage〕。

オ) 「ジ」「ヂ」「ズ」「ヅ」は区別がない。例、「時代」「鼻血」「鈴」「図画」は〔dzɯ̈ⁿdae〕〔hanaⁿdzɯ̈〕〔sɯ̈ⁿdzɯ̈〕〔dzɯ̈ga〕。

カ) 「セ」が「ヘ」になりやすい。例「洗濯」「稼ぐ」は〔heN dagɯ̈〕

〔kahegü〕。

キ) 「ヒ」は「ヘ」「フ」あるいは「ス」になることがある。例、「人」は〔heto〕〔φüto〕〔süto〕。「火」は〔he〕〔sü〕。「昼間」は〔herüma〕〔φürüma〕〔sürüma〕。

ク) 語中語尾の「リ」「レ」は「エ」になることがある。例、「借りる」「流れる」は〔kaerü〕〔nagaerü〕。

ケ) 「クヮ、グヮ、ヴヮ」「フェ、フェア、フィヤ」は老年層（60歳以上）に多く残っていて使われる。例、「喧嘩」「馬鍬」「真桑」は〔keNkwa〕〔maᵑgwa〕〔magwa〕。「減る」「箇」「百」は〔φerü〕〔φɛ〕〔φjagü〕。

コ) 語中語尾のカ行子音、タ行子音は有声化（濁音化）する。例、「駅」「伺く」は〔egï〕〔mügü〕。「歌」「音」は〔üda〕〔oto〕。

サ) 語中語尾のガ行音、ダ行音、ザ行音、バ行音は鼻濁音化する。同時に撥音便がをずることにもなるが、完全な撥音ではなく標準語の半分ほどの長さになることが多い。例、「鍵」「窓」「水」「蛇」は〔kaᵑgï〕〔maⁿdo〕〔mïⁿdzü〕〔heᵐbï〕。

シ) 濁音が清音化することもある。例、「わずか」「何時頃」は〔waⁿtsükа〕〔naⁿtsükoro〕。

ス) 動詞終止形連体形の活用語尾「ウ」は「ル」になることが多い。例、「歌う」「買う」「狂う」は〔üdarü〕〔karü〕〔kürürü〕。

セ) 形容詞終止形連体形の活用語尾「イ」は消滅することが多い。例、「苦しい」「恐しい」は〔kürüsü〕〔osorosü〕。

ソ) 形容詞連用形の活用語尾「ク」は「フ」になることが多い。例、「無くて」「おもしろくて」は〔naφüte〕〔omosüroφüte〕。

タ) 形容動詞連体形の活用語尾「ナ」は「ダ」となる。例、「変な」「静かな」は〔heNda〕〔süⁿdzügada〕。

チ) 長音、撥音、促音は完全に発音せず、標準語に比して半分ほどの長さになることが多い。または、消滅することもある。従って聞き取りが非常にめんどうである。発音しない例、「放送局」は〔hosokjogü〕、「勝った」は〔kata〕。

③ 文法上の特色

ア) 普通は主格、目的格の助詞を省略する。例、「エヌ　エダ。(犬がいた)」「メス　クタ。(飯を食った)」

しかし、強調したり、特に提示したりする事物等には「バ」「ゴト」「キャ」「ダキャ」「バダキャ」を使う。例、「ハエバ　タダゲ(蠅を叩け)」「ワゴト　ドスノヤ(吾をどうするのだ)」「ワキャ　ネゲダ(吾は逃げた)」「マバダキャ　フパエネ(馬を引っぱれない)」「オエサダキャ　コネ(俺家には来ない)」

イ) 名詞に接尾辞(指小辞)の「コ」が付く。例、「猫コ」「傘コ」

ウ) 可能表現は「～するによい」、不可能表現は「～られない」の形式をとる。例「見ルニエ」「見ラエネ」

エ) 自発表現は「～サル」を使う。例、「書ガサル」

オ) 現在の存在・継続「てある・ている」は「テラ」を使い、過去、過去の存在・継続、過去完了「てあった・ていた、であった、でいた」は「テタ、デタ、テアッタ、デアッタ」を使う。例、「本　置エデラ」「餅　有ッテラ」「魚　エデタ」「雨　降ッテタ」「坊ヅ人　アッテアッタ」

カ) 形容詞連用形、形容動詞連用形はそれぞれ「クテアッ(タ)、クテ(タ)」「デアッ(タ)、デ(タ)」を使う。例、「良クテアッ(タ)、大キクテ(タ)」「静ガデアッ(タ)、変デ(タ)」

キ) 場所・方向を示すのに「サ」を使う。例、「家サ居ル。山サ行グ」

ク) 理由表現「ので、から」は「ハンデ、ハデ、ドゴデ」を使う。例、「働グハンデ儲ゲル、働グドゴデ儲ゲル」。

ケ) 仮定条件、確定条件は「バ」を使う。例、「良バ　ソ　ヘ。(良いならそうしろ)」「田ノ草取テエレバ　ヘコキ　キタゼァデ～。(田の草を取っていると飛行機が来たそうだといって～」

コ) 逆接条件は「バテ、バタテ」を使う。例、「勝タバタテ後味悪リ」

サ) 推量は「ベ、ベー」、例、「エフテタベ。(良かったろう)」。また「エンタ」。例、「何処サモ無エンタ。(何処にも無いようだ)」

シ) 意志は「ベス、ベ、ベー」。例、「行グベス、行グベ(行こう)」

ス) 間投詞。実際には、副詞、接続詞、感動詞等のいずれか判別不可能

のものが多く、「ことばを引き出すため、単なることばつなぎのため、息つぎのため」の役割を持っている。例、「マヅ、マンヅ、ソエゴン、ソステ、ステ、テ、コンド、コンドア、コンダ、ホラ、ホラー、ホロ、ホロー、ロー、ウン、ウーン、ウ、アー、アン、ハー、ナー等」

セ) 文末のことば：標準語より少数が多く、さまざまなニュアンスがあり、適切な標準語訳をつけることができないほどである。例、「ホンダエナー（そうだよなあ）。コナグナッタオナー（楽なくなったものなあ）。ワダラエネセー（済られないよ）。ネゲダアダ、ネゲダヤダ、ネゲダアヅ、ネゲダヤヅ（逃げたのだ）。ツクッタヅ（作ったのだ）。ケネヤー（くれないよ）。マネヅヨー（だめなんだよう）。クタジャ（食ったよ）。クタネ（食ったよ）。マネキャ（だめだよね）等」

ソ) 敬語は親しい間柄では年齢に関係なくほとんど使わない。せいぜい改まった気持ちの際に「～ネス、～ノ」を使う程度である。例、「ソンダネス（そうですねえ）。ホンダエノ（そうですねえ）」これらは最高敬語であり、「ノ」より「ネス」が敬意は高い。

4. その他

① 地点選定理由

青森市は文字化担当者（佐々木隆次）の生育した地であり、文字化の際には困難が少ない。収録地点は文字化担当者の母の生地であり、条件に適した話者を求めやすかった。

② 協力者の氏名及び協力内容

- 桜田敏光　農業　51歳。文字化担当者の叔父にあたり、この家を収録場所とした。また、文字化、標準語訳を行う際に不明の箇所を判断してもらった。
- 村上　譲　青森県立青森中央高校教諭（国語科）　40歳。事前に録音技術の指導を受けた。また、文字化の際、微妙な発音箇所を判定していただいた。
- 高山　治　青森県立青森南高校教諭（国語科）　31歳。文字化の際、微妙な発音箇所の判定及び一部清書を手伝っていただいた。

B　表記について

長音．促音．撥音は標準語に比して半分程の長さで発音することが多い。ここではひとつひとつ表記はせず、標準語と同様の長さに聞き取った場合のみ文字化することにした。

あいづちは「アー、ウン、ウー、ウーン　等」にした。実際の音声は［a:，aN，a:N，ï:，ü:，ü:N，ə:，ə:N，N 等」で他のカタカナ表記と紛らわしいため、ほとんど標準語に近い表記に統一したものである。

C　収録内容の概略

全部．同一の日に同一の話者で収録したため、ここに一括して掲げ，各話題別には話者のみ記すことにする。

1．タイトル

1　田打ちの頃　　2　縄綯い　　3　つらい農作業
4　堆と小作米　　5　牛館橋　　6　川のさかなとり
7　お山（岩木山）参詣　　8　ボサマ　　9　青森空襲

2．録音年月日

昭和53年9月5日(火)　午後1時～午後3時40分

3．録音場所

青森市大字牛館字松枝乃書地　桜田敏光氏宅

4．話し手の氏名・性・生年・職歴・居住歴・言語的特徴

A　桜田鉄彌　男　明治36年12月1日生　農業（自営）　この収録地点に生育し、まだ一度も他所に居住したことがない。ほんの少し耳が遠くなったらしく補聴器をつけているが、言語動作共に常人と何ら変りない。古いことば・発音を有している人はこの人が唯一である。例．〔中〕音。また．間投詞的使用として「それこそ（ソエゴソ）。こんど（コンド．コンドア．コンダ）。ほら（ホラ．ホラー．ホロー．ホロ．ロー）」がしきりに発せられる。話好きで話題が豊富である。

B　八木沢千代三郎　男　明治43年9月4日生　農業（自営）のかたわら地元郵便局に大正14年～昭和37年まで勤務（配達業務）昭和20年に約3か月間．横須賀市海兵団に勤務。この3か月間

以外は地所に居住したことはない。話し手のAほどではないが、「こんど、ほら」が発せられることも多い。話好きで話題豊富。

C　棟方トミ　女　大正2年7月20日生　農業（自営）　この地点から5kmの西方の「細越（現在は青森市内）」から嫁入りし、以後この地に居住。「へをなす」の言い方を再三再四使用するが、これは、一種の臆化表現法と言うべきもので、前後のことばに明確な表現をしていることが多い。話好きで話題豊富。

上記三人に共通している言語特徴として間投詞「はあ（ハー）。あら（アラー、アラ、ラー）」が頻発されることである。

（D　佐々木隆次（男）は司会役、録音係をつとめたが、タイトル3、8　それぞれの一回だけ発言がある。）

5．録音環境

同席者一人。佐々木隆次（司会役、録音者、文字化担当者）

ほとんど自動車の通らない場所であり、家中に表戸もいず、騒音の障害は何もなかった。

長老格の桜田鉄彌氏が話のきり出し役をつとめた。三人は気心の知れた者同志であり、なごやかな雰囲気で笑いなどしながら、予定していた話題の枠とに縛ることなく自由に思うぞんぶん話した。

1. 田打ちの頃

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
A	桜田 鉄彌	男	明治36年生れ
B	八木沢千代三郎	男	明治43年生れ
C	棟方 トミ	女	大正2年生れ

A ムガスダバナー ソエゴソ サンガヅデバハー (B ウン) タ
昔ならなあ それこそ 三月といえばはあ (うん) 田(を)

ウヅ ウヅ スタオナー。 (B ウン) エマダバ ゴガヅダノ
打ち 打ち したものなあ。 (うん) 今なら

ー (B ウンウン) ゴガヅサ ハネ ウヅ タ ウダネバタテ
(うんうん) 五月に はいらないうち 田(を) 打たないけれど

ヤッパリ ムガス、ホラ (B ウン) テデバリ ヤルドゴデ
やっぱり 昔 ほら (うん) 手でばかり やるので

(B ウン) ハヤグネバ マエネハ゛デハー サンガツ(1) ユギ
(うん) 早く ないと だめだから はあ 三月 雪(が)

ケデハー (B ウン) ワンツカ カワゲバハー ノー(2) ミンナ
消えてはあ (うん) わずか 乾くとはあ のう みんな

ハー (C ホンダネナー) サンボクヮデ ハー (C ウンウ
はあ (そうだなあ) 三本鍬で はあ (うんう

ン) ウッテ。
ん) 打って。

B　アエ　サンツコロネ　エグンデ　ネガー、アサノ。
あれ　三時頃に　行くんで　ないか、朝の。

A　ウー　サンヅ。ハエ　ヘトダキャヨー　（B　ウン）　ハー　ジュ
うん　三時。早い　人はよう　（うん）　はあ　ナ

ニヅ　スギレバ　（B　ウンウン）　ホー　オギデ　エグヤデー
二時　過ぎると　（うんうん）　ほう　起きて　行くのだ

ウン。
うん。

B　ウン　メス　カネデー。
うん　飯(は)　食わないで。

A　メス　カネデ。
飯(を)　食わないで。

B　ウン　ホスモヅ　モッテナ　（笑）。
うん　干し餅(を)　持ってな　。

A　ウーン　ホスモヅ　モッテ　ホラー　ウン　ステハー　ス　ツヅ
うーん　干し餅(を)　持って　ほらあ　うん　そしてはあ　ス(が)　土

スミデラハンデ　クヅ　ナンダ　ワラヅヅトカ。
凍ってるので　屑　なんだ　藁履とか。

B　ワラヅヅ　ハエデッタ　モンダエナー。
藁履(を)　はいていった　もんだよなあ。

A　ウー　ツマゴ(3)　ハグトカ　ステヨー。　ステハー　クレドゴデ　オ
うん　爪籠　履くとか　してよう。そしてはあ　暗いので

ドゴダバヨー　（B　ウン）　カッツカッツカッヅ　オド　スバタ
男ならよう　（うん）　かっちかっちかっちという　音(が)するけれど

テ　フト　メァネヤダエナー。（B　ウン）　ンー。コンダ　アガ
人(は)　見えないのだよなあ。（うん）　うん。今度　明

ルグ　ナレバヨー　ハンヅメデ(4)　コンダ　エヨー　アッコノ　フト
るく　なるとよう　初めて　今度　やあ　あそこの　人
ダネラー。(5)ヅンブ　ハイァナーナンテ　(B　ウンウン　うんうん)　ホラ　ウ
だよあらあ。ずいぶん　早いなあなんて　(B　うんうん)　ほら　う
ー。
ん。

C　エグ　ヅギハー　ミンナハー　オナゴンド(6)ダバ　キナガヤグ(7)　(B
行ぐ　時はあ　みんなはあ　女達なら　半人役
ウン)　オドゴンドダバー　フトリエグタ(8)　ヅギハー　(A
B
うん)　男達なら　一人役といった　時はあ
ウン)　ハンブガラ　ウテマッテノー　(笑)　(A　ウン)。
うん)(先の早い人は)半分から　打ってしまってのう　うん)

B　チョンド　スヅンヅゴロニ　メス　クーエンタナー。　コヅガラ　メ
ちょうど　七時頃に　飯(を)食うようだなあ。　こちらから
ス　モテ　エッテヨー。
飯(を)持って　行ってよう。

A　ウー　コンダ　エ　エガラ　ベント　ウウ(9)　モッテ　エッテナー
うん　今度　xxx　家から　弁当(を)　持って　行ってなあ
ウー。
うん。

B　ベント　モッテ　エッテナ。　アノー　スノリヅル　スノリー　ド
弁当(を)持って　行ってな。　あのう　布海苔汁　布海苔　ど
ロドロテ　スノリナー。　(A　ウーン　C　うーん)　アエ　ニデ　オツユニ
ろどろして布海苔なあ。　あれ(を)煮て　おつゆに
ステヨー　ウン　(A　ウン　C　うん)　(笑)　マー　ススルンダナ　マヅ
してよう　うん　まあ　するんだな　まず

ナー（笑）。ステ コンダ ビンサ ツメデ ウン テ(10) スノ
なあ 。そして 今度 瓶に 詰めて うん そして 布海
リヴル カゲデ ホラ ウン（A ウンウウン ホンダ ホンダ
苔汁(を)かけて ほら うん うんうんうん そうだ そうだ
。C ウン）ウン カポエデナ ウン。オキー オ トンヅ
うん うん 急いで食ってな うん。 当時
ノ オキ タサ ハッテヨー ウン。
の 大きい田に 入ってよう うん。

A エヤ アノ マンダ ムガスア マンダ タ ウヅ ヅギダンバ
やあ あの また 昔は また 田(を)打つ 時なら
ニス アガテナー。
鮴(が)あがってなあ。

B ニス アガテナー。
鮴(が)あがってなあ。

A オモニ アラー ニスンバリハー。ニス ヤエデー ウーン。
主に あらあ 鮴ばかりはあ。鮴(を)焼いて うーん。

B ニスンダバ アギデマルダゲ クタエンタナー。ジェンコ アレ
鮴なら 飽きてしまうだけ 食ったようだなあ。銭 こ(が)あれ
バヨー。
ばよう。

A ニスダバ クタモンダナー。ニー ニス アガテ ニス アガテ。
鮴なら 食ったもんだなあ。 鮴(が)あがって 鮴(が)あがって。

C ナー クツコロテ ヘレバ ウッテマッテ デ エサ モンドテ
なあ 九時頃と いうと 打ってしまって で 家に 戻って
キテー ノー ア ミンナステ コンダ ハー（A ウーン
来て のう ああ みんなで 今度 はあ うーん）

ワゲモンド　ワゲモンドドア(11)　アスブネ　アルエテ　（A ウンダ そうだ）
若い者達(は)　若い者達と　遊びに　歩いて
（笑）

A　チュハンメァニハー　ノー　ウッテマッテー。
昼飯前にはあ　のう　打ってしまって　。

B　タエデハー　ジュンヅ　ジューエツヅコロニ（A ウン うん）　ナレ
たいていはあ　十時　十一時頃に　なる

バ　ウッテマルンデ　ネガナー。
と　打ってしまうんで　ないかあ。

A　ハイァ　ヘトダバハー　チュハメァニ　ジュンツコロニ（A ウン）
早い　人ならはあ　昼飯前に　十時頃に

ハー　スマテマルジャー。
はあ　しまってしまうよ　。

B　コエダハンデ　アサマニ　ハエグ　エグンダオナー　ウン。
これだから　朝に　早く　行くんだものなあ　うん。

A　ソエデ　コンダ　ホラー　チュハンニ　ナッテカラ　ヤスムヤヅ
それで　今度　ほらあ　昼飯に　なってから　休むの(が)

（B ウン うん）　ソレ　マンダ　モースレァ　ワゲセァ。
それ　なお　おもしろい　わけよ。

B　アレア　アサマカラ　バゲマンデダラ　トテモ　トサエル　モンデ
あれは　朝から　晩までだなら　とても　通される　もんで

ネベオン。
ないだろう。

A　アー　トテモ（B ウン うん）　カラダ　アー　カステマルジャ（
ああ　とても　からだ(も)ああ　壊してしまうよ

B　ウン）　ウン。
　　うん）　うん。

C　エマ　ヘバノ。
　　今　そうするとねえ。

B　スタハデ　バゲ　ネデデ　ヤネノ　ホゲァ(12)　カンジョ　スィグレァノ(13)
　　そうだから　晩　寝ていて　屋根の　垂木(を)　勘定　するぐらいの

　　ホラー　（A　笑）　アガリニ　（A　ウン）　デ(14)　ネルンダ
　　ほらあ　（C　笑）　明るいうちに　（　　）　寝るんだ

　　ッテナー　（A　ウー。　C　ンダ）　ハヤグヨー。
　　と言ってなあ　（　うん。　そうだ）　早くよう。

C　ネネンデ　ホゲ　カンジョ　エベステ　ネルアダモノー　（笑）。
　　寝ないで　垂木(の)　数　えようと言って　寝るのだもの　。

B　ヘバ　ハルノ　ホゲァ　カンジョステバ　マー　ナンダガテナー
　　そうすると　春の　垂木(を)　勘定　するといえば　まあ　なんだかと言ってなあ

　　アガリネ　ネデマテハー　ロー　ヨアゲ　オギデ　エグアダオン。
　　明るいうちに　寝てしまってはあ　ほらあ　夜明け　起きて　行くのだもの。

A　スタテ　ロー　アサマニ　ハヤグ　オギネバ　マエネハンデヨー
　　そうはいっても　ほらあ　朝に　早く　起きないと　だめだからよう

　　（B　ウンウン）　スタハンデ　ハー　アガリネ　ハ　ネル
　　（　うんうん）　そうだから　はあ　明るいうちに　は　寝る

　　ワゲセァ。
　　わけよ。

注記

(1)「サンガツ」の「ツ」はこの場合ほとんど発音されていない。

(2) 数少ない、敬意を含む間投助詞で、相手にあいづちを求める意がある。

(3) 高製の雪ぐつ。

(4) 感動詞。少しびっくりした時に使う。

(5)「フトダネラー」の「ネ」は多く使用される文末助詞の一つだが、適切な標準語が見当らない。今仮りに「よ」を当てておくが、勿論、婉曲な調子や敬意はない。

(6)「オナゴンドダバ」の「ンド」は複数を表わす。語源は「ども」。他に「ダヴ(達)」もあるが、少し改った言い方である。なお、「ンド」の「ン」がとれて「ド」を使うことも多い。

(7) 日常会話では「キナギャグ」と言う。録音を意識して「キナガヤグ」と発音したらしい。「キナガ」は「半分」の意であり、「日本国語大辞典 小学館」は「寸半」の字を当てている。「キナガヤグ」は、注記(8)の「フトリエグ」の半人分の作業量をいう。

(8)「フトリャグ フトリヤグ ヘトリャグ ヘトリヤグ」とも言う。一反歩(300坪、10アール)の水田を耕やす、男の一日分の作業量をいう。また、「タ」は「〜といった」の「といっ」を省略した表現。

(9) 無意味の発音。

(10) 接続詞「そして」をよく「ステ」と「ソ」を脱落していうが、更に「ス」までも発音しないことがある。発音しても軽いため録音できないこともある。

(11)「ドア」の「ア」は無意味の発音。ここの文意は「若い者達は若い者達同志で」である。

(12) 昔、茅葺き屋根に使った丸太の垂木。天井板を張っていなかったのでまる見えであった。別に「ホゲ」と発音する。

(13)「する(連体形)」は時には〔S ï〕になることもあり、ここはその例。普通は「ス〔S ɯ〕」である。

(14) 無意味の発音。

2. 縄綯い

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
A	桜田 鉄蔵	男	明治36年生れ
B	八木沢千代三郎	男	明治44年生れ
C	棟方 トミ	女	大正2年生れ

A ヤハー ワゲモンドダバ(1) チュハメァニ スマレバ (B ウン
やはあ 若い者達なら 昼飯前に しまうと (うん

) コンダ ホロー ホガムラサ コンダ メラハンド ミニ エ
今度 ほらあ 他村へ 今度 「娘達(を) 見に 行

グナンテ。(C 笑) ウー(2) ホガノ ホラ ソエゴソ ゴサデモ(3)
く」なんて。 うん 他の ほら それこそ 合子沢でも

スンマヅノデモヨー(4) (B ウン) ヨゴウヅデモ(5) コンダー ウ
新町野でもよう (うん) 横内でも 今度 う

ー ムヅレ(6) キテ スレァ サンジャグ スメデヨー (C 笑)
ん 筒袖 着て 白い 三尺帯 締めてよう

オーハバノー。 コンダ メラハンドノ ドゴサ エッテ エグッ
大巾の。 今度 「娘達の 所へ 行くと

テ ハー アー ナンニモ ソロッテヨー ウーン ソー(7) チュハ
って はあ ああ 何人も 揃ってよう うーん そら 昼飯

ンメァニ ハー オラー フト フトリヤグ(8) ウッテ メラハンド
前に はあ 「俺 一人役 打って 娘達

ミニ キターナンテ ハー ソステ アサグヤダエナー。
見に 来たあ」なんて はあ そして 歩くっだよなあ。

B マー アノ アダリ(9) ドゴノ ダエンレ ナンヅニ オワタナンテ
まあ あの あたり どこの 誰 それ(は) 何時に 終ったなんて

マーデ ハー (A ウー) ウン マヅ ＿＿＿(10)。
まるで はあ (うん) うん まず

A ソエデモ マンダ ホガムラサ エゲバヨー (B ウン) マダ
それでも また 他村へ 行くとよう (うん) また

ワゲモンド エグドゴデ メラハンド マンダ カダマテー(11)。(B
若い者 連(が) 行くので 娘 連(は) また かたまって。(B

ウン) ウン アノ アダリ マダ ホラ ター ウッテマレバ オ
うん) うん あの あたり また ほら 田(を) 打ってしまうと

ナゴンド ワゲァ ホラ メラハドンド アヅバテ (B ウン)
女 連(つれ) 若い ほら 娘 同志(が) 集まって (うん)

ナワー ナッテラダエナー。(B ゴゴナー) ウン (B ウ
縄(を) 綯ってるのだよなあ。(午後なあ) うん (う

ン) ハー ゴニンモ ログニンモ スヅニンモヨー (C ホタ
ん) はあ 五人も 六人も 七人もよう (ほた

コナー(12) 笑) ソロテー ソレ ホラ ホター。
こなあ 揃って それ ほら ほたあ。

C ホタトリ(13) コンダ (A アー) フロスギ カッタリ ホラー
ほた取り(は) 今度 (ああ) 風呂敷(を) 買ったり ほらあ

(B ウン) メァンダリ(14) カッタリステ (A ウン) ナステ(15)
(うん) 前掛け(は) 買ったりして (うん) なして

エル ワゲセァ ウン。
いる わけよ うん。

B ソユ ヅギ カヘンダ アダリ ミンナ ドゴノ フトモ オー
そういう 時 稼いだ あたり みんな どこの 人も

オヤヅデ ネカギリ ミンナ ホッタデ(16) アッタオンナー。(A ウン)
親父で ない限り みんな ほったで あったもんなあ。(A うん)

ウン ヤスマネンデ ナワ ナッテナー (A ウン)
うん うん 休まないで 縄(を) 綯ってなあ (A うん)

ウン。
うん。

A ミンナ スタテ ナワデバリ(17) オモニ ホロー (B ウンウン)
みんな そうはいっても 縄でばかり 主に ほらあ (B うんうん)

クーヤヅ。(B ウン) エマノ ヨニ テマ トル(18) ワゲデ
食うのだ。(B うん) 今の ように 手間(を) 取る わけで

ネス ゲッキュ (B ウン) トルタテ ソー ドゴサモ メッ
ないし 月給(を) (B うん) 取るといっても そう どこにも めっ

タニ ハル(19) ドゴ ネァス エッカダ(20) ホラー タド ナワ ナッ
たに 入る 所(は) ないし 専ら ほらあ 田と 縄(を) 綯っ

テ。(B ウン) ハー ウー。ボンネモ(21) ハー シュ オモニ ナンダ
て。(B うん) はあ うん。盆にも はあ 主に なんだ

ナー ションガヅ クレバ ジェンコ ネァドゴデ ナワ ナッテ
なあ 正月(が) 来ると 銭こ(が) ないので 縄(を) 綯って

(B ウン) ショーガヅスベステ(22)。ウー。ショガヅノ モノ
(B うん) 正月しようと言って。うん。正月の 物(を)

カルネ (B ウン) ウー ナワ ナッテ ホラ。(B ウン
買いに (B うん) うん 縄(を) 綯って ほら。(B うん

) セバ コンダ ナワケァヅモノ(23) マンダ ナッタ ナワ カル
すると 今度 縄買いという者 また 綯った 縄(を) 買う

フト(24) キテー ホラー オ……。
人 来て ほらあ あ……。

B ショガツヅゲ(25) オエデ エゲテナー。(A ウー うん) ウー エヅ
正月 遣い(を)置いて 行けと言ってなあ。 うん 一

エンダリ (A C 笑) ニエンダリ オエデ エゲテ カエデ
円なり 二円なり 置いて 行けと 借りて

ホラ マエガリステ ステ スマヘネンデ ウン。
ほら 前借りして そして 済ませないで うん。

A ソステ ナンダ タエデハー ムガスダバ ホロー ゴエンガ ジ
そして なんだ たいていはあ 昔なら ほらあ 五円か ナ

ューエン アレバヨ (B ウン うん) ショーガツズニ エスタダエ
円 あればよ 正月しれ 良かったのだよ

ナー。
なあ。

B エヤー ジューエン アンダバヨー。(A アー ああ) オラ オベ
いやあ 十円 あるならよう。 俺 覚え

デガラヨー ジューエン アンダバキャ(26) タエスタ モンダ。
てからよう 十円 あるならば 大したもんだ。

A スタハンデ ホロー ナワケァガラ (B ウン うん) アー ゴエン
そうだから ほらあ 縄買いから ああ 五円

ダリ ジューエンダリ (B ウン うん) カエデヨー コエデ ショ
なり 十円なり 借りてよう これで 正

ガツズテー ナンダ マダ ナワ ナッテ スマスベーステ。(
月して なんだ また 縄(を)綯って 済まそうと言って。

B C ウン うん) ウー。ソステ ハー オモネ ナワデバリヨ ナワ
うん。そして はあ 主に 縄でばかりよ 縄(を)

ナッテ　コヅゲァヘン　トタ　モンダ。
綯って　小遣　銭(を)　取った　もんだ。

B　ナワモナモ(27)　ナッテ　ナッテ　ナッテ　ワラ　ナグ　ナッテマッテ
縄も何も　綯って　綯って　綯って　藁(が)　なく　なってしまって

ナ。(A　ウン)　コンダ　エガラ　ワラケァ　デハタリ(28)　ステラ
な。(　うん)　今度　家から　藁買い　出　たり　してあら

ー　ウン　ナワコ　モテ　フトマワリデモ(29)　ヤーハンデ　ユツテ
あ　うん　縄こ(を)　持って　一　回　りでも　よいから　譲って

ケロッテ　ウン。
くれって　うん。

A　ウッテ　ニンジュ　アッテ　ナル　フトダバヨー　(B　ウン)
うんと　人　数(が)　あって　綯う　人　ならよう　(　うん)

ヅブンノ　ワラ　タエナグ　ステ　(B　ウン)　カテ　ナルヤダ
自　分の　藁(を)　足りなく　して　(　うん)　買って　綯うのだ

エナー。
よなあ。

B　モヅロン　タサダキャー　タエヘダンテアキャー(30)　ナモ(31)　ホントノ
勿　論　田には　堆　肥　のようなものは　何も　本当の

スビバリ(32)　モテタエナー。
藁くずばかり　持って行ったよなあ。

A　ウン　スッカド　ハー　ナワネ　ナッテマテヨ。(AB　笑)
うん　すっかり　はあ　縄に　綯ってしまってよう。

注記

(1) 1.「田打ちの頃」の注記(6)参照。

(2) 実際の音声は〔ɪ:〕と〔ɯ:〕の中間音に聞こえ、しまりのない感じである。うなずく際の音声は、この他に〔ə〕〔ə:〕〔ɐ〕〔ɐ:〕などが多い。これらのカタカナ表記は以下「ウ」「ウー」「ア」「アー」とする。

(3) 地名、青森市大字「合子沢（ごうしざわ）」。当地では昔から「ゴサ」という。収録地から約2km東方にある。

(4) 地名、青森市大字「新町野（しんまちの）」。収録地から、約1km東方にある。

(5) 地名、青森市大字「横内（よこうち）」。収録地から、約3km東方にある。

(6) 町などへ出かける際に着用したが、晴れ着ではない。普段着より少し程度の良い衣類。

(7)「ソラ」と必聞こえないわけではないようだ。

(8) 1.「田打ちの頃」の注記(8)参照。

(9) 時間的な意の「頃」。

(10) 聞き取り不可能。

(11) 文脈上、3行後の「ナワー　ナッテラダエナー」へつながる。

(12) ホタコの「ホタ」は臨時収入の金銭。「ホッタ」と中間に促音が入ることもある。「コ」は指小辞といわれ、東北地方特有のもので、ほとんどの名詞に付く。

(13)「ホタをトル人」のことで臨時収入金を得る人。語源は、領主地主の目の届かない「墾（ハリ）掘（ホリ）して新しく開いた水田」の「隠し田」だろうという説がある。（鳴海助一著「津軽のことば」）

(14) 忠実に漢字で書けば「前重り」か「前重れ」。

(15)「～をする」の意で「～をなす」を使うのは、話者このひとくせである。この場合、直前の「カッタリステ」の内容をそのまま受けている。

(16) 注記(12)に同じ。

(17) ナワデバリの「リ」は、この場合「舌先のふるえ音」であるが、これは当地の一般的ラ行音でなく、話者Aの偶然発した音である。

(18)「手間賃をもらってする仕事」の意。

(19) 「就職する」の意。

(20) 語源は「一方（いっかた）」だろう。

(21) 「盂蘭盆会」。

(22) 「ショーガツス（正月す）」は「正月を祝う」の意。

(23)(24) 「ナワケァヅモノ」と「ナワ　カル　フト」は同意。

(25) 「正月に遣う費用」の意。

(26) 「アンダバキャ」の「キャ」は、強く取り立てていう時に使う。語源不明。今後、方察を要する。

(27) 「縄も何も」と訳しておいたが、「モナモ」は「詠嘆・驚愕」などの程度が大きい際に使う表現で「縄も　まあ　なんとまあ」とでも訳せばよいのだろうが。

(28) 語源は「出張る」だろう。

(29) 「一抱え」。

(30) 「タエヘ（堆肥（たいひ））」は、最近、当地で使用するようになった語であり、昔は「コエ（肥）」と言った。

(31) 「ナモ」以下は「持って行かないで」を補う。

(32) 「スビ」を「薬くず」と訳したが、正しくは「稲の下葉」である。

3. つらい農作業

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)	
A	桜田 鉄彌	男	明治36年生れ	
B	八木沢千代三郎	男	明治41年生れ	
C	猿方 トミ	女	大正2年生れ	
D	佐々木隆次	男	昭和10年生れ	(司会役)

C ヤッパス タデモ ナンデモセァ (B ウン うん) コエ(1) ヘネァハ
やっぱり 田でも なんでも よ うん 肥(も) 入れない

ンデ (B ウンウン うんうん) タ カデステ マエネテ。 ヅギ(2) ハネ
から 田(は) 堅くて だめだって。 肥料(が) はいらない

ハンデ カデステ マネテ。 ウッテモ カデステヨー。 (B
から 堅くて だめだって。 打っても 堅くてよう。

ホンダエナー ウン) ウーン (B ――(3)) ヘバ エマダバ
そうだよなあ うん うーん すると 今なら

タ工(4) ホラ コ工 ハルドゴデ (B ウン うん) ナンボデモ タ
堆 ほら 肥(が) はいるので いくらでも 田(は)

アエダスノー(5) (A アー ああ) ンー。 エマダキャ ドーグ エベ
あれだしのう んー。 今は 道具(も) 良いだ

ァ。 ムガスダバー バッコダノー(6) (B ウン うん) ハルダノッテ(7)
ろう。 昔なら 馬耕だの はろうだのといって

ー。 (A ウン うん) (C 笑)
。

A テデバリデナー。(C ウーン) ハル カゲル ヅギノ ヘヅネ(18)
手でばかりでなあ。(うーん) はろう(を) かける 時の つらい

ノ ヘヅナグ ネノテヨー。
の つらく ないのってよう。

B ヤーヤ ハル エヅバン。アレア (A ウン) ハラサ コデァ
やあや はろう 一番。あれ うん 腹に こえ

ッテマッタナー。
て しまったなあ。

A マネ フパラヘルヤ(9)ヅー。(B ウン) ソエサ オエノ タダキ
馬に 引っぱらせるやつ。(うん) それに 俺家の 田は

ャ カデハンデヨー (B ウン) ヅッパド オサネバ (C
堅いからよう (うん) じゅうぶんに 押さないと (

笑) ナゲラエデ(10) マダエナー。ゴロゴロゴロゴロテ コロコル
捨てられて しまうのだよなあ。ごろごろごろごろと 転がる

ベー。マドンドド フッパルドゴデー オソエバ ハー ムッ
だろう。馬(田)どんどん 引っぱるので 遅いと はあ いっ

タド ハー コエダアデー。カラダ ハー ソラ ユツメデ。
ぺ はあ これなのだ。からだ はあ そら ゆらめいて。

B アエ ハー ナンメモ(12) ナー ウン。フトリャグダラ(13) フトリャグ
あれ はあ 何枚も なあ うん。一人役なら 一人役(を)

(A ウン) カゲデ マワッテヨー。
(うん) かけて 回ってよう。

A ナンニャグモ カゲデ マルダジャ。
何人役も かけて しまうのだ。

B ウン カゲデ マルダエナー。
うん かけて しまうのだよなあ。

C　ハルデ　ヤル　ウヅダバ　エヤ　(B　ウン　うん)　オラタヅンドダバ
はろうで　やる　表なら　良いや　(B　うん　うん)　俺達　なら

ー　マコ　ネドゴデ　(B　ウン　うん)　サンボカデ　プタエデバリ。
馬こ(め)ないので　(B　うん　うん)　三本鍬で　たたいてばかり。

(B　ウン　うん)

A　ウー　マ　ネ　ヘトダバナー。
うん　馬(め)ない　人　ならなあ。

C　ウーウン　クダエデバリ　ハー　プタエデバリ　タ　ヤタ　モンダ。
うんうん　砕いてばかり　はあ　たたいてばかり　田(を)やった　もんだ。

A　ヤタモンダエナー。
やったもんだよなあ。

B　ウー　サンバ(14)。
うん　三番

C　ナンボガ　スタハンデ　クルスンダガサ(15)　ワガラネァ。
どんなんか　だから　苦しんだか　わからない。

B　サンバウヅマデナー。
三番打ちまでなあ。

C　ウン　サンバウヅマデ。　エヅバンウヅステ　コンダ　ニンバウヅ
うん　三番打ちまで。　一番打ちして　今度　二番打ち

ステ　(B　ウン　うん)　コノ　コンダ　クデァダ　ドゴ　カダマルハ
して　(B　うん　うん)　この　今度　砕いた　所(が)　固まるか

ンデ　(B　ウーン　うーん)　コンダ　サンバウヅテ　オゴステ　(A
う　(B　うーん　うーん)　今度　三番打ちといって　起こして　(A

サンバウヅステナー)　ホエガラ　タ　カグアダモノ。
三番打ちしてなら)　それから　田(を)かくのだもの。

B　ニバンウヅ　エヅバン　ヘヅネスタジャ。
　　二番打ち(が)　一番　つらかったよ。

C　ニバンウヅ　エヅバン　ヘヅネ。　エーマダラ　ヘバ　ナンモ(16)　キ
　　二番打ち(が)　一番　つらい。　今　なら　すると　何も　機

　　カエデバリ　ヤル　モンダドゴデー　ナ。
　　械ではかり　やる　ものなので　な。

A　ソエガラ　コンダ　アノ　アダリダンバ　ナンダエナー。
　　それから　今度　あの　あたりなら　なんだよなあ。

　　ソエゴソ　ジューサンガ　ショーガッコ　オワレバ　ハー　(B
　　それこそ　十三(歳)か　小学校(を)　終ると　はあ

　　ウン)　ホガサ　(B　ウン　カロゴ(17)　ウン)　タノマエデ　サヘ(18)
　　うん　他へ　　うん　借子　うん　頼まれて　さへ

　　トネナー。(B　カロゴ　カロゴニ　エダリナー)　ウン　ワン(19)
　　取りれなあ。　借子　借子に　行ったりなあ　うん　わ

　　ツカダネ(20)　ハー　(B　ウー)　ウ　ショガッコ　オワレバ　ハー
　　ずかな年齢では　あ　　うん　うん　小学校　終ると　はあ

　　(B　ウー)　サヘ　トネ　ドゴダラ　ドゴサ　エゲーテ。ウー。
　　　うん)　さへ　取りれ　どこなる　どこに　行けと。うん。

　　ヘバ　ハー　ホレ　アサマネ　ハヤグ　クレァガラ　オギデ(21)　シ
　　すると　はあ　ほれ　朝に　早く　暗いうちから　起きて　小

　　ョガコ　オワテガラ　ハー　ワンツカダ　ヤヅヨー　(B　ウン)
　　学校　終ってから　はあ　わずかな　奴よう　　うん)

　　サヘ　トネ　デハテ(22)　ウッテ(23)　ブスカエデナー。
　　さへ　取りに　出て　うんと　叱られてなあ。

B　ブスカエデナー。テ　ホガサ　タノマエデ(24)　コゴサ(25)　(A　ウーン
　　叱られてなあ。そして　他へ　頼まれて　ここに　　うーん

笑）ワラハンド　ネデラヤヅ　ムリニ　オゴサエデ　ホラ（
子ども達(ga)　寝ているの(o)　無理に　起こされて　ほら

A　ウン）トーガ　ナンボノ　ヅギナー。（A　ウン）ウン。
うん）十歳か　なんぼの　時なあ。（　うん）うん。

ステ　アノー　ハー　ヤ　マ　ヤット　クッテ　アッタケンドモ
そして　あのう　はあ　いや　まあ　やっと　食って　いたけれども

ヨー（A　ウン）ウン　オドナノ　キモノ　キヘ(26)ヤダエナー。
よう（　うん）うん　大人の　着物　着せるのだよなあ。

（A　ウー　笑）スパサミドリ(27)ステ　ロー（C　ンダ）ビン
（　うん）裾を端折りして　ほらあ（　そうだ）びん

(28)ト　コー　ミンツカグ　ヤッテナー。（B C　ウン）ソエ　コ
と　こう　短かく　やってなあ。（　　うん）それ(ga)　こ

ンダ～～～～サガテ　マルベ。（A 笑）ヨゴエドゴデ　ホラ。　ソエ
んど　下がって　しまうだろう。　汚れるので　ほら。　それ

サ　コー　コゴ(29)ノ　ヅッチャ　アノ　コンダ　アノ　アラ(30)カマ
に　こう　ここの　爺さん　あの　今度　あの　あらあ　鎌(o)

モテ　キテ（A　笑）ジョロット　オドステ（A B　笑）
持って　来て　じょろりと　落して

オドステ　ケデヨー。（A　ウン）ステ　アン　ヅギ　エヅニ
落して　くれてよう。（　うん）そして　あの　時　一日

ヅ　ニヅッセンデ　アッテ　ロー。ウン　メス　ニギリメス　カ
二十銭で　あったほらあ。うん　飯　握り飯(o)　食

ヘデ　ニヅッセン（A　アー　ニヅッセン）ニヅッセン　ケダ
わせて　二十銭（　ああ　二十銭）二十銭　くれた

ウン。
うん。

A　ホンダ　ホダ。（B　ウン）ムガスダオナー。（B　ウーン
　　そうだ　そうだ。　うん　昔　だものなあ。　うーん

）ムガスダアダラ　ホダ。（B　ウーン）
　昔　であるなら　そうだ。　うーん

C　サヘトリダバ(31)　ハー　エヴバン　スギデ　ネスタ。　オツケロ　フ
　さへ取りなら　はあ　一番　好きで　なかった。　押っつけろ　引

パレ　オツケロ　フパレテヤ（A ウン）コンダ　スカエルドゴデ
っぱれ　押っつけろ　引っぱれと　うん　今度　叱られるので

ヤ　コンド　ホノ　トーリ　エゲバ　エタテヤ　クルッテ(32)　マルドゴ
　今度　その　とおり　行くと　良いサれビ　狂って　しまうの

デ　グルッグルッグルテ　コンダ(33)　マ　マワサヘデ　マルキャー。
で　ぐるっぐるっぐると　今度　馬(を)回させて　しまうということだよね。

（B　ウンダエナー）エッカエニ　フトヅドゴ　ナンカエモ
　そうだよなあ　一回に　同じ所(を)何回も

コンドア。（笑）
今度　。

A　コンダ　マンガ(34)　オス　フト　ナー　ソ　ソステ　コンダ　マンガ
　今度　馬鍬　押す　人(は)なあ　×××　そして　今度　曲

レバ　コンダ　サヘトリバ　サンジャグモ　ナゲー　ブヅ(35)（B C
ると　今度　さへ取りを　三尺も　長い　笞(を)

笑）モッテデ　ヘナガ　フタグアダエナー。　ナー　フェタデ
持っていて　背中　なたくのだよなあ。　お前(は)下手で

ァステ　ドンデ　コノ　ジャマーテ。　ウーン（C 笑）ヘバ
どうだ　この　ざまといって。　うーん　すると

コンダ　ダンダンネ　ワンッカダ　モンダベ、　ジューサンガ　ジ
今度　だんだんに　わずかな　もんだろう　十三歳か

(36) (37)
ェースノ モンダベ ヘンカサエルドゴデ コンダ ハー アダマ
十四歳の 者だろう たんかれるって 今度 はあ 頭

クルテ マッテ ハー。(C 笑) ステル ウヅニ ハー マ
痛って しまって はあ。 そしている うちに はあ 馬

ー コンダ ホラ グルグルド ター ワッテ マルアダエナー。
(は) 今度 ほら ぐるぐると 田(を) 回って しまうのだよなあ。

(38)
(C 笑)(笑) ソタ ヅギモドタ モンダエナー。
そういう 時も あった ものだよなあ。

D エヘデ マル ワケダ。(A アー / ああ)
すねて しまう わけだ。

B エヘデ マル。 ヅンブ スカス アノ アダリ クロー スタジ
すねて しまう。 ずいぶん しかし あの あたり 苦労 したよ

ヤー。
。

A エ エネ カルタテ ナー ムタド ハー カマデバリ ホレ ウー
xxx
稲 刈るといっても なあ いつも はあ 鎌ではかり ほれ うん

(39) (40)
ミンナ ハー カマデバリー ソエゴソ ニジュモ サンジュモ
みんな はあ 鎌ではかり それこそ 二十も 三十も

(41)
ツクテモー (B アーアー / ああああ) カマ カマデバリ カッテナー。
作っても 鎌ではかり 刈ってなあ。

(42)
B カマデバリ トッテー。
鎌ではかり 取って 。

(43)
A ソエゴソ ノー エ エネ カル ヅギダバ ハー ムッタド ナンニ
xx
それこそ のう 稲 刈る 時なら はあ いつも 何回

ヅモ (B ウン / うん) エッカゲツモ カガタベーナー。
も 一か月も かかったろうなあ。

B　ウンダナー　エッカゲツモー　（笑）　オラ　サエキンマデ　エッ
　そうだなあ　一か月も　俺　最近まで　一
　カゲツモ　カガタドモ(44)タアテ。
　か月も　かかったと思ったけれど。

注記

(1) 「堆肥」のことを昔「コエ」といった。

(2) 昔、「化学肥料」のことをいった。

(3) 聞き取り不可能。

(4) 次の「ホラ　コエ　ハルドゴデ」の「コエ」の言いかけ。

(5) 指示代名詞「アエ（あれ）」を使っているが、「アエダ」は「耕しやすい」の意。

(6) 「プラウ」。牛馬などに牽引させ、土地を耕す農具。

(7) 「ハロウ」。牛馬などに牽引させ、砕土などに使う農具。

(8) 語源は「せつない」。

(9) 「ヤヅ」は漢字を当てれば「奴」だが、前の発言者Bのことばの中にある「ハル」をさす。

(10) 津軽全般に「捨てる」「置きざりにする」を「ナゲル（投げる）」という。

(11) 指示代名詞「コエ（これ）」を使っているが、「コエダ」は直後の「カラダ～ユツメデ（いる）」（体が安定を欠いている）をさす。話者Aはその発言中、体をゆらせるしぐさをした。

(12) 「メ（枚）」は田の区画単位。

(13) 1.「田打ちの頃」の注記(8)参照。

(14) 次の話者Cの発言後の話者B「サンバウヅマデナー」の言いかけ。

(15) 「ガサ」は標準語の女性使用の婉曲な疑問終助詞「かしら」に相当するが、「ガサ」は婉曲なニュアンスはない。

(16) 「ナンモ」は文末に「つらくない」を伴うべきなのに省略した。

(17) 農家の雇い人。主として男子。

(18) 農耕牛馬の轡をとるために付ける棒。轡をとるのは子どもの役であった。そして牛馬にバッコ、ハル等の農具を引かせ大人がそれを操った。「サヘ」の語源は馬の進む方向を定かにするための「ササヘ（支え）棒」だろうか。

(19) 話者の発音。普通は「エタリ」「エッタリ」

(20) 「ワンツカダ（トス＝年齢）ネ」だが、普通（トス）は省略して言

わない。

(21) 「オギテ」の後に「一仕事した後、小学校へ登校し」を補う。

(22) 「デハテ」の前に「田へ」を補う。

(23) 「ブ」は強意の接頭辞。

(24) 「ホガサ　タノマエデ（例えば）コゴ（の家）サ（頼まれて）」と補う。

(25) 「コゴ」はこの会話を収録している家族（増田敏光家）をさす。

(26) 「キヘルヤダエナー」が普通だが「ル」が聞こえない。

(27) 「スパサミドリス」は「尻挟み取りする」。

(28) 擬態語「ビント」は、腰のあたりの帯をきりっと締める様をいう。「きりっと」と訳すのが適当か無知れないが、擬態語であるためそのままにした。

(29) 「コゴ」は注意(25)に同じ。なお「コゴノ　ヅッチャ」は昨年死亡。

(30) 昔を思い出していう代名詞で「あれ」と訳すべきかも知れないが、方言のニュアンスを重んじた。

(31) 「サヘトリ」は「サヘをとる人」。注記(18)参照。

(32) 「サヘトリ(が)クルッテマル」。「クルッテ」とは「頭が混乱して」「判断に迷って」の意。

(33) 「マ(を)マワサヘデ」。

(34) 農機具の一種。

(35) 当地は「ムツ（もち）」より「ブヅ」と発音することが多いようだ。

(36) 語源は「折櫃」。

(37) 「サヘトリ(の)アダマ(が)」。

(38) 「ヅギモデアッタ」と発音したらしい。

(39)(40) 「二十人役」「三十人役」のこと。1.「田打ちの頃」注記(8)参照。

(41) 「(田を)ワクテモ」。

(42) 「(メリ)トッテ」。

(43) この場合「毎日」の意。

(44) 「～ドモタ」は「トオモッタ」の約言。津軽は必ずこのように言う。

4. 堆（にお）と小作米

話し手

（略号）	（氏名）	（性）	（生年）
A	桜田鉄蔵	男	明治36年生れ
B	八木沢千代三郎	男	明治40年生れ
C	棟方トミ	女	大正2年生れ

C ムガスダバ スタテヨー(1)（B アーン）エネ カッテ マッテ
昔なら それもそのはずよ（ああうん）稲 刈って しまって

ホステッテ ヘレバ（B ウン）エサ モッテ キテー（A ウン）ニオ(2) ツンデダベア。（B ウン）ワンジャニ オッキ
乾してと いうと（うん）家は 持って 来て（うん）堆 積んでだろう。（うん）わざと 大きい

ニオ ツガネバ(3) マネスタ モンダモノー。
堆 積まないと だめだった もんだもの。

A ホンダー。
そうだ。

B センコギデ(4) コエデナー。
せんこぎで こいてなあ。

A マッコサー ツケデナー。（B ウン）ムンマロヅヅ(5) ツケデー
馬に つけてなあ。（うん）六 束ずつ つけて

ステ コンダ エサ モッテ キテー デッタダ オニヨネー
それて 今度 家に 持って 来て 巨大な 大堆に

ウー。ジュンニャグ(6) ツグレバー オキ ニヨ フタッツグレァニ
うん。 十人役 作れば 大きい 堆 二つぐらいで

ツンデナー。
積んでなあ。

B アー ツンデナー。 (A ウーン うーん) ソレガ ホマレダンダハン
ああ 積んでなあ。 それが 誉れなのだから

デナー。(A ウーン うーん) ウン エサタッテ ツガネ ウヅ マネ
なあ。 うん 家にとはいえ 積まない うち だめ

ンダ (A ウン うん) マネンダ。 エマダバ ノゴステ オゲバ
なのだ だめなのだ。 今なら 残して 置くと

(A ウンダ そうだ) マネンダケドモ モド ドンデモ コー ソド
だめなのだけれども 元 どうでも こう 外(を)

コー カンザルッテガサナー。
こう 鈴 るっていえばよいかなあ。

A ウー オエデ ソロー コノ クレァノー ソエゴソ オキ ニオ
うん 俺家で そらあ この くらいの それこそ 大きい 堆(を)

ツンデヅエンタ。(B ウン うん) ウー メヘルネ ホロー。
積んでというような。 うん うん 見せるに ほらあ。

B ウン ワラモ タステ ツンダリ ステ ラー。(笑) オキグ
うん 藁も 足して 積んだり して あらあ。 大きく

メヘルニ コンダ コエデ マッタ ワラー ハー。
見せるに 今度 こいて しまった 藁 はあ。

A ンー ニヨ オキグ メヘルニナー。
んー 堆(を) 大きく 見せるれなあ

B ニオ オキグ メヘルニ ホラー。 ニオ ミンデ ヨメ ケダ
堆 大きく 見せるに ほらあ。 堆(を) 見て 嫁(を) くれた

トンヅダネ ホラー。(C 笑)
当時だよ ほらあ。

A ウンダ ヨメ モラウデバ (B ウン うん) オエデ オニヨ ナン
そうだ 嫁 もらうといえば 俺家で 大堆 なん

ボ ツンダトガ (B ウン うん) ミッツ ツンダトガ ヨッツ ツ
ぼ 積んだとか 三つ 積んだとか 四つ 積

ンダトガ ホラー。
んだとか ほらあ。

B ヨグ ミニ キテナー。(A ウーウン 笑 うんうん) ニオ ミニ ハ
よく 見に 来てなあ。 堆(を) 見に は

ー (A ウン うん) ウーン カグマギ(7) ショッテ ハー。フタリ(8)
あ うーん 角巻(を) 背負って はあ。二人

ソッテ ハー。ダエヴ ソノー ドゴデ ケルテ(9) ヘ(10)×× ナンタガ
背負って はあ。第一 その どこで くれると なんとか

テ ヘレバ ニヨ ナンボ アル(11)。(B C 笑)
と 言えば 堆(の) なんぼ ある

A オッキ ニヨ オニヨ アッコデ ナンボ ツンデアナーテナー。
大きい 堆(つみ) 大堆 あそこで なんぼ 積んであるなあと言ってなあ。

オッソロスグ オッキ ニヨー (B アー ああ) ミッツモ ツン
恐しく 大きい 堆 三つも 積ん

デヤーテ (C ウン うん) アコダバ(12) キット クラス エガビョン
でようといって あそこなら きっと 暮らし(の)良いだろう

テ。
といって。

B マンヅ ソレー エヅバンデタエナー。(A アー ああ) ニオ ツ××
なず それ(が) 一番であったよなあ。 堆

(13) (14)
ミ ツンデ ニオノ オキグ メヘル 。
×× 積んで 堆の 大きく 見せる

A エ エモナモ ハー エモ ミルバタテヨー (B ウン) エノ
××× 家も何も はあ 家も 見るけれどよう (うん) 家の

ツギニ コンダ ハー ソー オニヨ ホロー。(B ウン) ア
次に 今度 はあ そう 大堆(を) ほらあ。 (うん) あ

ッコデ ター ツクテ ドノ クレァ ツクテ オニヨ ミレバ
そこで 田(を) 作って どの くらい 作って 大堆(を) 見ると

エヨー アエ タエスタ モンデ アレァ。(C 笑) ウー ア
やあ あれ たいした ものだ あれは。 うん あ

コダバ カマド エーイァ。 アコダバ ケデモ エーナーテ ホ
そこなら 暮らし(が) 良いよ。 あそこなら くれても 良いなあと そ

タ ハナス ス (笑) スタリ スー(15)。
んな 話(を) ××× したり して。

B マー エマダバナー ター ツクテモ ヨメ ケネイァ ホラー
まあ 今ならなあ 田(を) 作っても 嫁(を) くれないよ ほらあ

(A ウン) ウン。
(うん) うん。

A. ウン エマダバ オキ ニヨー ツム ワゲダバ ダモ ヨメ ケ
うん 今なら 大きい 堆(を) 積む わけなら 誰も 嫁(を) くれ

ネヤ。(B 笑) クー ミルッテ (笑)。 ソノ コロ ナン
ないよ。 苦(を) 見るといって。 その 頃 なん

ダ ソノ ニヨー コンダー フユサ ナレバ コンダ ユギ ア
だ その 堆(は) 今度 冬に なると 今度 雪
××

ル アルウヅ コガネデ フユニネ(16)バリ コグ コグアダエナー。
×× あるうち こかないで 冬にばかり ××× こくのだよなあ。

B フユ コグアダエナー。（A ン／ん） トストリ[17]ノ アダリ コエダ
冬 こくのだよなあ。 年取りの あたり こいだ

リ ステンデ ホラー。
り してるんだ ほらあ。

A ションガヅマデ（B ン／ん） スコス ナンダンダバー[18] ハー シ
正月まで 少し なんだのなら はあ

ョガヅモ ナンモ（B ウン／うん） ハー コス ヅギモ アレァア
正月も なにも はあ 越す時も あるの

ダ。
だ。

B ハンブガラ ヨー トラエデ マッテナー（A ウン／うん） ウンウ
半分から 余(ま)取られて しまってなあ うんう

ン タデマス[19]。
ん .

C ホタヨー[20] オエノ エンドダキャー ラー マッコ ネンデ アノ
そうだよう 俺家の 家などは あらあ 馬こ(が)なくて あの

タ ツクック モンダドゴデセァ（B ウン／うん） コンダ アノ
田(を)作っん もんだからよ 今度 あの

ー エサ ソッテ キテダベア。（B ウン／うん） マッコデ クバ
家れ 背負って 来てだろう。 馬こで 運

ラアデ[21] ネァヤー ヘナガサバリ アゲデ ソッテ キテダベア。
ぶので なくてよ 背中れば(か)り 上げて 背負って 来てだろう。

（A ウン／うん） ホヤステ エサ キテ ヘンコギデ コエデダ
そうして 家れ 来て せんこぎで こいでだろ

ベア。（A ウン／うん） ソヤステ コンダ ドンデァステ[22] フトリェ
う。 そうして 今度 どうだろう 一人

ァグガラテレバ(23) サンビョーガ (B ウン) ナンボオガ アゲ
役からというと 三俵か (うん) いくらかしか あげ

ネキャー。 (A ウン) ソエデ ニヒョー タデマス(24) トラエ
ないよね。 (うん) それで 二俵 小作米(を) 取られ

ルアデー ホラー。 ダンナサ(25) オサメネバ マネアダー。 コン
るのだ はらあ。 旦那に 納めないと だめなのだ。 今

ダ タ ツクテデ カッテ カネバ マネ ヤヅヤ。 ウン タ
度 田(を) 作っていて 買って 食わないと だめなのだよ。 うん 田(を)

ヨゲ ツクテ ネ モンダモノ (A ウン) ヅギ ヘネァダド
多く 作って ない もんだもの (うん) 化学肥料(を)入れないのだが

ゴデ ホラー。
ら はらあ。

A ウンダ タエデー ホンデタダネ。 (C ウン) ウン タ ー
そうだ たいてい そうであったのだね。 (うん) うん 田(を)

ハー オゲ ツクテモヨー オゲ ツクレバ ツクタエネ タデマ
はあ 多く 作ってもよう 多く 作れば 作ったような 小作米

ス オゲ トラエベーエ。 (C ウン) ヘバ ホロー ケッキ
(が) 多く 取られるだろう。 (うん) すると ほらあ 結局

ョグ フトヅダエナ。 タエデ ハー(26)。
同じだよな。 たいてい はあ。

B ダエエヅ ショガヅ トス ト ヅギ オラタヅドア クー コメ
第一 正月(に) 鼻(を) 取る時 俺達(は) 食う 米(が)

ネンダオン。(笑) (C ウンダ) ショーガヅー タ ー ツク
ないもだもの。 (そうだ) 正月(は) 田(を) 作っ

テーデ ミヅメダ モンダデバナ ホラ。
ていて みじめな もんではないか ほら。

A　スタテ　タデマス　サンジョーモ　トラエル　モンダモノ。
それもそのはず　小作米を　三俵も　取られる　もんだもの。

C　トラエデサ　コンダ　(A　アー)　ネァドゴデ　ダンナサ　ネガ
取られてさ　今度　(A　ああ)　ないので　旦那に　願い

ネ　エグベァ。　(A B　アー)　ウアーエ　ソヘバ　コンダ　マ
に　行くだろう。　(A B　ああ)　あーい　そうすると　今度　町

ヅノ　キ(27)ンバダガ　(B　ウン)　クスリヤサ(28)　エゲバ　(A B
の　本場か　(B　うん)　薬屋に　行くと　(A B

ウン)　ネガネ　エゲバ　アノ　カッチャニカッテ(29)　ニラメラエデ
うん)　願いに　行くと　あの　母さんに　にらめられて

ヨー　(笑)。
よう。

B　スカテ　ヨゴサダエナー。
叱って　よこすのだよなあ。

C　ウー　スカラエデ　キラ　キル(30)スタデバ　モド(31)テ。　ワダキャ　カ
うん　叱られて　××××　来ることがあったではないか　戻って。　吾は　一

ダテヨー。(笑)
緒について行ってよう。

A　ホダ　ホダ。
そうだ　そうだ。

B　ネガネ　エグテナ。　(A　ウン)　コドス　ヨノナガ(32)　エグネハ
願いに　行くといってな。　(A　うん)　今日　世の中　よくないの

ンデ　ウー　ヅヌスア(33)　ネガネ　エグテ　ホラ。　(C　ウン
で　うん　地まに　願いに　行くといって　ほら。　(C　うん

ナンニンモ　ソロテー　ウー　ヘバ　スカエデ　クルンダネ　ホラ。
何人も　揃って　うん　すると　叱られて　来るんだよ　ほら。

A　ウー。サギニナ　ソエゴン　サギダヅ　フト　サギニ　ナテ　ホラ
うん。先になそれこそ先立つ人(が)先になってほら

ヘ　ヘワガダ　ヘトリ　アッテ　ハー　(B　アー)　ミンナバ
×××　世話方(が)一人あってはあ　(ああ)　みんなを

ヘデ　エグ　ワゲセア。デ　カエデ　ハー　モギ　モギ(34)　エッピ
×××× 連れて行くわけよ。それで借りてはあ　籾　一俵

ョーサ　アギ　リスド　ステ　ソラ　モギ　マダ　エットー　リス
に秋利子としてそら籾また一斗(の)利子

ツグアダエナー。(B　ウン)　アー　スタハデ　カス　フト
つくのだよなあ。(うん)　ああそうだから貸す人(は)

ー　モゲ　アルドゴデ　スタハデー　ヅッパドー(35)　マンダ　テガダ
儲け(が)あるのでそうだからしっかりとまた手形(を)

カグ　ワゲダー　アー。ジェン　ジェンコノー　ジェンコ　カ
×××× ××××× ××××　書くわけだああ。　銭こ借

エダド　フトヅデヨ。テガダ　ハー　アー　ナンボ　ナンボ　カエ
りたと同じでよ。手形はあああなんぼなんぼ借り

デ　アギ　エッピョーニ　ツギ　エットダラ　エットノ　リスダヅ
て秋一俵に付き一斗なら一斗の利子だという

テガミ　テガ　テガダ　カグ　ワゲダエナー。
×× ×××× ×××× 手形(を)書くわけだよなあ。

B　ジョー　ジョージョーノ　モミ　モテ　コエテ　ラー。(A　笑)
×××××　上上上の籾(を)持って来いといってあらあ。

エー　ジョージョーノ　モミ。マンヅ　エマガラ　ミレバ　コーリ
良い上上の籾。まず今から見ると高利

ガスダケァンタ　モンダエナー。
貸のようなもんだよなあ。

A　ン　マ　ホンダエナー　アー。
　人　まあ　そうだよなあ　ああ。

B　デ　ムロ　ムロ(36)トアダリ(37)サ　エデバー　ソエサ　コンダ　ツギ　ツ
　それで　××××　室蘭あたりに　行くと　それに　今度　××××　次

ギ　ツケデ　ヨゴスダツケナー（A　ウン）　ウン。　アノー
　切れ(を)つけて　よこすのだそうだなあ　（A　うん）　うん。　あのう

ボロキレ　ホラ。　ホエデ　モモスギ　コヘダリ　ナンタリ　スタ
　ぼろ切れ　ほら。　それで　股引(を)　こしらえたり　何したり　した

コー　カダマタ　モノ　ホラ。（C　笑）　ソエ　ナンボテ　ソ
　こう　困った　物　ほら。　（C　笑）　それ(を)　なんぼと　そ

エ　ツケネバ　カサネ　ワゲセァ　ウー。
　れ(を)つけないと　貸さない　わけよ　うん。

A　アエ　スタテ　ホロー　モメンヤデ　アマテ　アマテ　マタ　ヤヅ
　あれは　だって　ほらあ　木綿屋で　××××　余って　しまった　やっ

ヨ。（B　アマテ　マタダ）　コダ　ソレ　コンダ　ホロー　フ
　よ　（B　余って　しまったんだ）　今度　それ　今度　ほらあ　百

イャクショーノ　ヘトンド　ヘヅネァドゴデ(38)　ムリニ　ソレ　ツケ
　姓の　人達　つらいので　無理に　それ(を)つけ

デ　コンダ　ソレ　タダ　オ××ツケデ（B　笑）　オゴヘバ　エタテ
　て　今度　それ(を)ただ　つけて　よこすと　良いけれど

ソ　ソノ　ボドキレガラ　コンダ　カネ　カネ　トルアダエ。マト
　××　そのぼろ切れから　今度　××××　金(を)取るのだよ。ま

ダ　オラタヅガラ。　アー　ホントノ　エ(39)　コー××××　コーリガスミ
　た　俺達から。　ああ　ほんとうの　高利貸　見

ルエンテタ　モンダネナー　エマダバナー。
　るようであった　もんだよなあ　今ならなあ。

B　スタハデ　ホラ　ヒャクショーモ　アノ　トゥヴダバー　アー。
そうだから　ほら　百姓も　あの　当時なら　ああ。

A　ヅゥブ　クルスンダ　モンダ。　スタハゥデ　ゴガツ　アガレバ(40)
ずいぶん　苦しんだもんだ。　そうだから　五月が　あがると

タエデー　ハー　クー　ヤツ　ナグ　ナッテナー。（B　タエデ
たいてい　はあ　食う　やつ　なく　なってなあ。（　たいてい

ソエダハゥデ　ホラー。　<間>(41)
それだから　ほうあ。

ンダ　ソエゴン　ダンダン　クー　ヤツ　ナグ　ナルドゴデナ。（
そうだ　それこそ　だんだん　食う　やつが　なく　なるのでな。

B　ウン）ゴガツ　アガレバ　ハー　クー　ヤツ　ネァンデヨー。
うん　五月　あがると　はあ　食う　やつ　ないんでよう。

（B　ウン）ウー　ゴガツ　アカ　アガタ　トギ　モ　フタリ(42)
うん　うん　五月　あがった　時　も　降ったり

ハー　チョト　マダ　フタ　ブンア　ハルサ　ナレバ　ハー　ユ
はあ　ちょっと　また　降った　分　春に　なると　はあ　雪

ギ　ケデモ　クヤツ　ナグ　ナルアダエナー。
が　消えても　食うやつが　なく　なるのだよなあ。

B　ステ　ラー　コエデ　マレバ　スグ　トネ　キテナー。（A　ウー
それで　あらあ　こいで　しまうと　すぐ　取りに　来てなあ。（　うん

）マワッテ　ハー　ウー（A　ンダナ）ステガラ　マサー
回って　はあ　うん（　そうだな）そうしてから　馬に

（A　ウー）ウー　ニヒョーヅンヅ　ツケデー　ウー　モデ　モ
（　うん）うん　二俵ずつ　つけて　うん　持って　数

ミナー（A　ウン）モテ　エタテナー。（A　ウン）ウン。
(を)なあ（　うん）持って　行ったってなあ。（　うん）うん。

リスド ホラ ソノ ツギ ツギクサテタエナー ムロツノ タバ
利子と ほら その ××××(44) つぎくさといったよなあ 室津の 束

デヨー。(C ツギクサ) ツギクサテ ソノ アデモ ミナ ホ
でよう。 つぎくさ つぎくさといって その 価も みな ほ

ラ ハラテー。(A ンデァナー) ウン ジョージョーノ モミ
ら 払って。 そうだなあ うん 上 上 の 籾

テ ホラ。(C 笑 ジョージョー)
といって ほら。 上 上

A (笑) ジョージョーノ モギデタエ エー モギデナー。
上 上 の 籾であったよ 良い 籾でなあ。

B ジョージョーノ モギ。エー モミナー。ウエノ ウエノ モギダ
上 上 の 籾。良い 籾なあ。上 の 上 の 籾な

ンダベナー。
んだろうなあ。

A コンダ ホロー マー ネバ コンダ アノ ダエハヅグルマサ
今度 ほらあ 馬(め)ないと 今度 あの 大八 車に

ツケデナー。(B ツケデナー) ガラガラガラガラテ アレ フ
つけてなあ。 つけてなあ がらがらがらがらと あれ(を)引

ッパテ アサガダエ ホラ ウン。エマノ エーニ テメァデ エ
つぱって 歩くのだよ ほら うん。今の ように 自分で ××

バ エマダバ クルマデ アサガタテ ウン マー モドダバ リ
×× 今なら 車で 歩くけれど うん まあ 元なら リ

アカーモ ネァ アノー フトー フグ ダエハ アノ クルマサ
あかーも ない あの 人(が) 引く 大八 あの 車に

ツケデ マヅマンデ (B ウン) フパテ アサガネバ マエン
つけて 町まで うん 引っぱって 歩かないと だめ

ダエナー。
だよなあ。

B ソノ クルマダアテ コノ ヘンダキャ ナガネ ネフテ アタエ
その 車だなんて この 辺は なかにも なかったようだ
ン。ホラー ヤジャグノ(50) アノー ヤマデンサ(51) エゲバナー。(A
ほらあ 八っ役の(52) あのう 山伝へ 行くとなあ。
ウン) オーヤゲデ ネバ。(A オーヤゲデ ネバ ネンデナー
うん 金持で ないと。 金持で ないと なくてなあ
) ウン スルメァ カエレバ ジューゴセン (A ウン) ウ
うん 宣前 借りると 十五銭 うん う
ーン バゲマデ カエレバ サンジッセン。(C ウーン) ソン
ーん 晩まで 借りると 三十銭。 うーん そう
ダ スグ アギ ネァンダジャ マダ ホラ (A 笑。C ホ
だ すぐ 空き ないんだよ まだ ほら そ
ンダネナー(53)) クルマノ(54) ツギツギド ホラ。
うだよなあ 車の 次次と ほら。

A ミンナネ ネーハンデ ホラ。
みんなに ないので ほら。

B ウー ミンナネ ネーハンデ ホラー。
うん みんなに ないので ほらあ。

A オーヤゲネバリ アッテ ホラ。
金持にばかり あって ほら。

B オーヤゲネバリ アッテ ホラ。
金持にばかり あって ほら。

A アー ツセァ(55) フトンド ミンナ ユンダ (C 笑) カエ カ
ああ 小さい 人達(ほ) みんな 今度 ××× 借

エネ　エグドゴデ。（笑）
りに　行くので。

B　トナリムラサ　カエネ　エグダエナー　（ハ　ウン）　アノー　ハ
　隣り村に　借りに　行くのだよなあ　（　うん）　あのう　橋
スネー　カラメ(56)　フパデ　（A　ウー）　ホラ　ウン。
　ない　石川原　引っぱって　（　うん）　ほら　うん。

注記

(1) 「スタテ」は、3. つらい農作業（直前の話）の最後の話者Bの「オラ　サイキンマデ（稲刈りは）エッカゲッモ　カガタドモタアテ」を受けている。本来「スタテ」は逆接の接続詞だが、この場合、本文標準語訳のように肯定的な意にすべきである。

(2) いなむら。別に「ニヨ」ともいう。

(3) 当地は「積む」をほとんどの人が「ツグ」という。

(4) 農具の一つで稲扱き機（器）である。別に「ヘンコギ」ともいう。

(5) 「マロ」は「束」のこと。六束で馬一頭分の荷となる。馬の背の左右に三束ずつつける。

(6) 一人役は一反歩（300坪、10アール）の水田を耕す、男の一日分の作業量。

(7) 昭和20年代まで、冬季間女性の用いた毛布様の防寒具。横六尺縦五尺程の長方形で縁に房がつき適度に折り合わせて着用する。頭からすっぽり被ることも多く、胸のあたりで左右両端をピンで止めた。

(8) 積んでいる堆を見るのは晩秋か初冬である。夫婦二人がその頃の悪天候を予想して遠方から角巻を背負い、自分の娘の婿さえが裕福かどかを偵察に来るのである。角巻の他に傘も背負って来たものだという。

(9) 「（嫁を）ケルテ」

(10) 次の「（ナンダガテ）ヘレバ」の言いかけ。

(11) 「嫁をケルといった家の親が嫁入り予定の家のニヨを見に来て、ナンボ　アルかなどと数える」と解する。

(12) 「アコダバ」の「バ」はほとんど聞こえない。「ラ」と発音したかも知れない。

(13)(14) 「ニオノ」の「ノ」は意味上無用の発音と思われるが、(14)の部分が聞き取り不可能のための無用と断定もできない。

(15) 当然「ステ」とあるべきだが［sɯ：］に聞こえる。

(16) 「フユニネ」の「ニネ」はいずれも、時を表わす格助詞だが、どちらか一つ不要である。なお「ニ」は改まった場合に多く使うという。

(17) 大晦日の「年越し」のこと。

(18) 「スコス　ナンダンダバー」は「ひょっとすると」と意訳した方がわかりやすいだろうか。

(19) 明瞭に聞こえない。「タデマス」は注記(24)参照。

(20) 「ホヲヨー」の「ヲ」は「ダ」と唱声にすべきだが、軽く発音したため清音となった。

(21) 終止形「クバル」は「配る」である。

(22) 「ドンデァステ」の「ステ」は古語の接続助詞「して」を終助詞に使用したもの。余韻余情を作る。今は擬音で訳しておく。

(23) 「テレバ」は「～テ　ヘレバ」の約言。

(24) 語源二説を掲げる。①斗代、斗代米、年貢、年貢米、小作料。江戸時代の頃からお上に金や米などを納付することを「たてる」といった。小作米を地主に納める、その際、納税高に若干の余分を添えることになっていたその余分、つまり「おまけ」が「立て増し」である。(鳴海助一「津軽のことば」) ②小作料、タデマダス(献て遣す)にもとづくものか。(松木明「私前語彙」)

(25) 地主。

(26) 「タエデ　ハー」と聞こえるが不確実。

(27)(28) 「ダンナ」は青森市中心部で薬屋を営んでいた斎藤忠一であり、収録した家や一部の話者の本家筋に当る。

(29) 「～ニカッテ」は後に受け身の語法を伴うが、たいてい不利な悪い事態の内容がくる。語源不明。

(30) 当地では「キル」をよく使うようである。

(31) 「モドテ　キルスタデバ」と逆転するとわかりやすい。

(32) 収穫。

(33) 「ヅヌスサ」の「サ〔sa〕」の〔s〕が脱落。よくありうる変化。

(34) 当地では老年層は一般に「モギ」と発音する。個人差はあるが、少し改まると「モミ」だという。

(35) 擬態語であり、そのような状況とすべきだが、意が通じないため「しっかりと」と訳す、あるいは「きちんと」でもよい。

(36) 「斉藤」という家号。正しくは斉津藤吉。青森市中心部に住んでい

た地主。

(37) 場所。

(38) 語源は「せつない」

(39) 無意味の発音。

(40) 「ゴガツ」は「田植」、「アガル」は「終わる」の意。

(41) かなりの間をおいて再び話が続く。

(42) 聞き取りにくい部分である。前後の文脈は意味を把握しがたい。

(43) 「モミ　モテナー」と逆にするとわかりやすい。

(44) 「布切れそのもの。着物の破れなどを繕うのに使う布切れ」のこと。

(45) 注記(36)参照。

(46) 語源は「充て」か。

(47) 当時は大八車は使用せず、もっと小型の手車だったという。三人の話者の感ちがいだろう。

(48) 次の「エマダバ」の中間の「マダ」を脱落させて発音した。

(49) 次の「アノ　クルマサ」の「クルマ」へつながる。あるいは大八車でなく別の車だったかも知れないという意識がこのように言いよどませたかも知れない。

(50) 「アタエンタ」の最後の「タ」が聞き取り不可能。

(51) 地名。青森市大字「八ッ役(やくら)」。当地では昔から「ヤジャグ」という。当地のすぐ北を流れている川(荒川)を隔てた所にある。川に懸っている牛館橋を渡るとその「八ッ役」である。200m程しか離れていない。

(52) 屋号。正しくは山田伝蔵。

(53) 「ホンダベナー(そうだろうなあ)」とも聞こえないわけではない。

(54) 「クルマノ　ツギツギド(借りることよ)」と解す。あるいは「ノ」は不要の発音とすると「クルマ　ツギツギド(カエルンダエナー　借りるんだよなあ)」とでもいうことになったろうか。

(55) この場合「オーヤゲ」の反対語で、「金持でない」の意。

(56) 水のない石の川原。

5. 牛鍵橋（うしたてばし）

話し手

（略号）	（氏　名）	（性）	（生　年）
A	桜田　鉄彌	男	明治36年生れ
B	八木沢千代三郎	男	明治43年生れ
C	棟方　トミ	女	大正2年生れ

A　オラホー(1)デナー　オラー　ソエゴソ　ワゲー　ヅギダバ　ハス　ネ
俺方でなあ　俺　それこそ　若い　時なら　橋(が)な

ンデ　ムッタド　カワバリ　コエ(2)デ　アリテ　ヴンブ　クー　ミン
くて　いつも　川ばかり　こいで　歩いて　ずいぶん　苦(を)み

ダジャナー。
れよなあ。

B　ナンボ　ボンオドリ　オドテ　モドテ　キテモ　アノ　カワデ　ハ
いくら　盆踊り　踊って　戻って　来ても　あの　川では

ー　ケツ(3)　タグレバ　ハー　（BC　笑）（笑）　カラダ　ハー
あ　裾(を)　たくり上げると　はあ　からだ　はあ

スッカリ　ステ　マテナー。（BC　笑）　ウー。
しっかり　して　しまってなあ　うん。

A　ナニスベア　カニスベア　ハス　ネァドゴデ（B　ウン）　カワ
何しよう　かれしよう　橋　ないので　うん　川(を)

コガネバ（B　ウン）　ホラ　マエネヤダベア。　ウー　スタハ
こがないと　うん　ほら　だめなのだろう。　うん　そうだ

ンデ タンゲ(4)ノ ホガムラデワヨー ウスタデ(5) ハス ネァハンデ
から たいていの 他 村ではよう 牛 舘(は) 捺(が) ないから

ウスタデサ ヨメ ケラエネナーテ ヘタ モンダエナー。(笑)
牛 舘に 嫁(を) くれられないなあと 言った もんだよなあ。

B ワノ アネァ スタハンデ オーノサテ(6) エッタヤ(7) ヨメニ ナル
吾の 姉(は) そうだから 大野に 行ったけれど 嫁に なる

ヅギ (A アー ああ) マー カミ ユテタヤナー (A アー ああ)
時 まあ 髪(を) 結っていたけれどなあ

ケツ タクテ ヨメ ケツ タクテ アサグタテ タンダデ ネデ
裾(を) たくり上げて 嫁(が) 裾(を) たくり上げて 歩くといっても ただごとでないでは

バナー。 (C ウー ホントニナー ウー うん ほんとうになあ うん) ムゲサ ワダルネ
ないかなあ。 何いに 渡るれ

ヨー。 ウー オヤヅ コネダ スンダバタテ (C ウーン うーん)
よう。 うん 親父(は) この間 死んだけれど

エンマデモ ホラー (A ウー うん) ケ(×××) ケツ タクテ アノー
今でも ほらあ 裾(を) たくり上げて あのう

オメダ(8)ガラ ヨメ モラテ キターテヨー。 (C アー。 A ああ。
お前の家から 嫁(を) もらって 来たといってよう。

ンー んー) ウーン アーユー ヅダエモ ホラナー ウー。
うーん ああいう 時代も ほらなあ うん。

C ウッテ ミヅ キレバ ドンデ アッタベア(9)。 ホエデモ コエデ
うんと 水(が) 来れば どうで あったろう。 それでも こいで

アリテ。
歩いて。

B ワダラエネセア。 コガエネセア。
渡られないよ。 こがれないよ。

A　ミンヅ　クレア(10)　コガエネー。（A C　ウー）
　水　来れば　こがれない。（うん）

B　ヘバ　ツリバス(11)　ワダテヨー（A　スエドーバス(12)　アラー）ス
　すると　吊り橋(を)　渡ってよう（水道橋　あらあ）

　エドーバス　ワダテナ　コスタ　アラー　ウン。
　水道橋(を)　渡ってな　こういう　あらあ　うん。

C　ウン　コノ　コノキン(13)　エダ　カガッタ　ドゴ。
　うん　×× ××　これくらい　枝(が)　懸った　所

A　エッシャグバリカ　ネァー　ハバコ(14)ナー。
　一尺ばかりしか　ない　巾こなあ

B　コノ　ハス　ワダテー　ウン（A　ソステ　ハー　ナー）ナン
　この　橋　渡って　うん（そして　はあ　なあ）なん

　タテ　ショユ　エッゴー　カネ　エグタテ　ヅーット　オーマリ
　といっても　醤油　一合　買いに　行くといっても　ずうっと　大回り

　ステ（A　ウー）ウー。ヤ　ヤ　ヤジャグサ(15)　エグネヨー。
　して（うん）うん　××× ×××　八っ役に　行くのによう。

（C　メヘ　ネァドゴデノー　ウン）メヘ　ネァドゴデ　ホラー
（店(が)　ないのでのう　うん）店(が)　ないので　ほらあ

　ウーン。
　うーん。

A　オラホーネ　メヘヤ　ネァドゴデ　ホラー　コンダ　ドドンド　サ
　俺方に　店屋(が)　ないので　ほらあ　今度　父達(が)　酒

　ゲ　ノムデバヨー　ヤジャグサ　ナンタカタ　コダ　ワラハンド
　(を)　飲むと言えばよう　八っ役に　どうしても　今度　子ども達(が)

　ヘバ　ロー　ゴールビン　ミンタ　ア　アノクレァノ　ビンコサ(16)
　すると　ほう　びーる瓶　みたいな　×××　あれくらいの　瓶こに

ニンゴーガ サンゴー。(B ウン) ムガスダハンデ ニンゴー
二合が 三合。(うん) 吾だから 二合

ガ サンゴーバヅヅ ハー サゲー メァバゲー カネ エガアダ
が 三合ばかりずつ はあ 酒(を) 毎晩 買いに 行くのだ

エナー。
よなあ。

B ワダラ エヅゴーヨリ ヨゲ カタ ゴト ネァンタジャー。(
吾なら 一合より よけい 買った こと なかったようだよ。

A 笑) ショユデモ エヅゴー ナー。
醤油でも 一合 なあ。

A オラダヅダバヨー タエデー ニンゴーバヅヅヨー ウー ユマニ
俺達ならよう たいてい 二合ばかりずつよう うん 夕方に

コンダ ホラ ノマハンデ。 エマノ ヨネ ダモ エッショダ
今度ほら 飲むから。 今のように誰も 一升だ

ナンテー。 ショガヅガ ボンダバナー (B ウン) エッショ
なんて。 正月か 盆くらなあ (うん) 一升

オグアタテ ダーモ エッショヅ サゲダキャ カエネアダネ。
置くけれど 誰も 一升という酒は 買えないのだよ。

B ウン スタテ スコービンコ モッテ ショ ショーユ カニ エ
xxxx
うん そうはいっても四合瓶こ(を)持って 醤油(を)買いに行

ゲバ エヅゴー カウアダアタテ スコービン モテ エゲバ ネ
くと 一合 買うのだけれど 四合瓶(を)持って行くと お前

(17) (18)
ァサ ダー キテ エデァテ ハー ショユ カネ エゲバ ハー
の家に 誰(が)来て いるのかと言って はあ 醤油(を)買いに 行くと はあ

ナンモ ショユダナンテ クタ クタ ゴト ネァンタナー。 (
xxxx
何も 醤油だなんて 食った こと ないようなあ。

A　ウー）　ボンガ　ショーガヅデ　ネバ　ショユ　カネ　ヅギダ
　　うん）　盆か　正　月で　ないと　醤油(を)買わない　時だ

ベ　ホラー。
ろう　ほらあ。

C　トーフダナンテ　ホンダキャー(19)。
　豆腐だなんて　そうだよね　。

B　ウンウン　ショーユ　ショーユ。
　うんうん　醤油　醤油。

C　ナニガ　アヅギデ　ネバナー。（A　アー
　何か　ある時で　ないとなあ　　ああ）

B　エヅゴーノ　ショーユ　ホラ　ビン　モテ　エゲバ　ネァサダー
　一合の　醤油(は)　ほら　瓶(を)　持って　行くと　お前の家に　誰(が)

アノー　ソエゴン　オギャグサマ　キテランヅエンタ（A　アー
あのう　それこそ　お客　様(が)　来ているんだというような　　あ

）　アンベ(20)デ　ホラ　キグンダエナ。　エマダバ　ダーモ　ショ
あ　ぐあいで　ほら　聞くのだよな。　今なら　誰も　醤

ユ　エヅゴーダアンテ　カウ　フトダキャ　ネァア(21)ミンナ　エッ
油(を)　一合だなんて　買う　人は　ないけれど　みんな　一

ショ　ニショ　エバ　フトタルダナンテ　マー　フトハゴナー　ウ
升　二升　良ければ　一樽だなんて　まあ　一箱なあ　う

ー　カッテ　オグアンタ　モンダバテ　ホラー。
ん　買って　置くような　ものだわれど　ほらあ。

A　ウー　エー　エットモ　カッテ　エマダバ　オガダバテー。　ソエ
うん　ー　斗も　買って　今なら　置くわれど。　それ

デ　コンダ　メァリ(22)　アンマリー　ムッタド　カー　クワバリ　コ
で　今度　あんまり　いつも　川ばかり　こ

エデ　アサグドゴデ　ダーンモ　ステ　コゴサ　オラホーノ　コゴ
いで　歩くので　誰も　そして　ここに　俺方の　ここ

サ　ハス　カゲデ　ケル　フト　ネァベガテナー。（B　ウンウ
れ　橋(を)　懸けて　くれる　人(は)　ないだろうかといってなあ。（　うんう

ンウン）　ソエゴソ　ハー　コゴサ　ハス　カゲデ　ケル　フト
んうん）　それこそ　はあ　ここに　橋(を)　懸けて　くれる　人

アレバ　カミサマネ　マ　マツテモ　エー　マツテモ　エーナーと
あれば　神様に　×××　祭っても　良い　祭っても　良いなん

テ　ヘッタヤダエナー。
て　言ったのだよなあ。

C　ソヘバセア　コノ　フユサ　ナ　アキサ　ナレバ　コンド　コノ
そうするとよう　この　××××　冬に　××　な　秋に　なると　今度　この

カリバスヅ　モノ　カゲダアダベオナー　ウー。
仮り橋という　もの　懸けたのだろうなあ　うん。

B　カゲダアデ。　アギ。
懸けたのだ。　秋。

A　カリバス　ウー。
仮り橋　うん。

B　ブラブラブラブラテナー。
ぶらぶらぶらぶらとなあ。

C　フユダバ　コエデ(Q3)　アサガエネハンデァ。
冬なら　こいで　歩かれないから。

B　コエンデ　アサガエネハンデァ　ロー。（C　ウン）　マー　フパ
こいで　歩かれないから　ほらあ。（　うん）　馬(を)　引っぱ

テ　アリテモヨー（C　ウン）　ソリダキャ　フパテ　アルグン
って　歩いてもよう（　うん）　橇は　引っぱって　歩くの

ダキャ　アブナクテ。（A　ウン）アノー　ソエゴン　スモゲ
なら　危くて。（　うん）あのう　それこそ　下肥

ァ　アゲデナー（A　ウン）ツケデ　キレバヨー　アブネテ
上げてなあ（　うん）つけて　来ればよう　危いといって

コー　エノグ　モンダドゴデ　ユラユラテ　ホラ（C　ウン）
こう　動く　もんだから　ゆらゆらと　ほら（　うん）

ウン。アエサ　マー　ツケデ　クル　モンダベ。（C　ウン）
うん。あれれ　馬(を)つけて　来る　もんだろう。（　うん）

ヤット　ソエゴソ　キタ　モンダジャナー。
やっと　それこそ　来た　もんだよなあ。

A　ソエサ　コンダ　ソエデー　エル　ウヅネ　オラホガラ　コンダ
それれ　今度　それで　いる　うちに　俺方から　今度

ホラー　サグランダトスローヅ　フト　コンダ　ソンチョーネ　ナ
ほらあ　桜田俊郎という人(が)今度　村長に　な

ッタエナー。（B　ウン）ソエデ　コンドア　ホロー　ソノ
ったよなあ。（　うん）それで　今度　ほらあ　その

フト　ソエデ　マエネテ。ワ　ソンチョー　ステラハンデ　ソン
人(は)それで　だめだと言って。吾(が)村長(を)　しているから　村

チョー　スタハンデ　ワ　ソンチョー　ステ　エラ　ウヅネ　コゴ
長(を)　したから　吾(が)村長(を)　して　いる　うちに　ここ

サ　ハス　カゲデ　ケラテナ（B　ウン）アー。ソエデ　コ
に　橋(を)懸けて　くれると言ってな（　うん）ああ。それで　今

ンダ　ホロー　オラホガラ　ソンチョー　デダハンデ　コンダ　ハ
度　ほらあ　俺方から　村長(が)出たから　今度　初

ンヅメデ　ハス　カガタダエナー。（B　ウン）
めて　橋(が)懸ったんだよなあ。（　うん）

C ウン ヘバ ホロー ソノ ヅギダネァ。(B ウン) ワ ヘバ
うん すると ほらあ その 時だよ。(うん) 吾(が)すると

アノー ヨメニ ナッテ キタ ヅギヨー。(AB ウン) ショ
あのう 嫁に なって 来た 時よう。(うん) 昭

ーワゴネンニ ヨメネ ナッテ キタキャー (AB ウン) ウ
和五年に 嫁に なって 来たよねえ (うん) う

ー。 ジューガヅノ ジューハヅニヅニ キタ ワゲセァ。(A
ん。 十月の 十八日に 来た わけよ (

ホデタベノー) ホノ ヅギ コンダ ホロー コノ カリバス
そうであろうのう その 時 今度 ほらあ この 仮り橋

(B ウン) ソノ ヅギ ユギ ハヤグ フタ トスデァ (AB
うん その 時 雪 早く 降った 身で (

ウン) ジューガヅノ ジューハヅニヅニ コンダ アノー バ
うん) 十月の 十八日に 今度 あのう 馬

ソリデ ホラー (B ウン) マッコサ ナス(24)テ ヌッテ キタ
橇で ほらあ (うん) 馬これ なして 乗って 来た

ワゲヨー。(AB ウンウン) デマンダ ユギ ジューハ
わけよう。(うんうん) それで また 雪 十八

ヅノ スユギ ケァデァ エマノ カノ(25) ケームショノ ドゴサ
の日 雪(が) 消えて 今の あの 刑務所の 所に

キタキャ コンダ ユギ ネンデヨー ソリ カツ(26)テナー (B
来たら 今度 雪(が) なくてよう 橇(を) 担いでなあ (

ウンウンウン) ウー。 ソステ コンド ヤット マッコ フバ
うんうんうん) うん。 そして 今度 やっと 馬こ(を) 引っぱ

テ コンダ コノ ハス ワダタヅヤー。(A ウーン) カリ
って 今度 この 橋(を) 渡ったのだよ。(うーん) 仮り

バスー。（B ウンウン） エマ ハヅレサ コンダ ンニャ(27)
橋 。 うんうん 今 はずれに 今度 いやあ

オワテ(28) マルタキャ(29)ー モスコスデ トックラガッテ マル ドゴ
終って しまうといった時 もう少しで ひっくり返って しまう ところ

スタダエナー（B 笑） ウー。 ナ ヨメ トックラカステ
したんだよなあ うん。 お前(は) 嫁(を) ひっくり返して

マル ドゴ スタテ（笑） ウー。 デ ホノ ツギ カリバ
しまう ところ したと言って うん。 それで その 時 仮り橋

ス ワダッテヨー。（A ウー）
渡ってよう。 うん

3 ホンデタエナー。 ナンボモ マダ フルグ ネンデナー ソリ
そうであったよなあ。 いくらも また 広く なくてなあ 橇(が)

アサゲバ ナンボモー マー。
歩くと いくらも まあ.

ロクシャグー ロクシャグ アー ロクシャグガ（B ウン）
六 尺 六 尺 ああ 六 尺 か うん

ナナシャググレァスカ ネァテタナー。（C ウン） クギ(30) ヨ
七 尺 ぐらいしか なかったなあ. うん くぎ(を)

ゴサ ウテ ロー。 ステ コンダ ナガラ(31) スタサ。 ナガラ
横に 打って ほうあ。 そして 今度 丸太(を) 下に。 丸太(を)

スーデタガー。（B ウン ナガラ ウン） ステ コンダ コ
敷いていたか 。 うん 丸太 うん そして 今度

モー（B ウン） ワラデ コモー クンデ（B ワラ モラ
菰 うん 藁で 菰(を) 組んで 藁(を) もらっ

テ アヘテナー ウーン） ソレサ コンダ ジャーリ
て 歩いてなあ うーん それに 今度 砂 利

アゲデ ラ(32) ナー。 ステ アヘタ モンダ。 (C ウン)
上げて あらあ なあ そして 歩いた もんだ。 うん

オエノ ヅーモヨ (B ウン) アノ アダリ コンダ ホロー
俺家の 爺もよ うん あの あたり 今度 ほらあ

タデマス モテ アルグ ヅギダドゴデ (B ウン) バサン
小作米(を) 持って 歩く 時なので うん 馬車橋

リサ ロー バシャ バンリサヨー (B ウン) タデマス ツ
にほらあ 馬車(xxx) 馬橋れよう うん 小作米(を) つ

ケデ (BC ウン) ヅッピョーダガ ツケダエナー。(BC
けて うん 十俵だったが つけれよなあ。

ウン) ステ ソノ ソノ カリバス コンダ ユギ フテガラ
うん そして その(xx xx) 仮り橋(を) 今度 雪(の) 降ってから

ソリサ アーア ホロー ツケデ オヤヅ フパテタ ワゲセ。
橋に ああ ほらあ つけて 親父 引っぱって行ったわけよ。

(BC ウン) スタキャー マー マンダ ウダデグ(33) ダンジ
うん そしたら 馬(の) まん ひどく 手こず

ャグダ(34) マデヨー。(BC ウン) エグネ マデタネ。(B
らせる 馬でよう。 うん 良くない、馬であったよ。

ウン。C ウンウーン) コンダ マー アマステ(35) マッテヨー。
うん うんうーん 今度 馬(を) もてあまして しまってよう。

コンダ ホロー ソリ コメ ヅッピョー ツケデ カワノ マ
今度 ほらあ 橋(は) 米(を) 十俵 つりて 川の 真

ンナガワー トックレァガッテ マッテ (C ウーン) コメ
ん中に ひっくり返って しまって うーん 米(を)

オドステ マッタアデ ホロー。(C オヤオヤオヤオヤ(36))(B
落して しまったのだ ほらあ。 おやおやおやおや

ウン　ウン　ステ　コンダ　ハー　ムラノ　フト　ミンナ　カ
うん　うん　そして　今度　はあ　村の　人　みんな　借

エデヨー（B ウン うん）コメ　アゲデ（C ウン うん）ソエ　マ
りてよう　米(を)上げて　うん　それ　ま

ンダ　エサ　モッテ　キテヨ（C ウン うん）コンダ　ドース。コ
た　家に　持って　来てよ　うん　今度　どうする。今

ンダ　タデマス　ダンナサ　モテ　エガエネベー。（C ウン うん）
度　小作米　旦那に　持って　行かれないだろう。

ソエデ　コンダ　オニヤサ(37)　ホラー　ミンナ(38)　モスロ　スエデ　ステ　ホ
それで　今度　お庭に　ほらあ　みんな　莚(を)　敷いて　そして　乾

スタ　ヅギモ　アテ　ホロー。（B C ウーン うーん）
した　時も　あった　ほらあ。

C　ヘバ　ホラー　コノ　ハス　コンダ　ナスタ(39)　ヅギ（A ウン うん）
すると　ほらあ　この　橋(を)　今度　なした　時

ウスタテバス　カゲダ　ヅギ　ヘバ　ショーワナナネンノ　アギ
牛館橋　懸けた　時　すると　昭和七年の　秋

コンダ　コノ（A ウン うん）ウスタテバス（B ウンウン うんうん）
今度　この　牛館橋

カゲダ　ワゲセァ。（B ウン エマノ　マエナー。A ホン
懸けた　わけよ。　うん　今の　前なあ。　そう

デタエナー）マエノ　ハス（A ウンウン うんうん）ウン。ホノ
であったよなあ　前の　橋　うん　その

ヅギ　コンダ　アギ　コンダ　アノー　ホラ　ヨゴウ(40)ヅノ　スカナ
時　今度　秋　今度　あのう　ほら　横内の　鹿内

エヅ　フトガ　マヅ　コノ　ハス　ウゲモッテ(41)（A ウー ウ
という　人が　まず　この　橋　受け持って　うん　そう

ンダ) ソエサ コンダ オナゴンドモ (B ウン) カダワグ
だ) それれ 今度 女達も (うん) 形枠

ナサネバ[42] マエネハンデァ (AB ウン) クギコ ヌガステモ
なさねば だめだから (うん) 釘こ 抜かしても

エヤーハデッテ (B ウン) フタリ コンダ オナゴンドバ
良いので と言って (うん) 二人 今度 女達を

マヅ テマ トニ[43] ナステ[44] ソエサ コンダ オラ キタ ワゲ
まず 手間(を) 取られ なして それに 今度 俺 来た わけ

セァ。 フタリ。 (B ウン) ヤナド[45] フタリー。 (B ウ
よ。 二人。 (うん) ヤナと 二人。 (う

ン) ホノ ヅギノ ヅダエノ オナゴンドノ テマドリ[46]ヅ モノ
ん) その 時の 時代の 女達の 手間取りという もの

ネステ アッタハンデァ (B ウン) ニャ コンドア ホノ
なかったので (うん) いやあ 今度 その

スカテーヅ[47] フト スカテ スカテ スカテ (笑) サギダヅバ[48]。
鹿頭という人 叱って 叱って 叱って 先立ちを

(AB ウン) オナゴノ テマドリ (A ウンウン) ツカ
(うん) 女の 手間取り(を) (うんうん) 使

ルモンダナ[49]テァ。 ニャ ウッテ ホノ ツカタ フト スカエダ
うものでないと言って。 いや うんと その使った 人(は) 叱られた

ダ。 オエノ アラー[50]。
すだ。 俺家の あらあ。

B アノ ヅギ ホラー ニンブ[51] ホラ エヅエンデテァ ホラー。
あの 時 ほらあ 人夫 ほら 一円であったよ ほらあ。

ハヅヅッセンガラ エヅエン。 (A ンダビョン) フトリメァ
八十銭から 一円。 (そうだろう) 一人前

ノ　ニンブデ。
の　人夫で。

C　ヘバ　コンド　ホエサ　オエノ　モガスダバー　ア　アニ　アニテ
すると　今度　それに　俺家の　昔なら　兄　兄と

ヘタハンデナー　（A　ウーン。　B　ウンウン）　オエノ　ア
言ったからなあ　（　うーん　うんうん）　俺家の　兄

ニンド　コンダ　キテタドゴデ　サギダッテァドゴデァ[52]　オラバ　ヘデ
達(が)　今度　来ていたので　先立っているので　俺を　連れて

キタ　ワゲヨー。　（A B　ウー）　ソエデ　コンダ　キテ　ウ
来た　わけよう。　（　うん）　それで　今度　来て　う

ッテ　スカタテヨー。　（A　ウーン）　ホエカラ　オラ　ナンニ
んと　叱ったってよう。　（　うーん）　それから　俺(は)　何日

ヅモ　コンダ　コゴサ[53]　キネスタバタテァ。　エンマ　ヘバ　オナゴ
も　今度　ここに　来なかったけれど。　今　すると　女

ンドバリノ　テマドリ　ヨゲダッキャ。　ン　スタハデ　ソノ　ヅ
達ばかりの　手間取り(が)　よけいだよね。　ん　そうだから　その　時

ギ　オナゴンド　ツカタヅ[54]　ハヅメデ　アッタド。
女　達(を)　使ったの　初めで　あったという。

A　ウーン　ホンデタベナー。
うーん　そうであったろうなあ。

B　ンダベナー。
そうだろうなあ。

A　ツヅエ[55]ノ　トクサスヅ　フト　マンダナー　コーヅ　（C　ウーン
筒井の　徳差という　人　またなあ　工事　（　うーん

）　ゲンバノ　ウー　ヤグメデー。
現場の　うん　役目で。

C　ウンダ（A　ウー）ウッテ　トノサスバ　スカタド。　オナゴ
そうだ　うん　うんと　徳蔓を　叱ったという。　女

ンドバ　ツカタテ　スカタテァ。　ウーン　ショーワナナネンノ
連を　使ったと　叱ったという。　うーん　昭和七年の

トス　カゲダンダネ　ホラー。
年　懸けたんだよ　ほらあ。

A　ウンウン　ホダエン(56)　ホンデタナー。（B　ウン　ホデタナー
うんうん　そうであったなあ。　うん　そうであったなあ

ウンウン）ンステ　カゲダモ　エバタテ　ムガスダハンデ　ナ
うんうん　そして　懸けたも　良いけれど　昔なので　な

ンボー　ナンボバリ　アッタベ。　ニゲ　ニゲンダキャ　ネジャナ
んぼ　なんぼばかり　あったろう。　二階は　ないよな

ー。
あ。

B　ハスガー　ウンウン　アノ　ムガスノー　ウンウンウンウン。
橋が　うんうん　あの　昔の　うんうんうんうん。

A　ウー　ハスノ　アラー　モドノ　ムガスノ　ハスヨー　キュー　キ
うん　橋の　あらあ　元の　昔の　橋よう　九

ューシャグバススカ　ネフテタベーナー。（B　ウン）ニゲン
十尺ばかりしか　なかったろうなあ。　うん　二階

ダキャ　ネフタナー。（B　ウン）
は　なかったなあ　うん

C　ネステ　アッタ。
なかった。

B　エヤ　ヅドシャ　キンバダキャ(57)　ヅット　ネバテ　マネバ。　タダ
いや　自動車　来れば　ずっと　くっついて　しまわないと。　ただ

アリテ　エガエネデァ。
歩いて　行かれないのだ。

A　キューシャグバリスカ　ネフタバ　ウン。　コンダ　ミヅ　クレバ
九　尺　ばかりしか　なかったろう　うん。　今度　水(が)　来ると

ナー　アノ　ハスノ　ウエ　(B　ウン)　ミヅ　コスヤダエナー。
なあ　あの　橋の　上(を)　(うん)　水(が)　越すのだよなあ。

モドノ　ハス　アレァ(58)　ヘヤ(59)　コノ　ヘンモナモ　ミヅ　クレバ
元の　橋　あれえ　そうすると　この　辺もなにも　水　来ると

ナー　ソックド　ハー　ウミド　フトヅ(60)。　(B　ウン)　(C　ホ
なあ　そっくりと　はあ　海と　同じ。　(うん)　(そう

ダエナー　ウン)　ミヅ　クレバ　エヤ(61)　ワガエ　ネ(62)　コノ　ヘン
だよなあ　うん)　水(が)　来ると　若稲(つまり)　この　辺

ノ　カワノ　ハダノ　エネ　ミンナ　ナガエデ　(B　ナガエデ
の　川の　端の　稲(が)　みんな　流れて　(流れて

ナー　ウン)　ウーン　モガスノ　ナガスギ(63)　ナガエデ　クルナー。
なあ　うん)　うーん　昔の　流し木(が)　流れて　来るというなあ。

B　ウン　リンゴ　ナガエデ　クルナー。　(A　ウン　リンゴ　笑)
うん　りんご(が)　流れて　来るというなあ。　(うん　りんご)

ツリバスニ　エデ　リンゴ　トンダエナー。　(C　笑)　ハス。
吊り橋に　いて　りんご(を)　取るんだよなあ。　橋

(笑)

A　アノ　スエドーバスダテ　ヴンブ　ムガス　ウウ(64)　タガフタエナー。
あの　水道　橋だって　ずいぶん　昔　高かったよなあ。

(B　タガフタエナー)　アノ　ハス　ハー　ツグダゲ　クルア(65)
(高かったよなあ)　あの　橋　はあ　ひれるだけ　来るの

ダエナー。
だよなあ。

B　リンゴ　ア　アミデ　スグル　ワケヨア　ロー　ウン。
　　りんご(を)　網で　すくう　わけよ　ほらあ　うん。

A　ソエデ　コンダ　ホロー。
　　それで　今度　ほらあ。

C　ナンタテ　マー　アノ　ハス　カガタテ　エーステナー(66)　ウー。
　　なんといったって　まあ　あの　橋(が)　懸ったといって　良くてなあ　うん。

A　ウー　ソエデモ　マンダ　エー　ハス　カガッタテ　ウー。（笑）
　　うん　それでも　まだ　良い　橋(が)　懸ったといって　うん。

B　ウン（笑）　アエッカラ　コンダ　ヨメ　モラウニモ　ケルニモ
　　うん　　あれから　今度　嫁(を)　もらうにも　くれるにも

　　ハ(xx)　ハゲデナー(67)。（笑）
　　さばけてなあ。

A　エー　アンベスターテ　（B　ウン　うん）（笑）　ウー　ソエデ　コン
　　良い　あんばいしたといって　　うん　それで　今

　　ダ　ホラ　サグラダヅ　フト　ソンチョー　ステ　コンダ　キネン
　　度　ほら　桜田という　人(が)　村長(を)　して　今度　記念

　　ヘ　ホラ　ホートプヘテ　ハー　キネンヘン　タデダ　ワケダ　ア
　　碑　ほら　報徳碑といって　はあ　記念碑(を)　建てた　わけだ　あ

　　ー。
　　あ。

B　ホダエナー。　アノ　フトダキャ　ソンチョー　サネバダキャ　マ
　　そうだよなあ。　あの　人が　村長(を)　しないならば　ま

　　ンダ　マダ　マンダ　マダダキャ　コーユー　ハスダキャ　タダネ
　　だ　まだ　まだ　まだ　こういう　橋は　建ない

ンデァ。
んだ。

A　ウン　タダネナ。
うん　連れないな。

C　カガネ(68)　カガネ。（笑）
懸からない　懸からない。

注記

(1) 「俺方の村でなあ」の意。

(2) 終止形は「コグ」。「川をコグ」とは「川にザブザブ足を踏み入れてわたり歩く」ことである。昭和7年まで橋がなかった。

(3) 「ケツ」は「尻」をいうが、着物の場合には「裾」をいう。別に「ケッツ」とも発音する。

(4) 「大概」だが、「たいてい」と訳す。

(5) 収録地の名。

(6) 「テ」は「といって」の意に解されもするが、むしろ無意味の発音。

(7) 文脈上、逆接の助詞で解する。この類の「ヤ」はよく使われる。

(8) 「自分の家」を「オエ(俺家)」「オエ(俺家)ノエ(家)」。それに対して「相手の家」を「オメダ」「オメダノエ」という。次に語源説をあげる。「オメダ　お前さんの家。アチタ　ソチタ　コチタ『タ』は場所を表わす接尾語」(松木明「弘前語彙」)。「だ『他』　ほかのところ、よそ、他所。　あだ『他、異』　例、物類称呼　外《そと》の事を西国にてあだと云。俚言集覧　備後あたりの在辺にて外をあだと云。」(日本国語大辞典)

(9) 話者Cは嫁入り前の、牛館の様子は詳しくわからないため疑問の助動詞「ベー」を使った。Cは牛館より約5km西方の細越(現在青森市)の生れである。

(10) 「クレバ」の「バ[ba]」の[b]の脱落。

(11)(12) 同一の橋。水道管を吊り橋状に渡しているため、人にはどちらでも呼ぶ。現在、以前よりも立派に同じ場所に懸っている。

(13) 「キン」は副助詞「きり」だが「くらい」と訳すのが適当。「コノ」等の連体詞に付属して使われることも多い。話者Cは手まねで板の巾の狭さを示した。次の話者Aがその巾を説明している。

(14) 一尺程度の巾だと言っているが、実際には12cm程度でその板がずっと向う岸まで渡していたという。

(15) 地名、青森市大字「八ッ役(やつやく)」。昔から「ヤジャク」という。収録地から川(荒川)を隔てて200m程離れた最も近接している地である。

昔、橋が架っていなかったため水道橋（吊り橋）を渡って醤油等を買いに行くにはかなり遠回りして行ったことになると話している。直線距離を行くならば「川もコグ」ことになる。

(16) 「コ」は指小辞。2.「縄綯い」注記(12)参照。

(17) 「ナ（汝）エ（家）〔nae〕」が〔nɛ〕となった。

(18) 「エデァ」は基本的には「エダ（いる）」である。標準語的扱い方をするなら過去だが、実際は現在を表わす。誰かが家に「来た」という行動を完了してそこに存在していると説明しておく。この文は簡略にすると「ダー（誰）エダ（いる）」の構文であるため訳は「誰」という疑問代名詞に応じて「いるのか」と訳す。

(19) 「キャー」「キャ」が文末に使われる場合の訳はむずかしい。「～よね」を当てておくが、方言は婉曲・敬意は含んでいない。語源不明。

(20) 「安配」

(21) 「ネァヤ」の「ヤ〔ja〕」の〔j〕の脱落。注記(7)参照。

(22) 次の「アンマリー」の「ンマリー」の言いかけ。「ア」が脱落した。

(23) 「（川を）コエデ」

(24) 次の「ヌッテ」と同意。「～をなす」を使うのは話者とのつぐせ。

(25) 「あの」の意で「カノ」を使うことはないため誤りの発音。あるいは次の「ケームショ」の「ケ〔ke〕」の〔k〕音を意識して発せられたと解釈すればよいか。

(26) 「担ぐ」は「カップ」の他に「カヅグ」とも発音する。

(27) 当地特有の表現で、たいへんな事態の際に使う感動詞。

(28) 「渡りオワテ」

(29) 「キャー」「キャ」が文中に使われる場合の扱い方もまたむずかしい。文末に使うのと併せて今後の研究すべき課題である。

(30) 木の杭状のもの。釘でない。

(31) 当地の人は簡明に「丸太のことだ」と解答したのでそのまま訳にしたが、「全体が細長い木で、直径がそれほど大きくも小さくもない製材しない木」　参考として「細長い木。ナガカラ（長幹）の意か」（松本明「紅苅語彙」）

(32) 代名詞「あれ」に相当し、遠い過去のことをさし示す。

(33) 語源は形容詞「うたてし」

(34) 「惰弱」だろうか。「ダンダグ 駄々をこねること。惰弱にもとづく」(松木明「弘前語彙」)

(35) 「(馬を)アマステ」

(36) 驚きの表現。

(37) 屋敷内の家の前のやや広い通路のあたり。「オ」の尊敬接頭語がついているが、敬意は失せ、語中に固定している。

(38) 「(お庭)全体」の意。

(39) 後の「(ウスタデバス)カゲダ」と同意。注記(24)参照。

(40) 地名、青森市大字「橋内(よこうち)」。収録地から、約3km東方にある。

(41) 「ハス(の工事を)ウゲモッテ」

(42) 「~をなす」の表現は話者Cの口ぐせ。この場合「作る」の意。

(43) 「テマ(を)ト(り)ニ」。「手間を取る」とは「手間賃を取る」。日雇として働きに行く」の意。

(44) 「雇って」の意。注(24)(39)(42)参照。

(45) 当時、話者Cの隣人であった同年配の女性。

(46) 「テマドリ」は「日雇人夫」のこと。

(47) 本名「鹿内卓作」。話者Cは「スカテーゾフト スカテスカテ」の同音によるおもしろさをねらって話している。

(48) この場合「監督者」の意。「スカテー氏」をさす。

(49) この「ナ」は今後考察を要することばだが、反語的に訳さなくけはいけない。

(50) 話の内容は5行後の同じ話者Cの「オエノ アニンド…」へつながる。「アラー」の意については注記(32)参照。

(51) 「人夫賃」のこと。

(52) 「スカテー氏より上役だったので」の意。

(53) 「牛舘」をさす。

(54) 「ヅ」は「ヤヅ」(漢字を当てるなら「奴」)の「ヤ」の脱落。

(55) 地名、青森市大字「筒井」。収録地からは約5km東北方。現在、青

森市中心部から表通みが連続して、昔の農家の面影は失せた。

(56) 「ホダエンタ（そのようだ）」と言おうとしたらしい。

(57) 「ダキャ」は「強意」を表わすが訳しようがない。注記(19)(29)同様今後考察を要することばである。

(58) 注記(32)参照。

(59) 「ヘバ〔heba〕」→〔heə〕→〔hejə〕。

(60) 「ひとつ」

(61) 無意味の発音。

(62) 当地では「若稲」と熟語にすることは珍しい。しかし、あろうるともいう。

(63) 山で伐採した大きい丸太を川の上流から流して運ぶことからこの名がついた。これを乾かし、割って冬の薪にする。上等の薪である。

(64) 無意味の発音。

(65) 「（川の水が流れて）クルアダエナー」

(66) 「ナー」は〔Nə:〕に聞こえる。

(67) 「ハゲル」（基本形）は「はける＝掛ける」

(68) 「（橋は）カガネ」

6. 川のさかなとり

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
A	桜田 鉄弥	男	明治36年生れ
B	八木沢千代三郎	男	明治43年生れ
C	棟方 トミ	女	大正2年生れ

A モドダバー アツ ヅギ アツグ ナレバー カワネ マスガラ
元なら 暑い 時 暑く なると 川に 鱒から

(B マス ウン) ナニガラ サガナ エデ エデデナ ラー ワ
鱒 うん 何から 魚(が) いて いてな。あらあ 子

ラハンド ミズ アンブル。オドナド マス トルー ウー。
ども達(は) 水 浴びる。大人達(は) 鱒 捕る うん

B ヤー コドスダエ ネ ヌグエヅギ ヌゲァ ワゲダラ ナンボモ
やあ 今年のように 暑い時 暑い わけなら いくらでも

トネ エフタデァ。マス バガイ(1) ナッタテ バガイ ナルッテナ
捕りに 良かったよ。鱒(が) ばかに なったといって ばかに なるといってなあ。

ー。(A C 笑) アノ トンヅ バガ ツケデナー マス(××××) マスー
あの 当時 ばか(を) つけてなあ 鱒

バガエ(2) ナルテ (C ウー うん) ウー トニカグ ハー ブラブラ
ばかに なるといって うん とにかく はあ ぶらぶらと

テ カラダ キガネグ ナッテ マルダオナー。ワラハンドデモ
体(が) きかなく なって しまうのだものなあ。子ども達でも

トニ　エグナッテ　マルダネー。（A　アンマリ　アツドゴデ）
捕りに　良くなって　しまうのだよ。　あんまり　暑いので

アツドゴデー（A　ウン）テデ　リョーホーデ　ラー　ドット
暑いので　うん　手で　両方で　あらあ　どっと

(3)
ナゲレバ　ナー　コー　オガサ　ナゲデ　ヨゴスタリ　ステヨー。
投げると　なあ　こう　陸に　投げて　よこしたり　してよう。

A　マス　エデー　マス　エデー。（B　ウー）エヤ　マスバリデ
鱒(が)　いて　鱒(が)　いて　。　うん　いや　鱒ばかりで

ネヤー　ソエゴソ　ヤット　ハルサ　ナレバ　オーゲ　ナー。（B
なくて　それこそ　早く　春に　なると　うぐい　なあ。

ウン　オゲ）ウーン　オゲ　エデ　ドンダノ(4)ヤラ（B　フトアミ
うん　うぐい　うーん　うぐい(が)いて　どうなのだといって　ー網

ウヅンダバナ）ウン　マスヨリ　チョト　ワンツカ　ツチャケ
打つならなあ　うん　鱒より　ちょっと　わずか　小さい

モンダバタテ　ウン　ハル　ヤット　ヨゲ　オゲ　エデ　コンダ
もんだけれど　うん　春　早く　うぐい(が)いて　こんど

ゴガツ　タウエ　スマレバ　コンダー　ヌググ　ナラハンデ　マス
五月(に)　田植(が)　済むと　こんど　暑く　なるから　鱒(が)

エデ　ラー（B　マスデァ　ホロー）ナー。
いて　あらあ　鱒で　ほらあ　なあ

C　ゴガツノ　エァヅメネ　アー　カンツカ　トテ　ウー（B　ウー）
五月の　植えじまいに　ああ　かじか(を)　捕って　うん　うん

(5)
カヘルテ　ナー　カンツカ　トネ　ミンナ　エッテデ　ナステレー。
食わせるといって　なあ　かじか(を)　捕りに　みんな　行っていて　なにしてあれー。

B　ウン　チュハン　ケバ　ハー　タンゲ　ハー　ウーン　ネドリンド
うん　昼飯(を)　食うと　はあ　かなり　はあ　うーん　苗採りの人(は)

ナー　ウー　アー　アリー　タ　カグヅアンデ　ヌゲデナー。（C
なあ　うん　ああ　あのう　田(を)　かくというので　抜けてなあ。

ウー　ヌゲデー）　ウー　ソステ　コンダ　コー　オステロー。ウ
うん　抜けて　うん　そして　こんど　こう　押して　ほら。う

ー　マグラ(6)　コヘデ。ヤナギ　キタゲテナー(7)。（A　カンツカト
ん　枕(を)　こしらえて。柳(を)　切ってなあ。　かじか　捕

リテナー）　アエデ　カンツカトリテ　ホラー　バンゲノ(8)　オワリ
りと言ってなあ　あれで　かじか捕りといって　ほらあ　晩の　終りに

サ　ソエ　コンダ　ツグ　ワケダー。ウー　ハダギ(9)　スタリナー。
そん　こんど　つく　わけだ。うん　はたき(を)　したりなあ。

（A　アー）　カンツカ(10)　ドゴデモ　ヤッタ　モンダエナー　ウー。
ああ　かじか(は)　どこでも　やった　もんだよ　なあ　うん。

A　ウー　ナンスロ　フルマサ　ナレバヨー(11)　ムガスダバ　カワ　ソツ
うん　なにしろ　昼間に　なればよう　昔なら　川(が)　そっち

ァ　マガル　コチャ　マガル　スタドゴデー　マガリカンド　ミン
へ　曲る　こっちへ　曲る　したので　曲り角(が)　みん

ナ　フンヅデ（B　ウー　ウン　ウン）　ヘー　タダネンダエナ
な　淵で　うん　うん　うん　背(が)　立たないのだよなあ。

ー。ヘバー　ソゴネ　ホラー　フケァ　ドゴデ　マスーデモ　ナン
すると　そこに　ほらあ　深い　ので　鱒　でも　なん

デモ　エードゴデ　ソノ　マガリカンドノ　フンヅネ　ドゴモ　カ
でも　いるので　その　曲り角の　淵に　どこも　か

スコモ　ミンナ　ハー　マストリ　ホレ　フルマヤミス　ヤスミネ
しこも　みんな　はあ　鱒捕り　ほれ　昼間　休みに

コンダ　ホレー　ホロー　オラダヅ　コンダ　ナー　ハー（B
こんど　ほれ　ほらあ　俺達　こんど　なあ　はあ

ウー) コンダ フルマヤスミダハンデ マス トネ エグベスーテ
うん) こんど 昼間休みだから 鱒(を) 捕りに 行こう といって

コンダ ワラハンド ワラハンドド マンダ アツドゴデ ミンヅ
また 子ども達(は) 子ども達同志(で) また 暑いので 水(を)

アブネ エテヨー ワラハンドモ オドナモ コンダ マンジャテ
泳ぎに 行ってよう 子どもも 大人も こんど まざって

(B ウン) ヤー ウット オラホノ(12) カミガラ コツマデ ハ
(うん) やあ いっぱい 俺方の 上から こっちまで は

ー カワ ソックド(13) ハー フトダラケ。
あ 川 全部 はあ 人だらけ。

B マストリナー (A ウン マス マス トルテ) ウン クグッ
鱒捕りなあ (うん 鱒(を) 捕るといって) うん もぐっ

テ アラー (A ウン) ウン テ テガギテナー (A ウン)
て あらあ (うん) うん 手鉤といってなあ (うん)

テデ コー ヤッテ クグッテ ギュット カゲルダエナー。
手で こう やって もぐって ぎゅっと 引っかけるのだよなあ

A カギコ モッテナー クグッテ エテー アノー ガラス ハ ハ
鉤こ(を) 持ってなあ もぐって 行って あの ガラス 箱

ゴサ ガラス (B ウン メガネ) ツダ ヤヅ(14) クグッテテ
に ガラス (うん 眼鏡) ついた やつ(を持って) もぐって行って

コー フンヅサ ハッテ エテ ソステ ツグ ヤヅ ハラサ コー カ
こう 淵に はいって 行って そして 突く やつ(を) 腹に こう 懸

ゲデナー ステ ハー ホロー フンヅガラ コンダ アガテ キテ ウン。
けてなあ そして はあ ほらあ 淵から こんど あがって きて うん。

C ナー ホレホンド エデタテ(15) エマ ホラ ナンモ エナグ ナ
なあ それほど いてあったけれど 今 ほら 何も いなく なって

ッテ　マタエナー。（A　ウン／うん）
しまったよなあ。

B　ラー　アユナー。（C　ウン／うん）　アギ　コンダ　サゲダベ　ウン。
あらあ　鮎なあ。　秋　こんど　鮭だろう　うん。

サゲモ　マンダ　ショーガヅ　モヅ(16)　トストリノスノ(17)　サゲ　トタ
鮭も　また　正月　　年越の日の　　鮭(を)　捕った

エナー。コゴデナー。カワサ　ミヅ　アブヘニ(18)　エテ　ホラー　ウ
よなあ。ここでなあ。川に　水(を)　浴びせに　行って　ほら　う

ン。
ん。

A　サゲモ　アエ(×××)　アエモ　マンダナー。（B　エデター／いたなあ）　アエ　エ
鮭も　鮎も　またなあ。　鮎(が)　い

デ　アエ　エデ　ナモカモ　ハー　カワ　コゲバー　アエサ　アガ
て　鮎(が)　いて　何もかも　はあ　川(を)　こぐと　鮎に　あがっ

テ　アサグアデァナー（B　ウン　ウン／うん　うん）　ウン。
て　歩くのだよなあ　　うん。

C　ホントニヨー　ガニ　エデ　ガニ　エデセァー。（B　ウン／うん）
ほんとによう　蟹(が)　いて　蟹(が)　いてよ。

ホントニ　アメ　フレバヨ（B　ウン／うん）　オラダヅ　タッコアミッ
ほんとに　雨(が)　降るとよ　　俺達(は)　たも網って

テ　アノ　マス　ツケデ(19)　ラー。（B　ウー　ホンダ　ホンダ／うん　そうだ　そうだ）　アエ
あの　鱒(を)　つけて　あらあ。　　あれ

デ　コッタ　オッキ　ガニ　ンニャ　サンビギモ　ススギモ　ハッ
で　こんな　大きい　蟹　いや　三匹も　四匹も　はい、

テ　キテサ。　ソステ　エサ　モッテ　キテ　コンダ　ナヘバ(20)　コ
て　きてさ。　そして　家に　持って　来て　こんど　なせば　子

ー　ハッテ。
(が)　はいって。

B　イワスノ　(C　ウン / うん)　アダマ　(C　ウン　ウン / うん　うん)　ツケデナ
鰯の　頭(を)　つけてなあ

ー　コ　コ　コーユー　マルイノ　スメァモ　ゴメァモ　ジュメァ
××　××　こういう　丸いの　四枚も　五枚も　十枚

モナー　(C　ウン / うん)　(21)トゴロドゴロサ　オエデヨ　ヅカン
もなあ　所々に　置いてよ　時間(が)

キレバ　コー　アゲンダバ　ヤー　(22)ドンダガーテ。
来ると　こう　揚げるなら　やあ　どうだろうかと

C　(ヤー / やあ)　オエノ　ワラハンドンドダケァ　(B　ウー / うん)　モスロ
俺家の　子ども達は　おもしろ

ガッテ　コンダ　ハステッテ　ツケルアダエナー。ソヘバ　マンダ
がって　こんど　走って行って　つけるのだよなあ。そうすると　まだ

ナンボデモ　ツデ　キルアヅ　ウン。
いくらでも　ついて　くるのだ　うん。

B　アノ　ガニ　エマ　ドゴサ　エッタ　モンダガサ　ハー　ナー。ア
あの　蟹(は)　今　どこに　行った　ものかしら　はあ　なあ。あ

レホド　エダモノナー。
れほど　いたものなあ。

C　ホンダキャ　ミテステモ　エネァ。
そうだよね　見たくても　いない。

A　チョンド　アレア　ヅギダバ　(B　ウン　(23)エマ　コエカラ / うん　今　これから)　エ
ちょうど　あれは　時期なら

ネガリー　(B　コエカラダネ　ウン　コエカラダネ / これからだよ　うん　これからだよ)　コエカラ
稲刈り　これから

ダネナー。ンー ヘバ チョンド ガニ コエデヨー (B ウン) ア
だよなあ。うん すると ちょうど 蟹(が) 肥えてよう (うん) あ

ー ガニノ コーラノ ミソ メァテ アラ ナー (B ク ク
あ 蟹の 甲羅の みそ うまいといって あらあ なあ

マガニッテナー アーアー) (笑) ナガニモ メガニ メァフ
熊蟹ってなあ ああああ なかにも 雌蟹(が) うまかっ

タエナー。
たよなあ。

B メァフター ウン。
うまかった うん

C メァガニノ(24) コー ハッテナー コーステ ナヘバ(25) タナ コー
雌蟹の 子(が) はいってな こうして なせば いやもう 子

ハッテー。
はいって

A ミンナ ハー ナモカモ ハー ヅット カミガラ(26) ガニ ツル
みんな はあ 何もかも はあ ずっと 上から 蟹(を) 釣る

フトァ (B エギアッテナー) エギアッテ マッテナ。
人は 行き会ってなあ 行き会って しまってな。

B マヅガッテ トナリノ アヅ アゲダ オエノ アヅ アゲネッテ。
まちがって 隣の やつ(を) あげた 俺の やつ(を) あげない といって。

(笑)

C ケンカ ステナー (笑) アー。
喧嘩 してなあ ああ

注記

(1)(2) 〔nï〕の〔n〕の脱落。そして〔ï〕は〔e〕と発音が混同することもしばしばである。あるいは〔ï〕は〔e〕に吸収されてしまうことが多い。

(3) 「(オガサ)ナゲレバ」。「オガ」は後文に出るが、この場合「岸辺」の意。

(4) 「ヤ」は感動終助詞。「オゲ」がたくさんいることに対する感嘆。

(5) 「～なす」「～をなす」の言い方は話者Cの口ぐせ。この場合「捕って」の意。

(6) 「マグラ」は柳の枝を束ねたもので即製の漁具。

(7) 前行の「コー　オステロー ～」から以後の文脈を整理すると「ヤナギ(の枝を)キタゲテ　マグラ　コヘデ　コー(川の中を)オステ(行く)」の意。

(8) 「晩の、仕事が終った食事に」の意。

(9) 魚料理の一つ「たたき」。酢をかけ大根おろしをつけて酒の肴にしたり、すり身にしてかまぼこのように煮て食う。

(10) 「カンツカ(のハダギは)」

(11) 文脈上、5行後の「フルマヤスミ」へかかる。

(12) 「オラホノ(村の)」

(13) 「そっくりそのまま全部」

(14) 「箱眼鏡(はこめがね)」のこと。底にいる魚を見て捕る漁具。

(15) 「エデタ」は標準語にない過去完了の表現法。

(16) 「ヅ」は聞き取りが困難。「正月持つ(正月に使う為蓄えておく)」の意か。それとも「モヅ」は不要のことばか不明。

(17) 「トストリノス(のご馳走に使う)サゲ」の意。

(18) 「(馬を)カワサ　ミヅ　アブヘニ(連れて)エテ」の意。

(19) 「マス(を餌に)ツケデ」

(20) この場合「煮て甲羅をとると」とか「食うと」の意。注記(5)参照。

(21) 聞き取り不可能。

(22) このあと「どうだろうかと思ってみるとすごい大漁だ」という内容

のことばを看映している。

(23) 「これからが蟹を捕る時期だ」の意。収録日が9月5日であり、9月下旬になると稲刈期に入る。その頃が蟹を捕る時期である。

(24) 「メァガニノ（腹の中に）コー」

(25) 「蟹の甲羅をとると」の意。注記(5)参照。

(26) 「カミ」は「川の上流」のこと。

7. お山（岩木山）参詣

話し手

（略号）	（氏　名）	（性）	（生年）
A	桜田　鉄彌	男	明治36年生れ
B	八木沢千代三郎	男	明治43年生れ
C	棟方　トミ	女	大正2年生れ

B　ウー　マー　コナイダノ　オヤマサンケ(1)ーテ　エマ　サベタ(2)　トー
うん　まあ　この間の　お山参詣といって(と)　今　しゃべった　とおり

リ　ウー　ソー　ナンデンテ　ナフテ　アッタケンドモー　マー
うん　そう　なんだといって　なかった　けれども　まあ

ムガスサ　クラベレバ　ナンダナー　オヤマサンケモ　ウー　ダン
昔に　比べると　なんだなあ　お山参詣も　うん　だん

ダンダンダン　アカンジモ　スグナグ　ナッタスナー　アノ　（
だんだんだん　あ　数も　少なく　なったしなあ　あの

A　ウーン）　ブブブ(3)　サイギサイギ　バタラバタラヨー　（A
うーん　××××　祭祀祭祀　ばたらばたらよう

ウーン）　ムガスワ　ビッドダモッ(4)タケドモ(5)　エマダバー　（A
うーん　昔は　村人みんなだと　思ったけれども　今なら

ウー　ウン）　サッパリ　コー　ダンダンダンダン　コー　サガッ
うん　うん）　さっぱり　こう　だんだんだんだん　こう　さがっ

テ(6)　キタデ　ネァガー。　ウー。
て　来たので　ないかなあ。　うん。

A ～～～～ コネンダモ エッテモ エフテタベーナー。
この間も 行っても 良かっただろうなあ。

B ウー エー エー エーテバ エーンタ モンダバタテヨー。ム
うん 良いといえば 良いような もんだけれどよう。昔

ガスサ クラベレバヨー ムガスサ クラベレバ コヅガラ コー
に 比べるとよう 昔に 比べると こっちから こう

ウー カラダ キヨメデ エッテ オナゴンド アノ ハエラエ
うん 体を 清めて 行って 女達(が) あの はいられ

ネァンタ (A アーム) アーユー ヅダエガラ クラベレバ
ないような ああ ああいう 時代に 比べると

ヨー。
よう。

A ウー ムガスダバナー ソエゴソ マ オモネ ワゲァ フトバリ
うん 昔ならなあ それこそ ま 主に 若い 人ばかり

ウー コーリ トテ マー ムラノ オミヤサ ナ (B ウン
うん 垢離(を) とって まあ 村の お宮に な うん

) エッシューカンモ チョンド エッシュカンダナ (C エッ
一週間も ちょうど 一週間だな ー

シュカンダタ(ク)) コーリ トッテ ホロー。
週間だった 垢離(を) とって ほらあ。

B カラダ キヨメネ トマッテナー。
体 清めに 泊ってなあ。

A アー トマッテー アー トマッテ ハー ハー ナー エ ソ
ああ 泊って ああ 泊って はあ はあ なあ

ソ エグネァ ゴト ハー サエネァ ワゲダ。
良くない こと はあ されない わけだ。

B （笑）ウン エグネ ゴト。
うん 良くない こと。

A ヘバ ハヅネカテ(9) エグネァ ゴト ステ エゲバ ウー トカ゜メラエデ ゲデ××××
するヒ 八に 良くない こヒ して 行くヒ うん ヒがめられて

ゲデスーテ(10) (B ウン うん) ウー ヤマサ ノボエネァテナー。
懈怠するといって うん うん 山に 登れないといってなあ。

(B ウン うん) スタハデ ハー ワゲモノ ハー エグネァ ゴト
そうだから はあ 若い者(は) はあ 良くない こと

サネァ(11) エッショケンメァ ホラー (B ウン うん) アノー ミ
しないで 一所懸命 ほらあ あのう

ンナ カワ ソバネ アルグドゴネ(12) (B ウン うん) ウー オミヤ
みんな 川(が) そばに ある所に うん お宮(が)

アルハンデ(13)。
あるから。

B ヨル エサ ニゲデ キタリ スタ ヘトダラ ゼッタエ マエン
夜 家に 逃げて 来たり した 人なら 絶対 だめ

ダナー。
だなあ。

A マイネ。 (B ウン うん) コンダヨー アサマネ ハー クレァネ
だめだ。 こんビよう 朝に はあ 暗いうちに

オギデ (B ウン うん) コーリ トルアダエナー。 (B アー ああ
起きて 垢離(を)とるのだよなあ。

サンブエ ヅギダエナー ウン) ヤー(14) ゴサノ ウン ゴサノ
寒い 時だよなあ うん やあ 合子沢の うん 合子沢の

アノ カワノ ミ サ ミンヅ (B ウー シャコイ ミヅ)
あの 川の 水(は) うん 冷たい 水

サッコエ ンダベ。エヤ シャッコエノ サッコグ ネァノッテヨー
冷たいんだろう。いや 冷たいの 冷たく ないのってよう

(B ウン / うん) ソステ ホロー コーリ トッテ。
そして ほらあ 垢離(を) とって。

C ホンダヤー オラノ エネ エデ ツセァ ヅギダバヨー (B ウン / うん)
そうだよう 俺の 家に いて 小さい 時 ならよう

オエノ エー チョンド オミヤノ ソバダアヅ。 (A アーン B ウン / ああ うん)
俺の 家 ちょうど お宮の 側なのだ。

スタドゴデセァー コンダ アノー サンケ トド ヨル (A アーア B ウン / ああ うん)
そうだからよう こんど あのう 参詣 人達(が) 夜

テーゴ タダエデァ コリ トニ エグニ サーイギ(15) サーイギテ サイギ ヨンデヨー (A アーア B ウン / ああ うん)
太鼓(を) 叩いて 垢離 (を) とりに 行くのに 祭祀 祭祀といって 祭祀 読んでよう

ソステ コンダ カワサ コーリ トニ エグアヅ キゲバセナ (A B ウン / うん)
そして こんど 川に 垢離(を) とりに 行く(を) 聞くとよな

ナンボ ワラハンドナガ ラデモ レァ (B ウン / うん)
いくら 子どもながら にでも あれえ

ナミダ デルエンテ アッタテー (A ウーン / うん) ウーン。
涙(が) 出るようで あったよ うん。

B コヤ カゲデ トマテルンダエナー。
小屋(を) かけて 泊まってるんだよなあ

A ウー オミヤ (C オミヤデ / お宮) ネァ ドゴダバ。
うん お宮(が) ない 所なら。

C　オミヤノ　ネァ　ドゴダバ。（B　ウンウンウン）　ホンダバテ
　　お宮の　ない　所なら。（うんうんうん）　そうだけれど

(16)
オラホーダバ　オミヤ　アッテタハンデ（A　アー）　コンダ
俺の方なら　お宮(が)　あったから（ああ）　こんど

ハヤス（B　ウンウン）　ハヤステ　ホラ　ハヤスネ　エデヨー
林（うんうん）　林といって　ほら　林に　いてよう

テァゴ　タダエデナー。
太鼓　叩いてなあ。

(17)　(18)
B　ヤジャグノ　フトンド　コ　ココノ　カラ　カラメデ　ソエゴソナ
八ッ役の　人達(は)　ここの　石川原で　それこそなあ

ニ。

(19)
A　ココノ　スタネ　エデナー　ヤジャグダバ　ラー。
ここの　下に　いてなあ　八ッ役なら　あらあ。

B　ウー　ヤタエナー　オナゴンド　オナゴンドテバ　マー　ナンダケ
うん　やったよなあ　女達　女達といえば　まあ　なんだ

ドモ　ゼンゼン　コノ　モノ　モッテ　キタリ（A　アーアーア
けれども　全然　この　物(を)　持って　来たり（ああああああ

ー）　ナニ　モッテ　キタリ　スノ　ウゲヅゲネァヅ　ワゲデネァ
ー）　なに　持って　来たり　するの　受け付けないという　わけでないのか

ガ　ヨラエネァンダツケナー。（A　ウンダ）
　　寄られないんだという話だなあ。（そうだ）

C　スタラセァ　ヅット　コー　ナワ　ハッテ　マッテヨー（B　ウ
　　だってさ　ずっと　こう　縄(を)　張って　しまってよう（

ンウン）　ゼッタエ　ハー　オナゴンドダケア（A　アー）
うんうん）　絶対　はあ　女達は（ああ）

コッチャ　ハッテ　エガエネヤダモノ。
こっちへ　はいって　行かれないのだもの。

A　ソゴサ　コー　ナワ　ハッテ　ゴフェ　ツケデナー　ステ　ハー
そこへ　こう　縄(を)　張って　御幣(を)　付けてなあ　そして　はあ

エヅデモ　ホロー　コリ　トネ　エグ　ヅギ　テァゴ　タデァデ
いつでも　ほらあ　垢離(を)　とりに　行く　時　太鼓(を)　叩いて

ハー　(B　ウン)　ウー　サーイギ　サーイギテ　ハー　(C
はあ　(うん)　うん　祭祀　祭祀といって　はあ　(

ウン)　ヨンデ　ソラ　(B　ウン)　コーリ　トネ　テァゴ　タ
うん)　読んで　そら　(うん)　垢離(を)　とりに　太鼓(を)

デァデ　(B C　ウンウン)　ウー　ステ　エグ　ワゲセー　ウー。
叩いて　(うんうん)　うん　そして　行く　わけよ　うん

(20)
B　ステ　ムラマワリダエナ　(A　ウン)　ムラメァ　ムラメァテ。(
そして　村回りだよな　(うん)　村めえ　村めえといって。(

C　ウー)　ウー　(A　ウー)　ムラマワリ。アノー　エーセン
うん)　うん　(うん)　村回り。あのう　一銭

ダラド　ニセンダラ　モッテナー。
だうと　二銭だう(を)　持ってなあ。

C　ジェンコ　ミガエデヨー。(B　ウー　ンダベ)　コッチャ　スレ
銭こ(を)　磨いてよう。(うん　そうだろう)　こっちに　白い

(21)　(22)
ァ　アレ　キヘデナー　(B　ステナー　ジェンコ　コゴサ　ヘデ
あれ(を)　着せてなあ　(そしてなあ　銭こ(を)　ここに　入れて

(23)
A　アノー)　サンジャグ　スメラヘデ　スレァ　ヤヅ　ハヅマ
あのう)　三尺帯(を)　締めらせて　白い　やつ　鉢巻き

ギ　サヘデー。
(を)させて。

B アレー カンドカンドデ コー ジェンコ マグエンタナー。(A
あれえ 門門で こう 銭こ(を) まくようだなあ 。(

ンダ) カンドカンドデ ウー。
そうだ) 門門で うん

A ナニ ナニセヨー アノー スレァ ヤヅ キテ ハヅマギ ステ
×××
なにせよう あの 白い やつ(を) 着て 鉢巻き(を) してな

ナー (C 咳ばらい) ソステ コゴサー クレァ アノ ヤヅ
あ ( ) そして ここに 黒い あの やつ

ー ハラオンビダガ ナニ ヌッテ コゴサ サンケヘン ヘデ
腹帯か 何(を) 縫って ここに 参詣銭(を) 入れて

(C ヅブンノナー テオ ハガヘデ) ヤー アレ ヘンダグ(24)
自分のなあ 手覆い(を)はかせて) やあ あれ(は) 衣装(を)

ミンダ バリデモヨー。(B ホンダエナー) ウー ステ ミン
見た ばかりでもよう 。(そうだよなあ) うん そして みんな

ナ ワゲモノ ナンジュニンモヨ ニジュニンモ サンジュニン
若い者 何十人もよ 二十人も 三十人も

モ アー ソヅコヅ ミンナガラ(25) エグハンデ ゴンジューニンモ
うん そちこち みんなから 行くから 五十人も

ログジューニンモ アエステ(26) ゴフェー モッテ (C アンマ
六十人も あれして 御幣(を) 持って (あんま

リ(27) オキ ゴヘ モッテナー) ムラ マワテ アサゲバ ホント
り 大きい 御幣(を) 持ってなあ) 村(を) 回って 歩くと ほんと

ネナー マーマー。(28)
になあ まあまあ。

B ウー エー エサモ コー アレ(29) ハッテナ ソゴノ エサナー。
×××
うん 家にも こう あれ(を) 張ってな そこの 家になあ。

C　トスナバナー　トスナ。
　　(30)
　年縄をなあ　年縄。

B　ンダ　トスナ　ハッテナー。
　そうだ　年縄(を)張ってなあ。

A　エグ　ホレ　ソノ　ワゲモノ　サンケト　エグ　エダバ　ハー　ソ
　行く　ほれ　その　若い者(が)　参詣人(として)行く　家なら　はあ
　エゴソ　ジューニグヅサ　サオサ　コンダ　ホラー　トスナ　ハッ
　　(31)
　それこそ　門口に　竿に　こんど　ほら　年縄　張って
　テ　ゴフェ　ツケデー　アー　ヘバ　ハー　(B　ウン
　　(32)
　御幣(を)つけて　ああ　すると　はあ　うん)
　ノー　ドゴノ　フト　キテモ　ハー　コッカラ　ソロー　エワキ
　のう　どこの　人(が)　来ても　はあ　ここから　そらあ　岩木山に
　サンサ　サンケニ　エグ　フト　ワゲモノ　アルナー　ウン。
　参詣に　行く　人(として)若い者(が)　あるなあ　うん。

C　フタリ　アレバ　フタツ　トスナ　ハッテナー。(B　ウンウン
　二人　いると　二つ　年縄(を)張ってなあ。　うんうん)
　アラ　コゴデ　フタリ　エグナツ　コト　ワガルアダ　(笑)　(
　あら　ここで　二人　行くなあという　こと(が)わかるのだ

A　ウーン)　ウン。
　うーん)　うん。

A　ハ　アラー　ヤット　エタ　ゴト　ネンデ　ハヅメネ　エゲバー
　　(33)
　あらあ　やっと　行った　こと　なくて　初めて　行くと
　(シ　ハヅマエリ)　アゲ　ハヅマエリンタ　アゲ　ゴフェコ　コ
　　(34)　(35)
　初詣り　赤い　初詣り(の)　赤い　御幣こ(を)
　ンダ　マンジェデナー　アー。
　こんど　洗ぜてなあ　ああ。

(36)

C　ツケデ　マンジェデ　コゴカラ　ハヅマエリ　エグアデァ　ホロー

つけて　混ぜて　ここから　初詣り(が)　行くのだよ　ほらあ

（笑）。

A　アー　コゴノ　オドゴンド　ホロー　エマ　ハヅメダナ　アゲァ　コー　ゴ

ああ　ここの　男達(は)　ほらあ　今　初めだな　赤い　×××

フェコ　アノ　キタゲタ　ヤヅ　コー　サゲルドゴデ　スレァ　ヤ

御廟こ(で)　あの　切った　やつ(を)　こう　下げるので　白い

ヅバリ　サゲデレバ　オー　コゴデ　ナンクァ　エモ　ハー　エッテ

やっぱかり　下げてると　おお　ここで　何回も　はあ　待って

ルアダベナー。（B　ウン　うん）　アゲ　ヤヅ　サゲデレバー　ロー

いるのだろうなあ。　赤い　やつ(を)　下げていると　ほうあ

(37)

コゴノ　ワゲモンコ　エマ　ハヅメデ　エグアダナテ（B C　笑

ここの　若い者(は)　今　初めて　行くのだなといって

）　ソステ　ワガル　ワゲダ。ドゴカラ　キテモ　ミレバ。ステ

そして　わかる　わけだ。どこから　来ても　見ると。そして

エッペ　マー　ソエゴソ　マー　ロー　ムラマリスー　ヅギダバ

いっぱい　まあ　それこそ　まあ　ほらあ　村回りする　時なら

(38)

オラホス　ヅブンノ　ムラバリデ　ネァネナ　ナングァヅモ　カゲ

×××××　俺方　自分の　村ばかりで　ないよなあ　何月も　かけて

デ　アセァテ。（C　咳ばらい）

歩いて　。

(39)

B　エヤ　オヤ　オヤグマギノ　フトー　ソエゴソ（A　ウン　うん）　オ

いや　×××　親戚の　人　それこそ

ヤグマギタテ　エッタテバ　ワラハンドドドンダバ　ソエゴソ　カ

親戚といっても　行ったというと　子どもたちなら　××　それこそ

ンドニ　マヅデデナー　（A　ウン　）　ヤー　エノ　フトモ　マン
門口に　待っていてなあ　（　うん　）　やあ　家の　人も　また

ダ　ホロー　ドコノ　ダエダーテ　ワラハンド　キテネベガーヅガ
ほらあ　どこの　誰だといって　子ども達(が)　来ていないだろうかヒの(思って)

ソノ　ソノ　フト　マンダ　パット　ジェンコ　ケデ　エグダエ
×××　その　人(は)　また　ぱっと　銭こ　くれて　行くのだよ

ナー。
なあ。

C　ジェンコ　ケルドゴデナー　（B　ダエダリ　カンダサ　ジェンコ
銭こ(を)　くれるのでなあ　誰なり　彼なりに　銭こ

ケルンデ　ネンダエラー）　ミンナ　デハテ　ヤラゲデ　ジェン
くれるので　ないのだよあらあ　みんな　出て　奪い合って　銭こ

コ　モラネ　デハラダベァ。　ウン　ジェンコ　ヅッパド　オヤグ
(を)もらいに　出るだろう。　うん　銭こ(を)　いっぱい　親戚

マギ　ヨゲダ(40)　フトダバ　ジェンコ　ヅパド　ワラハンドデモ　モ
(が)多い　人なら　銭こ(を)　いっぱい　子ども達でも

ラルキャ。ホレ　モスレァテナー（笑）。
もらうよね。それ(が)おもしろいといってなあ。

B　カドサナー　マヅデデ。
門になあ　待っていて。

A　ソエデ　ロー　アル(41)　ソエゴソ　ドゴムラサ　エテモ　オミヤ　ア
×××　それで　ほらあ　ある　それこそ　どこ村に　行っても　お宮(が)

レバ　ソゴサ　カナランヅ　ソラ　オーミヤサ　ホロ　ミンナステ　エグ
あると　そこに　必ず　そら　お宮に　ほら　みんなして　行く

フトンド　サンケス　ワケダ。　アー　コンスサマサ　エゲバ　コ
人(は)　参詣する　わけだ。　ああ　庚申様に　行くと

ンスサマサ　（B　ウン）　エグエネナー。
庚申様に　（　うん）　行くようになあ。

C　ソゴサ　エッテ　ジェンコ　フララダエ　ロー。（B　ジェンコ
そこに　行って　銭こ(を)　拾うのだよ　ほらあ。（　銭こ(を)

フララダエナー）　オミヤノ　ナガサ　サンケ　サネデ　コンダ
拾うのだよなあ）　お宮の　中に　参詣　しないで　こんど

チョンド　トリヤドゴノ　ホゴ　マワテ　トッラ　エグドゴデ（
ちょうど　鳥居所の　そこ(を)　回って　通って　行くので（

A　ウン）　ホゴサ　コンダ　ナゲ(42)　マグキャー。　ヘバ　ミンナ
うん）　そこに　こんど　投げ　まくよね。　すると　みんな

ワラハンド　ヤラゲデ　コンダ（笑）。
子ども達(が)　奪い合って　こんど。

B　コーモリ　サガサニ　スタリステ　ラー。（B　笑）　ワラハン
こうもり傘(を)　逆さに　したりして　あらあ。（C　）　子ども達。

ド。

A　ウー　コーモリ　コステ　サガサニ　スース　ワラハンドモ　アッ
うん　こうもり傘(を)　こうして　逆さに　しいいする　子ども達も

タエナー。　サガススステ　ロー。　コーモリダバ　ロー　グット
あったよなあ。　賢しくて　ほらあ。　こうもりなら　ほらあ　ぐっと

ナゲレバ　ハー　ハエリヤスベー。（A　笑）　ウン　ソタ　ワ
投げると　はあ　はいりやすいだろう。（B　）　うん　そういう

ラハンドモナー　アテ。コンド　マダ　アラー　タムラサ　マワテ
子ども達もなあ　あって。こんど　また　あらあ　他村に　回って

エゲバ　ソラー　オエノ　オヤグマギノ　ウスタデダラ　ウスタデ
行くと　そらあ　俺家の　親戚の　牛館なら　牛館の

ノ　ダレソレァ　アノ　エグヅテ　エマ　オラホサ　クルゼテ　ヘ
誰それ(が)　あの　行くといって　今　俺方に　来るよって　言

レバ　マヅデデ　(B C 笑)　アー　コンダ　サンケヘン　ア　ケ
えば　待っていて　(笑)　うん　こんど　参詣銭(を)　うん　くれ

(43)
ル　ワゲセ　ア。　コエデ　マ　サンケ　アー　ステ　コエジャー
る　わけよ　うん。　これで　ま　参詣　うん　して　来いよといって

テ　ウン。
うん。

B　トニカグ　アノ　アダリ　サンケニ　エグテバ　ソノ　カマド　ハ
とにかく　あの　あたり　参詣に　行くというと　その　家庭(は)　はあ

ー　タンゲ　コー　ナー　ジェン　スタグ　サネバ　マネフタスヨ
かなり　こう　なあ　銭(を)　支度　しないと　だめだったしよう。

ー。　(A うー うん)　サンケヘンタテナー　エマド　ツカテ　エッ
参詣銭　といったってなあ　今と　違って　一銭

セン　ニセンタテ　タエスタ　モンデタダオナー。　(C ウン うん)
二銭　といっても　大した　もんであったんだものなあ。

タエスタ　モンデタ)　ナンボ　カガルテ　ラー　ウン　タエスタ
大した　もんであった)　なんぼ　かかるといって　あらあ　うん　大した

(44)
ソエサ　カマドノ　ナンデアタデァ　ウン。
それに　家庭の　なんであったんだ　うん。

A　ヘン　ヘンダグ　ホラ　ノー　スレァ　ヤヅ　キテ　ハヅ　スレァ
(×××)　衣装(つまり)　ほら　のう　白い　やつ(を)　着て　(×××)　白い

ハヅマギステ　コゴサ　コンダ　アノ　クロエ　キャハン　アレ
鉢巻して　ここに　こんど　あの　黒い　脚絆　あれは

ァ　マグヤデ　ナグ　タダ　コー　ヤラヅ　ハエデ　テ　ワラヅ
巻くんで　なく　ただ　こう　やるやつ(を)　はいて　そして　わらじ

ハエデ　（C　ハエデナー）　ナー。　アーステ　ナンダ　エマ
はいて　（　はいてなあ）　なあ　ああして　何だ　今

カンガエレバ　ヨー　アノ　ヘンダグナー　ムガス　アーヤテ　マ
考えると　よう　あの　衣装(は)なあ　昔　ああやって

ガナテ　エタ　ヘンタグ　エマサ　ナレバ　ナンモ　アーユー　カ
まかなって　行った　衣装(は)　今に　なると　なにも　ああいう

ダゾ　ナグ　ナッタス。（B　アー）　ホントネ　ケァッテ　オ
形(が)　なく　なったし。（　ああ）　ほんとに　却って

ユワキサン　ナンダ　オヤマサ　サンケニ　エグネダバ　ムカスノ
お岩木さん(つまり)何だ　お山に　参詣に　行くのなら　昔の方

ホー　エーフタ　ナー。
(が)　良かった　なあ。

B　エーフテ　アッタ。　ソステ　カエリ　バッタう(45)　ヤッテ　クルテ
良くて　あった。　そして　り帰り(に)　ばったら　やって　来るといって

テーシャバサ　コンダ　ムラジュー　ムゲァネ（A　笑）エ
停車場に　こんど　村中　迎えに（　）

グアダエナー。　ウー　ソステ　コンダ　テーシャバメァガラ　テ
行くのだよなあ。　うん　そして　こんど　停車場前から

ーゴ　タデァデ（笑）（A　ウン）　エマ　オモエバナー。
太鼓(を)叩いて（　うん）　今　思えばなあ。

（A　ゴフェー　タデデ　アノー）　バッタラバッタラバッタラバ
（　御幣(を)立てて　あのう）　ばったらばったらばったら

ッタラバッタラテ　オドテ　クル　ワゲダ　ホロー　ウン。
ばったらばったらと　踊って　来る　わけだ　ほらあ　うん

A　ヤマ　カゲダテ　ナー。
山　かけたといって　なあ。

C　ヤマ　カゲル　ヅギ　スタハンデ　ワー　アノー　カダテテヤ　アノー
山　かける　時　だから　吾(が)　あのう　ついて行って　あのう

オミヤノ　メーサ　アノ　メヘヤ　テハベァ。（B　ウー　うん）　アノ
お宮の　前に　あの　店屋(が)　出るだろう。　あの

メヘヤノ　ナガサ　コンダ　テント　カゲダ　ドゴサ　コンダ
店屋の　中に　こんど　テント(を)　かけた　所に　こんど

フトリ　エァサ　アガテタス（B　ウン　うん）　ワ　コンダ　ワラス
一人　上に　上がっていたし　吾(は)　こんど　幼児

ヘデ　エテ　トマタ　ワゲセァ。（A　ウン　B　うん）　ステ　コンダ
連れて　行って　泊まった　わけよ。　そして　こんど

ホラ　ホッチャ　コンダ　ネデーヤヅヨ。（B　ウン　うん）　ネデデ
ほら　そこに　こんど　寝ているのよ。　寝ていて

コーヤステ　オドガテ　テンジョ　ミダヤヅヨー。（B　ウン　うん
こうやって　目覚めて　天井(を)　見たのよう。

）　ヤ　ジャックド(46)　コノ　エァッパラノ　ホス　ジャックド　カ
いや　ずらりと　この　上っぱらの　星(が)　ずらりと

ダマッテ　ホス　アラアヅ。（A　ウン　うん　B　アーアー　ああああ）　ヤー
固まって　星(が)　あるのだ。　やあ

ヤ　ナーテ　アコネバリ　ホス　カダマテル　モンダベガステテ。
やあ　どうして　あそこにばかり　星(が)　固まってる　もんだろうかと思って　。

（A　ウン　うん）　スタキャ　ムガスダバ　ハヤグ　エグドゴデ　タエ
そしたら　昔なら　早く　行くので　松明

マヅ（B　ウンウン　うんうん　A　ウンウン　うんうん　ウーンウーン　うーんうーん　オユワキサ
お岩木さんの

ンノ）　タエマヅ　アガステ　コノ　オユワキサンノ　エァッパラ
松明(を)　明して　この　お岩木さんの　上っぱら(を)

コー　アリテラアヅ　ホスネ　メァダ　ワゲ。　オモエデニ　ナ
こう　歩いているの(が)　星に　見えた　わけ。　思い出に

ル　アレ　（B　ウー　うん）　ウン。
なる　あれ　（　うん）　うん

B　エマ　アレガラ　ミレバヨー　（A C　ウン　うん）　エマノ　ホー　ヅッ
今　あれから　見るとよう　（　うん）　今の　方　ずっと

ト　コー　ウー　サ(××)　（A　シャ(×××)　サビスエナ　さびしいな）　サビスエンタ。
こう　うん　（　）　さびしいようだ。

C　エマ　ステモヨー　オナゴンド　（A B　アーアーアー　ああ　ああ　ああ）　アガル
今　それでもよう　女達(が)　（　）　上がる

ヨノナガダ　モノ。　ナンモノー　（笑）。
世の中だ　もの。　何ものう　。

A　コンダ　ヤマ　カゲデ　クレバ　ホロー　ン　コンダ　ナンダナー
こんど　山　かけて　くると　ほら　うん　こんど　なんだなあ

ミンナ　コンダ　メンコ　カテー　アレァ　（B　オゴス(47)　カテ
みんな　こんど　お面(を)　買って　あれは　（　おこし(を)　買って

）　カプテァ。
）　被って。

C　エー　ヤマ　カゲダジャ。　ツダヅヤマ　カゲダジャ　テヤ
「良い　山　かげだじゃあ。　一日　山　かげだじゃあ」といって。

A　エー　ヤマー　（C　笑）　カゲダー。　コァー(48)(××××)　ツダヅヤマ　カ
「良い　山あ　（　）　かげだあ。　一日　山

ゲダジャーテナー。　（C　バタラバタラテノー　ばたらばたらといってなあ）　バタラバタラ
かげだじゃあ」といってなあ。　（　）　「ばたらばたら

バタラヨーテヨー　ミンナ　ハー　ナンジュー　ニンモステ　ステ
ばたらよう」といってよう　みんな　はあ　何十人もして　そして

ホロー　オリデ　キテァ　ステ　ハー　ヘロサギマデ　アノ　ヅ
ほらあ　下りて　来て　そして　はあ　弘前　まで　あの

ギダバ　アヘテタベァナー。（C　アヘテバリダ　ウン）　ヘバ
時なら　歩いていたろう　なあ。（　歩いてばかりだ　うん）　すると

エギマンデ　エゲバー　アラー　コンダ　ムラノ　フト　コンダ
駅まで　行くと　あらあ　こんど　村の　人(は)　こんど

マンダ　ヨー　アー　ジェァンポノ　オラホノ　サンケト　モド
また　よう　ああ　田舎の　俺方の　参詣人(が)　戻

ルヅテ　ミンナ　ワゲァ　エ　エガネ　フトンド（C　笑）　ワ
xxx
るといって　みんな　若い　行かない　人達（　）

ゲモノガラナー（B　ミンナ　ムゲァニ　エグダエナー）　トシ
若い者からなあ（　みんな　迎えに　行くのだよなあ）　年

ョリガラヨー　コンダ　テァゴ　モテテ　コンダ　テシャバネ　マ
寄りからよう　こんど　太鼓(を)　持って行って　こんど　停車場に

ヅデル　ワゲセァ。　エー　ヘバ　コンダ　オリデクレバ　ラナ
待っている　わけよ。　ああ　すると　こんど　下りて来ると　あらあ

ー　コンダ　マダ　ソノ　フト。
なあ　こんど　また　その　人

C　マダ　ハスゴ(ば)　バダラ　バダラテー　アー（笑）。
また　階段(を)　ばだら　ばだらといって　ああ

B　バダラ　バダラテナー。ウー　コレマデ　キタダエ。ホロー。（C
ばだら　ばだらといってなあ。うん　これまで　来たのだよ。ほらあ。（

笑）　クレバ　ハー。
来ると　はあ。

A　コンダ　アオモリノ　ホロー　ソエゴソ　テシャバガラ　コンド
こんど　青森の　ほらあ　それこそ　停車場から　こんど

マダ　ベツニ　マ ンダ　ハー　ゲンキ　ツデ　ミンナ　メンコ　カ
また　別に　また　はあ　元気　ついて　みんな　お面（を）

プテ　ユンダ　ハー　マヅー(50)　アー　エー　ヤマ　カゲダジャー
被って　こんど　はあ　町（を）　ああ　良い　山　かげだじゃあ

ツーダヅヤマー　カゲダジャーテ　（C 笑）　ラ　テァゴ　タデ
一日山あ　かけたじゃあといって　あらあ　太鼓（を）　叩

ァデ　フエ　フエ　ツ　アノー　ラ　フェ　ツケデ　テ　ハー　エ
××××　××××　×××
いて　あのう　あらあ　笛（を）　つけて　そして　はあ　家

マデ　ハー　クルアダエナー。
まで　はあ　来るのだよなあ。

C　(51)デ　キルアダモノナー。
で　来るのだものなあ。

B　エサ　キテモ　マダ　フトスゴドダタエナー。
家に　来ても　また　一仕事　だったよなあ。

C　エサ　キタタテ　コンド　ムラ　マンダ　マワッテ　アルグアダエ
家に　来たといっても　こんど　村（を）　また　回って　歩くのだよなあ

ナー　アー。
ああ。

A　ニギャガデ　ニギャガデナー。
にぎやかで　にぎやかでなあ。

B　テ　スエガ　フトキリサ　オゴス　（A ウン / C うん）　メンコ　（C
そして　西瓜　一切れに　おこし　お面（を）

ツケデノー　A アー）　ソオラ　アエ　エヌノフェ(52)デ　ネァス
つけてのう　ああ　それから　あんは　どくだみで　ないし

ナンダキャ　（C センフリ / せんぶり）　センフリダガー　（A ミヤゲニ
(53)
なんだったけ　せんぶりが　土産に

ナー) ミヤゲニ ニゲァ アヅヨー アエ ツケデ ハー コー
なあ 土産に 若い やつよう あれ つけて はあ こう

マワス ワゲダー。
回す わけだあ。

A カナラヅ ((ウンダ)) エサ エサ クレバナー ミヤゲ マ
必ず そうだ 家に 来るとなあ 土産(を)

ワステ。
回すといって。

B デ タエスタ エマダバ ヅユーダバタテ ホラ タエスタ カネ
それで 大した 今なら 自由だけれど ほら 大した 金(が)

カガタダデバ。
かかったのだよ。

C カガタ ウン。
かかった うん。

A ウン ダエエヅ ハー ユワキサン/ メンコダバ ハー ナンタ
うん 第一 はあ 岩木山の お面 なら はあ どうしても

カタダナ。ミヤゲニ ツケデ。
だなあ。土産に つけて。

B ナンタカタ ツグアダ。
どうしても つくのだ。

C メンコド センフリダバ ナンタカタ オゴスド。
お面と せんぶりなら どうしても おこしと。

B デ スエガ ホラ フトキリ (C 笑) (笑).
それで 西瓜 ほら 一切れ 。

A ソ ソエデ コンダ ホロー コンダ ミンナ モドテマレバ ツ
それで こんど ほらあ こんど みんな 戻ってしまうと

(54)

ギノス　コンダ　アンゴワガレダテ　ホレ　ミンナ　コンダ　マダ
次の日　こんど　解散の宴会だといって　ほれ　みんな　こんど　また

ツギノス　アヅバテ　ソラ　ノミクエステナー（B　ウン　C
次の日　集まって　そら　飲み食いしてなあ（　うん

ウンダ）　ウン。
そうだ）　うん。

C　マヅ　ニギヤガデター。
まず　にぎやかであった。

B　エッテモ　エガネアテモナー（A C　ウン　A　ミンナ）　ウン
行っても　行かなくてもなあ（　うん　みんな）　うん

スタハンデ　アノ　アダリ　ソエゴソ　ハー　ナンデアタネ　ウー
だから　あの　あたり　それこそ　はあ　なんであったよ　うん

ビンボモノ　ヨグ　テァギガテ　タ　ウッテ（C 笑）　マタ
貧乏者(は)　よく　大儀がって　田(を)売って　しまった

ヅ　アッテタテバ。ナンモ　ヤエネヌ　ホラ。（A　ヤット　エ
という者(が)あったということだよ。なにも　やれないし　ほら。（　やっと

グテ　ヘレバ　ヤット　ヤルアダモノ）　ヤット　ヤルダベァ。エ
行くと　言うと　やっと　やるのだもの）　やっと　やるのだろう。

(55)

ガネ　フトモ　スタ　ハター　ハネバ　マエベー　ホラー　ウー
行かない　人も　だから　はいらないと　だめだろう　ほらあ　うん

ナン　ナンサデモヨー。ウー　ゾンブ　テァギガチタ　モンダー
なんにでもよう。　うん　ずいぶん　大儀がっていた　もんだあ

ウン。
うん。

注記

(1) お山参詣は別に「ヤマカゲ」とも言う。旧8月1日に部落別に岩木山へ集団登拝して、平穏無事と豊作を祈願する行事。

(2) 「エマ サベタ」とは、この話が始まる前に話者Bが2日前（9月3日《日》＝旧8月1日）に岩木山へマイクロバスで最近流行の観光旅行ふうに参詣してきた（頂上登拝しない）が、取り立てて言う程のことはなかった旨話し合っていたことをさす。

(3) あとの「バタラバタラ」の「バ[ba]」の[B]の言いかけ。

(4) 「ビッツド」は擬態語であり、「びっしりと」に当るだろう。標準語訳は意訳にした。

(5) 「ビッツドダ（ト、オ）モッタ」

(6) 「（お山参詣に対する熱の入れ方が）サガッテ」

(7) 聞き取り不可能。

(8) 岩木山頂の奥宮に祭っている御神体「八大金剛童子」をさす。「ハヅ」は頭文字の「八」。

(9) 「〜ネ（ニ）カテ」は後に受け身の語法を伴うが、たいていは不利な悪い事態の内容がくる。語源不明。

(10) 「落伍する」の意で使う。別に「ゲデ」は「下第」の漢字説もある。

(11) 「サネヤ」は[saneja]―[sanea]―[sanɛ]。「ヤ」は間投助詞。

(12) 「グ」は無意味の発音。

(13) このあとに、「そこで垢離をとるのだ」の意の内容を省略している。

(14) 地名、青森市大字「合子沢（ごうしざわ）」。当地では昔から「ゴサ」という。収録地から約2km東方にある。

(15) 「サイギサイギ」は唱えごとの最初の文句である。次に全文を掲げる「祭儀祭儀（さいぎさいぎ） 同行斎儀（どうこうさいぎ） お山に初田竈（はつたえ） 金剛童子 一一名号拝（いちいちなのはい） 南無帰命頂礼」

(16) 「オラホー（の村）ダバ」

(17) 地名、青森市大字「八ッ役（やつやく）」。当地では昔から「ヤジャグ」と呼ぶ。当地のすぐ北を流れている川（荒川）を隔てた所にある。約200m北側。

(18) 「水のない石の川原」

(19)　収録場「桜田家」のすぐ下が荒川のカラメで、ハッ役部落の人にはここで太鼓を叩いたりなどしたという意である。

(20)　何人ずつか組んで近郷各村の神社を回ってお参りすること。省略して「ムラメァ」というが、これは「村参り」か。

(21)　「スレァ　アレ」とはお山参詣用服装の「白装束」のこと。

(22)　東北地方特有の指小辞「コ」である。

(23)　「スレァ　ヤヅ」はすぐあとの「ハヅマギ」をさす。「白い鉢巻き」。

(24)　「洗濯したきれいな衣装」から一般的に「衣装」のこと。

(25)　「ミンナ（の家庭）ガラ」

(26)　指示代名詞の「あれ」だが、この場合「アエステ」は「集って」。

(27)　一般的使い方ではないが、「あんまりにも」の意で使っている。

(28)　このあとに「にぎやかでびっくりしたものだ」という内容がくる。

(29)　「トスナ」のこと。

(30)　「としな　『年縄、としなわ』で村のお宮に奉納する『しめなわ』のこと。」（鳴海助一「津軽のことば」）

(31)　語源不明。「序の口」か。

(32)　聞き取り不可能。

(33)　「ようやくの思いで」の意であとの「ハヅメネ　エゲバーヘ」へかかる。

(34)　「ヘンタ」は無用の発音。あるいは前に「アゲ」と言いかけがあるため、「アゲェンタ（赤いような）」と言いたかったのが、ここでつい出てしまったのかも知れない。

(35)　「コ」は指小辞の接尾語。

(36)　このあと「と言ったもんだ。」という内容が省略。

(37)　「コ」は指小辞の接尾語。

(38)　「オラホヅ」の「ヅ」が無声化となったもの。

(39)　「オヤグマギタテ」以下の文脈は省略が多く難解である。内容は「"親戚Aが村回りに歩いている"と、親戚Bの家族が噂に聞くとBの子らは自分の門口に立って待っていて、また、子らの親B達も何村の親戚Aがやって来たと子らに知らせたりする。一方また、村回りにやって

来たAは親戚Bの子らがこの辺に私を待ちこがれて来ていないだろうかと思って、もし、いるとすぐぱっとBの子に銭をくれて行くのだ。」

(40) 「よけいな」

(41) あとの「オミヤ　アレバ～」の「アレ」のまいかけ。

(42) 「賽銭をまく」が普通の表現だが、時には「投げるようにしてまく」ため「投げる」と言うこともある。そのまいかけである。

(43) 「ケル」は「くれてやる」

(44) 「経済負担がたいへんだっん」という意で使っている。

(45) お山参詣の帰途の踊りの様子そのものをまい、また、歌の文句にもそのことばを取り入れている。

(46) 標準語では「ずらりと」に当るようだが、「いっぱいだが数を数えられるように整然とある様」を言う。

(47) 菓子の一つ。

(48) 無意味の発音。

(49) 漢字は「梯子」だが、青森駅構内の跨線橋の階段のこと。

(50) 「青森市の町中を」

(51) 削り取り不可能。

(52)(53) 共に薬草で当時の貴重な家庭薬品（漢方薬）であった。(52)は「どくだみ」のことで毒消し用に、(53)は「せんぶり」のことで腹薬用。

(54) 「アンゴワガレ」は「網子別　漁期が終ること。方言　別れの会合、送別の宴」（　日本国語大辞典　小学館）

(55) 「スタ　ハター」は「スタハデー」の不完全な言い方であり、また「ハネバ」のまいかけにもなって混乱した発音。

8. ボ サ マ

話し手

(略号)	(氏 名)	(性)	(生 年)
A	桜田 鉄彌	男	明治36年生れ
B	八木沢千代三郎	男	明治43年生れ
C	棟方 トミ	女	大正2年生れ
D	佐々木陸次	男	昭和10年生れ

A ムガスナー ボサマ(1)ヅ モノ アッテ(2)ー (B ウン / うん) ヨグ ボ
昔 なあ ぼさまという 者(が) あって よく ぼ

サマ キル キル スタ モンダエナー。
さま(が) 来 来 した もんだよなあ。

B ホンダエナー ウー ワラス オボタリ ステ アノ ツエゴト(3)
そうだよなあ うん 幼児(を) おぶったり して あの 杖を

コー モッテナー ウー。ムスメアンタ フト マナグ(4) メァネ
こう 持ってなあ うん。娘のような 人(は) 目(が) 見え

ネァ。 タンゲ(5) キマテンダエナー。 (ABC 笑) ヨグ マ
ない。 たいがい 決まってるんだよなあ。 よく ま

ー アーステ アヘテー フグロ アノー フロスギサ オンブロ
あ ああして 歩いて 袋 あのう 風呂敷に 大風呂

スギサナー (A ウン ニモツ / うん 荷物) ニモツコ ソッテ ウン。
敷になあ 荷物こ(も) 背負って うん。

A ウン マナグ メァネドゴデノー(6) アッパネ コンドア ツエ モ
うん 目(が) 見えないのでのう 妻に 今度 杖(を) 持

ダヘデー（B ウン）ウー アッパネー。コンドア スタンタ
たせて（うん）うん 妻に。今度 そのような

アッパバ サギダデァデ ズブンデ ハー ソノ トーリ アヘ
妻を 先立てて 自分で はあ その とおり 歩い

ァテ。
て。

B アヘテナー。
歩いてなあ。

C ナンダガ ツヅエノ(7) ボーダ(8)ヅガサテー。
なんだか 筒井の ぼうだとか いって。

B ウーン ウ ツヅエノ ボーダ。アーア アッテ アッタ(9) ウー。
うーん うん 筒井の ぼうだ。ああ いた うん。

（A ツヅエテ ヘッテ エダタエナー(10)）アエダキャ タンゲ
筒井と 言って いたよなあ あれは かなり

トスイ(11) ナッテナー。
年に なってなあ。

C ステ アッパド フタリ ソロッテ キテヨア（B ウー ソロ
そして 妻と 二人 揃って 来てよう（うん 揃

テナー）アッパバ スカタリ プタエダリ(12) ステー。
ってなあ）妻を 叱ったり 叩いたり して。

B ウン オエサ ダ(13) ヅギ ア アノ フト トマッテヨー（
うん 俺家に だ 時 xxx あの人 泊ってよう（

A C ウーン）アパバ ツエデ フタエダアヅ(14) ワ オベデアヅ(15)。
うーん）妻を 杖で 叩いたの(を) 吾(は) 覚えてるのだ。

（A 笑）ブタエダアヅナー。（A アー）エンヅ コフ
ぶっ叩いたのだなあ。おお 意地っ張り

テ　ホラー　ウン。
で　はうあ　うん。

C　ウダネ(16)　ワンツカ　エグナグ　エグバ　アパバ　プタカダ。（笑）
歌に　わずか　良くなく　いくと　妻を　叩くのだ。

A　アーアー　トマレバ　ロー　コンダ　ロー　ボサマ　トマタハンデ
ああああ　泊まると　ほうあ　今度　ほうあ　ぼさまが　泊ったので

アー　コンニャ　ウダ　キグネ(17)　エグベスッテ　（B　ウンウン
ああ　今夜　歌(を)　聞きに　行こうと　　うんうん

）ウン　コンダ　ミンナ　アヅバッタンタエ　ステノー。
うん　今度　みんな　集まったようであったり　してのう。

B　ヨグ　キタ　モンダジャナー。アーユ　ボサマ　エマ　ハー　ナグ
よく　来た　もんだよ　なあ。ああいう　ぼさま(は)　今　はあ　なく

ナッテ　マッタエ　ホロー。
なって　しまったよ　ほうあ。

A　エマダバ　ボサマヅ　モノ　メッタ　エヤ　メッタネモナモ　コナ
今なら　ぼさまという　者(は)　　いや　めったにも何も　来な

グ　ナッタオナー。
く　なったものなあ。

B　ゼンゼ。コ　コグホー(18)ダジャー　エマノ　ボサマダバヨー。
全然。　国宝だよう　今の　ぼさまならよう。

A　ウー　ンダ。マンダ　ムガスダバ(19)　ロー　ヨゴウヅ(20)ニ　マンダ　ヘ
うん　そうだ。また　昔なら　ほうあ　横内に　また　寺

ンノヅ(21)ー　ウー。
えという　うん。

B　ワ　ソノ　ヘンノ　ワガラネンダバタテ　ウン　オエノ　コノ(22)　ハ
吾(は)　その　寺　え(を)　わからないんだけれど　うん　俺家の　この

ハオヤンド (A ウン オヤ[23]) ホンケサ ヨグ トマルー ナ
母親達(は) (うん そのとおりだ) 本家に よく 泊まる 何

ンニヅ トマタテナー。
日 泊まったといってなあ。

A オラ サット オベデラバタテヨ。
俺(は) うっすらと 覚えているけれどよ。

B トンカグ ショーヅギダンダツキャ[24]。(A ウン) ショーヅギデ
とにかく 正 直 なんだという話だよね。(うん) 正 直 で

ショーヅギデ (C ウン) ウン。
正 直 で (うん) うん。

注記

(1) 漢字は「坊様」と書き、「ボサマ」と発音する。主に盲目の男の人で、妻に引かれて三味線を弾き門はけして歩いた人をいう。妻が歌を歌った。また、場所によっては、鍼・按摩をした盲人や早口ことば掛詰等娯楽を与えてくれた人をもいった。特に津軽の農村地帯がその本場であった。

(2) 「いる」が「ある」に統一されてしまうことがある。この場合、主語のボサマという過去の人の名称を遺物のように把握して「アル」を用いた。

(3) 「ゴト」は名詞、代名詞について目的格を強める働きをする。本来は「事」であろう。訳は仮りに「を」を当てておく。

(4) 「目な子」の音化。

(5) 漢字は「大概」。

(6) 「ノー」は〔nɑ:〕と聞こえる。

(7) 地名、青森市大字「筒井」。牧歌地の牛館から約5km東北方。現在は青森市中心部から家並みが連続して昔の農家の面影は失せた。

(8) 「坊様」の「坊」をとって「ボー」といったのだろう。注記(1)参照。

(9) 「アッテアッタ」は過去完了に相当する表現であり、標準語の単純な完了ないしは過去を表わすものとは異なる。(此島正年著「青森県の方言」)

(10) 「エダタ」は「エデアッタ」の約言である。注記(9)参照。

(11) 〔ni〕の〔n〕の脱落。

(12) 「叩く」は「フタグ」「プタグ」「ブタグ」または「フタラグ」「プタラグ」「ブタラグ」といろいろの言い方があるが、「プ」は「フ」よりも、「ブ」は「プ」よりも強意であるという関係にある。

(13) 無意味の発音。

(14)(15) 「アヅ」は「ヤヅ〔jɑ dzu〕(奴)」の〔 〕の脱落。(14)(15)共に強い断定を示す表現に転用されている。正確な訳すなら「叩いたのだということを吾覚えているのだ」

(16) 文脈が乱れている。「ウダネ」の「ネ」は文脈上、不要の表現。あ

るいは「ネ」をなかすとするならばその後を「エグネ　ドコ　アレバ（良くないところがあれば）」と直さなければいけない。

(17) 当地では連体形に「～に行く」が付く。

(18) ここ数年来、全国的に有名になった青森県東津軽郡平内町出身の吉田の津軽三味線弾き、高橋竹山氏を想定して国宝級だといっている。

(19) 「昔の話をするなら」の意。

(20) 地名、青森市大字「横内（よこうち）」。収録地から東方約3km。

(21) 「雪之助（せんのすけ）」とかの名で明治期のボサマの一人。

(22) このあたり、文脈が少し乱れている。「コノ」は不要の発音。「俺家の母親達は寄えが本家によく泊ったと言っていた」という内容。

(23) ごく普通に使う肯定の表現。話者Bより年長者のAは注記(22)の内容を知っていたのである。

(24) 当地では本来「ツ[dzɯ]（～という）」だが無声化したものである。

9. 青森空襲

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
A	桜田 鉄彌	男	明治36年生れ
B	八木沢千代三郎	男	明治43年生れ
C	樽谷 トミ	女	大正2年生れ

A アノ クーシュートーヅ(1)アバ (B ウン) ホントネ オコナフ
あの 空襲 当時ならば (うん) ほんとうに おっかなく

テ オコナフテナー。 (B ウン) ウーン ナンガ ビーニジュ
て おっかなくてなあ。 (うん) うーん 何か B 29(が)

ーク(3) トナー(4) グングダゲー(5) トンデ キテ スルマネ スゴド
いやもう ぐんぐん音がする程 飛んで 来て 昼間に 仕事(も)

ステレバナッ (B ウン) アメリカノ(6) スコキ キタ キタテ
しているとなあ (うん) アメリカの 飛行機(が)来た 来たといって

ヤ ナンモカモ オコナガテ ヘゲサ ハテ カグレダリ ステ
やあ どうにもこうにも おっかながって 壕に はいって 隠れたり して

ヨ (B ウーウー) ウー。
よ (うんうん) うん。

C ンダ オラキャ アノー ラー タノクサ(7) トテ (B ウン)
そうだ 俺は あのう あらあ 田の草(を) 取って (うん)

ステ エレバヨ (A ウン) コンダ ヘコキ キタゼァテ ヘ
そして いるとよ (うん) 今度 飛行機(が)来たそうだと 言

レバ　アノー　タノクサ　トヅギ　ステラ　ノー　キー　コー
うと　あのう　田の草(を)取る時　そしてあらあのう　木(を)こう

ヤナギ　マクッテ　（A B ウー うん）　ホレサ　コンダ　クサ　コ
柳(を)ぬくして　それに　今度　草(を)こ

ー　カブヘデ　（B ウン うん）　ソステ　ヘナガサ　ショッテァ　ソス
う　被せて　そして　背中に　背負って　そし

テ　ホラ　アダマサ　ヅット　カブテデ　タノクサ　カマス(ぼ)　ワゲ
て　ほら　頭に　ずっと　被っていて　田の草(を)掻き回す　わけ

ヨ。（A ウーン うーん）　アオエハンデ　メネァハンデ　（A ウウ
よ。　青いので　見えないので　うん

ーン）　ウー。ソステ　コンド　エサ　ワラハンド　ノゴステ　オ
ーん）　うん。そして　今度　家に　子ども達(を)残して　置

グドゴデァ　コレア　ヘコキ　キタアゼァテ　ヘレバ　ホレ　カブナ
くので　これや　飛行機(が)来えらしいと　言うと　それ(を)被りな

ガラ（A ウン。　B ウンウン うん。　うんうん）　エサ　ハケデ　エグ　ワゲ
がら　家に　走って　行く　わけ

セァナ。　マーンヅ　オコネァ　メネ　アタ　モンダ　ウン。
よな。　まず　おっかない　目に　あった　もんだ　うん。

A　オラダバ　ハー　ヘゲ　アレバ　ハー　（C 笑）　ヘゲサ　ハッ
俺なう　はあ　堰(が)あると　はあ　堰れ　入っ

テ　マルアダエ。（B ウンウン うんうん）　ウン　ヘバ　ハー　メネ　メ
て　しまうもだよ。　うん　すると　はあ　見

ネベッ　ワゲデヨー　アー。
えないだろうという　わけでよ　ああ。

C　ウー　ナンダッテ　（A ヘゲサ　カグエデ　堰に　隠れて）　オラエサ　ワラハ
うん　なんといっても　俺家に　子ども

ンド　ノゴステ　オグモンダドゴデ。　ホラ　エサノー　ウーン。
達(を)残して　置くもんだから　。　ほう　家につう　うーん。

A　エッカダ　ハー　キレバ　ハー　オド　ヘバ　ハー　アー　キタ
寄ら　はあ　来ると　はあ　音(が)すると　はあ　ああ　来た

キタ　キタアテ　ハー　（B　ウン）　キノ　カゲデモ　ドゴデモ
来た　来たあといって　はあ　（　うん）　木の　陰でも　どこでも

ハー　カグエデ　マルヤヅ。（B　ウン）　ウン。ナンボ　カグ
はあ　隠れて　しまうのだ。（　うん）　うん。いくら　隠

エダタテ　ナンモカモ　ドースモ　ナンネヤダバタテ　（B C　ウ
れたといっても　どうもこうも　どうしようも　ならないのだから　（　う

ン）　ウン。ソエカラ　コンド　アレァ　ナンダガ　クーシューノ
ん）　うん。それから　今度　あれ　何か　空襲の

バゲ　アレ　スヅガヅノ　ニジュースヅ　（C　ニンジュスヅニヅ
晩　あれ(は)　七月の　二十七　（　二十七日

ノ　ウン　バンダオナ　ウン　ソダ）　スヅニ(9)ヅダナ。コンダ　コ
の　うん　晩だがな　うん　そうだ）　七日だな。今度　今

ンニャ　アノ　クーシュー　クルゼーテ　（B　ウン）　ウー　ミ
夜　あの　空襲(が)　来るらしいと　（　うん）　うん　み

ンナ　ホラ　アノー　ナンダ　ウエノ　ホーガラヨー　オガミノ　ホー
んな　ほら　あのう　なんだ　上の　方から　お上の　方

ガラ　ミンナ　ツーツ　クルドゴデヨー　（B　ウン）　ウー　エ
から　みんな　通知(が)来るのでよう　（　うん）　うん　い

ヅダラ　エヅノ　バゲ　ワルグ　ヘバ　クルハンデッテ　ミンナ
つなら　いつの　晩　悪く　すると　来るからといって　みんな

キー　ツケローテ。（B　ウン）　ウーン　コンダ　アノー　バゲ
気(を)　つけろといって，（　うん）　うーん　今度　あのう　晩

オロー　ハー　エノ　フトンド　ミンナ　コンニャ　クーシュー
ほうあ　はあ　家の　人達(は)　みーな　今夜　空襲(め)

クルゼァテ　ウ。マー　クーシュッテ　クーシュッテ　ヘ(10)ドッ
来るうしといて　うん。まあ　空襲って　空襲って　ふんどう

タ　モンダエヅ(11)ヘノテ　ウン　ヘナガラ　コンダ　ミス　クテ　バ
した　ものなのだい　なんて　うん　言いながら　今度　飯(を)　食って　晩

ゲ　ミス　クッテガラヨー　(B　ウン　うん)　ワンツカ　タッタケヨ
飯(を)　食ってからよう　(B　うん)　わずか　なったらよ

ー　(B　ウン　うん)　コンダ　オド　ステナ　(B　ウン　うん)　ウン
(B　うん)　今度　音(め)　してな　(B　うん)　うん

ゴンゴ　ゴンゴテヤ　クルノ　コネノテヨ。(B　ウン　うん)　ヤー
ごうごう　ごうごうとよ　来るの　来ないってよ。(B　うん)　やあ

コンダ　エヅバン　サギネ　コヅノ　ツヅ(12)ミノ　ホサ　(B　ウン
今度　一番　先に　こっちの　堤の　方に　(B　うん

)　ウン　ミョーケン(13)ノ　ホサ　オヅダジャ。(B　ウン　うん)　オラ
うん　妙見の　方に　落ちたよ。(B　うん)　俺

マンダヨー　チョンド　ソバネ　メデ　(B　ウン　うん)　アコ　ッ
まだよう　ちょうど　そば近くに　見えて　(B　うん)　あそこ　吊

リバス(14)サ　オヅダガド(15)モテヨ　(B　ウン　うん)　ステ　エダヤダエナ
り橋に　落ちたかと　思ってよ　(B　うん)　それて　いたのだよな

(C　ウン　うん)　ウン。ステ　アドカラ　キダキャ　ホロ　タ××
(C　うん)　うん，それて　あとから　聞いたら　ほら

タギジャ(16)サ　オヅダザエロー　(B C　ウン　うん)　ウン。コンダ
滝沢に　落ちたという　はあ　(B C　うん)　うん。今度

ソエガラ　ハー　ビッツド　ハー　エヤ　クルノ　コネノテ　エゲ
それから　はあ　びっしりと　はあ　いや　来るの　来ないって　行く

バ　クル　（B　ウン）　ソゴサ　エゲバ　クル　ステ　（B　ウ
と　来る　　うん　　そこに　行くと　来る　して　　う

ンウンウン）　ウー。
んうんうん）　うん。

(17) ホダ。オラキャ　ボークーゴー　コヘデ　コンダ　アノ　ボークー
そうだ。俺は　防空壕(を)こしらえて　今度　あの　防空

ゴーサ　ワラハンドバ　ヘデセァ　（B　ウン）　ソステ　コンド
壕に　子ども達を　連れてよ　　うん　　そして　今度

ナゲバ　キケルテナー　（A　ウンダ）　ナゲバ　ヘコキ　トン
泣くと　聞こえるといってなあ　　そうだ　　泣くと　飛行機　飛ん

デル　ヤヅサ　キケルハンデ　ワラハンド　ナガヘレバ　マネッテ
でいる　奴に　聞こえるから　子ども達(を)　泣かせると　だめだといって

ボークーゴサ　オエデ　モノ　カゲデァ　ソステ　ホラ　コンド
防空壕に　置いて　物(を)掛けて　そして　ほら　今度

アノー　タダ　コノ　キモノデアキャ　マネハンデテ　コンダ　ワ
あのう　ただ　この　着物では　だめだからといって　今度　吾

アノー　フトン　トネ　コンド　キタ　ワゲセァ。（B　ウン）
あのう　布団　取りに　今度　来た　わけよ。　うん

ストモドダラ　ストメテ　アッテ。（B　ウーウンウン）　ス
元なら　節　といって　あって。　うんうんうん

(18) トメガ　ホラ。ソステ　フトン　トネ　キタヅギ　ナンモ　オヅ
節さ　ほら。そして　布団(を)取りに　来た　時　何も　落ち

デネキャダバテァ　フトン　モッテ　キテー　デハル　キナタキャ
ていないのだけれど　布団(を)持って　来て　ある　気になったら

コンダ　ハー　コノ(19)　マツサ(20)　（B　ウン）　オヅダアヅ(21)。アノ
今度　はあ　この　町に　　うん　　落ちたんだ。あの

エマノ　ショーエダン。（AB　ウン）ドーン　ドーントデ
今の　焼夷弾。　　うん）どーん　どーんと

ヘレバ(22)　ンニャ　オヅダ(23)　コノ　ハリ　キモノノ　ウラ　ハリコデ
するので　いや　落ちた　この　針　着物の　裏　針こで

モ　ミンナ　メァルエニ　アガルグ　ナテ　マルダエナー。（AB
も　みんな　見えるように　明るく　なって　しまうだよなあ。

ウン）ヤー　ホノ　フトン　カブタ　ママ　コノ　ボークーゴ
うん）やあ　その　布団(を)　被った　まま　この　防空壕

サ　ハステ　エガエネヤダジャ。（B　ウン）フトン　ガッパド
へ　走って　行かれないのだよ。　うん）布団(を)　がっぱと

ストメノ　ドゴデ　カブテ　コヤステ　ホノ　オヅラ　ヤヅ　ヲ
節の　所で　被って　こうやって　その　落ちる　やつ(を)　見

ンデラヅ　モノヤ　アノー　キレーナデ　エマサ　ナレバヨ（A
ているという　ものよ　あのう　きれいで　冷に　なるとよ

ハンナビド　フトヅダエナー）ナニ　キレンダ　カニ　キレン
花火と　同じだよなあ）何(が)　きれいだ　かに(が)　きれい

ダテヤ（AB　ウン）ウン　オコネモ　オコネ。（笑）
だといこよ（　うん）うん　おかないも　おかない。

A　キレンダモ　キレンダナ　オコナブ　キレンデヨー。（B　ウン）
きれいだも　きれいだ　おかなく　きれいでよう。　うん）

ウン。　オエデダキャ　ホロー　コヅノ　オエノ　ボークーゴワ
うん。　俺家では　ほうあ　こっちの　俺家の　防空壕に

ハッテ　エダバタテヨ（B　ウン）チョンド(24)　ハー　ホソコエ
入って　いたけれどよ　うん）ちょうど　はあ　細越

ノ　ホーガラ　コッチャ　コー　オヅデ　オエノ　エサ(25)　コー　チョンド
の　方から　こっちへ　こう　落ちて　俺の　家に　こう　ちょうど

オヅルエネ ナ ナルアエナ。(B ウン) ソエデ コンドア
落ちるように なるのだよな。 うん それで 今度

クメダ[26]ノ ボークーゴサ (B ウン) ホロー ネゲダヤヅ。
久米田の 防空壕に うん ほうあ 逃げたのだ。

アー テ コンダ ミンナ ネゲデ ワ コンダ ミンナネヨー
ああ そして 今度 みんな 逃げて 吾(は) 今度 みんなによう

ミンナ カダマテー ネゲレバ (B ウン) カダマテ スンデ
「みんな 固まって 逃げれば うん 固まって 死んで

マレバ (B ウン) アド テァッテ マラハンデ (B ウ
しまえば うん あと 絶えて しまうから う

ン。 C 笑) ウー ミンナ ホレー ツラバッテ ソエゴソ
ん。 うん みんな それ 散らばって それこそ

ツラバッテ ネゲロット (B ウン) アンマリ カダマナーッ
散らばって 逃げろ」といって うん 「あんまり 固まるな」

テ (B ウン) ウン テ ワ コンダ サベタキャ オエノ
といって うん うん そして 吾(が) 今度 しゃべったら 俺家の

ババ[27]ヨ ダーエステ[28]。スヌアダラ ミンナ スヌビステ (C 笑
婆よ「誰がそんな。 死ぬのなら みんな 死のう」といって

) フトゲァリニ ミンナ スネバ エドナテ[29] (B 笑) エヤ
「一回に みんな 死ぬと いいではないか」といって 「いや

ソンデ ネァ モンダテ ワ ヘルアヅガ ダエガ カレガ エサ
そうで ない もんだ」と 吾(が) 言うのさ 「誰か 彼か 家に

エギデ (B ウン) アド タデネバ マエネ モンダハンデ
生きて うん あと 立てないと だめな もんだから

(B ウン) スタハンデ ワ シャベルヤヅヨート。 (B
うん そうだから 吾 しゃべるのだよう」と。

ウン）　オナゴンドヅ　モノヨ　（こ笑）　スヌヤダラ　エッシ
うん　女達　という　ものよ　「ろくぬうな　一緒

ヨニ　ミンナ　スネバ　エーッテ。（笑）　ソステ　コンダ　ヒロ
に　みんな　死ねば　良い」って　そして　今度　ほら

ー　キヌァ　ヤエデ(30)。
あ　膜（を）　立てて。

B　オコネハンデ　フトリヨダバ　ナンダオナー。ウー　バラバラド
おっかないから　一人　なら　なんだ知れあ。うん　ばらばらと

ネゲタグ　ネオナ。（A　ウーン）　ミンナヤ　フトノ　アドカ
逃げたく　なれな。（　うーん）　みんな　人の　後つ

ダテ　アヘテ　ウー。
いて　歩いて　うん。

C　オエデモ　スタンデ　ダンモ　エッショネ　エネァンデヨー　オエ
俺家でも　そうだから　誰も　一緒に　いないでよう　俺家

ノ　エマノ　トッチャ(31)　カギノ　キサ　ノボテァ（B　ウン
の　今の　父さん（は）　柿の　木に　登って（　うん

オエノ　オド　モゴノ　ヤナギサ　ノボテァ（A　ウーン）　ソ
俺家の　弟（は）　何の　柳に　登って（　うーん）　そ

ステ　オラタヅ　コドモンド　ホラ　ボークーゴサ　ハッテ（B
して　俺達　子ども達（は）　ほら　防空壕に　入って（

ウン）　テンデバラニ(32)　クラステ　エデタ　モンダ。　ソノバ
うん）　てんでばらばらに　暮らして　いた　もんだ。　その晩

ゲ。（B　ウン）　ウン。ミンナ　スンデ　マレバ　ソエゴソ　コ
。（　うん）　うん。「みんな　死んで　しまうと　それこそ　困

マッテ　マルテ（B　ウン）　ダエガ　カエガ　ノゴネバ　マエ
って　しまうと」って（　うん）　「誰か　彼か　残らないと　だめ

ネテ　ホラ。
だといって　ほら。

A　ンダベァ，（B　ウンダエナ。　C　ウン）　フモ　ソノ　ホロー
そうだろう，（　そうだよな。　うん）　吾も　その　ほろあ

デ　デン(33)　ヤッタバテヨー（B　ウン）　ウン　ナンモカモ
手　やったけれどよう（　うん）　うん　どうもこうも

キメァ　アド　キメァ　ヤエダリ　ウダデフタエナー（B　ウン
あと　腹(は)　立てたり　ひどかったよなあ（　うん

）　ウン。
）　うん。

C　ナー　ホントネ　アノ　バケダラ（A　ウン）　マヅ　ヤゲデ
なあ　ほんとうに　あの　晩なら（　うん）　まず　焼けて

マテ　ツギノ　ヘ　コンダ　ドンダガタキャ　ミンナ　マヅ　ヤゲ
しまって　次の　日　今度　どうかというと　みんな　まず　焼け

デ　マテー　マヅデ　ミンナ　スンデダテ　コンダ　ウー（A
て　しまって　まず　みんな　死んでいたといって　今度　うん（

ウーン）　ソカエ　ステ　ナス　ヘトンド(34)　コッツァ　エテ　ミン
うーん）　疎開　して　なす　人達(は)　こっちへ　行って　見

デモ　コヅデモ　アエダテー(35)。
ても　こっちでも　あれだと言って。

B　ミンナ(36)　オヤブマギ　アルンダスナー（C　ウーン）　ウン。
みんな(は)　親類(が)　あるのだしなあ（　うーん）　うん。

C　コンダ　ヤゲネ　ヘトンドダバヨー　ミンナ　コンド　エサ　ミン
今度　焼けない　人達ならよう　みんな　今度　家に　みん

ナ　モドテ　キテァ（B　ウーン）　ウン。
な　戻って　来て（　うーん）　うん。

A ミンナ ナー アノ バゲー マヅガラヨー ネゲデ クル ヤト
みんな なあ あの 晩 町からよう 逃げて 来る 人

(B C ウン うん) ミン(37) フトン カブタリ (B ウン うん) タン
みんな 布団(を) 被ったり 丹

ジェン カブタリ ステ (B ウン うん) エヤー ドンダカダ(38) モテ
前(を) 被ったり して いやあ どうだかと 思って

アノ スエドーノ ハスノ アッツァ エタキャ (B ウン うん)
あの 水道の 橋の あっちへ 行ったら

クルノ コネノテ ミンナ モノ カブテ クルアダエナ。(
来るの 来ないのと みんな 物(を) 被って 来るのだよな。

B C ウン うん)

C エヅオー ソカエステ キテ コンダ アノ バゲ ミンナ モド
一応 疎開して 来て 今度 あの 晩 みんな 戻

タダオノ ナー (A ウーン うーん) ウー コンド キネァ コンダ
ったのだもの なあ うん 今度 来ない 今度

アエダヅテ ヘテ ソカエステ キテデ モドテッテ (B ウ
あれだと 言って 疎開して 来ていて 戻って行って

ン) モドッタ バゲ コンダ コナタダハデ ホラー (B
ん) 戻った 晩 今度 こうなったから ほらあ

ウン うん) ウン。 うん。

B オエデ アノ ヅギ ベゴ タデデタ ヅギダエナー。(C ウン
俺で あの 時 牛(を) 飼っていた 時だよなあ。 うん

) ベゴサ クルマ ツケデー (A ウーン うーん) ウー アノ ロ
牛に 車(を) つけて うん あの あ

アー　ヅサマ　ンカエス　ドグ　トネ　エッタ　ヅキセァ　(A
ああ　爺様　疎開する　道具(を)取りに　行った　時よ

ウーン)　チョンド　マッサ　レンラクセン。(A　ウーン)　ソ
うーん)　ちょうど　町に　連絡船。(A　うーん)　そ

ンヅギ　オーノマデ(40)　エッタキャ　ホロー　(C　ウン)　ソー
の時　大野まで　行ったら　ほうあ　(C　うん)　そう

キタダエナー。(A　ウン)　アエデ　ベコダ　モンダドゴデ　ヤ(笑)　ドー
来たのだよなあ。(A　うん)　相手　牛な　ものなので　やあ　どう

スツ　ゴトモ　ナンネゼ。(B C　ウー)　ベゴ　コンダ　ケァンドサ　タ
するという　ことも　ならないという。(B C　うん)　牛　こんど　街道に　立

デデ　コンダ(笑)　(C　ンー　ンダネナー。A　ウーン)　ウー　ソエ
てて　こんど　(C　んー　そうだよなあ。A　うーん)　うん　それ

デモ　エッテ　ホラ　オワッテガラ　ツケデ　キタヅバテョー　ウ
でも　行って　ほら　終ってから　つけて　来たというけれどよう　う

ン　ベゴ　フパテ。ウン。アノ　トンヅ　ナンダエナー　カンヅマ
ん　牛(を)引っぱって。うん。あの　当時　なんだよなあ　鍛冶町

(41)ヅド　ダエグマヅド(42)　ソエカラ　テラマヅ(43)　(A C　ウン)　ノ
と　大工町と　それから　寺町　(A C　うん)　の

フトンド　コッツァ　キタンダエナー。(A　ウーウーン。C
人達(は)　こっちへ　来たんだよなあ。(A　うんうーん。

ウン)　ステ　オエデ　クチョー　ステラドゴデ　ロー　フト
うん)　そして　俺家で　区長(を)　していたので　ほうお　人(を)

ワゲデヨー　(C　ワゲデ　ミンナ　ナ　トメデ)　ウーウント
分けてよう　(C　分けて　みんな　なあ　泊めて)　うんうん　泊

メデナー　オエサダキャ　ゴゲンモ(44)　ロッケンモ(45)　トマテ　ホロー。
めてなあ　俺家には　五軒も　六軒も　泊まって　ほうあ。

A　ミンナ　エッケンサ　(B　ウーン　ウン)　アー　ゴログニンバ
みんな　一軒に　うーん　うん　ああ　五六人ばかり

ヅヅ　オッキ　ドゴ(06)　ジューニンバヅヅデモナ　(C　トマタナー
ずっ　大きい　所(は)　十　人ばかずっでもな　泊まったなあ

)　ミンナ　ドゴノ　エサモ　ロー　ネゲデ　キタ　フトンドダバ
みんな　どこの　家にも　ほらあ　逃げて　来た　人　達なら

タンゲ　ハー　エッシュカンモ　(C　ホンダ　ウン)　オエデ
たいがい　はあ　一週間も　そうだ　うん　置いて

タベナ。ミンナ　ミス　タエデ　カヘデー。
いたろうな。みんな　飯(を)　炊いて　食わせて。

B　ホダツケナー　ウン。
そうだということだなあ　うん。

A　ウー　ホントネ　ドンダモ　カンダモ　ヤゲダ　アドサ　エゲバ
うん　ほんとうに　どうにも　こうにも　焼けた　跡へ　行くと

スンダ　フトモ　ナモ　(B　ウン)　ソヅコヅネ　ゴロゴロゴロ
死んだ　人も　何も　うん　そちこちに　ごろごろごろ

テヨー　ウン　ヤヤ　ミラエダ　モンデ　ネフタエナー。(B　ウ
とよう　うん　やあや　見られた　もんで　なかったよなあ。(　う

ン)　ウン。ソステ　ネゲデ　クル　ヅギデモヨー　オナゴンドー
ん)　うん。そして　逃げて　来る　時でもよう　女　達(は)

ワラス　オボテヨ　(B　ウン)　ネゲダ　フトンド　アンマリ　ホ
幼児(を)　おぶってよ　うん　逃げた　人達(は)　あんまり　ほ

ロー　ヘデ　ヘデ　(B　ウン)　ヘナガ　オボテダ　ワラス　ロー
うあ　せいて　せいて　うん　背中(に)　おぶっていん　幼児(が)　ほらあ

ヘナガガラ　オヅダ　スラネデー　ウー　ネゲデ　キタ　ロー
背中から　落ちた(のを)　しらないで　うん　逃げて　来た　ほらあ

ソスタ　ヘトモ　フトンドモ　（B　ウン．C　ンダナー　ウン）
そういう　人も　人達も　（　うん　そうだなあ　うん）

ナンニンモ　アッタゼァ。（C　ナー）ウン。マンダ　ホロァド
何人も　あったという。（　なあ）うん。また　ほらあど

ンドドンドド（B　ウン）クーシュー　ホラー　クルドゴデ
んどん　どんどんと（　うん）空襲(が)　ほらあ　来るので

モエルドゴデ（B　ウン）ソエゴソ　ワラスサ　スヅガテレバ
燃えるので（　うん）それこそ　幼児に　かまっていると

ヅブデモ（B　ウンウン）マンダ　ホロ　エノヅ　ナグスベ。ス
自分でも（　うんうん）また　ほら　命(を)　なくするだろう。

タハンデ　ホロー　スタゴド　ナンモカモ　ハー　コドモモ　ナ
だから　ほらあ　そういうこと　どうもこうも　はあ　子どもも　何

ンモ　アッタ　モンデ　ネヤ　ヅブデ　フトリデモハ（B　ウン
も　あった　もんで　ないや　自分で　一人でも（　うん

ネゲルエネ（B　ウン）ソーユー　ホロー　キモヅネ　ナテ　マ
逃げるように（　うん）そういう　ほらあ　気持に　なって　ま

テ　エル　モンダビョン（B　ウン）。
って　いる　もんだろう（　うん）。

C　ナッ　ホントニ　ホントニ　コンダ　クエモノネ　コマテ　マテー。
なあ　ほんとうに　ほんとうに　こんど　食い物に　困って　しまって。

（B　ウンウン）オラタヅンド　アノー　ナッパ　ヘダリ　ヨコ
（　うんうん）俺達(は)　あのう　菜っ葉(を)　入れたり　横

ミ(47)(も)（B　ウン）ヘダリ　ダエゴンダバ　オナスモ　ダエゴンド
（　うん）入れたり　大根なら　同じも　大根と

マメダバヨア（A　アーアー　ウーンダ）フト(48)キテモ　メプサ
豆なようよ（　ああああ　そうだ）人(が)来ても　恥ずか

(49)
グ ネァンデタバタテ ナニハダノ ヨゴミダノテ アタ アヅ
しく なかったけれど 菜の葉だの 蓬 だのと あんなやつ

(B ウン) ヘダヅ モノー マックロニ ナッテ マルドゴデ。
(うん) 入れたという もの 真っ黒に なって しまうので 。

(50)
アレ コンドア ミンヅ ダップドヘデー オ ケァダケァニ
あれ こんど 水(を) たっぷりと 入れて ××× 粥のように

ステ ニデ ク モンダ モノ ナー。
して 煮て 食う もんだ もの なあ。

A スタテ クエモノ ネァ (C ウーン) ホラ ナグ ナッタドゴ
だって 食い物 無 (うーん) ほら 無く なったので

デ。(B ウン) デァゴナー (B.ウン C.ウン) ケンッテ
。(うん) 大根なあ (うん うん) 削って

コマグ キジャンデヨー。デァゴド コメド マンジェデ ミスニ
細かく 刻んでよう 。大根と 米と 混ぜて 飯に

タエダリ (C ウン) アー ソステ ミンナ クタ モンダエ
炊いたり (うん) ああ そして みんな 食った もんだよ

ナー。(B ウン) ウン。サドデバ ナンモ ネァ。サドモ サガ
なあ。(うん) うん。砂糖というと 何も 無い。砂糖も 魚

ナモ ナンモ ネァアダエナー。
も 何も 無いのだよなあ。

注記

(1) 第二次世界大戦で青森市がアメリカ軍飛行機約70機による空襲を受けたのは昭和20年7月28日夜であった。一夜で市内の90%は焦土と化した。収録地は南方へ約7kmの郊外にあるため被害はなかったが、焼け出された人々の宿泊、食糧等に尽力した。なお話者Cはこの頃3か月間、横須賀市海兵団に勤務していて不在であったことを付記する。

(2) 「ダバ〔dabə〕」→〔dbə〕、〔d〕の脱落。

(3) アメリカ軍重爆撃飛行機。空の要塞といわれた。

(4) 普通「タナー」である。

(5) 「以前には、偵察機など二、三機程度飛んで来ていたのに今度はグングンうなるように高音がする程多く」の意。「ダゲ(だけ)」は限定の副助詞であり、このような使い方が一般的か否かは今後考察を要す。

(6) 「アメリカ」の「ア」にアクセントを置くのは当地では一般的でない。当地は「アメリカ」である。

(7) 「稲の間に生える雑草」のこと。

(8) 「掻き回して除草する」こと。

(9) 実際には空襲の日は7月28日だった。注記(1)参照。

(10) 当地特有の表現で、せせら笑う際に使う感動詞。

(11) 注記(10)と同じ意だが、訳は「〜なのだい」の中に含めた。

(12) 地名、青森市「堤町(つつみまち)」。収録地から直線距離で約5km北東方。

(13) 地名、青森市の郊外にある。収録地から直線距離で約3km北東方。当時は大星神社のみで人家はなかった。

(14) 収録地のすぐ北側にかかっている水道管を吊り橋状にして通している橋。別に水道橋とも呼んでいる。

(15) 「〜ドモテ」は「ト思(オモ)ッテ」の約き。博軽では必ずこのように言う。

(16) 地名、青森市大字「滝沢(たんさわ)」。収録地から東北方へ直線距離で約12km離れた農村。市中心部から必ずしも同距離。

(17) 「ホダ〔hɔdə〕」の〔d〕の無声化。

(18) このあと文脈が整わない。「屋内から布団を持ち出して戸口の辺の所へ来たら焼夷弾が落ちた」のである。この収録地には弾は落ちなか

ったが、あまりにも多数落ち、その音と明るさに恐怖を感じていたのである。

(19) 「コノ」は不要。あるいは強めのために使ったのかも知れない。

(20) 「マツ」は旧青森市。

(21) 「ヅ」はほとんど聞こえない。

(22) 終止形は「ヘル（言う）」であるが、主語は「音」であるため「する」と訳す。

(23) 文脈上「オヅデ」と言うべきところである。

(24) 地名、青森市大字「細越（ほそごえ）」。収録地から西方約5km。

(25) 「オエ（俺家）ノエ（家）」は「家」の繰り返しであるが、当地ではよくいう。また「オエ」だけをも使う。

(26) 隣家の名前。

(27) 話者Aの妻。

(28) 「ダーエステ」の「ステ」の扱い方はむずかしい。正確に訳すなら「誰がそんなことをする必要があるか」となろう。

(29) この「ナ」は当地特有の表現。自己の意見を主張する際に用いる。

(30) 「キメァ　ヤグ」は「肝を焼く」が語源。

(31) 「エマノ　トッチャ」は「自分の長男」のこと。

(32) 「テンデバラバラニ」というのが普通の表現。

(33) 手段、方法。

(34) 「～なす」「～をなす」の表現は話者Cの口ぐせ。この場合、前の「ソカエス」の意である。

(35) 代名詞の「アエ（あれ）」は「収容できない」の意。

(36) 収録地「牛館村の人はみんな」の意。

(37) 「ミンナ」の「ナ」が聞き取り不可能。

(38) 「ドンダガダモテ」の「ダモテ」は「ドモテ」の訛語。注記(15)参照。

(39) 「（青函）レンラクセン（が入った時）」と補う。この話は7月28日のことかどうか不明。話者Cはこの頃3か月間横須賀市海兵団に勤務していて不在であった。多分、7月15日のアメリカ軍艦載機（グラマン戦闘機）が青函連絡船を襲撃した日だろう。

(40) 地名，青森市大字「大野（おおの）」，収録地から北方約4Km。当時，青森市にほぼ近接していた村であった。

(41)(42)(43) いずれも青森市中央部で互いに接していた町名。

(44)(45) 「五世帯も六世帯も」の意。

(46) 収録地牛館の「罹災者を多く収容できる大きい家」の意。

(47) 「ヨモギ」を一般に近郷近在で「ヨゴミ」という。

(48) 「茗」の意。

(49) 「茶の葉」は「ナノハ、ナニハ、ナッパ」と様々にいう。

(50) 「おつゆ」か「お粥」か、いずれかを言おうとした。

II．新潟県柏崎市大字折居字餅粮（おりいもちろう）

収録・文字化担当者　剣　持　隼一郎

〈A〉

I

収録地点名　新潟県柏崎市大字折居(おりい)字餅粮(もちろう)

II

収録地点の概観

1、位置

越後の上越地方（頸城(くびき)地方）と中越地方を隔てる米山の海岸段丘が海に没する「米山三里」の崎を西から越えて、中越地方に入った所が旧宿場町の柏崎市である。この柏崎市の旧市域に南から流入する鵜川(うかわ)（24Km）の上流に小さい鵜川盆地があり、これが旧鵜川村である。その東南の傾斜地に位する大字折居の小字、餅粮が収録地である。

2、交通

柏崎旧市域から鵜川に沿って、南方に上条地区・野田地区を経、中山峠（海抜160m）を越えて鵜川盆地に通ずる、県道柏崎保倉高田線が交通の幹線であった。この道は宮原から餅粮を経ず、阿相島(あそうじま)から南の桜坂峠（417m）を越えて、中頸城郡吉川町の岩野に出、更に東頸城郡大島村大平(おおだいら)に出る。宮原と柏崎駅との間に越後交通の定期バスが13往復する。所要時間片道45分である。宮原から中頸城郡岩野まで一時定期バスが通じたこともあったが、今は廃止された。岩野は柏崎市の経済圏に属している。然し冬期は雪のため交通できない。

最近上記の柏崎保倉高田線は昇格して国道353号線となり、路線が一部変り、餅粮を経て拝庭(はいにわ)まで開通した。将来拝庭から東頸城郡松代町中魚沼郡津南町等を経て群馬県に通ずる計画だということである。

南方の黒姫山の地蔵峠（海抜約600m）を越えて刈羽郡高柳町に通ずる山道がある。昔は馬も通り高柳町の石黒板橋等の人人は岡野町から鯖石川に添って柏崎市に通ずるバスができるまでは、この峠を越えて柏崎方面に出たのであって、鵜川地区と縁組みもあったが、現在はこの道の交通は少ない。

以上は南北の交通路で、柏崎から西の方の頸城地方や東の方の中越地方の文化が強力に入って来、南の方からはさして強力ではなくても魚沼郡・東頸城郡の山地の文化が入って来たと思われる。

これに対して東西の交通路もある。鵜川地区の北に接する野尻地区から、西は小村峠（328m）を越えて中頸城郡柿崎町黒岩を経て米山の南をまわって柿崎に達し、東の方は野田から鮭石地区を経て小千谷方に通ずる、柴道小千谷柿崎線がある。郷土史の教えるところによればこの道は古来からの重要な交通路で上越地方の文化の入って来るひとつの道であった。鵜川地区からは市野新田を経て、小村峠の南に並んでいる桔梗峠（368m）を越えて、黒岩の手前で小千谷柿崎線に接続する市道がある。定期バスは走っていないが自動車の通行が可能であり中頸城との交流もあり、市野新田はことば頸城色が強いと土地の人々は感じている。冬期は交通は杜絶する。

3、地勢・気候

鵜川地区は標高600m～800mの山々に囲まれた山村である。海抜250m位の山麓傾斜地に部落集落はある。鵜川地区全体として耕地率は10.8%にすぎない。平地の少ない頸城の耕地率はもっと低いであろう。

鵜川小学校の観測によれば、昭和38年～41年の平均最高積雪は、216cm，根雪期間116日となって居り、最高積雪は昭和38年の360cmとなっている。豪雪地である。

4、行政区画

この地方は6～7世紀は米山以北に新設され、高志深江国に属したといわれる。702年には越後七郡の中の三島郡（柏崎市が三島の駅）に属した。その頃先に述べた頸城地方から米山の南を小村峠や桔梗峠を通って中越に通ずる道路が開けたといわれる。

平安時代924年に「鵜川庄」の名があらわれ、海岸を通る米山峠の開発は、鎌倉時代柏崎が港津と発達をはじめた頃と考えられている。室町期に三島の郡は苅羽郡と改称されるがこの頃から鵜川地区は長く上杉氏の支配を受けたらしい。

江戸時代のはじめ1616年鵜川地区は刈羽郡西山町にあり、天領藩牧野忠成領となった。（刈羽郡の大部分は高田藩の酒井家治の領であった。）1619年高田藩松平忠昌領（一部刈羽郡椎谷藩領）、16

24年高田、松平光長領、1681～1709頃に幕府領となったが、1710～1867年幕末まで150年間、桑名・奥州白川藩の松平氏領であり、1742年柏崎大久保に柏崎陣屋が立ち、その支配下にあった。

1868年（明治元年）柏崎県が置かれ、明治6年まで柏崎県庁が、頸城・古志・刈羽・魚沼の五郡を管理したが、餅粮の属する折居(おりい)村は刈羽郡下にあった。柏崎県は明治6年新潟県に統合された。

1876年（明治8年）刈羽郡折居村ができ、1901年折居村は女谷村と合併して鵜川村を作り、1956年更に野田村と合併して黒姫村となり、1968年に柏崎市に合併された。

5、戸数・人口・産業

大字折居は餅粮・拝庭・上向・北向・阿相島の五つの小字から成る。大字の戸数をみると、明治34年の170余戸が昭和40年には116戸に減少している。（65年間に68%にへっている。）餅粮は以前は40戸あったというが過疎が進み、現在は30世帯137人である。

産業としては稲作と出稼ぎが二本の柱である。一時盛んであった製炭業は今は皆無となり、歴史の古い養蚕も現在では殆ど行なわれない。一時畜産にも手を出したが雪の制約の為失敗したという。

水田一戸平均所有7反、畑5畝、山林1反歩にすぎず、零細で生産性は低い。専業農家は昭和33年44.7%35年21.4%，40年8.2%と激減している。鵜川地区の40年の統計によって職業の構成をみよう。

職種	職員勤務	賃労働者	出稼	日雇人夫	自営兼業
%	13.9	9.3	46.6	18.5	12.7

このように出稼が非常に多いが、その職種別は次の通りである。

酒造工	401人	炭鉱	11
食品加工	31	荷役	11
土工	29	鋳造工	11
染色工	14	合計	561
自動車製造	12		

（昭和40年鵜川村統計）

70%以上が酒造工である，いわゆるサカヤモンである，この地方は江

戸時代から出稼地帯であった。冬期11月から4月中旬まで男子は遠く関東、中京、大阪方面へ出稼ぎに行く。以前出稼ぎに行くことを「上州行き」、帰ることを「上州帰り」と言ったという。魚沼地方を通り、三国峠を越えて群馬県方面に行く人が多かったことから起ったことばであろう。その多くが酒造工としての仕事であった。サカヤモン（酒屋者）はトウジ（杜氏）に率いられて出かける、である。

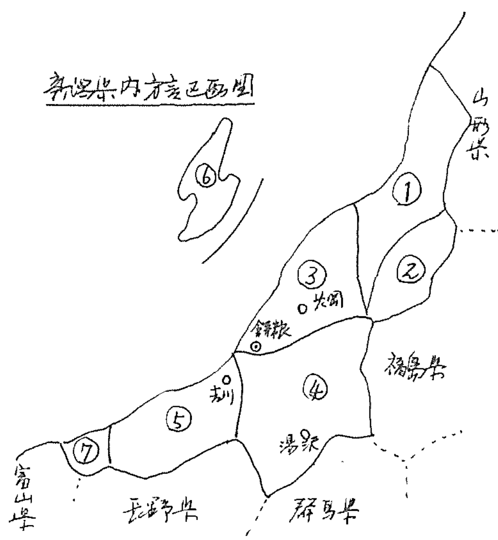
現在餅粮の30戸の中20戸が出稼ぎに出かける。

Ⅲ

収録した方言の特色

1、方言区画上の位置

右の地図は加藤正信氏の「新潟県内方言区画図」を簡略化したものである。収録地餅粮は③に属している。ここは新潟三条長岡柏崎市と西・中・南の蒲原郡と古志・三島・刈羽の諸郡を含む、越後の中心地帯であり、加藤氏もこれを新潟県の代表的方言と考えて居られる。



（方言学講座第二巻中の加藤正信氏の図による）

加藤氏は①②は共に東北方言的なズーズー弁地帯だが、文法面では①が関西的、②は関東・東北的だとされる。これを下越地方方言としよう。③と④は音韻上は共通点が多いが、文法は③が関西的なのに、④は関東方言的であるとされる。③を中越北部方言、④を中越南部方言あるいは魚沼方言ということにしよう。⑤は音韻文法の点で最も共通語に近い地域とされる。これを上越地方方言または頸城方言としよう。⑥は西部方言色の濃い佐渡方言、⑦は西頸城郡の糸魚川・青海地方で東西二大方言の接触地帯であるとされている。

餅粮は上の③の中越北部方言地域の西南端にある。概略を言うならば

既に見て来た様な地理的位置からして、長岡市を中心とする中越北部方言に属するけれども、音韻方面で(4)、魚沼方言と多くの共通点を持ち、又(5)の頸城方言の影響もみられる。要するに錦桂方言は中越方言の中で最も上越方言の影響を強く受けている方言ということができよう。

2、隣接諸方言との関係

「隣接方言」を前出の④の魚沼方言、(5)の頸城方言とし、それぞれから湯沢町方言と吉川町方言をとりあげ、また同一区域内から長岡市方言をとりあげ、これらと錦桂方言との関係を説明しよう。地点の位置は先の地図の上に示しておいた。吉川町方言については昭和29年の私の調査結果、湯沢町方言について私の方言の内観、長岡方言については方言集や都竹通年雄氏の御調査等によることとする。

(1) 上越地方の吉川町方言との関係

音韻の共通点

○/ヒ/を/シ/と発音することが多い。然し吉川方言の方がより多い。

○ i > e 、hi > he, ri > re 、ni > ne , ju > jo の訛りや kwa , gwa 音の存在、n音が語頭に立つことがある点など共通である。然し錦桂方言の方がより強い。

音韻の差異点

- いわゆる開合両様の音が錦桂にはある。吉川町にも区別は残っているが錦桂ほど強くなく、頸城地方の西に進むに従い失われる。
- 吉川町には〔kaɯ〕(買う)〔eɯ〕(言う)等の連母音があるが、錦桂ではこの外[kɔː][jɔː]とも言う。
- 吉川方言では d > r の変化は少ないが、錦桂方言では中越の影響でかなりきかれる。
- 錦桂には /fi/〔ɸi〕があるが吉川にはない。
- ラ行音が撥音化することは両方にあるが吉川方言の方が多い。例えば、キンタッテ(切れたって)ワスンタ(忘れた)<吉川町>

文法の共通点

- 過去完了とも言われるタッタ、ダッタが両方にある。但し吉川町では、「キータコトアッタ」(聞いたことがあった)という言い方の方が多

い，餅粮ではタッタ・ダッタの方が多い。

- 推量打消の助動詞マイはどちらも動詞の連用形に接続する。カイマイ（買うまい）〈吉川〉　カエメァー（買うまい）〈餅粮〉
- 詳細な用法には差はあるが、両方とも準体助詞「ガ・ガン」がありこれは北陸地方まで及んでいる。

文法の差異点

- 吉川町方言は促音便が多く、ウ音便は少ないが、餅粮はウ音便がさかんであり、またカーテ（買って）と言い方もさかんである。（両頭城郡・長岡地方もカーテである。）
- サ行四段活用動詞のイ音便が吉川町にある。餅粮にはないが刈羽郡刈羽村の老人のことばにはある。
- 吉川町には尊敬の助動詞ナサル・ナハル・ナルがある。餅粮でもナサルもやゝ使われるが、一般的なのはレル・ラレル・シャルである。
- 推量の助動詞は吉川ではダロウを多く用い、ロウを用いることは少ないが、餅粮は反対である。
- 吉川では目的格助詞にヲバを用いるが、餅粮ではヲを用い、又それを省略することが多い。逆接の助詞は吉川はデモ、餅粮はドモである。

(2)魚沼地方湯沢町方言との関係

音韻の共通点

〔oː〕〔ɔː〕の別、〔ɛː〕〔kwa〕〔gwa〕〔wɔ〕〔we〕〔wɛ〕の存在、〔ʼi〕がないこと、促音化撥音化の多いこと、エグ（行く）ドキ（時）等の語彙の活音化ユとヨ、イとエ、ウ段音とオ段音の混淆などの点において共通である。

音韻の差異点

- 湯沢町方言では撥音の促音化がある。サッビョー（三俵）サッズ（三升）北魚沼郡ではセッダク（洗濯）もきかれる。この現象は餅粮にも認められるが、湯沢ほど強くはない。
- 湯沢町方言ではヒをヘと訛ることが老人のことばに多い。餅粮にもこの傾向はあるが、それよりもヒはシに訛ることが多い。
- 餅粮方言では助詞ニをネと訛るが湯沢方言にはこれがない。
- 餅粮に多いダ行ラ行音の混淆は湯沢方言にはない。

文法の共通点

- ノセル・ノシテなどの二段活用、シム（死ぬ）のマ行活用、カ行変格活用の仮定形コエバの存在など共通である。
- 尊敬の助動詞としてシャルるの活がさかんである。
- 接続助詞としてスケァー、ンガ、ドモがある。

文法の差異点

- 湯沢町方言では動詞形容詞のウ音便は極めて稀であり、促音便がさかんであるが、錦粧方言ではウ音便がさかんで促音便は稀である。
- ア行五段活用の終止形は湯沢町方言では〔waraw〕（笑う）〔kaw〕（買う）であるが、錦粧では〔waro:〕〔ko:〕とも言う。
- 文語文の已然形と同じ用法が錦粧方言にあるが、湯沢町方言にない。
- 打消に湯沢はナイを用い、錦粧は四段にン、他にナイを接続する。
- 湯沢町方言でサ変動詞はサレルシルシレバと二段に活用するが、錦粧方言ではセーバが加わって三段に活用する。
- 動詞命令形は湯沢町ではオキロ、シロであるが、錦粧方言ではオキレ、シレであってオキロ、シロは少ない。
- 形容動詞の連体形は湯沢町方言ではシズカノなどであるが、錦粧ではシズカナなどである。
- 湯沢町方言では尊敬の助動詞にレル、ラレルは全く、ナサルもなくシャル・ラッシャル類が用いられる。錦粧方言ではレル・ラレルが多くして広く用いられる外、シャル・サッシャル、ナサルがそれより丁寧の高いものとして用いられるなど敬語の発達が目立つ。
- 湯沢町方言の可能の言い方にはレル・ラレルをつけていう言い方の外に～イル・～エル、～イタ・～エタと言う言い方があるが、錦粧にはレル・ラレルの外に、カケル・カケレル（何れも書ける意）という言い方がある。
- 湯沢町方言には過去完了的な言い方にカイテアッタ（書いたことがあった）ヨンデアッタ（読んだことがあった）という言い方がある。これは湯沢町の外三島郡、中頸城郡の南部にもある。錦粧方言では、ヨンダッタ、カイタッタと、コァーテアッタ（飼ってあった）の両形がある。

。湯沢町方言には推量の助動詞に、関東的ベーを使うが、柏崎方言ではロー［ɾɔ:］を使う。

。湯沢方言で推量の打消し助動詞マイは動詞の終止形（サ変は連用形カ変は未然形）に接続するが、柏崎方言では連用形に接続する。

。準体助詞は湯沢町方言ではガ（の）、ガダ（のだ）であるが、柏崎方言ではガン、ガンダ、アンダという。

。湯沢町方言には間投助詞ネーの古形と考えられるナイがあるが、柏崎ではノーがさかんである。

(3) 中越北部方言長岡方言との関係

音韻の共通点

。［o:］［ɔ:］［kwa］［gwa］の存在、［ï］がない，ju>jo の混同など。

音韻の差異点

。柏崎方言及び刈羽郡にある ɸi 音は長岡方言にはない。

。柏崎方言は頸城方言の影響でヒがシに訛ることが多いが、長岡方言ではわずかな語彙に限られる。

。ラ行音の促音化及び促音添加が長岡方言には強い。例　ホッルナ（惚れるな）ミテラッル（見ていられる）クッズ（呉れる）ヤッスイ（安い）柏崎にもこの傾向はあるものの、長岡ほど強くはなく、クッズという類はない。

。撥音の促音化も長岡方言の方が多い。例　コッケァー（こんな）

。ダ行音がラ行音に訛ることは長岡方言の大きな特色であり、母音間のみならず語頭にもあらわれる。これは三島郡・刈羽郡の中国地方まで広く行なわれ、柏崎方言にも影響をあたえており、しばしば d > ɾ の混同がきかれるけれども一部の語にかぎられる。

文法の共通点

。動詞・形容詞の活用の仕方、ウ音便の存在、助動詞ナイ、ンの接続の区別等共通の点が多い。身内の者のことを言うのにも敬語を使う。

文法の差異点

。長岡市では尊敬の助動詞ナサルが多用され連用形にナシッタがあり、市周辺ではレル、ラレルがラッル，ラッズと発音される。これに対し柏崎

ではナサルはあまり用いられず、レル・ラレルが多用される。

- 長岡は城下町であったため、旧士族のことばが残っていると言われている。オミシャン（あたた）オクリャエ（お呪れ）オシ（しなさい）～ザア（～しなければ）～マイカ（動誘表現）などの表現があるという。鍋粮にはこうしたことは見当らない。
- 接続助詞について、鍋粮には特殊なものがある。エニ・エネ（理由をあらわす）モンガ（理由をあらわす）ツガヤ（と、すると。接続をあらわす）トサイニワ（と、すると。接続をあらわす）等である。長岡市方言にはモンガの変化と考えられるンガは存在するが他のものは見当らない。「けれども」に当たるドモは長岡ではロモと発音される。

3、音韻上の特色

(1) モーラ表

'u	'o	'ɔ	'a	'ɛ	'e	('i)	ju	jo	jɔ	ja	jɛ	wɔ	wa	wɛ	we
ku	ko	kɔ	ka	kɛ	ke	ki	kju	kjo	kjɔ	kja		kwɔ	kwa		kwe
gu	go	gɔ	ga	gɛ	ge	gi	gju	gjo	gjɔ	gja			gwa	gwɛ	
su	so	sɔ	sa	sɛ	se	si	sju	sjo	sjɔ	sja	sjɛ				
zu	zo	zɔ	za	zɛ	ze	zi	zju	zjo	zjɔ	zja					
	to	tɔ	ta	tɛ	te										
cu	co	cɔ	ca			ci	cju	cjo	cjɔ	cja	cjɛ				
	do	dɔ	da	dɛ	de										
nu	no	nɔ	na	nɛ	ne	ni	nju	njo	njɔ	nja					
fu						fi									
	ho	hɔ	ha	hɛ	he	hi	hju	hjo	hjɔ	hja					
pu	po	pɔ	pa	pɛ	pe	pi	pju	pjo	pjɔ	pja					
bu	bo	bɔ	ba	bɛ	be	bi	bju	bjo	bjɔ	bja					
mu	mo	mɔ	ma	mɛ	me	mi	mju	mjo	mjɔ	mja					
ru	ro	rɔ	ra	rɛ	re	ri	rju	rjo	rjɔ	rja	rjɛ				
u	o	ɔ	a	ɛ	e	i									
N	Q														

(2) 音声的特徴

1、いわゆる開合の別がある。/O/ はほぼ基本母音の[O]に当たり、共通語のオ段長音よりもかなり狭いように思われる。開音の/ɔ/は基本母音の[ɔ]にあたるが共通語のオ段長音に近いように思われる。

例　eɑkO　（一個）　eɑkkɔ:　（一向）

toːdʒi　（冬至・杜氏）　tɔːdʒi　（当時）

dO:　（胴）　dɔ:　（堂）

sO:rjɔ:　（総領）　sɔːre:　（葬礼）

bimboda　（貧乏だ）　bɔ:　（棒）

tʃO:ʃi　（調子）

[O:]は次第に減少して行く傾向がある。

庖丁　hO:tʃɔ: > ho:tʃɔ > hɔ:tʃɔ:

帽子　bO:ʃi > boʃi > bɔ:ʃi

船頭　sendo > sendɔ:

総理　sO:ri > sɔ:ri

印判のことを[hankɔ:]と言っているのはこの語の語源が「版行」であることを示すものかもしれない。開音はオァーと表記した。

2、/ai/ /ae/ が変化して[ɛ:]となっている。[Omɛ:] お前 [erɛ:] えらい、これらはオメァー，エレァーなどと記した。

3、単音の[i]は共通語の強い影響を受けた者以外には存在しない。いちごもえちごもすべてえちごと発音される。その/e/は[i]と[e]の中間母音[e̝]に近いものであろうか。子音と合した場合は[i]と[e]の区別はあるが時にはイがエに訛ることがある。特に助詞「に」は「ね」となり稀に老人においてヒがヘと訛ってヘラテ（平手）、ヘラク（開く）、ヘラスミ（昼休み）などとなることがある。ウ段音の次ではイが[i]に近く発音されたり、[ï][ɨ]の如く発音されたりする。

4、[g]は語頭以外でも[g]であって[ŋ]は存在しない。

5、老人に/fi/音がある。フィシモチ（菱餅）フィヤザケ（冷酒）等で[ɸi]であろうか。

6、/sjɛ/は[ʃiraʃʃɛ:]シラッシェァー（しなさい）などにあらわれる。

7、[cjɛ] は暑いの変化 [accjɛ:] 等にあらわれる。[jɛ] の例 [hajɛ:](早い)
8、[ca] はツァーツァ(父) アンツァコト(あんなことの卑語)、[cɔ] はゴッツォ(御馳走)、ジッツォク(十束)、[cつ] はアッタッツォァー(あったとさ)など。
9、[wɔ] は感動詞ウォァーエ [wɔ:e]、金おう [kɯwɔ:]、[wɛ] は具合 [gɯwɛ:] [we] は上 [jɯwe] 桑を植えたり [kwa:jɯwetari] などにあらわれる。
10、[rjɛ] は [harjɛ:nɛ:](強合ない)等にあらわれる。
11、[kwa] は [kwa] 桑 [kwaserɯ] 食わせる、[gwa] は [sɔ:gwatsɯ] 正月等にあらわれる。

次で音声の変化について述べる。

12a 促音について
- 促音が語頭に立つことがある。ッジャー(それでは) ッデ(それで)
- う行音が促音化することがある。エッテ(入れて)、ソダラッドキ(言てる時)、オッドヤ(下りろよ)、オッテクレ(下りて呉れ)
- 促音が添加される。アッツイ(暑い)、アッツキ(小豆)
- 撥音が促音となる。ナッテモ カッデモ(なんでもかんでも) ガッギ(雁木)

12b 撥音について
- 撥音が語頭にくることがある。
  ンメァー(うまい)、ンラサキ(蛸)、ンーネ(ほんとうに) ンーナ(皆)
  ンダドモ(そうだけれども)
- う行音の撥音化 カワンネァー(買われない)、ソンネ(それに)、カワンニ(代りに)、オワレンガンモ(追われるのも)

13、長音化について
- 一音動詞は語に長音化する。マー(馬) フー(麩)
- 形容詞は長音化に固定しているものがある。ニーゲァー(若い)、ワーケァー(若い)、ナーゲァー(長い)
- 強調するために長音化することがある。ミンーナ(皆) ゼンーブ(全部)、ホンーネ(ほんとうに) マエーンチ(毎日) リーレガ(それが)、リーラ(それは)、サーンゾク(三束)

14、清音化について
カ行・タ行の音がわずかに混られる語について述べることがある。

エグ（egu 行く）　ドゴエエカッシャル（どこへおいでか）　ガニ（かに）
セギ（堰）　ハダケ（畑）　ワラハダキ（藁叩き）　ソダテッドキ（育てる時）　ソンドキ（その時）

16、ヒシの混同

シ（日・光）　シカル（光る）　エトシキ（糸引き製糸）、シンナカ（「虫の中」から国防衛のこと）、シダナ（火棚）、シトシ（人）、シトツ（ひとつ）等のようにかなり目立つ。中にはヒシの中間音のようにきこえる場合もある。赤、雲等には混同をさかなかった。ヒシの混同は中頸城郡方言の影響である。シフヒは少なく乾くにあらわれる程度である。

17、魚沼郡に似てヒとヘの混同もややある。ヘー（稗）、ヘリ（昼）
ヘロガル（広がる）、ヘロー（拾う）、ヘンガワリー（品が悪い）

18、サ行音＞ハ行音　ホァーシテ（そうして）、ホァーテ（そうして）

19、ハ行音の脱落がある。

アナズラ（鼻面－直前）、キノア（木の葉）、クロエメ（黒姓）
エヤシリ（冷や汁）、ンーネ（ほんとうに）、オンネ（ほんとうに）
ニヤク（二百）

20、ラ行音の脱落

モァーテ（貰うて）、～ナンク（～ならないよ）。シネァケナン（しなければならない）、ホドコ（ふところ）

21、ラ行音の撥音化促音化　12a 12b 参照

22、ダ行音のラ行音化　長岡地方の影響でしばしばきかれる。

オラロコ（おらどこ、私の家）　センゴラッタ（戦後だった）ネラッタ（ねだった）、～ガレヤナンレヤ（～だかそれだか）
ダラの中間音に発音される場合もある。[rgɔ:gidra]（ごろざだ）

23、ザ行ダ行の混同

シンゴデァン（新五左衛門）、エゼテ（ゆでて）、ナゼ（なだれいなで）
オカンネァード（置かれないぞ）

24、ウ段音とオ段音の混同

スル（剃る）、ノエハリ（縫い針）、フーノキ（朴）、ホドコ（竈）
アマゴ（雨具）、モコ（婿）、ヨーガク（夕方）

4．文法上の特色

(1)動詞について

1、二段活用がある。ノセル，ノシテ（載せる）ヨセル，ヨシテ（寄せる）

2、「死ぬ」はナ行にもマ行にも活用する。マ行四段に活用する点は関東の西南部地方・福島県に似ている。（中頸城郡にはガ行四段に活用する。これは長野・栃木・茨城・神奈川西部・山梨と共通である。）

3、四段活用の動詞の連用形はウ音便がさかんであり、これについで「カーテ」（買って）という「ア音便形」が多く、促音便は極めて稀である。この状況をやゝ詳しくみると、明治生れの老人（明治29年生れ）にはウ音便だけがみられた。今回の文字化の中の「4.養蚕」について、「飼う」という語についてのウ音便とア音便のあらわれ方の比をみると、明治30年代生れの男女においては、ほぼ3対1であり、大正生れの者においては逆転して1対3となっていた。

「ア音便」は中越の長岡地方・刈羽郡内・柏崎市旧市域及び中頸城をとび越えて西頸城郡に多い現象である。能生ではアラテ（洗って）クテ（食って）の様に縮音化された形も存在する。

4、ア行五段活用の終止形は例えば、[kɔː]（買う・飼う）[warɔː]（笑う）の外[kaɯ][waraɯ]ともなる。中頸城郡では[waraɯ][kaɯ]と連母音になる。

5、サ変動詞の未然形にセーバ、セバ、命令形にセー・シロ・シレがある。またシレバ、シル・シロ・シレと一段化の傾向もある。

6、カ変の未然形はコエバである。マイが接続する場合はキマイである。

7、文語動詞の已然形と同じ用法がある。

セーフデ　キメテ　エラレレバ　ゼン　エッパァー　モラワンネシサエ。
（政府で決めていられるから、銭をたくさん貰われないしね。）
（大正七年生れ男子）

リャーシタレバ（そうしたら）（昔話から）　トイッタレドモ（と言ったが）（昔話）

8、一段活用動詞の命令形には起キロ、受ケロという形と起キレ、受ケレという形と二つが行なわれている。老人の語る昔話では起キロ、見ロ寝ロが圧倒的で、起キレ等は皆無に近い。ロ命令形は魚沼郡から関東につながり、レ命令形は中越から東北地方に分布しているものである。

だから錦織ではロ命令形が古く、レ命令形が新しい形であろう。

(2) 形容詞・形容動詞

1.形容詞の連用形はウ音便が圧倒的に多用され、ヨワクテの様な例は殆どきかれない。ウ音便は短く発音されてハヨ(早く)のようになることもある。

2.形容詞の活用は単純化し無活用化する傾向がある。終止形がひろく他の活用形に用いられたり、語尾をおとし語幹のみが用いられることもある。アシガ ナンギーテ(足が苦しくて)スズシナッテ(涼しくなって)オモシロエカッタ(おもしろかった)

3.形容動詞の連体形は～ナの形で亜流型の～ノという形に対立する。サカンナコロ、ラクナ絵、マックロナ，マッカナ。

(3) 助動詞・助詞

1.敬語が発達していて広く用いられる。最も多用されるのはレル・ラレル類である。若者にもさかんにでてくるし、誰もが広く用いる。共通語からきたものではなく古代語の直系と思われる。しかし、レル・ラレルは他の尊敬の助動詞よりもやゝ敬意の軽いもののようである。詳説はさける。

2.前期上方語や前期江戸語としてさかんに用いられたとされるシャル類がレルラレル類より敬意の高いものとして用いられている。

オトッツァンガ エワッシャルヨァーネ(明治34年生れ女→29年生れ男子)

オメァサン ジョァーズデ エサシック(明治39年生れ女→35年生れ男子)

3.シャル類に「ラッシャル」「サッシャル」がある。一段活用・カ変・サ変に接続する。

オメァサン ユーテ ミラッシャエ(明治29年生れ男 >34・39年生れ女)

ユーテ エサシッタ。

4.旧柏崎市域や中越・刈羽郡地方で最も標準的な尊敬の助動詞である、ナサル(江戸後期の代表的敬語)は、錦織では大正生れの男女に少しみられただけで、明治生れの老人には普及していないようである。

5.近世上方語・江戸語とされる「ヤル」という尊敬の助動詞や「マイル」などの語も若者にみえる。若者には「オ～ニナル」もみえる。

下がった方からまいりゃれの（下がった方からお食べなさい）
荒神さんがみんなめえらしなふうぞ（荒神様がみんなお食べになったらしい）

6、打消の助動詞ナイは一段活用・サ変・カ変の動詞の未然形に、ンは四段活用動詞の未然形に接続する。助動詞レルラレルにはナイ、マスにはンが接続する。但しナイは[nɛː]と発音される。

7、推量打消の助動詞マイ[meː]は動詞の連用形に接続する。

ヨミメァー（読むまい）　アリメァー（有るまい）　キメァー（来まい）　シメァー（しまい）

8、理由原因をあらわす接続助詞が豊富である。

○明治生れの者がさかんに用い、また昔話しにも多用され、また大正生れの者も時には用いるものに「エニ」「エネ」がある。

セガレモ　チョット　キタエネ　オラ　キョァーワ　ドッコモ　エカンデエル
格助詞「ニ」の変化したものであろうか。

○明治生れの者に用いられる「モンガ」があり、その変化と思われる「ンガ」は広く用いられる。

トショリバッカ　アエンデ　エカンケ　ナランモンガ　カナンヨァーダコテネ（年寄りだけが歩いて行かなければならないから困るよね）
カネ　トル　ドコガ　ネァー　ンダンガ　ハー　（金をとる所が無いのだから、はい　）

ンガは広く中越地方で用いられる。

○関西系のスケァー・スケァーデ・スケァーニが最もさかんに用いられる語である。　改まった場合には共通語のカラを用いる。

9、二つの動作が同時にあるいは継起的に起ることを示す接続助詞に次のようなものがある。

○ドコテモンガ・ドコテンガ・ドコガ

追っかけてきたどこてもんが、落し穴に爺さんが落ちてしもうて。
猿がまあ臼かづいで（ママ）、そして来たどこてんが、土手へ来たとこてんが、桜がきれえに咲いていて、
…と言うたどこが、そのアニが弟の腹さいてみたと。
（「黒姫の昔話」より）
語源は「所と言うものが」であろう。

○ッガヤ

ソーレガ　オメァサン　アッタケァー　カゼン　ノッテ　クルツガヤ　クチンナカマデ　ニゴァーナル　（高橋ケユノ　明治34年生れ）

○トサエニャー

アキン　ナルトサエニャー　シトワ　コノ　デヤノサカオ　オメァサン　ツナギン　ナッテ　エネ　カズクデショァーネ　（田前）

この三つの語はいずれも老人のことばで、若旅にはしばしば使われる。特にトサエニャーが多くあらわれる。「と深には」が語源である。

岐阜三重滋賀山口のトサイガ、石川静岡・名古屋千葉のトサイニャ佐渡のトセーカ、中頸城郡の（タゥ）サイナ等と同類である。

トコテンガは越沼郡につながるようである。

10、接続助詞のドモがある。中頸城南頸城と同じくデモと発音されることもある。

11、助詞が省略されることがある。格助詞ヲの場合特に多い。

オドリー　ミル（踊りを見る）　ユキ　ホル（雪を掘る）

ハンコァー　オシテ（判を押して）　カエコ　カータ（蚕を飼った）

格助詞ワもこれに次いで省略されることが多く、また前の語と融合することもある。

ヨァーサン　オソカッタ（養蚕はおそかった）　ソラー（それは）コラー（これは）　オラー（俺は）

「ニ・ヘ」もわずかに省略されることがある。

トマリー　エク（泊りに行く）　トナリー　エッテ（隣へ行って）

12、「ではないか」という反語の表現をする時、

カータンダ　ネァーカ。デルヨァネ　ナッテルンダ　ネァカナ。

のように言うこともあるが、「では」に当たる語を伴わず、「ネァカ」が直接動詞や形容詞や助動詞（レル，ラレル，タ，マス等）に接して，

ユータネァカ（言ったではないか）　アルネァカ（あるではないか）

のように言うことが多い。佐渡方言にもこの表現がある。

オソカッタガン　ネァカネ（遅かったのではないかね）

のような例もある。

IV

その他

1. 地点選定の理由

(1) 調査地の方言は、新潟県の中越後側の代表的方言と考えられる、中越方言に属すること。

(2) NHKの「全国方言資料」に中越地方の方言が採り上げられなかったこと。

(3) 調査地は旧市街から20キロメートルしか離れていない農山村であるが古い方言が保存されていることの多い所であり、また昔話の伝承者も多いこと。

以上のような理由で選定した。

2. 協力者の氏名と協力内容

高橋喜宣氏

調査地に生れ育ちそこに住み、柏崎市役所総務課広報係でいらっしゃるこの方からご協力頂いた。話者の紹介と対話会話の司会をしていただき、また聴きとりの困難な部分について意見をきいたり、話中にでて来る方言やこれに関連する語彙・表現・修辞について教えていただいたり、地点の概観のための資料の一部の提供を頂いたりした。

田村彦雄氏

新潟県立西頸高等学校教諭で生物学専攻。刈羽村周辺の植物の調査をしていらっしゃるので、植物の方言名等について教えていただいた。

〈B〉

表記について

表記は表音的カタカナ表記によった。そして次の方式に従った。

1. 長音には「ー」の印を用いる。
2. 合拗音の〔kwa〕〔gwa〕はクヮ、グヮのように表わす。
3. 〔ʃe〕〔dʒe〕はシェ、ジェのように表わす。
4. 〔ɸi〕…はフィのようにあらわす。
5. 〔ɛ〕〔Kɛ〕〔Sɛ〕〔ʃɛ〕…はエァ、ケァ、セァ、シェア のようにあらわす。
6. 〔ɔ〕〔Kɔ〕〔Sɔ〕〔Kjɔ〕…は オァ、コァ、ソァ、キョア …のように表わす。

アクセント、イントネーションは表記しなかった。

カナの表わす具体音声について．判断に迷った微妙な音声の処理原則について。

1. エァ、ケァ、セァ、シェア等で表記した音声は、共通語のエ段音よりも少し開いて居り、基本母音の〔ɛ〕と同じくらいか、あるいはそれよりいくらか開いている音声のように思われる。

2. いわゆる開合の別の残っている地方なので、オー、コーで合音を、オァー、コァーで開音を表わした。オーは基本母音〔o:〕に近く、共通語のオ段長音より少しせまいように思われる。〔ɑ:〕に近いかもしれない。オァーはほぼ基本母音の〔ɔ〕にあたり、共通語のオ段長音に極めて近いか、あるいはわずかに開いている音声のように思われる。

3. 表記に迷ったのは〔i〕～〔e〕の音声群である。この方言には単独の〔i〕は存在しなかったが、教育やマスコミなどの影響で、教養ある人には〔i〕に近い音声もきかれるようになってきている。イがウ段音の次に来る場合など特に〔i〕に近く発音されることがある。〔ɛ〕であったり〔e〕であったり微妙である。調査者もこの地帯の者もこれらの音声に対して敏感でないこともあり、判断に迷うことが多かった。それで〔i〕に近いと思われる場合はイと表記し、〔e〕に近いと思われる時はエと表記することとした。

4. ウは非円唇の〔ɯ〕であると思われる。

5. ヒ〔ɕi〕はシ〔ʃi〕に転ずることがあり、時にはその中間の音にも聞えることもあった。〔ɕi〕に近い場合はヒ、〔ʃi〕に近い場合はシと表記した。

6、母音の無声化はほぼ東京流と同じいと思われるが、符号はつけなかった。

〈C〉

収録内容の概要

1、タイトル　I、昔の労働

2、録音年月日 昭和50年(1975)8月10日

3、録音場所　栃崎市大字折居字餅粮　　話者Bの自宅座敷

4、話し手の氏名 A、高橋庶之助

同　性	男
同生年	明治29年
同職歴	農業
同役職名	村の司法保護司2年間、民生委員17年間、村会議員4年間。鵜川地区老人会長。(現)
居住歴	栃崎中学校在学中2年間は栃崎市に下宿したが以外は餅粮に在住。
言語的特長	80歳を越す老年であるがすこぶる元気でしっかりしている。郷土史、薬草学に関心が深く、古いむかしの生活やことばを保存している。話し好きではっきりしたことばで話すが、経歴の関係で共通語化もかなり見受けられるが、関西の訛を保存し、古いことばを使う。教養人であるので、話が論理的、説明的になることがあり、対話会話においてとかく発言を独占する傾向もみられた。はじめ司会者や調査者に対して説明する傾向があったが、後等によって後にはなくなった。文字化した部分はそうした余分の少ない部分である。 この人の話しぶりを「チャリが多い」と批評した人がもった、話がわき道にそれることが多いことらしい。この人だけではないが、他の人の話しの終りの中に話しはじめる所がある。

話し手氏名　B.高橋チエノ
性　女
生年　明治34年
職歴　主婦・農業
役職歴　なし
居住歴　旧鶴川村大字女谷字下野に生れ育ち（祖母・母ともに餅粮出身）餅粮に嫁いできた。14歳の時東京に出て3か月お手伝さんをしたことがある。
言語的特長　話し好きで静かに情緒的に具体的に話す。調査者の意図を早くのみこむ。古い方言を保存している。接続助詞トサイ、ニャー、エネ等を多用する。記憶もたしかで、昔話のよき伝承者でもある。話者Aと同じく他の話者の話しの終らないうちに発言するところもある。

話し手氏名　C.高橋孝宣　（司会者）
性　男
生年　大正15年
職歴　地方公務員
役職歴　鶴川郵便局員2年、村役場・市役所吏員24年間、現在柏崎市役所総務課広報係長
居住歴　餅粮に生育し、飛行学校（場所不明）在学の為に1年間他村等に居住したことがある。
言語的特長　低音でややかすれた声の持主。役職上共通語を話すが集落の人とは方言で話す。

5.録音の環境

同席もなく、池の滝の水も止めてもらい、静かな部屋で、三つのマイクを使用して録音した。司会者の指導もあり、和やかな気分で、話し合いはスムーズに進行した。

1、タイトル　　Ⅱ、冬の仕事
2、録音年月日　昭和50年（1975）8月22日
3、録音場所　柏崎市大字折居字餅粮話者Bの自宅座敷
4、話し手氏名　A、高橋　清治
　同　　性　　男
　同　　生年　明治35年
　同　　職歴　餅粮で農業、一時製炭に従事し、冬期間は酒造労働者として40年間出稼ぎをした。
　同居住歴　兵役で高田市に在住。昭和11年応召3か月で内地送還。
大正時代から40余年間冬期六か月間の出稼に、東京都西多摩郡(2年)茨城県笠間在（40年）浜松在（3年）に出向いた。
同言語的特長　言語がなめらかでなくにごもったり、どもるような話しぶりで、連続する音がちぢまったり飛躍するようなところがあり、とらえにくいところがある。他の話者に比し話しが短い。
長い出稼ぎによることばの共通語化は特別認められないようである。「オマエ」などというこの地方のあそびことばをさかんに使う。
　話し手氏名　B、高橋チエノ
　　　　性　　以下Ⅰ「昔の労働」に記述したので省略
　話し手氏名　C、高橋ミサノ
　　同　　性　　女
　　同　　生年　明治39年
　　同　　職歴　農業・主婦
　　同居住歴　生家は餅粮と同一大字の字北向、母は大字清水谷出身。北向に育ち餅粮に嫁いで来た、他の居住経歴はない。
　　同言語的特長　上下の前歯が抜けていたが発音に異常はなかった。鵜川地区に於ける代表的な昔話伝承者で、その語り調子ははきはきとして、内容も整っていると評されている。

他の土地の居住歴もなく方言の保有度が高い。話者A Cとは隣家同士で、特にBとは親しく、しきりに行き来して話しあう仲である。

5.録音環境　I、IIの場合と同じく、話者Bの自宅座敷の静かなところで行ない、同席者なく、司会は調査者が行ない前以て打合せをし、司会者の発言は少くとも話はスムーズに進行した。

1.タイトル　III、養蚕

2.録音年月日　昭和50年(1975)11月8日

3.録音場所　柏崎市大字折居字餅粮　話者A高橋眞氏宅座敷

4.話し手の氏名　A.高橋　眞

同　性　男

同生年　大正7年

同職歴　農業

同居住歴　餅粮に生育し餅粮に居住。但し昭和14年より6年間兵役のため東京都及び外地で過ごした。(在外期間が3年を越えて、望ましくないが、他に適任者がない。)

同言語的特長　元気に大声で朗らかに話す。話のテンポが早く、ことばに飛躍があり、早口で、ききとりにくい点がある。しかし方言を保有し、また会話をリードして行く。

同氏名　B.高橋マツノ

同　性　女

同生年　大正2年

同職歴　製糸工女・農家の主婦

同居住歴　餅粮に生育し小学校卒業後群馬県前橋市へ女工として行き、六年間そこに居住した。(在外期間3年以上となり望ましくないが、古い話者が他に少なく止むを得ない。)

同言語的特長　静かに明瞭に話す。年令・居住歴の関係もあり明治生れの老人より共通語化している，話者3人の中で共通語化が最もはっきりしている，

同　氏　名　C、高橋　初枝

同　性　女

同　生　年　大正2年

同　職　歴　女工・農家の主婦

同　居住歴　館林に生まれ高等小学1年修了後、女工として出稼ぎし、前橋市に6年、京都市に4年居住の後帰郷し、農業に従事した。

同言語的特長　母は中館城沼に最も近い青野新田生れで館林に嫁いだ高橋サヨ氏で昔話の伝承者である。朗らかで話し好きである。但し当日は孫を面い後にはひざに抱いて昔話と会話に加わったので、その孫にさまたげられて発言をおさえられるきらいがあった。鼻をつまらせているらしい発音であった，

(司会者)
話者の氏名　D、高橋　彦宣

同　性　男

同　生　年　大正15年

同　職　歴　地方公務員

同　役職歴　館林郵便局員2年、村役場市役所勤続4年現在市役所総務課広報係長

同居住歴　館林に生まれし、飛行学校（場所不明）在学のため1年間他県に居住した以外は館林に居住，

同言語的特長　低音でややかすれた声の持主。役職上共通語を話すが部落の人との話しには方言が多い，

5、録音の環境　A氏宅は道路に面しているため、時折道路を通るバイクの音がかなり大きく入ってきた，録音機にはマイク3個を使った。何のためか少し雑音が入ってしまった。話者Cは家庭の都合で孫の子守りをしなければな

らなかったので、はじめ背に負い、後にはこたつで膝の上に抱きながら対話・会話にのぞんだ。孫が退屈してむずかった。その音声も録音された割合もあり、また話者Cもそれに発言を制約された面もあった。同席者として話者Aの妻がお茶の接待をしたり、隣室のこたつで見守っていたりした。司会者のリードで話はスムーズに進んだ。

1. タイトル　　Ⅳ．雪の中の生活
2. 録音年月日　昭和50年11月8日
3. 録音場所　　柏崎市大字折居字餅粮　話者A高橋眞氏自宅座敷
4. 話し手氏名　A. 高橋　眞　男　大正7年生れ
　　　　　　　B. 高橋初枝　女　大正2年生れ
　　　　（司会）D. 高橋孝宣　男　大正15年生れ
（話し手の職歴以下の事項についてはⅢ、Ⅳ参照）

1. タイトル　　Ⅴ．冬の楽しみ
2. 録音年月日　昭和50年11月8日
3. 録音場所　　柏崎市大字折居字餅粮　話者A高橋眞氏自宅座敷
4. 話し手の氏名　A. 高橋　眞　男　大正7年生れ
　　　　　　　C. 高橋マツノ　女　大正2年生れ
　　　　（司会）D. 高橋孝宣　男　大正15年生れ
（話し手の職歴以下の事項についてはⅢ、Ⅳ参照）

1. 昔の労働

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
A	高橋鹿之助	男	明治29年
B	高橋チエノ	女	明治34年
C(司会)	高橋孝宣	男	大正15年

C ソレー(1) マー イッ(2) ナラータ モンデス。オンナシューワ イツ=
それを まあ いつ 習った もんですか。女衆は いつも
モ イソガシーンデスガ(3)。
忙しいのですが。

A ガッコァー(4) オエテノー(5)。
学校が 終ってねえ。

B ソレワネー ハルン ナッテカラ。 マーマー オショァーグヮツニ(6)
それはねえ 春に なってから。 まあまあ お正月に
ナッテカラ ヤマエ(7) デルマデ。 セッキウチワ(8) オメァサン(9) オ=
なってから 山に 出るまで。 節季うちは あんた お
ハリシル ～～～～ アッデスコテ(10)……。
針する ～～～～ あれですよ……。

A ン アー フユウチ ソノ アノ オハリシショァーテノガ ドコニ=
ああ 冬うち その あの お針師匠というのが どこにも
モ アッタカラサ オーアザニ(11) シトリグレァー(12) ズツワノー オシ=
あったからさ、大字に ひとりくらいずつはねえ、教える。

(13)
エル。

B コノ ウカワデモッテ エッチバン ハリノ カテァー ヒトワ ホ=
この 鵜川で いちばん 針の 堅い 人は それ

レ オメァサンタ(14) ホンケノ マルトカラ(15) コラッタ(16) オッカサン。
あなたの家の 本家の まるとから 来られそ おかあさん。

(A ソ ニシノ。(17)) ソレカラ シモノノ(18) ドァーシノヤ(19) アレガ
(うん、西の。) それから 下野の 道正の大家 あれが

アノ ～～～～。 アノ オッカサンタチガ(20) エチバン ～～～。
あの ～～～～。 あの おかあさんたちが いちばん ～～～。

A ソコエ オーカタ アノ サエホァーテダカネ ナラエ。 ノエハリ(21)
そこへ 大方 あの 裁縫と言うのかね 習いに。 縫い針

テッタ アノ コニ ノエハリ ノエハリダ。
と言った、あの 頃は 縫い針 縫い針だ。

B ア ソッデ ～～～～ ショァーグヮツワ ワリアエ---- ニグヮツ
あ それで ～～～～ 正月は わりあい---- 二月

サングヮツ ショァーグヮツカラ ショァーグヮツ ニグヮツ サングヮ
三月 正月から 正月 二月 三月

ツ マ ミツキグレァー エキマシタネ オハリナラエ。
まあ 三月くらい 行きましたね、お針習いに。

A オハリナラエノー オハリナラエ----。ソッデ サン ミフユグレァー
お針習いにねえ、お針習いに----。それで 三冬くらい

エカンケア フユウケ----。 アン ----。
行かなければ 冬うち-----, あ ----。

B ミツキグレァーネー ミツキグレァー ミーフユグレァー エカンケア
三月くらいねえ 三月くらい 三冬くらい 行かなければ

オマエサン (22) (A ソァーソァー。) ハー ヌーテ コター デキネァー。
あなた (そうそう。) はい 縫うということは できない。

A エッチョァーメァーナ (23) マー ワフクオ エッチョアメァーッテ マー
一人前な まあ 和服を 一人前と言っても まあ

ソンガノ (24) アノ アノ ホラ シューゲンニ キルヨァー ナノマデ=
そんな あの あの それ 礼言に 着るようなのまでは

ワ ノワンネァーデモネ (25) アタリメァーノ…ン (26)。
縫われないけれどもね、普通の…… うん。

B ソァーソァー。 マー ホントノ エー キモンワ ノワンネァデモ
そうそう。 まあ 本当の いい 着物は 縫われないけれども

アッデスコテ コドモニ キセルグレァーワ (27)。 コドモネ (28) オラガ
あれですよ 子供に 着せるくらいは……。 ××××私とでもか

コドモオ ソダテッ (29) ドキワ アッデスエネ エーノガ ヒトカサネ
子供を 育てる 時は あれですよ いいのが ひとかさね

ソレカラ キルノガ ××××マエンチ キテ アエクノガ フタツ ナケラ
それから 毎日 着て 歩くのが ふたつ なければ

ヨゴシテ キタ トキ カワリガ ノァーテ (30) コマルスケァ…(31)。ソレガ
汚して 来た 時 代わりが なくて 困るから…。それが

アキ ハ×ハル アノ アワセト ハダコト (32) ワタエレト ソレガ
秋 春 あの 袷と 肌着と 綿入れと それが

ミトーリ ネァケラ…(33)。ダスケァ オメァサン ハケグツワ アッデスエネ
三通り なければ…。だから あなた 八月は あれですよ

ホレ エマミテァージャー アリマセンスケァー アノー ヒマダスケァー (34)
それ 今みたいでは ありませんから、 あの 暇だから、

ミンーナ (35) ハリモン シテテ (36) ホエテ (37) オラガ (38) ンーナ (39) キミガ
みんな 針物を しておいて そうして 私が まったく きめが

(40)
ワリースケァ　エネカリノ　ハジマルマデネ　ヨーサリ　ヨナベニ
悪いから　稲刈りの　始まるまでに　夜　夜なべに

ミンーナ　フユモナー　ワタ　エレテテ　ソレカラ　ヨーサリワ
みんな　冬物は　綿を　入れておいて　それから　夜は

オソテモ　ハヨテモ　デコァーテモ　チーソァーテモ　ソノ　ワタエレオ
遅くても　早くても　大きくても　小さくても　その　綿入れを

シトツズツ　マトメチャー　ネタモンデスエネ。　(A ヨメネ…アー　嫁に…あぁ…)
ひとつずつ　まとめては　寝るものですよ。

(41)
エネカリガ　ハジマルト　ホレ　アカギレガ　キレチモァテ　アノ
稲刈りが　始まると　それ　あかぎれが　切れてしまって　あの

マワタガ　クッツイチモァテ　ワタエレニ　ナリマセンスケァ
真綿が　(指に)くっついてしまって　綿入れに　なりませんから、

ココノツデモ　トーデモ　ゼンーブ　ハリナオシ　エマノ
九つでも　十でも　全部　張り直し、　今の

モンミテァーネ　マエトシ　アタラシー　モンナ　カワンネァスケァ
着みそいに　毎年　新しい　物は　買われないから

(42)
ソレオ　ホグシテ　アラテ　ハッテ　ソシテ　アッデスエネ　ソノ　ゼンブ
それを　ほぐして　洗って　張って　そうして　あれですよ　その　ぜんぶ

フユ　アレシル　ヌータンデスエネ　ハー。
冬　縫うのですよ　はい。
×××

(43)
A　アノ　ホレ　ヨメネ　エッテカラ　マー　ソノ　エーノ　ジョーニモ
あの　それ　嫁に　行ってから、まあ　その　家の　事情にも

(44)
ヨルドモ　ナンネングレァーダ　アノ　ハケグツ　ホラ　ホラ
よるけれども　何年間、おいそうりか　あの　八月に　そら　そら

(45)
トデァーテテ　コドモガ　シタリモ　サンニンモ　デキテモ　マー
斗代と言って　子供が　二人も　三人も　できても、まあ

デッケァー　コワ　ヨメネ　エッタウチニ　オイテキテモ　チーセァー
大きい　子は　嫁に　行った家に　置いて来ても　小さい

コドモノ　シタリグレァーワ　ブータリ　テー　ヒータリ　シテ
子供の　二人くらいは　負ったり　手を　ひいたり　して

トデァーヤスミテノガ……　ソレガ　ソノ　ボロ　ツズクル…(46)（B笑）
斗代休みというのが……、　それが　その　ぼろを　繕く……

ウー　ノノノー(47)。　アラ　ハチグヮツダ　ネァーカ。　キューレキノ
んー　ののねえ。　あれは　八月では　ないか。　旧暦の

ハチグヮツ。　ン　キューレキノ　ハチグヮツダデノー　エネカリノ
八月　うん　旧暦の　八月だよねえ、　稲刈りの

ハジマル　メァーニ。
始まる　前に…。

B　オラガ　マダ　ヨメ　ハー　ヨメノ　コロワ　アリマシタコテ(48)。
私どもが　まだ　嫁、はい　嫁の　頃は　ありましたよ。

ハー。　ウチエ　ボロ　ヒトリエ　カズイテ(49)テッテ　ゼンブ
はい。　実家へ　ぼろを　ひと背負い　かついで行って　ぜんぶ

ウチデモッテ　ソレネー……。　マー　オラ　ドコワ　アレ
実家で　それをねえ……。　まあ　私の　所は

オラ　トシヨリガ(50)　トシヨリダッタスケァー(51)　ソノ　ツトメワ(52)　シマセン
私の家の　年寄りが　年をとっていたから　その　勤めは　しません

カッタガネー。（Aンー。うん。）　ホァテ　ウシガ　エルスケァ（Aソー。そう。）　イヤ
でしたがね。　そうして　牛が　いるから、　いや

マ　マ　アノ　コロワ　マーデ(53)　アッタガ　マエーンチ　マエンチ
馬　馬　あの　頃は　馬で　あったが、毎日　毎日、

ホレ　トッツァンテ(54)　モンナ　マエーンチ　ヨリエ　デネァケ　ナランシ
それ　主人という　者は　毎日　よそへ　出なければならないし、

マノ　クサカリ　シネァケ　ナラン。（A ンーンー。うん うん。）ヘァー　ヨーガタ(55)
馬の　草刈りを　しなければ　ならない。　　　　　　　　もう　夕方

スズシ(56)　ナッテ　クルト　ンマノクサ　シトツエズツ(57)　カッテ　キテ…。
涼しく　なって　来ると　馬の草を　ひと背負いずつ　刈って　来て…。

（A ハー。はい。）ソレガ　アッデスエネ　（A ～）アレン　ナッテ(58)　アキン
　　　　　　　　それが　あれですよ　　　　　　　　　　　　　　　　秋に

ナルトサエニャー(59)　ソノ　シトワ　コノ　デヤノサカオ(60)　オメァサン
なると　　　　　　その、人は　この　出会の坂を　　あなた

ツナギン　ナッテ(61)　エネ　カズクデショァーネ　（A ンー。うん。）オラ　ソレー
繋がって　　　　　荷を　かつぐでしょうね、　　　　　　　　　私は　それを

マエーンチ　アッデスエネ　ソノ　ハチグヮツ　シトノ　ヤスム　ドキモ
毎日　　　　あれですよ　　その　八月　　　　人の　　休む　時も

クサ　シトツエズツ　カズイテ　アガルスケァ　エネカズキテ　モンナ
草を　ひと背負いずつ　かついで　上がるから　荷かつぎというものは

シマセンカッタガネ。
しませんでしたがね。

A　アンマニ　カツガシテノー。（B ンマニ　カズカシテ。馬に　かつがして…。）ソーソー
ああ馬に　かつがしてねえ。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　そうそう

ソラー　ンマノ　アル　ショーワ(62)　ンマダ。
それは　馬の　有る　人々は　馬だ。

B　ソレガ　マタ　カラダノ　ナレッコデ　エワッコシテ(63)　アッデ(64)　コンガネモ
それが　また　体の　馴れで　上積みをして　　　　こんなにも

シテ　クサオネ　ゴリククレァーモ　カズイテ　クルガンダ(65)。
して　草をね　五束くらいも　かついで　来るのだ。

リョァーマルケニ(66)　シタガンオ。　デヤノサカ　ナンーニモ　ナンギ
両束ねに　　　　　したのさ。　出会の坂を　少しも　　苦しく

(67)
ノァーテ　トットトットト　アガッテ　キタ　モンデスガ　サー　コンダ
なくて　とっとととと　登って　来た　もので"すが、　さあ　今は

(68)
トケクラエ　エネカリー　エッテ　サーンゾク　カズイテモ　アノ
柄倉へ　稲刈りに　行って　ミ来　かついで"も　あの

サカガ　コンダ　アガランネァー　カラダガ　ナレッコニ　ナッチモァーテ。
坂が　今度は　登られない。　体が　馴れっこに　なってしまって。

A　ハーハーハー。
はいはいはい。

(69)
B　(笑)ソー　ユー　(笑)オラガ　ワーケァー　ドキャー　リァーナンデス。
××　××　私とその若い　時は　そうなんです。

A　ア　アノ　コロノ　ンマテノガ　エマノ　コーウンキト…(Bハー。はい。)
あ　あの　頃の　馬というのが　今の　耕耘機と…

アルイワ　アノ…ジドァーシャノ　ホラ　コガタ…ナンダ…　アレッテンダカ……
あるいは　あの…自動車の　ほら　小型…何だ…　あれというのが…

アノ　ノセル　ニ　ノセル　ジドァーシャ　ナンタカナ　ユーネッカ……
××　××　あの　荷を　載せる　自動車は　何というかな、言うじゃないか、

(70)
ソー　エッタヨァーノ　モンデ"　アッタンダヨ　ムカシノ　ンマトカ
そう　言ったような　もので"　あったんだ"よ、昔の　馬とか

(71)
ウシトカテ　モノワネ　エマノ　クルマ　キカエト　オンナシ
牛とかと言う　物はね、今の　車、機械と　同じ

コッテ。　ダカラ　アノ　ンマヤ　ウシノ　アル　シトワ　アンマリ
ことで。　だから　あの　馬や　牛の　ある　人は　あまり

(72)　(73)
ジブンジャ　オモニ　シネァーデモノー　トーヤマヤ　アタリノ
自分では　重荷を　しなくてもねえ　遠い耕地や　近くの

ホントノ　エーノ　メグラデ……。
まったくの　家の　まわりで……。

B　アキダケワネー(74) ～～～～ アー。　ソノ　カワリ　タノクサトリー

秋だけはね、　　ああ。　その　かわり　田の草取りに

ナッタッテ　シトワ　モモシキ(75)　エッソク　コーシテ　アラータノオ

なっても　人は　股引　一足を　こうして　洗ったのを

カタネ　カケテ　ヘヤガリ(76)　シテ　クルガ　サー　オメァサン

肩に　掛けて　昼上りを　して　来るが、さあ　あんた

エッソクデモ　ニソクデモ　セナカエ　ノシテ(77)　キテ…。ダスケァ　コノ

一束でも　二束でも　背中に　載せて　来て…。だから　この

シタノ　ゴロァゼァンノ(78)　ショーガ(79)　アッデスエネ　ヒルマ　クル　ドキワ

下の　五助左衛門の　爺が　あれですよ　昼間　来る　時は

ヘァー(80)　オヒル　タベテ　エラレッ　ドキ　オラ　アノ　メァー　トーッタ

もう　お昼を　食べて　いられる　時　私は　あの　前を　通った

モンダシ　（Aンー。うん。）　ソレカラ　コンダ　ヨーサリャー(81)　オヨハン

ものだし、　それから　こんどは　夜は　お夕飯を

タベテ　ラレッ(82)　ドキ　アッデス(83)エネ　アノ　メァー　トーッタ　モンデスエネ。

食べて　いられる　時　あれですよ　あの　前を　通った　ものですよ。

（Aアー。ああ。）　ソレダケドツネー(84)　トチクラカラ　クルニャ　チゴァータ

それだけずつ　ねえ　栃倉から　来るには　違った

モンデスエネ。

ものですよ。

A　ソーソーソー。　エヤ　エーノ　アタリデモッテ　ヒャクショァー　シテル

そうそうそう。　いや　家の　あたりで　農業を　している

ヒトナンテア　オメァー　ヒョコヒョコト　ウチエ　ヘァーッチモァー(85)ンダアンネ

人などは　あんた　ひょこひょこと　家に　入ってしまうのだのに、

（Bハー。はい。）　オメァサンタ　ソレ　エク　アノ　アッドァー(86)　ナンバエデモ

あんたたちは　それを　行く　あの　あれだよ　何俵も

ムコァードァー　トケクラテ　ドコワノー(87)。
向こうそ"よ、　栃倉と言う　所は　ねえ。

B　ハー　ナンバエデモ　ムコァーデシタコテー。
はい、何倍も　向こうでしたよ。

A　アー　ッダカラ…。　ソレカラ　デヤノサカテ　ユー　サカガ　ヒトツ
ああ　そ"から…。　それから　出合の坂と　言う　坂が　ひとつ

アルシサー。（B　ソーリー。そうそう。）　アノ　デ"ヤノサカッテ　ユーノワネー
あるしね。　あの　出合の坂と　言うのはねえ、

コノ　マエニ　アノ　ゼームショガ　ミンナ　トケシラベー　キタリ
この　前に　あの　税務署が　みんな　土地調べに　来たり

アエ(88)　シタ　ドキ　オレニ　アノ　ユータガ"サー　アノ　カシワザ"キノ
あれ　した　時　俺に　あの　言ったがね、　あの　柏崎の

ゼームショインガ　キテ　ンーナ　ナンカ　シラベタ　ドキ　ナンカ(×××)
税務署員が　来て　みんな　何か　調べた　時

キテ　ユータガ　コレガ　アッラカネ　アノ　トキ　オレ　クチョァー
来て　言ったが"、「これが　あれそ"かね」、あの　時　俺は　口長を

シテ　イタカナ　ナシタカナ(89)　クチョァーサン　アー　ナダカエ　ソノ
して　いたかな　どうであったかな、「口長さん　ああ　名高い　その

アノ　ナタデ(90)　アタマ　スルカ（B　笑）　モチニァー(91)　エ　ヨメネ
あの『鉈で　頭を　剃るか』　餅屋へ　嫁に

エクカ　アケラモ　アノ　ナンダカナ　デヤノサカ　アケテモ
行くか　明けても』　あの　なんそ"かな『出合の坂　明けても

クレラモ　コシニ　ミナワノ(92)　タエガ　ネァーテ　ユー　ドコ(××)　ウタオ
暮れても　腰に　荷縄の　絶えが　ない』と　言う　歌を

オラ　シッテルガ"ンダ"ガ　テバ(93)　エー　オマエサマ　ワケァー
俺は　知っているのそ"が"」と言うので、「そう、　あなたは　若い

(94)
ゼームショノ　ヤクニンサンワ　ソンガン　ユト　シッテルカエテ
税務署の　役人さんは　そんな　ことを　知っていますか』ヒ

エッタラ　ソァーコテ　オッダッテ　カシワザキ　コノ　カリワグングレァーン
言ったら、「そうさ、　俺そって　柏崎　この　刈羽郡くらいの

コター　キーテラエ　テナ　コト　ユーテ…。　ソァー　ユー
ことは　聞いていますよ」といったようなことを　言って……。　そう　言う

(95)
デヤノサカナンダノァー。　アサカラ　バンマデ　コシニ　ニナワノ
出合の坂なのだねえ。　朝から　晩まで　腰に　荷縄の

タエガ　ネァーテヤ　アノ　ミンナ　ドコノ　ウチニモ　ンマヤ　マ
絶えが　ないというのは、あの　みんな　どこの　家にも　馬屋、まあ

ウシワ　(B ハー。ばい。)　ソノ　ゴダガ　ハジメワ　ンマダッタノー。(B ウシワ
牛は　(B はい。)　その　後だが　はじめは　馬だったねえ。(B 牛は

サエキンデシタ…。)　ンマノ　ネァー　ウチナンテ　マー　ヒャクショァーガ
最近でしたよ…。)　馬の　ない　家など　まあ　農家が

ナランテ　ユータグレァーデ　エマノ　コァーウンキト　オンナシ
できないと　言ったくらいで、　今の　耕耘機と　同じ

コンデネー。　(B リテ　リァー。そう　そう。)　ダカラ　アノ　ンマニ　クワセル　クワ
ことでねえ。　(B そう　そう。)　だから　あの　馬に　食わせる　草を

クサオネー　(B リァーリァー。そう　そう。)　マー　アノ　コァー　ジブンノ　エーノ
草をねえ、　(B そう　そう。)　まあ　あの　こう　自分の　家の

チケァー　ドコニ　クサバガ　クサー　カル　バショガ　アル　シトワ
近い　所に　草場が、草を　刈る　場所が　ある　人は

(96)
エーンダドモ　トーノ　ホァーエ　サクバ　モッテルヨァーナ　シトワ
いいのだけれども　遠い　方へ　作場を　持っているような　人は

サクバエ　エカンケラノー　クサカリバガ　ネァー。　アノ　クサカリバガ
作場へ　行かなければねえ　草刈場が　ない。　あ　草刈場が

ネァーンダ。
ないのだ。

B ～～～ オメァサンガ ～～～ トチクラマデ エカンケラ カズイテ
あなたが 栃倉まで 行かなければ かついで

コラ ンネァガンダ…。 ソッデ マタ ウシネ ンマネ フマシタノオ
来られないのだ…。 それで また 馬に 踏ませたのを

ダシテ リョアマルケニ シテテ ソレオ マタ シタゴエノ
出して 両しばりに しておいて それを また 基肥の

カワンネ マタ トチクラエ カズイテ エカ～～～ (A カズイテ
代りに また 栃倉へ かついで 行か～～～ かついで

エカンケ ナラン。) ダスケァ エキキ アー セナカネ ニノ
行かなければならない。 だから 行き来 ああ 背中に 荷の

タエガ アリマセンコテ。
絶えが ありませんよ。

A ンー。マー アノ コッカラ オマエサンノ コノ ウチカラ
うん まあ あの ここから、あなたの この 家から

トチクラマデテ ユート ムカシノ リスーデ エーバ ハンミチカ。
栃倉まで と 言うと 昔の 里数で 言えば 半道か。

(B ソーデスネ) ンー マー エチリワ ネァードモ ハンミチモ
そうですね。 うん まあ 一里は ないけれども 半道も

アルンダン (97) ハンリモ アルンダン リスーニ シテノー (B アノ
あるのだから、半里も あるのだから、里数に してねえ。 あの

コロワ ミンナガ エカシタスケ (98) クナシニ エキマシタドモ ン
頃は みんなが 行かれたから 苦なしに 行きましたが ん

エマ ヘァー ダメデス。) イマノ キロニ シテ ニキロカ。ンー
今は もう だめです。 今の キロに して 二キロか。 うん

エケリワ　ヨンキニダケラ　ニキニ　ニキニモ　アルンダンガノー。
一里は　四キにならば　二キに、二キにも　あるのさからねえ。

ソコン　ドコエ　エクサ　クルサ(99)　ソァーシテ　リノ　ナタデ　アタマ
そこの　所に　行きも　帰りも　そのようにして、その　鉈で　頭を

スルカ　モチニァーエ　ヨメニ　エクカテ　ユー　デヤノサカテノガ
剃るか　餅米へ　嫁に　行くかと　言う　名合の坂というのが

エクマガリ　アルンダー　シトマガリ　シタマガリ　ミマガリ
幾曲り　あるのそろう、ひと曲り　ふた曲り　三まがり

ヨマガリモ　アルカ。（笑）　ソノ　マガリ　マガッテ　アガッテ
四まがりも　あるか。　その　曲りを　曲って　上って

ノボッテ　クル　サカオ　メァーンチ　アエッタスケァネ(100)(101)。
登って　来る　坂を　毎日　歩いたからね。

B　アノ　サカガ　マタネ　オモシロエ　サカデ　（Aアー。）　カラミデ
あの　坂が　またね、おもしろい　坂で　（Aああ。）　空身で

アガッタタッテ　ナンギーンデスエネ(102)。
上がったって　難儀なのですよ。

A　アマ　ソァーエンダ(103)。（笑）　カラミ……。
ああ　まあ　そうなんそ。　空身……。

B　（笑）シカモ　チョエット　（Aニー　カズイタ……。）　ヒッカケニ(104)　シタ
むしろ　ちょっと　（A荷をかついそ……。）　引っ掛け荷を　しそ

ホァーガ　ア　ラクダッタ。
方が　あ　楽だったそ。

A　エヤ　アノ　サカノ　ヤスミバデ　ニー　カズイタノオ　ヤスム
いや、あの　坂の　休み場で　荷を　かついそのを　休む

ドキノァー　（Bソァーソァー。）　マタ　キモチ　エーンドァー。
時　ねえ、　（Bそうそう。）　また　気持が　いいのそよ。

キタカゼガ (105) ホドコエ ヘァッテ クルシノー。(笑)
北風が ふところへ 入って 来るしねえ。

B ダスケァ ムカシノ ショー…… アノ エカキネ エッチバン
だから 昔の 人々…… あの 絵書きに いちばん
シャバジューデモッテ ミッタクネァー (106) ミタドコノ (107) ワリー エー カエテ
娑婆中で みにくい 見た所の わるい 絵を 書いて
クレッタラ アノー オトコモリー (108) エ カエテ クレタテ ユー。
呉れと言ったら あのう 男子守りの 絵を 書いて 呉れたと 言う。

(笑) (Aハーン オトコノ……。) ホァーシタラ コンダ エチバン
(ふうん 男の……。) そうしたら こんどは いちばん
ラクナ ラクンナ (109) エ カエテ クレッタラ ムツムツムツムツ (110)
楽な 楽な 絵を 書いて 呉れと言ったら むつむつむつむつと
デヤノサカノヨァーナ ドコオ ニオド (111) カズイテ アガッテ
出合の坂のような 所を 堆(にお)ほど かついで 登って
ヤスミバデ ストント ヤスンダ ドコ カエテ クレタナンテ
休み場で すとんと 休んだ 所を 書いて 呉れたなどという
ハナシ オラ キキマシタガ。(Aンア ンア ～～～。) リレガ マー
話しを 私は 聞きましたが。(うん うん ～～～。) それが まあ
ソノ ヤスンダ トキガ シャバジューノ マー (Aゴクラクダ。)
その 休んだ 時が 娑婆中での まあ (極楽だ。)
ゴクラクデ アッ～～～。
極楽で あっ～～～。

A アー イヤ チョァード マタ アレガ ゴゴン ナルト ヒカゲン
ああ いや ちょうど また あれが 午後に なると 日陰に
ナッテ ネー。ホァーテ (B ハー～～～ アコガ ヒカゲニ ナルエネ。(112))
なって ねえ。そうして (はい。 あそこが 日陰に なるので。)

キタカゼガ　キタカゼガ　ソヨソヨト　ヘァーッテ　クルシ。オラモー
北風が　北風が　そよそよと　入って　来るし。　私どもも

アコカラ　エネノー　ンー　ニヤク　サンビャク　サンxx　サンビャクモ
あそこから　稲の　んん　二百　三百　三　三百束も

カズイタカ。（B ソァーデスネー　オマエサンタモ　アコニ
かついだが。　そうですねえ。　あなたの所も　あそこに

アッタンダスケ。）アー　オー　エネノ　サンビャクリクモ　カズイタ
あったのだから。　ああ　おう、稲の　三百束も　かついだ

モンダガ　カズイテ　アガッタ　モンダガ(113)サ　エー　アコア　マタ
ものだが、かついで　登った　ものだがね、ええ　あそこは　また

ソラ　ホントニ　ゴクラクノ　テーソァー(114)ダヨ。アノ　ムツムツムツ
それは　ほんとうに　極楽の　姿だよ。　あの　むっむっむっと

アセ　アセ　エッペァン　ナッテ　シ〰ダ　ドキ　アノ　ヤスミバガ
汗　汗　いっぱいに　なって　〰〰　時　あの　休み場が

マタ　ンマク　デキテ　エルカラノー。エワオ　ダン　ツケテ
また　うまく　できて　いるからねえ。　絵を　段を　つけて

デキテル。　アコデ　ヤスムト　アレナンダ。　アノ　チョアド　ソノ
できている。　あすこで　休むと　あれなのだ。　あの　ちょうど　その

コロ　キタカゼガネ　キタ　ムイテ　エルカラ　キタカゼガ
頃　北風がね、　北を　向いて　いるから　北風が

ホドコエ　コァー　ヘァッテ　クルシ　ホァーテ　マー　アノ　テヌグイ
ほところへ　こう　入って　来るし、そうして　まあ　あの　手拭、

クビー　マイタリ　ハチマキ　シテル　テヌグイデモッテ　コァーコァー
首に　巻いたり　鉢巻に　している　手拭でもって　こうこう

コァーコァー　シテ　テーデ（B笑）コァー　マワスト(115)ノァー（B ソァーソァー。
こうこう　して　手で　こう　回すとねえ、　そうそう。

カゼガ ヘァッテ クルシサー。(B笑) ホァーデ マー チット ヘァー
風が はいって 来るしねえ。 そうして まあ 少し そう

アノ ナンギーノガ ラクン ナッタ コロ マタ ウントコサト
あの 苦しいのが 楽に なった 頃 また うんとこさと

カズイテ アノ コシ キッテ アガッテ クルンダドモネ。ヤスミバ
かついで あの 腰を 切って 登って 来るのだけれどもね。休み場

ガ ミドコ ヨドコ テンジョァーマデ ヨドコ アッタカノァー。(116)(Bソァー
が 三所 四所 上まで 四所 あったかねえ。 そう

ソァー。) ソレ マー ヨァーエジャ ネァーンダテー アノ… ミンナ ソコ
そう。 それ まあ 容易じゃ ないのだよ、 あの… みんな そこ

ン ドコ カズキアゲネァンダケラ(117) ナランノダンガノー。(118)
の 所を かつぎ上げなければ ならないのだからねえ。

B ソァーソァー。(Aンー。 うん。) ハナシガ マタ ヨコエ ソレマスドモ
そう そう。 話が また 横へ それますけれども、

コンダネー タアガリノ(119) ホレネ アノ ドヨエ(120) ヘァールト (Aンー。 うん。)
こんとはねえ 田上がりの それね あの 土用に はいると

ノグサカリテノガ(121) クロエメノ(122) ハジマルンデスエネ。
野草刈りというのが 黒姫の 始まるのですよ。

オラ ヒリョァー(123) ミッカグレァー タノンデテ カッテ ソァーシテ
私どもは 人夫を 三日くらい 頼んでおいて 刈って、そうして

オマエサン ソレオ ミンナ ニューネ ツンデテ ホイテ オボンニ
あなた それを みんな 堆(にお)に 積んでおいて そうして お盆

スギネ ダスンデスエネ。(Aソーエ ユト。 そういうこと。) ソレ トケクラエ
過ぎに 出すのですよ。 それを 納倉に

オメァサン ハンブン オイテ ウチー ソノ ニュー シトツグレァー
あんた 半分 置いて、家へ その 堆 ひとつくらい

モッテ キテ フエウッケ ソレ マタネ ンマネ フマセルンデスエネ。(124)
持って 来て 冬中 それを またね 馬に 踏ませるのですよ。

(A ソァーエンダ。 そういうことぞ。) ハー ソレオ マタ シタゴエニ シテ オマニ(125)
はい、それを また 基肥と して おな

エサン アノ タンボエ モッテグンダ。
え あの 田へ 持って行くのぞ

A ノグサテノワ アラ ドーヌケテ ユー アノ クサダガネ (B (126)
野菜というのは あれは どおぬけと 言う あの 草だがね。

ソァー。) アレガ ナカナカ ンマニ フマシテモ グッシャグッシャ シネァデ(127)
そう。 あれが なかなか 馬に 踏ませても ぐしゃぐしゃと しなくて

サ カワエテ。
ね。 乾いて

B アソノ ナカニ ムラダケテガンガ アルト ソーレガ オメァサン(128)
あ その 中に むらだちというのが 有ると それが あんな

マタ アッタケァー カゼニ ノッテ クルツガヤ クチン ナカマデ(129)
また 暖かい 風に 乗って 来ると 口の 中まで

ニゴァー ナル。(130)
にがく なる

A アー アレガ エマ オレノ ヤクソァーノ コノ アノ オヤカタドァーエ(131)
ああ あれが 今 私の 薬草の この あの親方ですよ、

(Bハー。 はい。) アノ ムラダケガネー。 (Bハー。 はい。) アラ エンメーソァー(132)
あの むらだちがねえ。 はい。 あれは 延命草

テンドァー。 (Bハー。 はい。) エマ ヤクソァーノ アー ナマエカラ ユート
と言うのぞよ。 はい。 今 薬草の ああ 名前から 言うと

エンメーソァー エノチオ ノバス……。アラ ニゲァーンダ。
延命草 命を 延ばす……。あれは にがいのぞ。

B　ッテ　ニサンケ　マダ　ジキガ　ハヨァ　エッテ　コァー　クサ　カリマストサエニャー
それで　ニ三日　まだ　時期が　早く　行って　こうして　草を　刈りますと、

（Aンー。うん。）　ミーンナ　テガ　ンラサキニ(133)　ンーナ　リマッチモァー　クサカリ
まったく　手が　紫に　まったく　染まってしまう、草刈りを

シット。
すると。

A　ヤッパシ　アレ　アノ　ンマナンカノ　アノ　ノグサノ　ドーヌケノ
やはり　あれ　あの　馬などの　あの　野草の　どうぬけの

ノグサン　ナカエ　アノ　ムラダケ　（Bンラダケ～～～ハー。むらだち～～～はい。）ガ
野草の　中に　あの　むらだち　が

ヘァッテルト　（Bハー。はい。）アレ　ンマノ　アッラヨ　エチョァーガ　（Bハーハー。はいはい。）
はいっていると、あれは　馬の　あれぞよ　胃腸が

ガエニ(134)　ナッタンダヨ。　ニガエ　ニガエ　クスリガネ(135)。（B　アレ
丈夫に　なったのだよ。　にがい　にがい　薬がね。　あれを

ンーナ　クイマス…。）　ヤッパシ　ヤクソァー…ドァーブツダッテ
みんな　食います…。　やはり　薬草　…動物だって

ヤクソァー　ヤクソァー　クワンカラ　クータ　ホァーガ　エーンダカラサ。
薬草　薬草を　食わないから　食った　方が　いいのだからね。

エー　ソレデ　アノ　マー　ムラダケ　ナルベク　アノ　ヒルメシ
ええ　それで　あの　まあ　むらだちを　なるべく　あの　昼飯を

クー　コロン　ナッタラ　オエ　ムラダケ　ソノ　カマデ　カルナヤ
食べる　頃に　なったら　おい　むらだちを　その　鎌で　刈るなや

ナンテ…。アノ　ソノ　カマデモッテ　キウリオ　アノ　ホラ
など……。あの　その　鎌で　きゅうりを　あの　それ

コスッテ　アノ　（Bンー。うん。）　キザンデテノワ　アノ　カマニネー(136)
こすって　あの　きざんでというのは、あの　鎌にねえ

(Bソァーデスネー。) (137)コァコァコァコァー シテ エー (138)ケソエデ エ
(そうですねえ。) こうこうこうこう して ええ け剥いて ええ

(139)クワンケ ナンダスケデ ニーゲァーカラッ。
食わなければならないのだから、にがいから。

B (140)エヤ モチコァーノ アノ ヒガシノ (141)オッカサンガ エキノ (142)キレル
いや 餅粉の あの 東の おかあさんが 息を 引きとる

(143)ドキワ アノ アカエコァーノ (144)エヤシリガ タベテァーテ (145)エワシッタ
時には あの 赤子の 汁や汁が 食べそいと 言われると

テーガ マタ ヤマカラ (146)アッツイ メ シテ オリテ キテ
言うが、また 山から 暑い 目に あって 下りて 来て

(147)スズバネ マッテ (148)オトッツァンガ エワッシャルヨァーネ (Aアー。ああ。) カマデ
涼み場に 行って、おとおさんが 言われるように 鎌で

(149)コァーシテ ケズッテ (Aナマミソデノー。生味噌でねえ。) ソン ナカエ ナマミズ
こうして 削って その中に 生水を

エレテ コァー シテ‥‥。 ソレ マタ エマデモ ワスレラレマセン。
入れて こう して …。それ また 今でも 忘れられません。

~~~~~~。

A (150)アー ヒャッコエ ソノ オクヤマノ (151)チベテァー ミズオネ ヒャッコエ
ああ つめたい その 奥山の つめたい 水をね、ひやっこい

ミズ‥‥。オラ ホァーデ エーバ ホァーゲンワ マー ヒャッコエ
水‥‥。私どその方で 言えば 方言は まあ ひやっこい

テンダ。ヒャッコエ ミズ エレテ リァーシテ ソノ ミソ エレテ
と言うのだ。つめたい 水を 入れて そうして その味噌を入れて

(152)カンモァーシテ エ クーノガ ~~~~ ソレ トッテモ ~~~~~。
かきまわして ええ 食うのが それ とても 。
~~~~~~

B　ソァーシテ　シマエネ　オメァサン　ゴハンガ　ノコルト　ソレ　コンダ
　　そうして　しまいに　あんた　御飯が　残ると　それを　こんどは

　　ゴハン　ストント　エレテ　ソァーシテ　コァー　シテ　オイテ
　　御飯を　すとんと　入れて　そうして　こう　して　おいて

　　タベルンデスエネ。(笑)
　　食べるのですよ。

A　ワッパ(153)ト　ユー　アノ　キオ　マゲタ　キノ　マー　エタ…。
　　輪っぱと　言う　あの　木を　曲げた　木の　まあ　桜を…。

注記

1、ソレー　それを。裁縫のことを指す。

2、イツ　〔itsɯ〕副詞

3、イソガシー　〔isogasi:〕司令者は公務員で最も若く共通語化している。

4、ガッコァー〔gakkɔ:〕コァーは開音で共通語のオ段長音よりやや広いがあるいはほとんど等しい音声のように思われる。

5、オエテノー　オエルは自動詞ア行下一段終る。ノーは〔nɔ:〕間投助詞。感動をあらわし、同意を求めたり、納得させようとする心持で相手に訴える。親しい関係の目上、同輩、目下に対して用いる。強い感動訴えの時は開音の〔nɔ:〕になることもある。芸岡を中心とする中越地方の共通語といえる。糸魚川市西川原ではnɔ:は品位はあまりよくないといわれる。

6、オショァグワツ〔oʃɔ:gwatsɯ〕佐渡郡・中頸城郡の一部を除き本来は〔gua〕音を保存している。

7、ヤマ　田畑のあるところと山岳をさす。田畑はすべて傾斜地にある。「ヤマエデル」は四五月の交に農作業を開始すること。

8、セッキウチ　節季中。十二月正月前のこと。

9、オメァサン〔omɛsaN〕あんた。二人称代名詞が間投詞的に用いられた。品位はわるくない。最も丁寧になるとオマエサマとなる。

10、アッデスコテ　「あれですよ」の意が間投詞的に用いられた。ことばを思いつかぬ時にいう。コテは〔kote〕文末に来て強い感動と主張と時に反ぱくの心持をこめて相手に訴える終助詞。昔話のことばの中に「コトイ」「コトイネ」が見える。芸野県に「コトヨ」富山県に「コトー。コトイネ」本来両頸城郡糸魚川市西川原に「コトイネ」柏崎・中頸城郡柿崎に「コテヤ」がある。コトヨ＞コトイ＞コテと変ったか。コテは佐渡・下越、中越、魚沼・頸城に広い。南魚沼郡湯沢町のコテァー〔kɯtɛ:〕はコトヤレの変化であろう。コテァレとも言う。鍋粮でも「コテヤ」とも言う。Ⅱの注47参照。

11、オーアザ〔o:aza〕

12、〔ʃitorigɯrɛ:〕ɕi＞ʃi　ai＞ɛ:　中頸城の影響でヒ＞シが多い。

13、オシエル　「お針を教えるお針師匠というのが」の意。

14、オメァサンタ　お前様方の変化であなたの所の意で、司会者の家庭をさす。

15、マルト　柏崎市中浜にあった某家の屋号。漢字不明。

16、コラッタ　来られたの変化。ラレルの連用形の促音化。レルラレルは最も普及して使われている軽い尊敬の助動詞で、親類・近隣の親しい人についても使う。主婦は主人を使用対象としても用いる。親しくない目下についても用いる。使用対象が面前に居る場合はもっと敬意の深い「シャル系」を用いることもある。レルラレルは室町末期使用対象が不在の場面に主として用いられるというロドリゲスの文典が参考になる。長岡市方面ではラレルが変化してラッル・ラッズとなるところがある。これらのレルラレルは共通語（現代の）の普及したものでなくもっと古いものと思われる。

17、ニシ　屋号西。司会の高橋氏（屋号小西）の本家にあたる。

18、シモノ　杉居の隣の大字女谷の小字の名。

19、ドァーシノヤ　屋号　道正の大家と書くが、道正は「どうしよう」（何としようか）から起ったという伝説がある。

20、オッカサン　一家の主婦で中年以上の人をいう。

21、ノエハリ　スイハリ縫い針の変化で針仕事のこと。江戸時代語で宮城長崎にも行なわれている方言。頸城でオハリ・ハリモンとも言う。佐渡・南魚沼郡にハシン、佐渡にスイハシン・スイモンがある。

22、ソァーソァー　[sɔ: sɔ:]

23、エッチョァーメァーナ　[ettʃɔ:mɛ:na]　形容動詞の連体形。一丁前なの変化。語尾はナである。南魚沼郡では語尾はノである。

24、ソンガン　[soŋgaN] か。また[soŋgana] [soŋgano]のようにもきこえる。終止形はソンガダ。それの連体形か連用形かよく分らない。そんな、そんなにの意。頸城地方にソンガナ，ソンゲナ、魚沼郡にソッゲダ，ソッゲニ，ソッゲノがあり、西蒲原郡にソンガがある。江戸時代語それがい（それ様）の変化であろう。コンガダ，ソンガダ、アンガダ、ドンガダと体系をなす形容動詞である。佐渡のそねえに，

そのうに・そのん（佐渡方言辞典）南魚沼郡湯沢町のソネァー等は「その様に」の変化であろう。

25、ノワンネァデモ　縫われないけれどもの変化。デモは逆接の接続助詞で中頸城・東頸城郡の特徴的。その影響である。昔話のせにもよくある老人語であり、ドモとも言い又ドモデモの中間音と思われる時もある。この場合も中間音的である。中越三条市付近ではロモと訛る。

26、形容動詞の連体形「普通の」の意。あとに「和服は縫われる」のような意味のことばが省略されている。

27、キセルクレァーワの次に「縫われるようになる」のような語が略されている。

28、ネは格助詞「に」の変化。

29、ソダラッドキ　ラ行音は変化しやすり消えやすりする傾向がある。時はよくドキと濁音化する。

30、[nɔ:te]。[naite]となることもある。明治生れには[ɔ]音便が多く、大正生れには[~ai:te]というア音便（促音）が多い。

31、コマルスケァ　[sukɛ]は[sukɛ:]とも。また[suke]のようにもとえる場合もある。

32、ハダコ　肌着ではなく、夏着るひとえ物を言う。用例　サブイノニハダコ　エケマエデ　エタ　寒いのにひとえ一枚で居た。

33、ネァケラ　なければの変化。次に「ならない」の意が略されている。ネァを終止形ケうを助詞と考えるがよい。

34、シマダスケァ　シはヒシの中間でシに近い。服だすかいの変化。スケァはスケァー・スケァーニ・スケァーデともなる。理由複団を表わす接続助詞で最も普通に用いられる。エニ・エネは明治生れの老人が用いる。スケァ類は近世上方方言サカイ・サカイニ・サカイデの変化である。語源は「境ひ」と言われる。佐渡郡にサカイ・サカヤ・サケ・スキャアスケ・スケン・サケニ・(シ)があり、上越地方にサカイ・サケ・シケシケー・スケ・スカエラがあり、中越地方にスケァ・スケァー・スカエスケァーニ・ッケンがあり、下越地方にスカエ・スカ・スカエデ・ス

カデニ・サカニ・サカデ・サガ・サデ(粟島)・カデがある。サカイ系の外に佐渡にシ、上越にソイ・ソイニ・サエ、中越にセー・ンダン・ンダンガ・ンナンガ、岩船にモンガ・ンガ・ニ・エニ、下越にサニ・ンダンがある。サカイはサカイデとともに岩手・盛岡まで、サカイニは青森までのびている。

35、ミンーナ　強調するため第二音節を長音化する傾向がある。ミを脱落してンーナと言うこともある。38参照

36、シテテはシテイテ・シテオイテの変化。

37、ホエテ　そうして　ソシテ＞ソイテ＞ソエテ＞ホエテ

38、ンーナ　みんなの変化、副詞全くの意。語頭のム・ミは変化したり脱落したりする。

39、キミ　きめ(肌)の変化。手のきめがの意。

40、ヨーサリ [jo:sari]　夜。昼に対する語。古語ゆうさりの変化。上越・中越地方で広く使われ、なお中越にはヨーサル(刈羽郡古志郡)ヨーサレ(中蒲原郡など)があり、上越にはヨーサ・バンゲ、佐渡にはヨーマ・ユーマがある。岩船でバンゲは夕食と晩・夜の両義がある。バンゲは夕方の意として中越・柏崎地方、今晩の意で東蒲原郡で用いられる。

41、[kiretʃimɔ:te] モは長音だが短い。

42、[arate]

43、[dʒidʒo:] [dʒɔ:]ではないように思われる。

44、何年位。結婚後何年間ぐらいかの意。

45、トデァー [tode:]　後出のドデァーヤスミの略語であろう。中世近世語の斗代に由来するか。(方言では西蒲原郡・青森秋田で小作料・小作米の意味で用いられている。)トデァーヤスミは農耕の休み(野休み洗濯休みとも言う)の一種で、お盆(現在は八月)と稲刈(秋野とも言う)の中間に、嫁が実家に帰り休養しつつ衣服の修理などする休みを言う，現在はすたれてしまった。内容は本文中に説明されている。

46、ツズクル　ぼろ(襤褸)を継ぐ。ぼろをボァータクとも言う，着古し

な衣服を修理するのである。

47、ノノノー [nonono:] 形式名詞＋格助詞＋断定助動詞 あとに「休みであった」などが省略されていよう。

48、コテ 10参照

49、カズイテ カ行五段活用連用イ音便形。背負って運ぶこと。カツグ カツイデの変化。北陸地方と新潟県の特殊形（「日本言語地図」参照）更にカズカスとも言う。

50、トシヨリ 老人で、話者の姑（義母）をさす。

51、トシヨリダッタスケァーとは、若くなく、話者が実家に帰り不在となると家事に困るほどの老齢であったということ。

52、ソノツトメ トデァーヤスミに実家へ帰ることをさしている。それを「勤め」と表現するのは、この風習で嫁が実家に帰り時には十日間以上もそこで生活することは、衣食に乏しく特に食を大切にした当時としては、婚家にそれだけプラスすることで、婚家の歓迎するところであり、従ってそれは婚家に対する嫁のひとつのつとめとなるという意識が生じていたからであろう。

53、マー [ma:] 馬の古音というより uma > mma > ma と変化したものであろう。県下ではンマが多く、日本言語地図作成の際の調査では中頸城郡南部にわずかに「マ」があった。他県では青森に集中し岩手までのびている。話者A男子はンマと言っている。

54、トッツァン [tottsaN] トトサンの変化。オトッツァンより品位は低いがツァツァ（隣りの町高柳町石黒方面から来た人は使うという）よりは高い。トッツァンテモンワの表現はトッツァンワを強めた表現であろう。

55、ヨーガタ ユ＞ヨは中越の特色。

56、スズシナッテ 涼しくなっての変化。形容詞は語尾を失ったりして活用が単純化したり、無活用化したりする。特にシク活用にはスズシューというウ音便形がなく、シクもなく、シ・シーの一形となる。

57、シトソエ ひとそいの変化。ソエはソー [so:] という動詞の連用形ソイ＞ソエから来た名詞。ソーはセオウの変化。セオウ＞セオー＞ソー ソーは中頸城・中頸城郡・魚沼郡から長野県につづき、岩手秋田に

もあり、ソウは中頸城・中魚沼郡にある。(日本言語地図)

58、アレンナッテ　あれにそってで終ってての意か。本文にxx印をつけそが、言いちがいとも言えるかもしれない。

59、トサエニャー〔tosaenja:〕とも〔tose:nja:〕とも。順接条件の接続助詞、時間的な継起関係を表わす。と、とするとに当たる。語源は「と際には」であろう。北陸から入って来た語であろう。今は老人語で、昔話にもよく使われる。中頸城郡に(タラ)サイナがあり、佐渡にトセーカ・トセニャー・トセーニャ、佐渡外海府にサイゴニャ(但し外海府方言集には「ならば」「であるか」と注され少し意味がずれるようである。)がある。全国的にみると岐阜三重滋賀山口にトサイガ、岐阜三重滋賀にトセーカ、京都にサイナ、石川静岡名古屋千葉にトサイニ、トサイニャ、タサイニャがある。(「日本国語大辞典」「トサイガ考」その他による。)

60、デヤノサカ　地名出合の坂

61、ツナギ　動詞ツナグの連用形から来た名詞。繋ぎ。列を成っての意。

62、ショー〔sjo:〕〔sju:〕の変化。シュフショは越後中通の特色。衆。人々。

63、エワッコ〔ewakko〕のようでもあり〔jowakko〕のようでもある。語源は「上っこ」か。ウは植えるを〔jwerw〕〔joerw〕と言うようにエ、ユ、ヨと変化する語句がある。魚沼方面にもある語句である。コは東北的接辞か。上荷・上積みの意で、正常な分量の荷物の上に更におまけの荷を上積みすること。

64、コンガニ　コンガイニの変化。形容動詞の連用形。終止形はコンガダ。こんなに。24参照。手振で大きい形を示しそのであろう。語源は「この様に」(ロドリゲス日本大文典)参考。頸城地方にコナナ(こんな)コンナン(こんなに)三重九州にコゲン、山陰九州にコギャン、東北にコガイナコガエニがある。魚沼方面ではコンゲニコッゲニである。佐渡にはコンゲニとコネーニとある。

65、ガン〔gaN〕準体助詞　物、の物、の。本来は格助詞であろう。ガが基本形、それに撥音が添加した。ガンは越後全般と佐渡郡の外海府地方にあるが、この外がが古志郡魚沼郡中頸城郡に、また東頸城

郡・中越・下越地方にアンが用いられる。錦綾でも中越の影響でアンも行なわれる。ガンダはのだ，ガンニはのにの意である。これに対して佐渡郡にはノンダ、西頸城・中頸城及び下越の岩船郡にナンダ、ナダという語がある。ガンは「越後のガン」と言われ著名であるが、愛媛県・北陸地方から福島県まで分布している。

66、リョァーマルケ　両束ねの意。荷物を二か所でしばること。東北地方富山関西にも分布するマルケル（束ねる）からきた名詞がマルケ。

67、コンダ　こんどはの意で、若い頃に比べて現在はの意。

68、トチクラ　地名栃倉

69、ソァーユー　そう言うで「そんな」の意、ユーは[jɯː]に近い。

70、ソァーエッタョァーノモン　話者はその名称を思い出せずこう言った。軽自動車のことであろうか。

71、オンナシコト　オナシコトの変化。オンナシは形容詞、オンナシダは形容動詞。中世語に「オナシ」があったからその残存か。大正七年生れの男子は「オンナジ」と言っている。上越地方（最も共通語化されているとされる）ではオナジ、オンナジと用い、魚沼郡中越から山形・福島県にかけてオナシ、オンナシ、オンナジが用いられている。

72、オモニスル　重荷をするの変化であろう。重い荷物を背負って歩くこと。

73．トーヤマ　遠い耕作地や山。語源は遠山。10トーノポッパー参照。

74、アキダケワネー　後に「（為が使われたから）よかった」の意が省略されたのであろう。

75、モモシキ　股引　農作業用の裾からでになく筒状のはきもの。パッチ。

76、ヘヤガリ　ヒルアガリの変化。ヒ>ヘは中越の山間部の特色。昼食をたべるために家に帰ること。

77、ノシテ　「のせる」の連用形　シセへ二段に活用する。刈草を背負っての意。

78、ゴロゼァン　屋号五郎左衛

79、ショー　[ʃoː]に近い。

80、ヘァー〔hɛ:〕ハヤ＞ハエ＞ヘァー　副詞　もう、すでに。長野県上田市ヘー。上越市ハエ。西蒲原郡と長野県諏訪ハイ。南魚沼郡は群馬県と同じくハーと言う。

81、ヨーサリ　４０参照

82、ラレッドキ「居られる時」の変化。尊敬のラレルは１６参照。

83、デスエネ　デスは共通語の丁寧の助動詞。エは活用語の終止形や助詞に接続し、時には下にネ・ヤ等の助詞を伴なって、軽い感動、丁寧親愛の情を表わす訴えの終助詞。ネは共通語的間投助詞。

84、ソレダケドツ　ソレは朝晩における他の人との時間的距離的な不利な条件を指すのであろう。ドツは割合程度を表わす副助詞ズツの変化。

85、アンネ　ガンニ＞ガンネ＞アンネと変化した語。接続助詞「のに」に当たる。アンは既出（64参照）のガンの変化、ネは逆接条件を示す接続助詞「ニ」の変化したもの。アンネは接続の特殊形である。アンネガンネは終助詞となることもある。ガニは北陸にも南伊予にもある。ガンニ類は東頚城、中頚城北部から中越・下越にかけて分布するのに対し、頚城地方と佐渡郡、山形県米沢にはノニ類（ノンニ、ナニ、ンニ、ンネ）があり、中魚沼郡西頚城郡にはヤンノ、ヤンネがある。

86、ドァー〔dɔ:〕「だよ」の変化か。体言や準体助詞ガ、ガン、ノに接続して活用はない。強く断言して相手に訴える終助詞。同輩目下に対して用いる。丁寧に言う時はエを加えドァーエと言う。その変化と考えられる終助詞ドは[do]である。中越・西頚城郡糸魚川西川原にあり、長野山梨県にもきかれる。

87、ノー　５参照

88、アエ　あれの変化であるかことば。

89、ナシタカナ　本来どうしたかなの意だが、ここでは「共通語訳」に近い意味。

91、モチロァー　調査地の小字餅粮

92、ミナワ　ニナワのようにきこえる。「鵜川方言集」にミナワとあ

る。物を荷なう時用いる特製の太いなわ。

93. テバ「と言えば」の変化。文語の已然形と同形で「言うと・言うので」の意か。

94. エ　88参照

95. ノァー　ここではのうは古い〔nɔ:〕訛えへ心が強いからか。

96. トーノ　遠いの語幹に格助詞「ノ」がついた。古い表現であろうか。遠方のの意である。

97. 「アルンダン」の末尾の「ン」。「モノガ」「モンガ」(5の注85参照)の変化か。モンガは形式名詞モンに格助詞が順接の接続助詞となった「ガ」がついてできた、理由・原因を表わす接続助詞であり、ここでは更に終助詞となったもの。アルンダンはあるのだからの意。石川県羽咋郡志雄町の「アルモンノ」(あるからの意、国立国語研究所録音資料1968年)が参考になる。「モンガ」は飯能及び頸城郡内にある。柴下の越後に古い「ンガ」という接続助詞はこの語の変化したものである。理由を表わす助詞としては「サカイ」系の語よりも古い形であろうか。

98. エカシタの「シ」は尊敬の助動詞シャルの連用形の変化したもの。前期江戸語において「エカシッタ」等の〜シッ〜の形が普通に用いられたというがそれと関係がある。飯能ではレルラレル(16参照)よりも新しく敬意も高いようである。魚沼方面でも用いられる。

99. エクサクルサ　サは時を表わす接尾語。行く時来る時、行きにも帰りにも、往復の意。ゆくさくさ見れども飽かぬ岩室の田中に立てる一つ松あなれ　古今

100. アエッ　四段動詞アエクの促音便形。歩きまわる、移動する意。古語ありく・あるくの変化。アイク(東頸城郡安塚町・静岡・長野・岐阜南知多)、アイグ(中越・岩船郡・柏崎市)、アク(頸城郡)(秋田)、アーク(信州鳥取)ヤーク(静岡)、アラク(富山)、アラグ(山形)

101. スケー　31参照

102. ナンギー　形容詞，肉体的に苦しいつらいさま，難儀を形容詞化したもの，形容動詞もある，

103、ソァーエンダ 「そう言うのだ」の変化で、「そうだ」と人のことばを肯定して言う時用いる常用句。

104、ヒッカケニ ヒはシに似た音。「引っ掛けに」であろう。ヒッカケとはホンカズキ（本格的かつぎ方）に対して軽い物を無雑作にかつぐことだという。たとえば刈草なら四束、稲ならば五束をかつぐのがホンカズキであるが、それを一束ぐらいをかつぐのがヒッカケであるという。「ニ」は荷でなくて、助詞であると思う。

105、ホドコ フトコロの変化 懐

106、ミッタクネァー 形容詞 みっともない。見たくないの変化か。中頸城から中越・東蒲原郡から県北まで分布する語だが、佐渡はミットモナイ、ミットムナイ、ミトメナイと言う。

107、ミタドコ 複合名詞 体裁・外形

108、オトコモリ 男守り。子守りは女性の分担だったから男守りを見苦しいと考える。

109、ラクンナ ラクナの言いあやまりか。

110、ムッムッ 副詞 力をこめて重い物を運ぶさま。根気よく物事をするさまにも言うという。県下では中頸城・西頸城郡で「根気よく仕事をするさま」下越で「事の勢いよくはかどるさま」頸城地方と佐渡郡で「だまって仕事に精出す」ことだという。

111、ニオド [niodo]ときこえる。諦音にただすと[ɲjo: hodo]だという。弱音化しh音が消えている。「にお穂」の変化。稲・薪・わら等をうず高く積んだあのにお（堆）積たくさんにの意。上越地方と佐渡地方でニオ、中頸城には他にニヨ・ニゴもあり、県下は一般にニュー・ニョァー・ニョーと言う。

112、エネ エニの変化。エニとも言う。理由原因根拠動機などを表わす接続助詞。明治生れの老人が用いる。語源は未詳であるが次の様な例から考えると、接続助詞「に」の前にわたりの音イ～エがはいったもののように考えられる。

くれてやるに、はよ取れ取れ。（「黒姫の昔話」）（柏崎市清水谷）

どうしても嫁にもらいたい，て言うに。向こうへ申しこんだ。（「黒

姫へ若読」）（柏崎市大字折居梓旋）

コネーウジャ　アンジゴンダ＝　ババー　帰って来ない中は心配するから、わたしは。（新潟県岩船郡朝日村高根　NHK全国方言資料第二巻）

高いにまっと負けてもらいそい。（静岡県富士郡「日本国語大辞典」）

いかは色が変るといけないに簀の上によく並べて置けよ。（伊豆大島「日本国語大辞典」）

俺は此処に居るに。（愛知県南設楽郡「日本国語大辞典」）

おじさんも来てるだに　（長野県上田「日本国語大辞典」）

同じ理由原因を表わす接続助詞「モンガ」「スケァ」との異同についてはまだよく分らない。スケァが最も新しいもの　のように思われるがエニとモンガの新古については何とも言えない。

113、サ　間投助詞。サーと長めに言う時もある。確認の気持をこめて話しかける時の語。さかんに用いるが親しい間柄の者に使い、目上などにもう少し丁寧に話す時は共通語的助詞ネをつけサネと言う。サは共通語的といえないだろうか。

114、テーソァー [teːsɔː] 有様・様子・姿等の意か。語源不明。話者は「体相」ではないかと言った。老人語である。大正七年生れの男子はこの語を知っている。用例を記す。

アーノ　テーソァダ　ダメダコテァー。（あんな有様では駄目だよ。）

オラドコノ　テーソァー　ミテクダサイ。（私の家の様子を見て下さい。（ひどいでしょう。））（とりちらしている時人の訪問を受けた場合など）

アコンチワ　ウチジューノ　モンガ　テンデンノ　コト　ユーテ　ウチナカガ　ワリースケァ、アレガ　ホンノ　ジゴクノ　テーソァーダコテァー。（あそこの家は家中の者が勝手なことを言って内仲が悪いから、あれが本当の地獄の有様というものだよ。）

本文は「よい場合」の例だが、ここに引いた用例はみな「悪い場合」に限られている。

115 ノァー　広い[ɔː]のようである。普通[noː]が多いのだが強く訴える時は広くなるようである。

116 ノァー [nɔː]

117. カズキアゲネァケラと言うのが正常の表現だと思う。ここでは断定のダが介入している。～ダケラ（～のなら，であるなら）という言い方もあるから、間違いとはいえないまでと稀な言い方と思う。

118. ダンガノー　ダモンガノーの変化。ダは断定、モンガは理由の助詞（97参照）ノーは訴えの問投助詞。

119. タアガリ　田植え終了後の時期。田上がり。

120. ドヨ［dojo］せまい○、夏の土用

121. ノグサカリ　本文中に説明がでてくる。黒姫山麓のアカエロ（赤平）、ツキノコビロァー、ミナワ等の名のつく採草地で野草刈りをする。

122. クロエメ　はじめ意味がわからなかった。クレメのようにもきこえた。クロ⌒エメの前の部分にアノという語があるようである。録音と文字化後の調査で分かった点があるので、この部分の本文を次のように訂正する。

ノグサカリテノガ　アノ　クロ⌒エメノ　フモトデ　ハジマルンデ
スエネ。　あの　黒姫山の　麓で

クロヒメフクロイメフクロ⌒エメフクレメ　と変化したのであろう。この方言ではh音を落とす性質がある。黒姫山は集落の東南東にある889.5mの山で高柳町と鵜川地区をへだてている。

123. ヒリョァー　料金を支払ってたのむ人夫、またその賃金、その慣習。転じて子供に与える間食の菓子など、駄賃。用例　ヒリョァータノミエッテキタ（人夫を頼みに行って来た）ヒリョァーセンターカー　ナッチモァーテコマル（人夫賃が高くなってしまって困る）コドモニヒリョァーカク（子供にお駄賃を与える）ヒリョァートリ（日傭人夫）

ヒリョァーは中越魚沼地方群馬芒野に広く分布する語。但し中越の三島郡ではヒロァー芒岡では日傭人夫をヒョットリという。全国的にはヒヨーという語が広い。

124. ンマネフマセル　馬にふませるというのはうまやに草を投げ入れ食べさせふませて厩肥にすること。

125. シタゴエ　下肥の意で基肥のことであろう。

126. ドーヌケ［do:nuke］植物名　みやまあぶらすすき　ドーは節のこ

とで、節の所がぬけて折れやすいことからの命名といわれている。宮北向では〔do:pike〕、三島郡出雲崎町でドニケという という。南魚沼郡六日町ではドーヌケは別の植物かりやすをさすという。

127、グワシャグワシャ　副詞水分の多いさま。

128、ムラダケ　植物名　唇形科のひきおこし。本文にその説明がでて来る。南魚沼郡六日町でもムラダケ、糸魚川市ではオガラムラダケという。ムラダケとは群がり生える性質からきた名という。

129　ツガヤ〔tsɯgaja〕　接続助詞、時間的な継起関係を表わす順接条件を示す。〜と。〜すると。話者は「トサエニャー」（注59参照）と同じだと説明している。極めて古い表現らしく、今のところ昔話の中にも出ていないし、大正生まれの老人も知らない語である。語源も未詳であるが、ツは「と」「という」「て」等の変化した助詞であろうか。「ガヤ」については上代東国語「がへ」（連語「…する上に」「…する一方で」）が思いあわされるが、一応「ガ」は「トコテンガ」（すると）「モンガ」（から）(5の85、1の97参照）等の「ガ」と同じく格助詞から来た接続助詞、「ヤ」は間投助詞と考えておこう。結局「ツガヤ」は「と」，「…となると」「というと」「やいなや」の如き意であろうか。

130、ニゴァーナル　苦くなるのウ音便　ひきおこしに含まれている成分のプレクトラチンはにがく健胃剤であるという。小野蘭山はひきおこしに一種の臭気があることを言ったという。

131、ドァーエ〔dɔ:e〕　ですよ。強い断定を同輩や目上などに丁寧に訴える表現。「ドァー」は注86に説明した強い訴えの助詞，それに注83の丁寧親愛の訴えの助詞「エ」を合した連語。

132、エンメーソァー　ひきおこの別名。延命草。話者は漢法薬に明るく薬草を採取し製剤している。

133、ソラサキ　m→N　語頭にンがくるのは柏崎市外刈羽郡の老人のことばによくみること。例むしろ→んしろ。むらさきはノガリヤスの仲間で、昔草木染めの染料にしたということである。

134、ガエニ　形容動詞の連用形。強く、丈夫にの意。ガエはガイの変化であろう。ガイは我意又は異(け)・怪(け)・実(げ)を語源とする説があ

る古語であり、方言としても関東・北陸・近畿・その他西の地方に分布している。上越地方で体や物が丈夫で強い、魚沼中越以北で物事が大きい強い多い烈しい手荒い無理だ等の意味で使われ、山形福島県につながることばである。

135. ニガイクスリ　にがい化学成分。前述のプレクトラチンをさす。

136. カマニ「鎌で」でなく「鎌に」と言ったのは、鎌の方を動かさず固定して、きゅうりを動かして鎌の刃に当ててきりきざむからであろう。

137. コァーコァー　こゝに小さい身振があったのであろう。次にあるきゅうりを「ケソグ」動作をしたのであろう。

138 ケソグ　五段活用動詞　ケは接頭語。滋賀県に「コソグ」がある。中越地方に「コーゲル・コゲル」という語がある。ケ又はコは毛・木か。　ソグは古語ソク（刃物などでななめにけずりおとす意）の変化か。佐渡郡西蒲原郡上越地方ではヘズル、ハツルという。

139. スケァデ　サカイデの変化。スケァーデとも云うであろう。老人語。近世上方では「さかい・さかいに」よりも「さかいで」が多く用いられたという。スケァーデが南魚沼郡湯沢町に、スカデニが越後北部にスカイデ・スカデが西頸城糸魚川西川原にある。この類は岩国米沢富山県京都・徳島にもある。

140. ヒガシ　屋号　東

141. オッカサン　こゝの所不明瞭で分らなかったが、話者にたしかめて文字化した。オッカサンは主婦をいう品位あることば。

142. エキノキレルドキ　死期・臨終を言う。「息の切れる時」の変化。

143. アカエロァー　地名赤平アカヒラの変化。黒姫山の麓にあり既述のように夏期草刈りをする場所、冷たい水がわいている。

144. エヤシリ　話者にただして「冷汁」の変化だと分った。hi > i > e　u > i 。冷汁は煮汁に対することば、冷水に味噌を入れきゅうり等を入れた汁。夏の野外の作業の時ワッパ（曲げ物の弁当）に清水を入れて作った。古典の冷汁（ヒヤジル）は冷たく冷やした汁であるが話者のは火を通さない汁である。長崎鹿児島愛媛青森のヒヤシルも同様の味噌汁らしい。　ヒヤシル 岩船郡山北町。

145、エワシッタ　９８参照

146、メスル　目する。目にあうともいい、体験すること。

147、スズバ　スズミバ（涼み場）の変化か。上に木が生いかぶさり、ややすずしい所、遠い耕地や山地に労働に行った時、休んだり食事をしたりするに適する場所。簡単な小屋を作りそれをスズバと言うこともあったらしい。本文を すず場に（スズバニ） 坐って（ネマッテ） と訂正する。

148、オトッツァン　一家の主人。ここでは謙吉を指す。

149、ナマミズ　生水。山のデッポ（涌水がちょろちょろと流れ出たり、あるいはモロモロと湧き出たりするところ、出壺か）の生水。

150、ヒャッコエ [çjakkoe] ひやこいの変化。形容詞つめたい。県下には外にハッコイ（南魚沼郡・上越地方）シャッコエ（中越など）もある。

151、チベテァー [tʃibetɛː] 形容詞つめたいの変化。頸城郡地方にチベタイ、チビタイ、チブタイ、ツベタイ、中越にチベタイ、チベテァー、ツベタエ、佐渡にチベテーがある。

152、カンモァース [kammɔːsɯ] 五段動詞。攪拌する、かきまぜる。
カンモァースは県下に広く外にカリモス（頸城地方）カマス、カンマス（東蒲原郡）カクムス（佐渡郡）がある。東北地方関東地方長野県ではカンマスが有力である。語源は頸城地方でカエモース山形県でカンマワスと言うことから「かきまわす」であろうと思われる。

153、ワッパ　俚言ではない。輪っぱ。曲木製の食器、ここでは飯を入れる弁当用の器具。南魚沼郡ではメンパと言っている。

2. 冬の仕事

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
A	高橋 清治	男	明治35年
B	高橋チユノ	女	明治34年
C	高橋ミサノ	女	明治39年
D(司会)	釧探集一朗	男	明治45年

C オメァサン ソーネ スミ ヤクニモ ジョァーズデ エサシッタシ。(1)
あなたは ほんとに 炭を 焼くにも 上手で いらっしゃったし。

B ソァー ソァー。 ソッデ マタ スミヤキー スル アー エカゲンネ(2)
そう そう それで また 炭焼きを する、 ああ いいかげんに

オモーオド(3) ヤクカ ヤカンネ コンダ マタ エネカリダ。
思うほど 焼くか 焼かないに こんどは また 稲刈だ。

A ダスケァーソァー。(4) (B笑) アノ スミヤキテノモ アッデスエネ
だからさあ。 あの 炭焼きというのも あれですよ。

ジブンデモッテ マー ムシガ スカンケラ マー ヤランネァー
自分で まあ 虫が 好かなければ、 まあ やられない

ショァーバエダガネ。 (B ソァーダネ。(笑) そうだね。) シトガ カネ クレッカラ
職業だがね。 人が 金を やるから

ヤレナンタッテ マー ヤランネァー ショァーバエデスエネ。 (B ソァーダ そうだ
やれなどと言ったって まあ やられない 職業ですよ。

ソァーダ。) ハー マー スミノ エーノガ デキタ デタ ドキニャ
そうだ。) はい、 まあ 炭の いいのが できた 出た 時には

キモチ　ヨーテ。
気持が　よくて。

B　ソレガ　タノシミデネー。
それが　楽しみでねえ。

A　ハー。
はい。

C　ソァーカネー。
そうかねえ。

B　ソァーデスコテー。　エヤ　オンネ(5)　アノ　スミヤキ　シテ　マタ
そうですよ。　いや　ほんとに　あの　炭焼きを　して、　また
ヤスム　ヒマモ　ネァー(6)　コンダ　マタ　エネカリ　シテ　サー
休む　暇も　なく　こんどは　また　稲刈りを　して、　さあ
サカヤエ　エク(7)　シガ　キマッタテ　ヨー(8)　ホァーラ　アレア
酒屋へ　行く　ほが　決まったと　なると、　そうら　あれは
オヤサンケ　ナラン　コレア　オヤサンケ　ナランテテ(笑)ナカナカ
済まさなければ　ならない　これは　済まさなければ　ならないといって、　なかなか
(A ダスケァソァー。 そだからさあ。)　ハー　ヨァーエジャー　ナカッタコテー　オマエサンワ。
はい　容易では　なかったよ　あなたは。
オラ　ドコデモ(9)　アッダッタドモ(10)　マー　デカセキダケア
私の　主人も　あれであったけれども　まあ　出稼ぎだけは
シネァカッタスケァネ　アッデストドモ(11)　リッデモ　シネァケラ　シネァヨァーネ(12)
しなかったから　あれですけれども、それでも　しなければ　しないように
オメァサン　シゴト　カラメテルスケネ(13)。(A ソァーソァー。 そうそう。)　アー　ヤー
あなた　仕事を　持っているからね。　ああ　やあ
エチバン　アレナノワ　アッデスコテネ　ハー　フユガコエワ　シネァケ
いちばん　あれなのは　あれですよ、　ああ　冬囲いは　しなければ

ナラント　ユー　アー　ヘァー　ヨーガタ　ヘァー　カマデモ　クワデモ
ならないと　いう、　ああ　もう　夕方　　そう　鎌でも　鉈でも

ソトニャー　オカンネァド(14)　ホラ　バンネ　エキャー　フルヤラ
外には　置かれないぞ、　ほら　晩に　雪は　降るやら

ワカランドナンテテ　サワギタッテ　アエシテ(15)　キタンダガ……。
分からないぞなどといって　大騒ぎして　あれして　来たのだが……。

C　エマー　キカエガ　ヤルスケァテヨァーナ　モンダドモ　ソッデモ　ナカナカ
今は　機械が　するからといったような　そのだけれども、それでも　なかなか

エソガシテネー(16)。
忙しくてねえ。

B　エヤ　キカエモ　キカエネ　オワレンガンモネー　（A　ソァーソァー。そうそう。）
いや、機械も、機械に　追われるのもねえ

エソガシースケァー　（A　ハー。はい。）　アー。　エヤ　ホンネ　ムカシワ
忙しいから、　ああ。　いや　ほんとに　昔は

センバデ(17)　コエテ　アー　ジッソクモ(18)　コケバ　オーヨナベデ　（A
千把で　扱いて　ああ　十束も　扱けば　大夜なべで

ソァーダネ。）　アッタンダン(19)。　エーマー　オマエサン　キカエデ
そうだね。　あったのだから。　今は　あなた　機械で

ナンビャクモ　ココァーテガンダスケァー(20)　ナカナカ……。
何百（束）も　扱こうというのだから　なかなか……。

C　オラガ　ワーケァー　ドキ　センバデ　コエタ　モンデステ。
私どもの　若い　時な　千把で　扱いた　もんですよ。

B　アー　オラモ　コエタエネ　アー。
ああ　私どもも　扱きましたよ　ああ。

C　ホエテ　ソレカラ　アシフミダナンテテ(21)　アシデ　ドンドンドンドン……。
そして　それから　足踏みだなどといって　足で　どんどんどんどん……。

A　ソァーダネ　ドンドンドンドント　オマエ　(Cアー　ああ)　コエテ　オマエ。
そうそうね、　どんどんどんどんと　あんそ　扱いて　あんそ。

アレガ　マタ　ボッツァラガ(22)テノガ　デテ　オマエ　(笑)　(B笑オラ　オムの)
あれが　また　ぼっつあらというのが　出て　あんそ

アトシマツガ　ヨァーエジャ　ネァーテネ。
後始末が　容易では　無くてね。

B　ヨァーエジャ　ネァー。　オラ　ウチンノワ　コクノワ　シトバンネ
容易では　ない。　わたしの家ののは　扱くのは　一晩に

ニヤクグレァー(23)　コクドモ　(Aアー。ああ。)　コンダ　ボッツァラガ(24)　デルスケァ
二百(束)くらい　扱くけれども、　　ンんどは　ぼっつあらが出るから、

マエーンケ　マエンケ　ボッツァラガケガ　フタバングレァー　カカルンダ。
毎日　毎日　ぼっつあら揚きが　二晩くらい　かかるのそ。

A　ソァー。
そう。

B　アー　ヤ　ナカナカ　アッダノァー。
ああ　いや　なかなか　あれそねえ。

C　ワーケァー　ドキノ　アノ　ボッツァラオトシガ　ヤーデー。
若い　時の　あの　ぼっつあら落としが　いやで……。

B　イヤ　ホンーネ…。
いや　ほんとうに…。

A　ネムイテガンネ　オマエ…。
眠いというのに　あんそ…。

B　アン。
うん

C　ホンーネ　アンガン　コト　オモーナラ(25)　エマ　ヘァー　ミガ
ほんとうに　あんな　ことを　思おうなら　今は　もう　身が

ブルブル　シルヨァーダコテー。
ぶるぶると　するようだよ。

3　ソァーソァー。　ホァーテ　アッデスコテー　ソレマデ　オマエサン　アレー
そうそう。　そうして　あれですよ、　それまで　あなた　あれ

トクベァーノ(26)　ショーガ　ハジメテネー　（A ソァー。）　アレオ　キカエオ
徳兵衛の　衆が　始めてねえ　（そう。）　あれを　機械を

モッテ　キテ　シラッタノダガ　アレ　メァーワ　オメァサン　エー(27)　シテ
持って　来て　されたのだが、　あれ　以前は　あなた　結いを　して

モァーテ28　（A ソァーダネー。）　ジューサン(29)ビョーグレァーズツ　シクガンダガ
もらって　（そうだねえ。）　十三俵くらいずつ　碾くのだが、

オラ　サンシローノ(30)　コナエダ　シナッタ　オジジト　エー　シテ
私どもは　三四朗の　この間　死なれた　おじいさんと　結いを　して

モロァータラ　ヘァー　ジッピョーグレァー　シクトセァーニャー　アノ　タテ(31)
もらったら、　もう　十俵くらい　碾くと　あの　「たて」を

ミー　チョコチョコッ　チョコチョコット　エカレルンダ。〰〰〰〰〰〰〰〰。
見に　ちょこちょこ　ちょこちょこと　行かれるのだ。

（A アー。）　ホァーシテ　ヤスミニ　ナルト　オマエサン　サツマエモー
（ああ。）　そうして　休みに　なると　あなた　さつま芋を

デッケァー　ナベデ　エゼテテ(32)　ソレ　マー　ヒトハラ　クテ　ソレカラ
大きい　鍋で　ゆでておいて　それを　まあ　一腹　食って、それから

マタ　ソノ　ウスシキガ　オエルト　コーンダ　ゴハン　タエテ
また　その　臼碾きが　終ると　こんどは　ご飯を　炊いて

ダエコゼァー　シトナベ　ニテ　ソッデ　マタ　ソレ　ミンナ
大根菜を　ひと鍋　煮て　それで　また　それを　みんな

タベタンダスケァネー。　（A マー　ソァーダネ。）　ダスケァ　ムカシワ
食べたのだからねえ。　（まあ　そうだね。）　だから　昔は

コッデ　アッダコテー　マー　シゴトモ　シタシ　チカラシゴトデ
これで　あれですよ　まあ　仕事も　したし、力仕事で

アッタスケァー　アッデスコテネ　タベタコテー。
あったから　あれですよ　食べたそんそよ。

C　マー　エマ　ケァーモケナンタッテ　ホンノ　シトツカ　シトツハン
まあ　今は　おはぎなどといったところで　ほんの　ひとつか　ふたつ半

グレァー　タベレバ　チーセァーノ　タベルガ(33)　ムカシャ　マー　ナナツヤ
くらい　食べれば　小さいのを　食べるが、昔は　まあ　七つや

ヤッツ　アッダノー　タベタノー。
八つ　あれそねえ　食べたねえ。

B　マー　エネカリガ　オエタテテ　ケァーモケ　セーヤ　ソレ　マッテテ
まあ　稲刈りが　終ったといって　おはぎを　すれば　それを　待っていて

タベタ　モンダシ　（A　ソァー。そう。）　コロバシャゲダテテ　（A　ンー。うん。）
食べた　ものだし、　搗き上げだといって

エネ　コキャゲレバ　シテ　ソレ　マタ　タベタ　モンダシサ。
稲を　扱き上げると　して　それを　また　食べた　ものだしね。

C　ホァーテ　カリャゲノ　ケァーモケダナンテ　モッテ　アノ　ヤマエモホリー
そうして　刈り上げの　おはぎなどといって　持って　あの　山芋掘りに

エクナンテッテノー。
行くなどといってねえ…。

B　（笑）　ホンーネ…。
ほんとうに…。

A　（笑）

B　ダスケァ　ヒャクショァーワ　ナカナカ　ツギー　ツギートヘァ　オエタ
だから　百姓は　なかなか　次　次と　そう　終った

シータ(34) ネァー マンーデ ユキノ フルマジャー ツギー ツギート
引いたが 無く、 まるで 雪の 降るまでは 次 次と

ヤマーモマデ(35) ホランケ ナランスケァ (笑) (A ソァーダネー。(36) そうだねえ。)
山芋まで 掘らなければ そらないから、

ヨァーエナ モンジャ ネァー。 (笑)
容易な ものでは ない。

C ホァーテ エマ マー キカエダドモ ムカシワ コメツキダナンテ
そうして 今は まあ 機械だけれども 昔は 米搗きなどといって

クルマヤエ(37) ヨーサリ(38) エチジカンネ エッピョーズツ ツクアンダ(39)ナンテ
車屋 夜 一時間に 一俵ずつ 搗くのなどと、

ネネァーデテ エチジカン タット クルマヤマデ ソノ コメ アゲ(40)
寝ないでいて 一時間 そっと 車屋へ その米を 揚げに

エッタナンカ シタリネー。
行ったりなど したりねえ。

B ソァーダソァーダ。 オラ アッデスエネ アノ アレー ハンダワラ
そうだ そうだ。 私は あれですよ、 あの あれを 半俵。

エッピョー カズカンネァスケ ハンダワラズツ カズイテ (A ソァー。 そう。)
一俵 かつがれないから 半俵ずつ かついで、

ホァエテ アノ アエッタ モンダガ アッダコテン(41) ダスケネ
そして あの 歩いた ものだが、 あれだよね、だから

クルマヤバンガ(42) クットセァニャー マー ヨル シトバンジュー ツカーテ。
車屋 者が 来ると まあ 夜 一晩中 使って…。

(A ソァーネー。 そうねえ。) ハー。 はい。

A ホァーシテ エマミテァー ハクヒモノガ(43) エケヤ エードモ アノ
そうして 今みたいに 痩せ牛が よければ いいけれども あの

ジブンワ　オメァー　ワラジ　ハエテ　（B（笑）ワラジ　ハエテ。）
時分は　あんそ　わらじを　履いて　（わらじを　履いて。）

シメジテテ(44)　オメァー。（B（笑）サー。）　ソァーシテ　アシガ　チベトァーテ
濡って　あんそ　（さあ。）　そうして　足が　冷そくて

チベトァーテ　マ　コマッタッケナ。(45)
冷そくて　まあ　困っそっけね。

B　ヤー　カゼガ　フイテ　マーンデ　アノ　キノアガ(46)　ツケァーテ　コ×
やあ、風が　吹いて　ひどく　あの　木の葉が　つかえて

コネァーデナンテテ　ユー　ドキヤ　シモガ(47)レデソァー　（A　ソァー。）
（水が）来ないてなどと　いう　時は、霜枯れ時でね、　（そう。）

ホァーテ　エマ　サッキナモ　エワッシャル(48)ヨーネ　オレ　ミソテガ(49)
そうして　今　さっきそ　おっしゃるように　ほら　みそれが

フルンダン(50)（A　アー。）　アー　クルマヤノ×　マウケニ(51)　ソァーラ
降るから、（ああ。）　ああ　車屋の　回るうちに　そうら

ツカン　ナンワテテ(52)　エクバンモ　オメァサン　ヨトギ(53)　シタコテー。
搗かねは"ならないわといって　幾晩も　あんそ　徹夜　しそよ。

A　マー　ソァーネー。
まあ　そうそ"ねえ。

B　ハーハー。エヤー　ホンネ　ナカナカ　ムカシノ　ハナシ　ショァーナラ
はいはい。いやあ　ほんとに　なかなか　昔の　話を　しようなら

エマー　マンデ…(54)。　デモ　マー　アッデスコテ　ムカシンヨァーダロァーナラ(55)
今は　まるで…。　でも　まあ　あれですよ、昔のようであろうなら

トショリモ　コンガ"ン(56)　コト　シテランネァー　デテ　チリグレァー
年寄りも　こんな　ことを　していられなく　出て　塵くらい

ヘロワンケ　ナンガ。（A　ソァーダネ。）　ッダドモ　マー　エマ
拾わなければ"ならないが…。（そうそ"ね。）　だけれども　まあ　今は

ニワノ　アイテ　カンソーキノ(57)　バン　シルグレーナ　モンデ
作業の　相手は　乾燥器の　番を　するくらいの　もので

（Aソー。そう。）ニワノ　アイテニヤ(58)　ナランスケー　エードモ。
作業の　相手には　ならないから　いいけれども。

C　ソッデモ　エソガシーワ。（笑）
それでも　忙しいわ。

B　（笑）エソガシー。（笑）ホンネ　エソガシー。
忙しい。　ほんとうに　忙しい。

C　（笑）　ホン…　ナニ(59)　ノーカエ　キカエニ　シルエネ(60)
×　×
なんと、　かえって　機械に　するから

エソガシーヨーナ　キガ　シラー。
忙しいような　気が　するよ。

B　ソーダネー。（Cアー。ああ。）キカエネ　ツカワレルスケー。　ヤー
そうだねえ。　機械に　使われるから。　やあ、

アコノ　ウチデ　エッケン　オエタナンテ(61)　エーバ　ヘー　マルデ
あそこの　家で　一軒　終ったなどと　言えば　もう　まるで

キチゲーサワギダモン(62)。
気違い騒ぎだから。

A　ソーアネー。
そうだねえ。

B　ハー。
はい。

A　ヤー　アノ　コメツキナンテ　ユーテト　エッペー　カツイデ
やあ、あの　米搗きなどと　ゆうと　いっぱい　かついで

エカンネー　ヤツガ(63)　ハンダワラグレー　カツガシテ(64)　ソーシテ
行けない　奴が　半俵くらい　かつがせて　そうして

ヤラレルガンガ　エッチャン(65)　セッナカッタガ(66)　アー。
遣られるのが　いちばん　切なかったが　ああ。

B　ソーレ　オメァサン　ウチエ　モッテ　キテ　ソレ　コンダ　センゴクネ(67)
それを　あんた　家へ　持って　来て　それを　こんどは　千石通しに

カケテ　(A ソァーダネー。)　トァーミデ(68)　アオッテ　(A ソァー。)　ソァーシテ
かけて、(そうだねえ。)　唐箕で　あおって、(そう。)　そうして

タワラエ　ツメル。
俵に　詰める。

A　ハー。
はい。

C　ソッデモ　マダ　チットワ　エーコテ。　ソノ　ムカシワ　アノ
それでも　まだ　少しは　いいさ。　その　昔は　あの

ウスデモッテ　サンニンデモ　ゴニンモ　トァントァン　ツイタモンダテガ
臼で　三人でも　五人も　とんとんと　搗いたものだというが、

(B アー　ああ。)　ザマナ(69)　モンワ　オゴトダコテー(70)。
体力のない　者は　大変ださ。

B　ソァーソァー。　ソノ　コロダロァー　アノ　フミガラテノモ(71)　アッタガンナ
そうそう。　その　ころだろう。　あの　踏み唐というのも　あったのは、

(A ソァーネー。　そうだねえ。)　ストァンストァントネー。
すとんすとんとねえ。

A　ジガラテダカネ(72)　ハー。
地唐と言うのかね、はい。

B　ジガラテガンダカ　エガラテガンダカ(73)　シランドモ…。　エヤ
地唐と言うのか　えがらと言うのか　知らないけれども…。　いや

ナカナカ　アッダコテネ　ホンネ　サー〜〜〜〜〜〜〜〜(74)ンー。
なかなか　あれですよ　ほんとに　〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜。

A　エマ　ソレ　オマエ　ネテテテ×　オマエ　（笑）（B笑）　テレビ
今は　それを　あんた　寝ていて　あんた　テレビを

ミテテテ×　コメツキ　シテラレルガンダ。　エーガンダドモ
みていて　米搗きを　していられるのだ。　いいのだけれども

ソレデモ　ラクダト　オモワンガンダスケ　（Bハーイ。）ニンゲンワ(75)
それでも　楽だと　思わないのだから．　（はい。）人間は…

……。（笑）
……。

B　（笑）ハー　ヒヤヒヤヒヤヒヤト　カゼガ　サムー　ナッテ　キタ
「ああ　ひやひやひやひやと　風が　寒く　なって　来た

ハー　バンニャー　エキダロー(76)ナンテッテ　オメァサン　コアナレガ(77)
ああ　晩には　雪だぞ」などと言って、　あなた　小あられが

サラサラサラサラト　トブルガンネ(78)　クルマヤガヨエ(79)　シタモンダー。
さらさらさらさらと　降るのに　車屋通いを　したものだ。

ホーエテ　コンダ　ホレ　フユウチノ　アレオ(80)　シナケ　ナンスケネ
そうして　こんどは　ほれ　冬中の　あれを　しなければならないから、

ハキモンオ(81)　コシャワンケ(82)　ナンスケ　（Aソァー。）サー　ワラスグリ(83)
履物を　こしらえなければ　ならないから、　（そう。）さあ　藁選りを

マガ　アレバ　シテテ　コンダ　ワラハダキダ(84)。　（Aソァーネ。）
間が　あれば　しておいて、こんどは　藁叩きだ。　（そうだね。）

ウスシキ　ワラハダキ。　（Aソァー。）ハー。　ワラハダキモ
臼碾き　藁叩き。　（そう。）はい。　藁叩きも

エッチューヤ　マー　バン(85)　シネケラ　マネアワンカッタシ　ウスシキモ
一昼夜　まあ　番を　しなければ　間に合わなかったし、　臼碾きも

エッチューヤ　シネケラ　アトノ　コザコザガ(86)　アルスケ
一昼夜　しなければ　後の　小ざ小ざが　あるから

マネアワンカッタシ　ネズネ　オメァサン　アレシッタガンダ。(87)
間に合わなかったし、　寝ずに　あんた　あれしていたのだ。

C　スッデモ(88)　ウチニ　エル　ショワ　マダ　エーガンダガ　ゴロスケノ(89)
それでも　家に　いる　衆は　まだ　いいのだが、　五朝助の

オジーサンダチワ　ソレ　オヤシテ(90)　コンダ　サカヤエ　エコァート
おじいさん達は　それを　済まして　こんどは　酒屋へ　行こうと

モーンダガ　（B　ウン。）　ウチノ　ショーニ　ミンーナ　シテ
思うのだが、　（うん。）　家の　衆に　みんな　して.

カコエマデ(91)　シテ　サカヤエ　エコァーテガンダガ　（Bダスケー。）
雪囲いまで　して　酒屋へ　行こうというのだが、　（だから。）

オシマエニ(92)　ムカシン　ショワ　ワラーテ　マエンチ　クー　アノ
「結局」、（昔の　衆は　笑って）、「毎日　食う　あの

ヤクモチマデ(93)　コネテ(94)　エカンケ　ナラン　〰〰(95)　（A B（笑））
焼餅まで　こねて　行かなければ　ならない　〰〰」

ナンテ　ハナシガ　アルガンネ　（B　イヤー　ホンネ）
などといった話が　あるのに、　（いやあ　ほんとに）

オジーサンダチノ　サカヤン　ドキャー　ホンネ　（B　ナカナカ）
おじいさん達の　酒屋の　時は　ほんとに　（なかなか…。）

ソンゲァノ(96)　モンダッタコテー。
そんな　ものだったさ。

B　ソレガ　マタ　ミンナ　テシゴトダスケァー　（C アー。）（Aダスケァー。）
それが　また　みんな　手仕事だから　（ああ。）（だから。）

ヨーエジャ　ナカッタコテー。　エヤー　ホンネ　オラ　エンデジャー(97)
容易では　なかったさ。　いや　ほんとに　私の　主人は

マー　サカヤニ　デランネァカッタドモ(98)　ヤッパリ　マタ　ホカノ
まあ　酒屋に　出られなかったけれども、　やっぱり　また　外の

(99)
ダチントリ　シタリ　シテラッタモンダスケァネ　オーカタ　オメァサン
駄賃取りを　したり　していられたものだから　大方　あんた

(100)　(101)　(102)
ウチシゴトワ　シトリデ　シタガ　アウノアタマエ　キミガ
内仕事は　ひとりで　したが　その上に　きめが

ワリーガンデ　エビノ　アタマアタマネ　ガニノメミテァーネ　ナッテ
悪いので　指の　頭頭に　蟹の目みたいに　なって

(103)
アカギリガ　キレテ（A　リァーネー。）ソーレ　コンド　エドノ
皹が　切れて、（そうだねえ。）それを　こんど　井戸の

ツルベ　アゲルネ　カネノ　クサリダにァーネ（A　ソァー。）
つるべを　上げるに　金の　鎖だろうね、（そう。）

ガラグヴラグヴラット　ジャボァーント　オチタタッテ　コンダ　コァー　アゲル
がらがらがらっと　じゃぼんと　落ちても　こんどは　こうして　上げる

ドキガ　オメァサン　コレガ　ヒリヒリト　〜〜〜　ノー。ホンネ
時が　あんた　これが　ひりひりと　〜〜〜　ねえ。ほんとに

エマデモ…。（A　ピリピリト　エビガ　サケルヨァーダスケァネー。）
今でも…。（ぴりぴりと　指が　裂けるようだからねえ。）

(104)
アン。エマデモ　オモートサエニャー　ミガ　サワサワト
うん。今でも　思うと　身が　ざわざわと

シルヨァーダ。
するようだ。

(105)　(106)
C　オマエサンタノ　ウチノ　エドガ　フケァアンデネー。
あなたの　家の　井戸が　深いのでねえ。

(107)
A　ダスケァ　オラにコノ（笑）エドガ　フケァアンデ　アッダエネ…。
だから　私の所の　井戸が　深いので　あれですよ…。

（笑）

C　エヤー……。
　　いやも……。

B　オラ　ウチノ　エドワ　ソァー　フコァー　ネァカッタ。（A アー。／ ああ。）
　　私の　家の　井戸は　そんなに深く　なかった。

　　アー　～～～　エマ　ンーナ　～～～ト　オモーナラ　アッダコテ
　　ああ　～～～　今　みんな　～～～と　思おうなら　あれだよ、

　　エマノ　ショワ　ホンネナンカ　シマセンコテー。
　　今の　最は　本当になど　しませんよ。

A　マー　ソァーアネー（B ンー。／ うん。）スイッチ　エッレバ　グーット　アゲテ
　　まあ　そうだねえ。　スウィッチを　入れれば　ぐうっと（Gは）上げて

　　クレルスケァー[108]　オメァー　（笑）（B笑）　セワ　ネァーガンダガー。
　　くれるから　あんた　世話が　ないんだよ。

　　（笑）

B　（笑）　ソァーダ　ソァーダ。
　　そうだ　そうだ。

注記

1、サシッ　尊敬の助動詞「サッシャル」の連用形。一段動詞・カ変動詞の連用形に接続する。Iの注98エカシタ参照。

2、エカゲンネ形容動詞　かそり、相当「いい加減に」の変化。

3、オモーオド　オモーホドの変化。[h]はかすかである。

4、ダスケァーソァーのソァー　終助詞・間投助詞　さ。よ。ね。カ又はサー（Iの113参照）との差については未詳。ソァーは南魚沼郡でも用いられ、大分県にもある。（大分県のは終助詞）

5、オンネ　ホンニの変化。

6、ネァー〔nɛ:〕形容詞「無い」の連用形。

7、サカヤエク　酒屋に行く。酒造り従業員として出稼ぎすること。十一月から四月中旬まで関東・中京・大阪方面にでかけた。三国峠を越えて雪国へ行く人が多かったので「上州行き・上州帰り」と言う語が使われたという。天保期（1830～1843）に出稼者数が飛躍的に増加したと言われる。昭和40年の旧黒姫村の統計によれば労働人口1409人中出稼者が643人（55.6%）を占め、この中70%が酒造工である。統計は14歳から出稼ぎにでた。

8、ヨー〔jo:〕言うの変化。きまったと言うと、きまるやいなやに近い表現であろう。

9、オラドコ　私の所の意で、話者が自分の家をさしていう。

10、アッダドモ　あれだけれどもの意で「忙しかったが」ということか。

11、アッデスドモ　「それなどではなかったけれども」という心境か。

12、シネァケラ シネァヨァーネ 出後ぎをしなければしないように、それはまそれで期当にの意。

13、シゴトカラメテル 仕事を持っていること。絡(カラ)める。他動詞，身辺に持つこと。「カラマルコドモガネァー」（メリ羽朝メリ羽村）のカラマルは自動詞で母親にまつわりつき手のかかる幼児を持っていない意。南魚沼郡湯沢町では「コドモオカラメル」と他動詞に用いる。身辺におき世話をよくみる意である。

14、ド〔dO〕ドーと長音にも言う。終助詞。男女とも用い、対等又は目下の者に念を押したり注意をうながしたりして強く働きかける時用いる。「ぞ」の変化と考えられる。（南魚沼地方はゾという。）親しい目上に対しては「ぜ」の変化と考えられる「デ・デー」を用いる。ドは長野県上田・広島・島根、ドーは静岡・志摩・島根にある。

15、アエシテ 仕事を片付け冬に備えるというようなことを指すか。

16、エソガシテ 形容詞忙しいの連用形＋テ。終止形（この場合は経時されている）を連用形に用いる。大阪方言の言い方に似ている。

17、センバ 稲扱き用具千把扱きの略であろう。既出の「カラハシ」（Ⅱの油83コロバシャゲ参照）より能率的なことからついた名であろう。鉄のとがった櫛状の板を主要部とする稲扱具で、大正初年まで使われた。

18、ジッツォク〔tSO〕の音がある。十束。一束は八把から成る。

19、アッタンダン 語尾が消えているが、「あったのだから」の意。

20、ガンダ 準体助詞ガン＋断定の助動詞ダ Ⅰの油65参照。

21、アシフミ 足踏み稲扱器 大正初年頃から使われた。

22、ボッファラガ ボッファラの言い誤りか。24参照。

23、ニヤク ニヒャクの〔h〕音系脱落。

24、ボッファラ〔tSa〕の音は古音かえは〔Sa〕の変化かは未詳。稲扱きの時籾が穂からはなれず穂の一部とともに折れとりしるもの。それを回でついて籾を穂からはなす作業が後出のボッファラオトシ・ボッファラガケである。「綜合民俗語彙」に「穂打ち・棒打」とする語源説があるが、茨城県・静岡県にボッカリ（木の先っぽさま）、長野県諏訪・群馬県に

ボッサ（稲扱きをして残った籾・くさびら）、又栃木県・長野県・群馬県にボッツァラ（十分脱穀できなかった稲穂）があるから、擬態語が語源であろう。

25. オモーナラ〔omo:nara〕ときこえる。omowɔ: mononara > omoɔ:N nara > omo:nara と変化した語であろう。

26. トクベァー　屋号

27. エー〔e:〕ゆいの変化　結い、労働交換。佐渡郡イイ、佐渡郡海府エエ、中頸城郡エーッコ、南魚沼郡湯沢町エー。

28. モーテ〔mɔ:te〕〔morɔ:te〕の変化、後者はきこえないと思う。

29. ビョー〔bjo:〕俵　せまいo:

30. サンシロァー　屋号

31. タテ　ミシロ（むしろ、3尺×6尺）を二枚又は三枚縦につなぎ、輪状にして、むしろを敷いた作業場の平面上に立て、扱き終った籾を籾すりまで収めておく、臨時の置き場・容器。二枚のをニマエタテ、三枚のをサンマエタテと言い、それぞれ八俵分、十五俵分の籾を収容できる。共通語にタテ（断）があり、茶や綿を入れる俵という。「立て」に由来するか。青森・滋賀・奈良県にこの語があり、堅畚（タテフゴ）の略かという。（「綜合民俗語彙」）

タテミー　は「タテ見に」の変化で、残りの籾を見に行くこと。早く作業を終りたい心理のあらわれた動作。

32. エゼテ　エデテの変化。jɯ>e、de>ze　エゼん南魚沼郡古志郡エゼル　長岡地方栃尾市。

33. タベルガ〔tabeɯga〕のようにきこえる。

34. オエタシータ　オエタヒータの変化か。「終った退いた」か。終ったを強調した語。オエタヘタガネァー（柏崎市「消えゆく方言」）

35. ヤマーモ〔jama:mo〕山芋の変化、重母音をさけている。

36. ソァーダ〔sɔ:a〕のようにきこえる。

37. クルマヤ　水車小屋　五六戸が共同で作ったという。米を搗いたり藁をおったりする。

38. ヨーサリ　夕さりの変化。夜。中越地方にこの外ヨーサル、ヨーサレ

があり、中頸城郡にヨーサリ・ヨーサ、バンゲがあり、佐渡にはユーマ・ヨーマがある。

39. アンダ　ガンダ(のぞ)の変化。中越の長岡地方の特色。

40. コメアゲ「米を上げに」の意。つき終えた米を臼からとること。

41. アッダコラン　アレダコラネの変化。

42. クルマヤバン　バンはボンのようにそさこえる。車屋着。水車を使う順番。

43. ハクヒモノ　ハキモノの言い誤り。

44. シメジテテ　このようにきこえるが、話者Bは「シメリガアガッテ」ではないかという。話者Aは前述したように合がもつれるような不明瞭な発音をすることがある。

45. ケ　回想の助動詞。

46. キノア　キノハの変化。　h の脱落

47. シモガレ　霜枯れ時で。老人はシモツキ(霜月)という説を持っている。十一月のこと。

48. シャル　Iの注98参照。

49. ミソテ　みぞれ。中頸城郡海岸地方・上越市・岩野平でミソテという。この外ミソタ(上越地方)ミソタユキ(上越地方)ミズユキ・ミズエキ(上越)、ミゾレ・ゾブユキ・ザブユキ・ジャビユキ(佐渡郡)ミドロ(柏崎市)がある。

50. ダンガ　ダモンガの変化。ぞから

51. マウチ「マワルウチ」の変化。w・r は脱落することがある。

52. ナンワ　ナランワの変化。　ラの脱落

53. ヨトギ　徹夜。用例　ヨーベワ　オキャクサンガ　トレテ　ヨトギシテシモータ。　お通夜もヨトギと云う。葬通夜の「夜伽」である。

54. マンデ　まるで、まったく。この次に「嘘そのぞ」という意味のことばが省略されている。

55. ヨッーダロナラ　珍しい表現。

56. コンガン　ガは〔ga〕だと思う。

57. ケリ　稲扱き後の籾に混っている藁屑など。塵。

57. カンソァーキ　籾乾燥器

58. ニワノアイテ　ニワシゴトの相手。男子のする縁扱等の作業の手伝い。

59. ノァーカエ〔nɔ:kâe〕副詞なおさら。naokaʃiえは naokaɲi の変化であろうか。長野県に「のうかし」佐渡郡に「なおか」「なおしか」がある。ノァー・ノァーコト（南魚沼郡）ナオカ（中頸城郡中越地方中蒲原郡）ノーカ（上越新井市柏崎旧市域）ノカ（上越市）もある。

60. エネ　Iの法112参照

61. オエタ　自動詞　終った。

62. キチゲァーサワギダモン　気狂い騒ぎだから。モンはモンガの略か。

63. カツイデ〜〜〜　はっきりしないが「カツイデエカンネァーヤツガ」で、「背負って行けない奴、つまり私が」の意の様に思われる。

64. カツガシテはカツガセラレテと言うべきところか。

65. エッチャン　イチバン（一番）の変化。副詞。イッチ南魚沼郡・岩国市・柏崎市・中越地方・全国各地・江戸。イットァー南魚沼郡。イッチカ山形県。イッパン千葉県・岩手県。

66. セツナカッタ　つらかった　精神的・肉体的両義。佐渡郡・関東・東北。

67. センゴク　千石通しの略　器具の名

68. トァーミ　唐箕　器具の名

69. ザマナ　ザマダという形容動詞の連体形。体力のないさま。語源は様か。中越地方では役に立たぬ人・弱虫をザマナシ・ザマッタレと言い、佐渡郡で年老い気力体力の衰えることをザマガノーナルと言う。同郡で力がない、役に立たない、意気地のないことまたその人をザマナシと言う。米沢にザマザマシイ・ザマデナイという語がある。

70. オゴト　オーゴトの短音化。大変

71. フミガラ　足で踏んでつく臼。踏唐。唐臼。「踏唐臼」の略語か。東京都・島根県で言う。

72. ジガラ　地面に臼を埋め固定して据え、杵を足で踏んでつく臼。地唐臼の略か。「綜合民俗語彙」に「地面唐臼」の意とある。江戸の在・埼玉県にあった。

73. エガラ　不明。あるいは実在しないものか。

74. ききわけられない。

75. ニンゲンワ　人間というものはわがままなものぞ、困ったものぞと言いたかったのであろう。

76. ロー　ゾーの変化 zo:> do:> ro 終助詞　強意・相手に対して強く主張し訴えることをあらわす。目上に対しては「レ」となる。

77. コアナレ　コアラレ小穀。アナレの語は富山県から新潟県東北地方に分布。佐渡郡はアラネ。

78. トブル　フル(降る)の言い誤り。サラサラトのトの影響か。トブルは中越地方で雪や泥の中に足をふみこむこと。

79. クルマヤ　前出の水車小屋へ行き来すること。

80. アレ　次に言うハキモノを思い出せずこう言った。

81. ハキモン　はきもの。冬のはき物でワラグツ・シビガラミ・ツマガケ・ウソカケなど。

82. コシャワ　五段活用動詞コシャウの未然形。こしらえる。コシラウの変化か。参考コシャウ山形県　コシャル東北地方　コソー茨城

83. ワラスグリ　わら選り　藁の不要な葉の部分などを手又は手の形をした木製の用具で除き、細工に適するようにすぐること。また1寸×3寸くらいの長四角の板の面に釘の先をブラシ状に並べたものでわらをかいてもすぐった。

84. ワラハダヤ　ワラハタキの変化。ジョアーバイシという専用の石の上で藁をうって細工に適する軟かさにすること。ここでは水車の杵でわらを打つ話しである。

85. 水車による藁打ちの見張り。

86. コザコザ　こまごまとした仕事。例えば蕎粉・こうせん造り・団子の粉ひきなどの細かい仕事がその「ダイセン」(大事・第一、主要なものの意)であったと言う。

87. アレシッタ　アレシテイタの変化。働いていた意か。

88. スッデモ　それでも　ソレデモ>ソッデモ>スッデモ

89. ゴロスケノオジーサン　五郎助は屋号。話者Aを指す。

90、オヤス　他動詞　終える。

91、カコエ　カコイの変化　囲い、雪囲い。

92、オシマエニ　オシバエニの感じもする，オシマイニの変化，結局とか極端なことを言えばのような意味で，あとの「ヤクモチマデコネテ」を修飾する。

93、ヤクモチ　焼き餅。餅を焼いたものではない。エゴモチ・エリゴダンゴとも言う。エリゴは屑米のこと，各製屑米などを粉にひき，こねてまるめ，中に味噌・小豆などを入れて焼いて食べる食物。

94、コネテ　ヤクモチをコネテ作るのは主婦の毎朝の仕事であるのを，男がしかも前もってこねておくなどありえないことを誇張しておもしろく言ったもの。

95、〰の部分に「と言った」のような語が入れば論理的なのだが，言葉が重なったためききとれない。話者は「テガンネ」（というのにの意）と言ったとするが疑問である。

96、ソンゲァ　そんな。Ｉの注２４参照。

97、エンデ　オラエンデは「私の所」くらいの意らしい。わが家を主とし，その近辺もふくむ感じがする。これに似た語オラアタリ・オラッタリ・オラタリがあり，これは本村に近隣を主にしそれにわが家も含ませる言い方のようである。但しここでは話者が自分の夫をさしている。尾張で近隣をインデと言ったといい，秋田県北部では戸主をイデ，津軽地方では農家の戸主を指してエデと言ったという。それらと関係があるか。鶴岡では「オラエンジャー」（おらえんでは）とも言う。要するに語源は不明である。

98、ラレ　夫のことを話すのに尊敬の助動詞を使うのは柏崎市地方の一般の傾向である。

99、ダチントリ　日雇の仕事及びそれをする人，駄賃取り。ヒリョアートリとも。

100、ウチシゴト　屋外の作業に対し家の内部の仕事。

101、アタマエ「アウノ」というような音がこの前にきこえる。話者は「ソノ　アタマエ」と言ったと言う。「その上に」の意である。

102、キミ　キメの変化，肌理である。

103、アカギリ　皹　中頸城郡アギリ・アギレ。南魚沼郡湯沢町アカギレ。秋田県、千葉県、福井県・紀州・鳥取県でアカギリ。

104、サワサリト　副詞　ぞくぞくと。悪感のするさま。

105、オマエサンタ　お前様方。「あなた」の複数から話相手の家庭をさす。

106、アンデ　「ガンデ」の変化。ので。

107、オラロコ　オラドコの変化、私の所、私の家。

108、モーターが簡単に水を揚げてくれる意。

3. 養蚕

話し手

(記号)	(氏名)	(性)	(生年)
A	高橋 真男	男	大正7年
B	高橋マツノ	女	大正元年
C	高橋初枝	女	大正2年
D(同会)	高橋彦宣	男	大正15年

D ハイ ソァー セヤ ソァーシキノ ホァーワ マー ソンナ テードニシテ。
はい、 それでは 葬式の 方は まあ そんな 程度にして…。

ソレカラ マー アノ エマワ アンマリ ナクナッタンデスガ
それから まあ あの 今は あまり 無くなったのですが、

ムカシワ アノ ヨァーサンガ ヒジョァーニ マー ハヤッタンデスガ
昔は あの 養蚕が 非常に まあ 流行したのですが

エチバン ヨァーサンガ オラ ホァーデ サカンナ コロラヤ(1) アラ
一番 養蚕が 私どもの方で 盛んな 頃といえば あれは

エッゴロデシタカネー。
いつ頃でしたかねえ。

A ヨァーサンノ イチバン サカンナ ジブンテ(2) ヤッパシ(3) モチロァーワ
養蚕の いちばん 盛んな 時分といえば やはり、餅様は

ワリヤエニ ヨァーサン オソカッタガン ネァカネー(4)。(C オソカッタデスネー。遅かったですねえ。)
別会に 養蚕は 遅かったのでは ないかねえ。

ホカムラデ エッペァー (C ソァーソァー。そうそう。) ツクッテ アッタドモ (C
外の集落で いっぱい 作って あったけれども、

モチロァージャー ワリアエニ…。) アノ コァーテ アッタドモ(5) ナ
餅では 別会に……、 あの 飼って あったけれども、私どもの

ホァー　アンマリ　カワンカッタンサネ(6)。　デモ　センゴダッタロァーカネー(7)
方は　あまり　飼わなかったのでよ。　でも　戦後であったろうかねえ、

エチダエニ(8)ッコァータノワネー(9)。（C センゴデショァーネー。）ネー。
いちどに　飼ったのはねえ。（戦後でしょうねえ。）ねえ。

（Cソァーデスコテー。）センゼンモ　ソァー　エッパァー（Cチッタ(10)～～
そうですさ。）戦前も　そんなに　いっぱい（少しは

～～ハー。）カッタ(11)シトワ　アッタドモサーネ。　ダドモ　マー
はい。）飼った人は　あったけれどもさ。　しかし、まあ

ブラクノ　カズトシテ　シイクスル　シトノ　カズトシテ　エッパァン
集落の　数として、　飼育する　人の　数として　いっぱいに

ナッタノワ　センゴダッタコテネ。（Cセンゴデスコテネー。）ハー。
なったのは　戦後であったさね。（戦後ですさねえ。）はい。

センゼンワ　ソァー(12)アノ　アー　ブラクデモ　ゴニンヤ　ロクニンノ
戦前は　そう　あの　ああ　集落でも　五人や　六人の

シューワ　カーテ(13)アッタドモ　アー(14)ミンナワ　カワンネァカッタネー(15)
家は　飼って　あったけれども　あんなに　みんなは　飼われなかったねえ。

ハー。
はい。

C　カワンネァカッタヨァーデスネー。
飼われなかったようですねえ。

A　アノー　オラガ　マー　アッデスコテ　アノー　オー(16)ジューニサンカ
あのう　私どもが　まあ　あれですよ　あのう　おう　十二三か

マー　オマエサンガタ　オレヨリワ　マー　トシガ　エッパダスケァ
まあ　あなた方は　私よりは　まあ　年が　多いから

アッダドモ　アノー　モトワ　ホレ　ガッコァー　オエレバ　スグ
あったけれども　あの　昔は　ほれ　学校が　終われば　すぐに

エトシキダナンテッテ(17) ミンナ マー エキマシタコテネ。 エ
糸引きなどと言って みんな まあ 行きましたさ。

ロクネンセーガ オエレ… エマノ マー… (C リァーソァー。) モトワ
六年生が 終れ… 今の まあ… (そう そう。) 昔は

アノ ジンジョテ ショアーガッコァー オエレバ オエタ…(18)。ソノ ジブンワ
あの 尋常小学校が 終れば 終った…。その 時分は

ンダドモ オラ ホァーワ アンマリ カエコワ (B ～シマセンカッタ。)
しかし 私どもの 方は あまり 蚕は (～しませんでした。)

カワンカッタ ネァカネー。(C カワンカッタデス…。) ヨァーサンワネー。
飼わなかったのでないかねえ。(かわなかったです。) 養蚕はねえ。

(Cハー。) マー カーテタ シトモ アッタドモ リァー(20) サカンダ
(はい。) まあ 飼っていた 人も あったけれども そう 盛んでは

ネァカッタ(21)。センゴラッタ(22) ネァカ エチバン エッパァ カタノワネ コノ
なかった。戦後であったではないか、いちばん たくさん 飼ったのはね、この

ブラクデワネー。(C エチバン カータノワ センゴジャ
集落ではねえ。(いちばん 飼ったのは 戦後では

ネァーデスカ ハー。) ハー。
ないですか はい。) はい。

B オラミテァン テガン(23)× ネァテモ カエコ カーテ…。
私の家のように 人手が なくても 蚕を 飼って…。

A ソァーソァー ホトンド アノ ノキナミニ カエマシタコテ ハー。
そうそう、ほとんど あの 軒並みに 飼いましたさ、はい。

B ソレデ コドモニモ マタ ボンノ スカート カーテ
それで 子供にも また お盆の スカートを 買って

ヤルドナンカッテ コドモニ テツダエ サシテサ。
やるなどと言って 子供に 手伝いを させてさ。

A　シカシ　アレ　エクヨァーシンガ　フソクシタ　ソァー　ユー　クワンケーモ
しかし　あれは　衣料品が　不足した　そう　いう　関係も

アッタシネー。（B ソァーデスネー。）　ソレカラ　ホカニ　ソァー
あったしねえ。（そうですねえ。）　それから　外に　そう

タエシタ　シューニューガ　ナクテ　ワリアエニ　アノ　カイユガ　ネガ
たいした　収入が　なくて、割合に　あの　当が　値が

エーカッタスケァ　ソッデ　マー　ミンナ　カータ　クワモ(24)　ダエブ　ユエタシネ(25)。
良かったから　それで　まあ　みんな　飼った、桑も　だいぶ　植えたしね。

（C ソァーデスネー。）　ハー。　エマノ　アノ　テンジョァマノ(26)
（そうですねえ。）　はい。　今の　あの　天上山の

ボケナンカ　カエコンシタノモ　ソノ　ジブン　（C ソノ　ジブンデシタネ。）
墓地などを　開墾したのも　その　時分、（その時分でしたね。）

ソノ　ジブンデ……　ハー。
その　時分で……　はい。

D　ハーハー　ナルホドネー。
はいはい、なるほどねえ。

A　センゴワ　ホトンド　マ　ノキナミニ　カータンダ　ネァーカ。
戦後は　ほとんど　まあ　軒並に　飼ったのでは　ないか。

B　ソァー　ユー　ジタイモ(27)　アリマシタネー。
そう　いう　時代も　ありましたねえ。

A　ハー。
はい。

C　カワンネァ　ショナンカ　ホトンド　ネァカッタ。
買われない　繭など　ほとんど　無かった。

L　オラ　マー　カエマシタシサ。（A ソァーデスネー。）　マー
私の家は　まあ　飼いましたさ。（そうですねえ。）　まあ

ザラダッタノー。
ざらだったねえ。

A ハー ソッデ アノー ムカシワ ナッデモ カッーデモ(28) アノ コァー
はい、それで あのう 昔は なんでも かんでも あの こう

タナ コショァーテー(29) ホァーシテ ゼンブ アノ エチメァーズツ
棚を こしらえて、 そうして 全部 あの 一枚ずつ

カゴン(30) ナカエ (C ソァーデス。) エッテ(31) ソァーシテ シタ ケァーテ(32)
籠の 中に (そうです) 入れて、そうして 下を 替えて

クッテ(33) カータモ ソノゴ オメァー アッデスコテァー キゴト
呉れて 飼ったけれども その後 あんた あれですよ 木ごと

クワセラレルナンテテ ジョァソァーキョァーエク (C ハー。) アノ
食わせられるなどと言って 糸桑 (はい) あの

シイクナンテテ ハヤッテ キタスケァ コンド カエヤスー ナッタテ
飼育などと言って はやって 来たから こんど 飼いやすく なったという

コトモ アッタンデスネ。 (C アッタンデショァーネ。) ハー。ソァーシテ
ことも あったんですね。 (あったんでしょうね。) はい。そうして

ムカシワ ソレ アノ マブシオ コァー ワラデモッテ (C ワラデ
昔は それ あの 蔟を こう 藁で (わらで

オッタデス ハー。) コァーコァーコァーコァート(34) オッタノーネー(35) (C
折ったです、はい。) こうこうこうこうと 織ったのを ねえ

ソァーソァー。) コァー オショッタ(36)バッカミテァン(37) (C ハー。) コァー シバッテ
そうそう。) こう 折っただけみたいに (はい。) こう しばって、

ソレオ コァー ヒロゲタンデスガネ (C ハワシタ。(38)) エマ ソレ
それを こう 広げたものですがね。 (這わせた。) 今は それを

アノ カエリョァマブシダナンテテ(39) アンガン モン デキテネ。
あの 改良 まぶしだなどと言って、 あんなものが できてね。

C　ソレカラ　ホレ　テデ　コァー　シルガンガ(40)　ハヤッタコテネー。（A
それから　ほれ　手で　こう　するのが　はやりましたさ。

アーアー。）ヤマン　ナッタノガ。(41)（Aヤマン　ナッタノネー。
ああ　ああ。）山に　なったのが。（山に　なったのかねえ。）

オラガ　ソッデ　ヤーノ(42)　シタンデスケァ（Aアーアーアー。
私どそ　それで　～～～～　したのですから、（ああ　ああ　ああ。）

アー　アレ　アレ　エッゴロダ　アレ　クグリー　コノー　カワシモノ(43)
ああ　あれ　あれは　いっ頃だ。あれは　隧道、　この　川下の

クグリノ(44)　アイタトシャ　アケタ　コロ　アッデスエネソノマブマブシガ
隧道の　明いた(年は)　明けた　頃　あれですよ、その　蔭が

ハヤッテ　キタンデスエネ。
はやって　来たのですよ。

A　ソァー　セバ(45)　ソラー　センソァーチュードァーネ。
そう　すれば　それは　戦争中ですよ。

C　センソァーチューダカネ。
戦争中ですか。

A　オラ　エネァーカッタモン　～～コロ…。　ジューゴロクネン…。
私は　居なかったから　その頃。　十五六年…。

C　ハー。
はい。

D　カワシモノ　アコダケラ(46)　デンザブロァーノ　オヤジヤ　ヤゼァンヤ
川下の　あそこなら　伝三郎の　親爺や　弥左衛門や

エノスケノ　シューガ　ホラッタンダ～～　オラガ　コドモン　ドキ…。
伊之助の　衆が　掘られたのだ～～、私どその　子供の　時に。

A　ハー。
はい。

C　ハー　ソァー　セバ　センジ…。
はい　そうすれば　戦時…。

A　ダッカ(47)　〜ジュー〜
だから　十…。

D　センソァーチューダ。
戦争中そ。

C　センソァーチューデスネ。　(Aジューシゴネンダエネ。)　ソノ　コロ
戦争中ですね。　(A十四五年ですよ。)　その　頃

エッペァー　ハヤッタ。　ソレ　メァーニャー　ホレネ　(Aフン。)　マブシワ
ひどく　はやったそ。　それ　前には　ほらね　(Aうん。)　まぶしは

ヨゼァンデ(48)　アノ　(Aフン。)　ハリガネ(49)　マエタノガ　(Aハーハーハー。)
斜左前方で　あの　(Aうん。)　針金を　巻いたのが　(Aはいはいはい。)

ハヤッタコテ。　ソレカラ　コンダ　コノ　カワシモノ　アノー　クグリノ
はやったさ。　それから　こんどは　この　川下の　あのう　隧道の

アク　トシー　アッデスエネ　ドッチガ　マー　アレダ　ヘァー　ジッキ
明く　年に　あれですよ、　どちらが　まあ　あれそ、　もう　直に

ツキソァーダテ(50)　ドキ　マエバン　マエバン　オレガ　アノー　ソノ
着きそうだという　時、　毎晩　毎晩　私が　あの　その

マブシオ　アノ　シュノ　アガッテ　コラレルマデ　ジューニジ　ジプンマデ
まぶしを　あの　衆の　上がって　来られるまで　十二時　時分まで

ヨナベニ　ソノ　シタコトガ　アルンデス。　(Aハーン。)　ハー。
夜鍋に　その　したことが　あるのです。　(Aふうん。)　はい。

A　ソァー　セバ　センソァーチューダノー。　(Cセンソァーチューデスカ。)　アー。
そうすれば　戦争中そねえ。　(C戦争中ですか。)　ああ。

ジューシゴネンダノー。
十四五年そねえ。

C　ソノ　コロカラ　マー　カイコガ　エッペーダッタンダ　ネァーンデショァーカネ。
　その　頃から　まあ　蚕が　いっぱいそだったのでないでしょうかね。

A　アー　ソァーダネ。　ダエタエ　センソァーカラ　センゴネ　カケテ
　ああ　そうだね。　大体　戦争から　戦後に　かけて

カエコ　エッペー　カウヨーネ　ナッタンダネ。（Cハー。はい。）　ハー。
蚕を　いっぱい　飼うように　なったのだね。　はい。

C　ソノ　コロ　オレガ　オラ　ホカニャ（笑）オボエテ　ネァンダドモ
　その　頃　私が、私は　外には　覚えて　居ないのだけれども

（Aハーハー。はいはい。）ソノ　カワシモノ　シューガ　アガッテ　コラレル
　その、川下の　衆が　上がって　来られる、

クボタノ(51)　オジジガタガ　オヤカタデ　（Aハー。はい。）　アガッテ(52)　コラレル
久保田の　お爺さん方が　親方で　上がって　来られる

ドキ　オレガ　アノ　シューガ　コラレルマデ　ソノ　マブシオ
時、私が　あの　衆が　来られるまで　その　まぶしを

オッテ　（Aハー。はい。）　ホァーシテ　シタガンガ(53)　ヨー　オボエガ
折って　そうして　しそこと　よく　記憶して

アリマステ。
いますよ。

A　クボタノ　アレダコテ　エマノ　シカノスケサノ　オジーサンガ
　久保田の　あれだ、今の　鹿之助さんの　お爺さんが

（Cハー　オジーサンガ　オヤカタデ。はい、お爺さんが　親方で。）　アレダコテー　アノ　カ×
　あれだ、あの

カイコモ(54)　オヤカタダッタコテネー。（Cハー（笑）　オヤカタデ
蚕も　親方でしたさ。　はい。　親方で

アッタッタネー(55)。）（D～～～）　オラモ　マー　アノ　シトカラ
したねえ。　私も　まあ　あの　人から

カイコテ　モン　ハジメテ〜〜　ナロァータンダ。ハー。
蚕という　ものを　始めて　飼ったのだ。　はい。

B　ソレデ　ケートモ　カエナクテサー　(Aソァーソァーソァー。)　ソレデ　ソノ
それで　毛糸も　買えなくてさあ、　(そうそうそう。)　それで　その

マータノ(56)　チョッキオ　コシラエタリ(57)　(Aアソァーソァーソァー。)　スルノデ(58)
真綿の　チョッキを　こしらえたり　(ああそうそうそう。)　するので、

ワタシナンカモ　カータンデスエネ。
わたしなども　飼ったのですよ。

C　ソァーダ。
そうだ。

A　ヤー　ダカラネー　オレガ　ハジメテサー　アノ　カイコ　カーテサネ
やあ　だからね、　私が　始めてさ　あの　蚕を　飼ってね、

ホーテ　アノ　マー　アノ　モトワ　ホレ　デンザブロァーデ
そうして　あの　まあ、あの　昔は　ほれ　伝三郎で

カータコラ　トショリガネ。　(Cソァーソァーソァー。)　ホーテ　カイコ
飼ったさ、　年寄りがね。　(そうそうそう。)　そうして　蚕を

コータラ　ホレ　エチレー　ニレー　サンレート　アノ　キン
飼ったら、ほれ　一齢　二齢　三齢と　あの　衣

ヌクコテネー。(59)　(Cハー。)　アノ　ドキニ　カワオ　キン　ヌク
脱ぐよね。　(はい。)　あの　時に　皮を、衣を　脱ぐ

ドキニ　アノ　エトー　コァー　ダシテサーネ　ソァーシテ　コァー　アッテスコテ
時に　あの　糸を　こう　出してね、　そうして　こう　あれですよ

ソコラノ　マー　アノ　アッテスコテ(60)　アノー　クワノハヤ(61)　ソレカラ
そこらの　まあ　あの　あれですさ　あのう　桑の葉や　それから

アノ　エダニ　コァー　カケテ　ソレデコァーキヌ　ヌクンダコテ。
あの　枝に　こう　かけて　それでこう　衣を　脱ぐのさ。

ソレオ　オレ　カイコナンテ　ハジメテ　コァーター(62)　シラン
それを　私は　蚕なんて　始めて　飼ったから　知らない

モンダモンネー(63)。　ソァーシテ　コァー　ヤスミーニ　カカッタ　ヤ
もんだからねえ。　そうして　こう　休みに　かかったら、

オラ　ヤスム　ユーンダネー　アノ　(C ソァーソァーソァー。)　ヤスミニ
私ども　休ひと　言うのだねえ、　あの　そう　そう　そう。　休みに

カカッタラ　コァー　エト　ダシタンダ。　ターマゲチモァーテ　(C笑)
かかったら　こう　糸を　出したのだ。　たまげてしまって

ホエカラ　ソノ　デンザブロァーエ　ソレ　カエコ　モッテ　エッテサ
それから　その　伝三郎へ　それを　蚕を　持って　行ってさ、

「オジジ　オラ　ロコノ(64)　カエコワ　エナ(65)　モンダエネ」テ…「ナシター」(66)
「おじいさん　私の　所の　蚕は　異ま　もんですよ」というと、「どうした」

テ　ユースケ　「エマッカラ　ヘァーネ　アガルガンレヤ　ナンレヤ(67)
と　言うから、　「今から　もうね　上蔟するのであるかなんだか、

コンガン(68)チーセァーノガ　エト　ダシタエネー」ッタラ　ホァーシタラ
こんなに　小さいのが　糸を　出しましたよ」と言ったら、　そうしたら

(笑)　ワロァーテラレルノサー。　ホッデ　「ドァー　シタンダロァーネ
笑っていられるのさ。　それで「どう　したのだろうね、

コラ　ドァーカ　ナッタンダロァーカネ　コンガン　ナッテ　コンガン　チーセァー
これは　どうか　なったのだろうかね、　こんなに　なって、こんな　小さい

ナリ　シテ　エマッカラ　エト　ハキダシタガ　アレ　アノ　ニワヤスミ(69)
なりを　して　今から　糸を　吐きはじめたが、　あれ　あの　にわやすみを

シテ　オキテ　ソァーシテ　ソレカラ　エト　ハクンダテー　アノ
して　起きて　そうして　それから　糸を　吐くのだという、　あの

デッコァー　ナルガンダガンネ(70)　ソレー　スキトーリモ　シネァーガンネ
大きく　なるのだのに、　それを(体が)透き通りも　しないのに

コンガン ケーセァー ウチニ エト ハエタエネーッテッタラ ソァーシタラ
こんなに 小さい うちに 糸を 吐きましたよ」と言ったら そうしたら、

ワロァーラ ラッタッケヤ 「バーカ ソーラ ソァーエ(71) モンドァー。
笑って いられたが、「ばか それは そういう ものだ"よ。

カエコテ モンワノー (笑) (C笑) ヤスムゴットラネ(72) カワ アノ
蚕という ものはねえ。 休むごとに 皮を あの

キン ヌカンケ ナランヌク(73) (C ソァーソァー。) ソァーシテ ソァーエヨニ(74)
衣を 脱がなければ"ならないではないか。(そう そう) そうして そういうように

アノ エトデ ソレ アノ ヒッカケテテ (C ～～。) ソァーシテ
あの 糸で" それと あの ひっかけておいて そうして

ヌク モンドァー。」テテ エヤー ワラータ ユト アッタッケ。(笑)
脱ぐ ものだ"よ。」といって、 いやあ 笑った ことが あったっけ。

(C笑) ハジメテ カエコァエシタラ(75) オメァサン…。(笑) (C笑)
初めて 養蚕をしたら あんた……。

B ヘァー ソラ ハジメテドァー。(A キン ヌグ ドコ…。) (C
へえ、それは 始めてだ"よ。 衣を 脱ぐ ところ……。

ソンガノ(76) コト…。) (A ハー。) シリマセンカッタエネ(77)。 カエコ
そんな こと…。 (はい。) 知らなかった"すよ。 蚕を

ケッター カータドモ ムチューデ カーテタスケァ (A ハー。) ソンガネ
少しは 飼ったけれども 夢中で 飼っていたから (はい) そんなに

エト ダ"シテ キン ヌグナンテ コト シリマセンカッタエネ。
糸を 出して 衣を 脱ぐ"なんと言う ことは 知りませんでしたよ。

A ソレネー オラ ハジメ タマゲマシタエネ。(D ハー。) タマゲテ
それをねえ 私は 始め たまげましたよ。 (はい。) たまげて

ホァーテ デンザブロァーエ モッテ エッタ。(D ハー。) 「ミテクダサイ
そうして 伝三郎へ 持って 行った。 (はい。) 「みてください。

オジジ」ッタラ　オジジ　ワロァ～テバッカ　エアン(78)。（D ハー。）（C ンー。）
おじいさん」と言ったら　おじいさんは　笑ってばかり　いるのだ。　はい。　うん。

アレ　アタ(79)　ヤッパシ　アノ　ホレ　キン　ヌクニ　ソァーテ　アノ
あれ　やはり　あの　ほら　衣　脱ぐのに、そうして　あの

（C シカケガ　ネァケラ…。）　シカケガ　ネァケラ　ヌカンネァカラサ
仕掛けが　なければ…。　仕掛けが　なければ　脱がれないからさ。

（C ソァーソァー。）　ハー。　ソァー　エーバネー　アノ　ソレカラ
そう　そう。　はい。　そう　いえばねえ、あの　それから

オレガ　キョツケテ　ミテ　エタガ　アノ　アー　サンレー　ヨンレーン
わたしが　気をつけて　見て　いたが、あの　ああ　三齢　四齢に

ナッテ　デッコァー　ナッテ　エルト　アエラー(80)　ヌギカケタガ(81)　ヤタラニ
なって　大きく　なって　いると　彼等は　脱ぎかけたのを　やたらに

ウゴカストユート(82)　ヌゲレーネァノガ(83)　アルンデスヨ　ハー。
動かすと　脱がれないのが　あるんですよ、　はい。

B　ンー。
うん。

C　ソァーソァー。ホァーテ(84)　ヤッパリ　アレ　コァー　ムイテ　クッタタッテ
そう　そう。　そうして　やはり　あれを　こうして　むいて　やっても

ダメダ～～サ～～。
だめだ　～～～。

A　ダメダ　ハー。（D ンー。）　ヤッパシ　アレァー（C アルテード
だめだ、はい。　うん。　やはり　あれは、　ある　程度

シッキガ(85)　アッテ…。）　ヤツラ　コァー　ヒッカカッテテ　ソァーシテ　ソノ
湿気が　あって…。　奴等は　こう　ひっかかっていて　そうして　その

ズート　ソノ　ヌクヨァーニ　ナッテルンダ。　ソレオ　オラガ　ソノ
ずうと　その　脱ぐように　なっているのだ。　それを　わたしどもが　その

エ　ヤスンデ　キヌ　ヌキハジメルガン　コァー　ウゴカストユート
それ　休んで　衣を　脱ぎはじめるのを　こう　動かすと、

ソノ　エトガ　キレチャウスケァネ　シカケ　アッタ　ドコ　キルスケァ
その　糸が　切れてしまうから、　仕掛の　あった　所が　切れるから、

ヌケレーネァノガ　アルンデスヨ　ハー　ハー。
腰が抜けないのが　あるんですよ、　はい　はい。

C　ソァーデスネ。
そうですね。

D　ハー　ヤッパリ　シゼンガ　エーンデスネー。
はい、やはり　自然なのがいいのですねえ。

A　マー　アノ　センゴ　アッテ　カイコデモッテ　ダイブ　ミンナガ　マー
まあ　あの　戦後　あれで　商で　大分　みんなが　まあ

アレ　フクギョァーデ　タスカッタコラネ　ハー。（C ソァーソァー。）（B そうそう。）
あれ　副業で　助かりましたよね、　はい。

ソァーデスネ。）　ハー。　ナンタッテ　ホカニ　オメァサン　カネ　トル
そうですね。）　はい。　なんと言っても　外に　あんた　金を　取る

ドコガ　ネァーンダンガ(86)　ハー。
所が　無いのだから、　はい。

C　ホァーテ　ワリエァー＝　アノ　コロワ　ソァー(87)　ネダンモ　エカッタ(88)。
そうして　わりあいに　あの　頃は　そら　値段も　よかった。

A　ネダンモ　エカッタ　ハー。　ネダン　エカッタ。　ホァテ　コメワ　ホレ
値段も　よかった　はい。　値段が　よかった。　そして　米は　それ

ミンナ　ホレ　アノ　ダセダセダセテテ　ミンナ　ダサレッシリァー(89)
みんな　それ　あの　出せ出せ出せといって　みんな　出させられるしさ、

ホァテ　ネダンワ　ホレ　セーフデモッテ　キメテ　エラレレバ(90)　オメァー
そうして　値段は　それ　政府で　決めて　いられるから　あんた

ゼン　エッペァー　モラワンネァシサエ。　ダカラ　アレダ　マー　カエコ
金を　なくさんは　貰われませんしね。　だから　あれぞ、　まあ　蚕を

カーテ　コズカエ　トリー…。（C　ソァーデスネ。）　エマミテァーネ
飼って　小遣い　取り……。　そうですね。　うみそいに

ホカニ　コァーバエ　エクトカネー（C　アレガ　ネァカッタデスケネー。
外に　工場へ　行くとかねえ、　それが　ありませんでしたからねえ。

）ホカニー　コァーキョアー　ジキョアーダッテ　ネァーカッタシソァー　ハー。
外に　公共事業だって　無かったしさ、　はい。

（D　ナルホドネー。）デ　マー　ブラク　ヨケー　アレ　カエコ
なるほどねえ。　それで　まあ　集落が　一帯　あれを　蚕を

カータンダ　ネァーニァカネー。（D　ナル……。）ダカラ　アレデスコテー
飼ったのでは　ないだろうかねえ。　なるほど。　だから　あれですよ、

マー　アノ　ミンナ　アレダコテー　クワ(91)　エウェタリサー　ソレカラ
まあ　あの　みんな　あれだよさ　桑を　植えたりさ、　それから

アノ　コンダ　タナ　コショアータリ　マブシ　コショアータリ　マー
あの　こんどは　棚を　こしらえたり、　まぶしを　こしらえたり、　まあ

オラ　カエコナンテ　マー　カエコテ…　オラ　トコモ　オレノ
私どもは　蚕など、……　まあ　蚕と言えば　私の　所も　私の

マゴジサンノ　アノソァー　アノ　オトートノ　シトワサ　マー
祖父の　あのそれ　あの　弟の　人はさ、　まあ

ヨァーサンノ　ギジュツインダッタスケ　マー　オキナワマデ　エッテソァー
養蚕の　技術員だったから　まあ　沖縄まで　行ってさ、

カエコ　ソノ　ジブン　カワッタテ　アンダドモ（C　ンー。）ソレゴ
蚕を　その　時分に　飼われるということだけども、　うん。　その後

オラウケン　ゼンゼン　カータ　コタ　ネァーンデスモン　ハー。
私の家は　全然　飼うなどは　無いのですから　はい。

(C ソァーデスネー。) ソレ マー ハジメテ マー カエコ コァータ。
そうですねえ。 それを まあ はじめて まあ 蚕を 飼ったよ。

モットン マー ホレ センソァーネ エッテ キテ タンボ コンド
もっとも まあ ほれ 戦争に 行って 来て 田圃が こんど

チットバカン ナッタシ カエコデモ カワンケラ シゴトモ ネァースケァー
少しばかりに なったし、蚕でも 飼わなければ 仕事も 無いから

シタドモ ソッテ(92) ハジメテ オラ マー カエコラ モノモ カーテ
やったけれども、それで はじめて 私は まあ 蚕という ものも 飼って

ミタンダガネ ハー。
みたのだがね はい。

D ハー ～～～～～～。
はい。 。

B オジーサンノ ダイニャ カワッシャランカッタンダナ。
おじいさんの 代には お飼いにならなかったのだな。

A ゼンゼン カワンネァー(93) ハー。
全然 飼われない、はい。

C オジーサンノ ダイニャ カワッシャンネァー。
おじいさんの 代には お飼いにならない。

A タンボ イッポンダ ハー。
田圃 一本だ はい。

C テガ ネァカッタモンネ。
人手が 無かったものね。

A ソレデ ウカワダッテ アノ ジブン カエコノ シューニューテ
それで、飼ったって あの 時分 蚕の 収入という

モンワ サカヤモン(94) デカセギノ(95) シューニューヨリ ヨケーダッタロァーカネ
のは 酒屋や、出稼ぎの 収入より 多かったろうかね、

アノ　ジブンデ。　コメニ　ツグノワ　アン　ドキャ　スミダッタロァーカ
あの　時分で。　米に　次ぐのは　あの　頃は　木炭であったそうか、

ソレカラ　カエコダッタロァーカ　デカセギダッタロァーカ。
それから　唐であったそうか、　出稼ぎであったそうか。

D　ソァーダノー。　ミンナ　～～～～　ダイブ　～～～～。
そうだねえ。　みんな　大分

A　オラ　ワスレタナー。　オンナジダッタカナー。　ソァートァーナ　アノ
私は　忘れたなあ。　同じだったかなあ。　相当な　あの

シューニューノ　エチ　シメッタンデスエネ　ハー。
収入の　位置を　占めていたのですよ、　はい。

C　ソァーソァー。
そう そう。

B　シメッタヨァーデスネ　スミッダカ　カイコダカ。
占めていたようですね、　木炭であるか　唐であるか。

A　～～～～～ネー。
ねえ。

B　ハー。
はい。

A　ダモ(96)　ギジュツイ　ンダッテ　チャントネ　アノ　シトリズツ
しかし、　技術が　負だって　ちゃんと　あの　ひとりずつ

エラッタンダシサー。
居られたのだしさ。

B　ダドモ　スミヨリ　カイコノ　ジダイモ　アリマシタコテ。(Aハー。はい。)
しかし、　木炭よりも　唐の　時代も　ありましたさ。

センソァーデ　ミンナ　デテ　エラスタ(97)　ドキャー　(A　カイコノ　ホァーガ
戦争で　みんな　出て　いられた　時は、　唐の　方が

(98)

ヨケーダッタカ シラン。) カエコノ ホァーガ ヨケーデシタガネ。
多かったかしら。 蚕の 方が 多かったですがね。

A ソレガ エマ ホトンド ネァー ナッタスケネ カイコナンカ。(C
それが 今は ほとんど 無く なったからね、 蚕などは。

ハー。) ウカワノ カーテルナンカ ホンノ ニサンニンデショァー。
はい。 鵜川の 飼っている(人)など ほんの 二三人でしょう。

D ソァーデスネ。
そうですね。

C ソァーデスネー。 シモノノ シューバッカダ ネァーデスカ。
そうですねえ。 下郷の 人々ばかりでは ないですか。

A ソァーソァーソァー。
そうそうそう。

D ンー。
うん。

A マー カエコト ウシダコテー。 アノ キューニ タエタノワ
まあ 蚕と 牛だこと。 あの 急に 絶えたのは

カチクダコテァー。
家畜だこと。

D ソァーデスネー。
そうですねえ。

注記

1、テヤ　と言えばの変化か、と言いやの変化か。

2、テ　と言えばが極端に短くなった。

3、ヤッパシ　副詞　県下に広く分布する。刈羽郡刈羽村の老人はヤッパルのような発音をする。県下には「ヤッパ」もある。リの脱落であろう。

4、ガンネァーカネ　準体助詞ガン（Iの注6参照）に形容詞ナイが直接接した。間にジャ・ダを入れて言うこともある。のではないかの意。

5、テアッタ。て有った。接続助詞テ＋ラ変動詞＋過去の助動詞。過去のことを確認断定する気持である。「飼った」「飼ったのであった」とでも訳すべきかもしれないが、直訳しておいた。この表現は南魚沼郡湯沢町にもある。これをちぢめて「タッタ」ということは新潟をはじめとして西蒲原郡その他の中越地方にある。タッタは富山県・長野県・愛知県・東北地方にもあり、普通過去完了の助動詞と説明されている。テアッタッケとなると確認断定の外に回想の気持が加わる。

6、サ　確認の気持をこめて話しかける間投助詞、同輩目下に対して用いる。Iの113参照

7、ダッタ　デアッタの変化。5参照。

8、エチダエニ　いちどきに、いっせいに位の意か。語源不明、「一代に」か。

9、ツコァータ　この様にきこえた。話者にたずねると「コァータ」であるという。言い誤りか。

10、「ちっとは（少しわ）飼った人があるけれども」のようなことを言っているのであろうが、よく分らない。

11、カッタ　共通語化して促音便となっている。

12、ソァー［Sɔ:］指示して注意を促す間投助詞。「そら」が語源であろうが。

13、カーテ　飼っての?音便　IIIの4文法上の特色(1)動詞について(3)参照。

14、アー　副詞　あんなに、あれほど、

15、カワンネァカッタ　「ン」は尊敬の助動詞「れ」の変化。

16、オー　［O:］間投声　あそびことば

17、エトシキ　イトヒキの変化　糸引き、製糸、製糸工女。

18、オエタ　終った　この次に「皆にみんな糸引きに行った」のような語が省略されたのであろう。

19、ンダドモ　接続詞　だけどの意。

20、ソァー［sɔː］副詞　そんなに、それほど、そいして、

21、サカンダネァカッタ　サカンダは形容動詞終止形と同形の連用形。

22、センゴラッタ　ダフラの変化。

23、テガンネァテモ　「ン」はまちがってはいった音であろう。ネァは21と同じく終止形と同形が連用形となった例。「人手がなくても」の意。

24、クヮ［kwa］桑

25、ユエタ　うえた(植えた)の変化。

26、テンジョアーマ　地名大字折居地内の共同墓地のあるところ。天上山のヤが脱落している。

27、ジタイモ　このようにきこえるが「ジダイ」の言いあやまりであろう。

28、ナッデモカッーデモ　ナンデモカンデモの変化。何でも彼でも。促音のようにききとれる。ここは魚沼郡にかけて撥音の所が促音になる地帯である。

29、コショアーテ　Ⅱの注32参照

30、カゴ　養蚕用の竹製の3尺×4尺程のかご。

31、エッテ　イレテの変化。入れて。

32、シタケァーテ　シタオカエテの変化。蚕の下の蚕の糞やたい桑などを取り去ること。

33、クッテ　クレテの変化。

34、コァーコァー　副詞　左右の手を交互に動かし、まぶしを折る身振をしたのであろう。

35、オッタノオ　アクセントから考えて、折るでなく、織るであろう。オル(折る)　オル(織る)の別がある。

36、オショル　折る。オルよりオショルが普通。押し折るが語源か。本県の外東北地方群馬岩手熊本大分の各県で用いる。

37、ここの発音は不明瞭である。話者は「オショッタバッカンノー」と折っ

たばかりの物を）と主張するが、実際は文字化しそようにきこえる。「折ったばかりみそいに」と解した。

38、ハワシッタときこえる。話者は「ハワシタ」と主張する。まぶしを遠わせるように伸ばしひろげたこと。

39、カエリヨァーマブシ　改良まぶし。ボール紙を組み合わせて折りたたみのできるもので、一辺両に一匹の蚕がまゆを作り、何年でも使用できる改良されたまぶし。

40、テデシル　手でするの変化で、手で組み立てる意か。

41、ヤマンナッタ　山形になっていることで、一種の改良まぶしの網の目の形状が山形、三角状になっているものらしい。

42、ヤーノ　不明「やまの」か「山の」か。

43、カワシモ　地名　川下、用水路のトンネルのあるあたり。

44、クグり　くぐるところ。トンネル。暗渠。土や雪のけに作った隧道。

45、セバ　サ変動詞未然形＋助詞バ

46、アコダケラ　はじめアゴアセワのようにきこえたが、話者にたしかめて、本文のように分かった。

47、ダッカ　はっきりとは分からない。だからの意があまいは「だけら」の変化で「それなら」の意か。

48、ヨゼァン　家拝殿にある家の屋号。

49、ミカデマブシと言って針金で作ったむかで状のまぶし。

50、ツキソァーダ　着きそうだとは雨端から掘り進んだトンネル工事が中で接して貫通しそうだの意。

51、クボタノオジジ　久保田は屋号、その先人の男で高橋庄之助氏をさす。前出エノスケも同じ家の屋号。

52、アガル　家に帰ること。仕事などやめて家に帰ること。

53、シタガンガ　養蚕をしそのがの意。

54、カイコモ「カイコノ」ではなかろう。

55、アッタッタ　有ってあったの変化。5参照。

56、マータ　マワタの変化、Wの脱落。

57、コシラエタリ　共通語化した表現。コシャータリなどが本来の表現。

58、スルノデ　共通語化した表現。

59、キンヌク　衣を脱ぐ。脱皮する。上代の記号では脱ぐはヌクであったとされる。ヌグも本文の後にでてくる。共通化したのであろう。動詞活用ではノクといい、これは千葉県にもある。ヌクは千葉県・大分県・対馬にある。

60、アッデスコテのデはレの感じもする。

61、クワノハ　共通語化している。普通クワノハ。

62、コーターの語尾が不明瞭、がっそらのらがはえそれのであろう。

63、モンダモンはシランモンダモンガの略されたものであろうか。

64、オラニコ　オラドコの変化　俺の所　わが家。

65、エナ　共通語イナ（異な）連体詞の変化。

66、ナーシター　何した。どうした。

67、アガルガンレヤナンレヤ　アガルガンダヤラナンダヤラの変化。dとrの中間的音声。[ɾe]は[ɾɛ]に近いか。

68、コンガン　形容動詞コンガダの連用形かと思われる。チーセァーを修飾すると考える。コンガイニフコンガニフコンガンと変化したと考える。コンガイノフコンガノフコンガンと考えれば「チーセァーノ」を修飾する連体形となる。

エの24・64参照。コゲン（連体詞）（副詞）九州各県　コゲンニ三重県

69、ニワヤスミ　番の第四眠　新潟県・長野県・静岡県・埼玉県。

70、ここのところは正確にきとることができない。早口の上に音の省略がある。話者の説明に従って文字化してみた。

71、ソーエ　連体詞　そんな、そのような　語源は「そう言う」である。

72、ゴットラネ　接尾語…毎に。これに似た語に「グチラ・ゴチラ」がある。～ごと、～ぐるみ　～共にの意味である。「りんごなんか皮ぐちら食うで」（柏崎市「海をゆく方言」）愛知県・近畿地方にある「グチ」に更に「ラ」がついたもの。ゴットラネも同様にゴトにラ、更に副詞的ニがついてできたものであろう。ニは木と就る。

73、「ナンヌク」のようにもきこえる。ナラン木カ（ならないではない

か」のこの人らしいぞんざいな早口の表現から生れたゆがんだ発音なのであろう。

74. ソァーエヨニ　そういうようにの変化。

75. カエココエ　蚕飼いの変化〔Kai〕の変化〔kae〕が終止形の〔Kɔː〕に同化して生れた発音である。

76. ソンガノ　形容動詞の連体形。

77. エネ　Iの注83参照。

78. エアン　イルアンダと考え「いるのだ」と訳したが、この話者のことだから、イラレルアンダと尊敬の助動詞を入れているつもりなのかもしれない。

79. アレアタ　不明　アレワマタと言おうとしたのか。

80. アエラー　アイラワの変化　アイラは江戸時代語遠称代名詞複数、彼等。当地ではののしる気持はなく、同輩、目下に対して使う。ここでは「蚕たちは」の意である。後出の「ヤッラ」はこれに比し見下げた気持のある卑語である。参考あい。彼。三重・和歌山・香川・隠岐・佐賀・鹿児島。

81. ガ　ガオ(のを)の変化。

82. トユート「と言うと」で「と」を強めている。

83. ヌゲレーネァ　ヌケレーネァとも。ヌゲレール（脱ぐことができる）の否定。可能の言い方はヌゲレルともヌガレルとも言う。

84. ホァーテ　そうして

85. はっきりしなかったが話者Aにきいて、蚕の体に湿気があっての意とわかった。

86. ダンガは語尾がはっきりしない。Iの注97参照

87. ソァー〔Sɔː〕感動詞。相手の注意を喚起する時用いる。

88. エカッタ　よかった。ヨァーネァー，エーネァー，エーロァー、エーナル、ヨァーナル、エー，エーヒト、エーケラと活用する。

89. ダサレッシ　ダサセラレルシが此の人のくせでちぢめて発音された。

90. エラレレバ　ラレルは尊敬。その已然形。文語的な表現。

91. 〔Kwaː jmetari〕に近い。

92. ツッデはツッテのようにもきこえる。それでの変化。

93. カワンネァー　尊敬の否定　前のBのことばの中の「シャラン」より敬意はひくい。

94. サカヤモン　酒造業従業員。トージはその指導的地位にあるものだが一般酒造作業員の意味に広く使うこともある。参考トージ　新潟、富山、岐阜、静岡、三重、島根、広島、高知、熊本。

95. デカセギ　II収録地点の概観5戸数人口産業の部参照。

96. ダモ　ツァーダドモ＞ンダドモ＞ダドモ＞ダモ

97. エラスタ　イラシッタとイナスッタの混成か。

98 カシラン　連語。カシランは終助詞とした方がよいかもしれない。江戸語の入ったものか。刈羽村では九十歳の老婆も使っているようだ。こゝでも老人、しかも男性が使っている。共通語からのものではない。

4. 雪の中の生活

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
A	高橋 真	男	大正7年
B	高橋 初枝	女	大正2年
D(司会)	高橋 彦宣	男	大正15年

D コンドワ フユノ セークヮツノ コトデモ チョット キーテ
こんどは 冬の 生活の ことでも ちょっと 聞いて

ミマショァーカネー。 マー フユテーバ ユキガ フッテ ヒラバノ(1)
みましょうかねえ。 まあ 冬と言えば 雪が 降って 平場の

フユト チョット チガイマスノデ ソコラヘンノ ハナシカラ
冬と ちょっと 違いますので、 そこら辺の 話しから

ダシテ ミテ クンナセァー。
出して みて 下さい。

A マ エキガ フルノワ アレダコテ コラー (B笑) ヤマン
まあ 雪が 降るのは あれだよ これは 山の

ナカデ…(2)。 ダケ(3) ヨー(4) ホレ アノ シンブンヤサー テレビデ
中で…。 だから よく ほら あの 新聞やねえ テレビで

モッテ アッラコテー(5) アノ ゴメーター アノ サンメーター フッテ
あれだよ あの ××××× 五メートル、 あの 三メートル 降って

オーエキダナンテ(6) ユードモ サンメーターナンテ ウカワデ
大雪だなどと 言うけれども、 3メートルなど 鵜川で

サンメーターナンカ　ユキ　エッパーダト　オモワンガネー。（D
ミメーターぐらいな　雪は　多いと　思わないがねえ。

ソーデスネー。）タイテー　ヨンメーター。　マー　サンメーター
そうですねえ。）大抵　四メーターぞ。　まあ　三メーター

グレーダケラ　タイシタ(7)　エッペーダト　オモワンネ。
ぐらいなら　たいして　多いと　思わないね。

B　シミズダニノ(8)　ショウ　ヨーエダ　ネーカッタデスコテネー。（A　アー
清水谷の　人人は　容易では　ありませんでしそよねえ。　ああ

ヨーエダ　ネーカッタ　ハー。）アレ　カヨーテ　キナスッタンダスケー。
容易では　なかったぁ、はい。）あれを　通って　来られたのだから。

（A　ソーソーソーソー　アー。）ハー。　アノ　アレネー（A
そうそうそうそう、　ああ。）はい。　あの　あれをねえ、（

カンジキ　カケテネ。）カンジキ(9)　カケテ（A　アー。）ホーシテ
かんじきを　かけてね。）かんじきを　かけて、（ああ）そうして

アレーネー（A　アー。）アノ　カクマキニ(10)　ナワ　トーシテ
あれをねえ、（ああ。）あの　角巻に　縄を　通して

モローテ　ホーシテ　コー　クビノ　ホコデ　シバッテ。
もらって　そうして　こんなに　頭の　ここで　しばって

A　シバッテ。　ソーダッタネ。　ソノ　ユウエ(11)　ミノ　ミノボシ(12)　カブッテ
しばって。　そうだったね。　その　上に　蓑　蓑帽子を　かぶって、

テンボクラニ(13)。（B　ミノボシ　カブッテ　ハー。）ソーシテ
頭上に。（B　蓑帽子を　かぶって、はい。）そうして

ガッコーエ　カヨータンダネ。（B　ハー　ガッコーエ　カヨエマシタ。）
学校へ　通ったのだね。（B　はい、学校へ　通いました。）

ソーシテ　オヤドモワ　ミンナ　オクッテ　キタンダ。　ダースケー
そうして　親達は　みんな　送って　来たのだ。　だから

シミズダンノ　ショーワ　ヤダテッテ　コノ　ガックカラ　ハナレラッタンダ。
清水谷の　　人は　　いやだと言って　この　学区から　離れられたのだ。

コノ　ミチ　ツケルダケデ(14)　ヨァーエジャ　ネァーン～(15)。
この　道を　つけるだけで　容易では　無いから。

B　オラガ　ドキワ　キット　オクッテ　クルナンテ　コト　ネァカッタカ
私どもの　時代は　きっと　遅って　来るなどという　ことは　無かったかも

シレマセンテ。
知れませんよ。

A　オソラク　ネァカッタネ　アノ　コロワネー。
おそらく　無かったね、あの　頃はねえ。

B　ハー　ソァーソァー。
はい　そうそう。

A　ソァーシテ　モトワ　アッダコテ　アノ　ユキガ　エッペァ　フッテ　ガッコァーガ
そうして　昔は　あれだよ　あの　雪が　たくさん　降って、学校が

ホレ　クジハジマリガ　デキネァーデサ　(B　ソァーソァー。)　ソァーシテ
ほれ　九時始まりが　出来なくてさ、　(B　そうそう。)　そうして

(B　オソー　ナッテ　キテネ。)　オソ　ナッタ　ドキア　エッペァー　アッタコテー。
(B　遅く　なって　来てね。)　遅く　なった　時は　しばしば　あったさ。

(B　ソァーソァー。)　ソレカラ　ノタノ　アノ　ホレ　タヤノ　ナダレノ(16)
(B　そうそう。)　それから　野田の　あの　ほれ　田屋の　雪崩の

デタノワ　アレ～　エツダッタッケナー(17)。　タイショァー　サン…
出たのは　あれ　いつだったっけねえ。　大正　三…

ナンネンダコァーネ。　アレ　ニガツノ(18)　エッカダッタネー。
何年だろうね。　あれは　二月の　何日だったねえ。

B　オラ　エネァカッタンダ　ネァーダロァカ　ソノ　コロ。
私は　居なかったのでは　ないだろうか、その　頃。

A　ソァーダッタロァーカ。
そうだったろうか。

B　オラ　オボエガ　ネァーガンネ。(19)…エタンダナー。
わたし　記憶が　ないもの。　(いや) 居たのだな。

A　エヤ　エタットァー。(B　エタンダノ。　エタンダ。　居たのだな。　居たのだ。)　ンー　オラガ
いや，居たのだったよ。　うん、　わたしどもが

エタネン　ア　サンネンセーノ　ドキダモン(20)　エラッタコテァー。
××××　ああ　三年生の　時だその　居られたさ。

B　ソァー　セヤ　オラ　ゴネングレァーダッタスケァノァー。
そう　すれば　わたしは　五年生くらいだったからねえ。

A　アレ　フッテ　マエンケ　フッテ　ホーテ　エマミテァーニ　ガッコァー
あれは　降って、毎日　降って、そうして　今みたいに　学校は

デンキガ　ネァーデショァー　ホァーッテ　ランプ　ブラサゲテ　シタノ
電灯が　ないでしょう、　そうして　ランプを　ぶらさげて　下の

キョァーシツ　ゼンブ　ランプ　シタノ。　ソッデ　メーナクテ　マ
教室　全部　ランプに　したの。　それでも見えなくて、　まあ

ニケァーノ　ホァーワ　クロァーク(21)　ネァードモ　オラ　シタダッタスケァ
二階の　方は　暗く　ないけれども、私どもは　下だったから

メーノァーテ　ホァーテ　ジュギョァー　ヤスンダンダ。　アラネー　アノ
見えなくて、　そうして　授業を　休んだのだ。　あれはねえ、あの

ニグワツノ　オソー(22)　ナッテカラ　フリダシタンダ。　ソレマデ　エキワ
二月の　遅く　なってから　降りだしたのだ。　それまで　雪は

ナンニモ　ネァカッタンダ。
少しも　なかったのだ。

B　ソン　ドキ　ナカヤマガ(23)　エッシューカン　ミナガ　アカンカッタンデステネ。
その　時　中山峠が　一週間　道が　明かなかったんですってね。

A　アー　ソァーダッタネー。
ああ、そうだったねえ。

B　ソァーデスッテ。　エッシューカン　ミケガ　アキマセンデシタ。
そうですって。　一週間　道が　明きませんでした。

A　アー　アン　ドキ　アッレ　アノ　アレダコテ　アノ　ヤマダノ　ナダレノ
ああ、あの　時、　あれ　あの　あれだよ、　あの　山田の　雪崩の

(B　ハー。はい。)　ドキ　ジンカガ　(B　ソァーソァー。そうそう。)　エッペァー(24)　ツブレタコテ。
時、　人家が　　そくさん　つぶれたさ。

ニンゲンモ(25)　シンダシネー。　ホテ　ココラカラ　ミンナガ　アノ
人間も　死んだしねえ。　そして　この辺から　みんなが　あの

(B　ソァーソァー。そうそう。)　ホレ　アッダコテ　エキホリ(26)　エッタコテァー。　ハー。
ほれ　あれださ　雪掘りに　行ったさ。　はい。

B　シタリ(27)　アッタ　モンワ　ミンナ　エガレマシタ。
二人(人年の)有った　者は　みんな　行かれました。

A　アラ　オラ　ジンジョァーサンネンノ　ドキダエネ　ハー。
あれは　わたしどもが　暑寄三年の　時ですよ、　ない。

B　サンネンノ　ドキデシタカネー。
三年生の　時でしたかねえ。

A　ダスケァ　オマエサマガタ(28)ー　ママダ　エラッタ　ワケダ。(B エラッタネー。)(29)
だから　あなたがたは　まだ　居られた　わけだ、　居られたねえ。

エラッタ　コァーガクネンニ　(B　ソァーダネー。そうだねえ。)　エラッタ　アー。　アノ
居られた、高学年に　　居られた、ああ。　あの

ドキワ　マエンチマエンチ　ガッコァーエ　エクノガ　ジュージダッタコテ。
時は　毎日毎日　学校へ　行くのが　十時だったさ。

(B　ソァーソァー。そうそう。)　ネー。
ねえ。

B　エキガ　ヘァー　フレバ　ジュージデシタコテネ。　(A　ジュージダッタ。)
雪が　もう　降れば　十時でしたさ。　十時だった。)

ハー。
はい。

A　アレカラネー　エマ　アンマリ　フランネー。　アンガン(30)　コト
あれからねえ　今は　あまり　降らないねえ。　あんな　ことは

ネァー　ネァカネ。
ないじゃ　ないかね。

B　フランガンデショァー　ネ。
降らないのでしょうね。

A　ダッテ　アノ　トシモ　ダドモ　アッテスゼ　アノ　ジブンワ　ニグヮツ
だって　あの　年も　しかし　あれですぜ　あの　時分は　二月

ダガサー　ショァーグヮツガ　マー　ミンナ(31)　イチグヮツダッタ。　(B　ソァーソァー。)
だがさ、　正月が　まあ　みんな　一月であった。　そうそう。)

シトツキオクレダッタンダスケァ　ニグヮツノ　ショーグヮツダスケァーネー
一月遅れだったのだから　二月の　正月だからねえ。

アレ　マダ　イチグヮツノ　サンジュー　イチンチガ　トシトリナンダ
あれは　まだ　一月の　三十　一日が　年取りなのだ

ガ　ソノ　ジブンワ　マダ　ユキガ　ネァカッタンデス。　(B　ソァーデスネ。)
が、その　時分は　まだ　雪が　なかったのです。　そうですね。)

アラ　ニグヮツノネー(32)　エッカカラ　フリダシタカナ　ニグヮツニ
あれは　二月のねえ　何日から　降り出したかな、　二月に

ヘァッテカラ　フッタン〜〜。　アン　ドキワー　マー　アノ　キュ
入ってから　降ったんだ。　あの　時は　まあ　あの

キューゲキニ　フッタンダガネ。　マエンチマエンチ　フッタンダガネ。
急激に　降ったんだがね。　毎日　毎日　降ったんだがね。

マエンケマエンケ　サンジャクグレァーズッ(33)　フッタンダ　アノ　ヒトバンニ。
毎日毎日　三尺くらいずつ　降ったんだ、あの　ひと晩に。

B　ソレマデ　フラン　アノー　ヒトッキリ(34)　アワエガ(35)　アッタソァーデスネ。
それまで　降らない　あの　しばらく　間いが　あったそうですね。

(Aアーソァーソァーソァー。)　デ　ユキガ　カタマッタ　ドコエ　(A　アー。)
(Aああそうそうそう。)　それで　雪が　固まった　所へ　(Aああ。)

フッタスケァー　アッダテ　コーエガンダ(36)。
降ったから　ああなったと　こういうことだ。

A　ア　ソァーダッタネー。　(B　ハー。)　エヤ　コノ　ユキテ　モノガ
ああ、そうだったねえ。　(Bない。)　いや、この　雪と　いうものが

ソァー　ナントカ　マー　ヨノナカガ　ススンデ　アノ　ブンメーガ
そら　なんとか…、まあ　世の中が　進んで、あの　文明が

ススンデルンダガ(37)　クワガクガ　ススンデルンダガ(38)　ナントカ　ナラン
進んでいるのだが、科学が　進んでいるのだが、なんとか　ならない

モンカノー　コノ　ユキガー。　ユキサー(39)　フランケレバ　マー
ものかねえ、この雪が。　雪さえ　降らなければ　まあ

コエラモ(40)　マー　アノ　(B　マー　エー　ドコデスコテ。)　エー
ここらも　まあ　あの　(Bまあ　いい　所ですさ。)　いい

ドコダドモ。　(B　ソァーソァー。)　マー　エッチバン　コマルノワ　コノ
所だけれども。　(Bそうそう。)　まあ　いちばん　困るのは　この

ユキホリ。　マー　ミケミケフミワー(41)　コノゴロワサー　アノ
雪掘りだ。　まあ　道踏みは　この頃はさ　あの

ブルガ　キテ　マー　アノ　ジョセツ　シタリサー　フミカタメテ
ブルドーザーが来て　まあ　あの　除雪　したりさ　踏み固めて

クレルスケァ　マー　ヨー　ナッタドモ　ユキホリワ　ヨァー　エジャー
くれるから　まあ　良く　なったけれども、雪掘りは　容易でよ

ネァーコテ　ハー。
ないさ、　はい。

B　〜〜ヨァーエジャ　ネァーデスネ。
　　容易では　ないですね。

A　ソレヨリ　アノー　ミンナ　ホレ　デカセギシテ　シマウスケァー
　　それより　あの　みんな　ほら　出稼ぎして　しまうから

アレデスコテ　オンナショバッカン　ナッテット　ヤネノユエノ　アタマエ(42)
あれですさ　女衆ばかりに　なっていると　屋根の上の　頭(棟)に

アガルノガ　ネァー〜〜　ドァーショァーモ(43)　ネァーンダ。（B　ハー。はい。）
上がる者が　無い〜〜　どうしようも　ないのだ。

ソァーシテ　マタ　ハツユキン　ドキャ　オッカネァースケァネー(44)。（B
そうして　また　初雪の　時は　こわいから　ねえ。

オッカネァスケァ。シタガ　アエテマススケァネー(45)。）ハー。ソァーシテ　エマ
こわいから。下が　明いていますからねえ。）はい。そうして　今

クズヤデ　ホリオトスタッテ　サスガ　タッテルデショァー(46)　ミンナネ
かやぶき屋根で（雪を）振り落とすとしても　扠首が　立っているでしょう、　みんな　ね

ドコノ　エーモネー。ダカラ　ナカナカ　ヨァーエダ　ネァーンダ
どこの　家もねえ。だから　なかなか　容易では　ないのだ、

オッカノァーテ　ハー。マー　サンメーターグレァーノ　ユキダケヤ
こわくて　はい。まあ　三メーターぐらいの　雪なら

エードモ　マー　ヨンメーター　コセバ　ヘァー　ドァーショァーモ
いいけれども、まあ　四メーターを　越せば　もう　どうしようも

ネァーコテー。（B　〜〜ネー。ねえ。）ハー。
ないさ。　はい。

B　マー　ホトンド　ユキホリデ　ソトネ　エネァケ　ナリマセンスケネー。
　　まあ　ほとんど　雪掘りで　屋外に　居なければ　なりませんからねえ。

A ソァーソァーソァーソァー。 マー オーユキノ ドキワ ヨンジューンチグレァー
そう そう そうそう。 まあ 大雪の 時は 四十日ぐらい

ツズクスケァネー エキホリガー。
続くからねえ、 雪掘りが。

B ソァーネー。
そうねえ。

A カンジキガ ミンーナ ヘァー コワレテ シモァーテ (B ハクガンガ
かんじきが みんな もう こわれて しまって はくのが

ネァー。) ハクノガ ネァー ア。 エマ マー ホレ ワリアエニ アノ
ないっ。 はくのが ない ああ。 今は まあ ほら 割合いに あの

ンー アマゴガ (B ン ソァーソァー。) ヨー ナッタスケァ エードモ
んん 雨具が うん そうそう。 良く なったから いいけれども

(B ソァーデスネ。) オラ ドキャ アレダッタコテ モト ムカシヤ
そうですね。 わたしどその時は あれだったさ、 元 昔は

(B ミノト(48)) ホレ ミノトネ (B カサダ。(49)) カサダスケァー
蓑と ほら 蓑とね 笠だ。 笠だから、

フブキン ナレバ コラ マッテ(50) サブテ コゴエシムヨァーダ。(51)
吹雪に なれば これは ほんとうに 寒くて 凍え死ぬようだ。

B ソレ ミンナ シンナカエ(52) モッテ ヘァッテ (A モッテ ヘァッテネ。)
それを みんな 囲炉裏に 持って 入って、 もって 入ってね。

カワカシテ マタ アシタダ。(53)
乾かして また あすだ。

A ソァーソァー。 ソァーシテ ミンナ アノ ナガグツ アノ フカグツ(54)
そう そう。 そうして みんな あの あの 深靴

(B フカグツ。) ツクッテネー ホァーテ アレダコラ (B ナンゾクデモ
深靴 作ってねえ、 そうして あれださ、 何足でも

シダナエ。(55)
火棚に。

シダナエ　ブラサゲッタ。　ソシテ　ソノ　マー　アノ
火棚に　ぶら下げていた。　そして　その　まあ　あの

フカグツノ　ナカ　ワラ　ホレ　エレ(×入れ)　(B笑)　エンネテソァー…(56)。
深靴の　中に　藁を　ほら　　入れないでさ…。

ソァーテ　オラモ　アノ　アレ　シタ(57)　モンダガ　アノ　オレア
そうして　私どもと　あの　あれ　した　ものだが　あの　わたしは

アシノ　ギョァーサガ(58)　ワリー　ワケデ　ネァードモ　(B(笑)マカ。)
足の　行作が　悪い　わけでは　ないが　　曲が…。

マガルンデネ　フカグツガネー。　(B　ソァーソァー。)　アー。
曲がるのでね、深靴がねえ。　　そうそう。　ああ。

B　トンデモネァー　ドコ　ハイテ(59)　ハー。
とんでもない　何を　履いて、はい。

A　ソァーソァーソァーソァー　ヨコッチョァー　ハイテ。　ソレデモ　マー
そうそうそうそう。　横側を　履いて。　それでも　まあ

アレダコテ　アノ　ヨキホリニ　アノ　オマエサンガタモ　ツ(×っ)
あれそさ　あの　雪掘りに　あの　あなたがたも

ツマガケテノ(60)　ハカッタデショァーネ。
爪掛けというのを　履かれたでしょうね。

B　ガッコァーエネ　(A　ハー。)　ハー。
学校へね。　　はい。　はい。

A　ツマガケネー。
爪掛けねえ。

B　ハー。
はい。

A　ハー。　ソレカラ　アノ　ダイモケナンカニ(61)　デンシャホレ
はい。　それから　あの　大物などに　電車は　ほら

オソカケ[62]。

おそかけ。

B　オソカケ。

おそかけ。

A　ハー　オソカケ　ズイブン　アエシタコテ　ツカータコテ　。

はい、　おそかけを　ずいぶん　あれしたさ、　使ったさ。

B　アレ　オソカケッタッテ　フツカモ　ハケバ　キレッチモァーシ。

あれは、　おそかけといったって　二日も　履けば　切れてしまうし。

A　ソァーソァーソァーソァー。　ッダドモ　アレガ　アノ　マタ　アノ　ワランジト

そうそうそうそう。　しかし、　あれが　あの　また　あの　わらじと

アラ　ナンダ　(B　ナガグツ　ハー。)　フカグツト　チゴァーテネ

あれは　何だ、　(B　長靴だ、　はい。)　深靴と　ちがってね、

アシノ　ケァーリガ[63]　エー～～　(B　ハー。)　ダカラ　ソノー　ドァーチュー

足の　反りが　いい～～。　(B　はい。)　だから　そのう　道中を

シルニャネー　ミチオ　アルクニャー　マタ　アレノ　ホァーガ　エーンダネ。

するにはね　道を　歩くには　また　あれの　方が　いいのだね。

ダエモケ　シクナンテ　ドキモ　エーシサー。

大物を　引くなどという　時も　いいしさあ。

D　ハー。

はい。

B　ガッコァーエワ　アシャノ[64]　アレ　ハエテネー　クツ[65]　ハエテ　(A　ハーハー。)

学校へは　～～～　あれを　履いて　革靴を　履いて　(A　はいはい。)

ココエ　アノ　アレ　ナンデァーナー　(笑)　(A　シガラ……[66])　シガラ

ここに　あの　あれを　何だったかなあ、　(A　しがら)　しがら

(笑)[67]　ン　アレ　ハエテ　ガッコァーエワ　カヨータコテー　。　(A　ソァー

うん　あれを　履いて　学校へは　通ったさ。　(A　そう

ソァーソァー。) アノ コロワ エマヨリワ エキャ フッタンデスコテネー。
そうそう。) あの 頃は 今よりは 雪は 降ったのですよねえ。

A フッタヨァーナ キガ シマスネー ハー。(B ソァーデス本。) エマ
降ったような 気が しますねえ、 はい。(そうですね。) 今は

アンゲァ(68) サンジューンチモ ツズケテ エキ フルヨァーナ コタ
あんなに 三十年も 続けて 雪の 降るような ことは

アンマリ ネァーヨァーダ ネァカネー。(B 〜〜ネ。) アノ ジブンワ
あまり 無いようでは ないかねえ。(……ね。) あの 時分は

アノ シトバン ニシャク サンジャク フルナンカ ヘー (B ヘーキデシタ。)
あの ひと晩に 二尺 三尺 降るなど ×× (平気でした。)

ヘーキ シジュー アッタガンネネー(69) ハー。 ホーッテ アノ ソァー
平気、 始終 あったものねえ、 はい。 そうして あの それ

フツーノ カンジキジャ ダメデサー スカリッツ(70)(B スカ〜〜。) モァー
普通の かんじきでは 駄目でさ、 すかりというのを(すか……。) もう

シトツ カケタコテネ (B ソァーソァー。) アノ コンゲァ(71) キノ
ひとつ かけたさね。(そう そう。) あの こんな 木の

デッケァー (B ハー。) ワッカオネー(72) ハー。 アレ アノ オラ サイショ
大きい (はい) 輪をねえ、 はい。 あれを あの わたしは 最初

アレ カケッコト 〜〜〜〜(73) クビー カケテネー コァーコァーコァーコァー(74)
あれを かけること 〜〜〜〜 頸に かけてねえ、 こうこうこうこう

シテ……。(B ハー。) ソノ ホァーガ ラクダテアンデネ。(B ソァーソァー。)
して……。(はい。) その 方が 楽だというのでね。(そうそう。)

ホァーシテ アレデスコテ エワムケァカラ(75) ホレ オリイノ(76) ガッコァーノ
そうして あれですさ、 上向から ほら 折居の 学校の

ミチツケガ(77) マエアサゲ(78) デルノデ アノ ソレア コイデ(79) アエク(80)
道ばけが 毎朝 出るので あの それが 漕いで 歩く

ソノ　アトカラ　マー　オラガ　アノ　デッケァ　コドモカラ　エッタ
その　後から　まあ　わたしどもが　あの　大きい　子どもから　行った

モンダコテネー。
ものださねえ。

B　ソァーデスネー。
そうですねえ。

A　エマ　ソレ　マーマー　ブルガ　キテ　クレッスケァー　マー　ヨクワ
今は　それ　まあまあ　ブルドーザーが　来てくれるから　まあ　良くは

ナッタンダドモ…。
なったのだけども……。

B　ヨク　ナリマシタコテー。
よく　なりましたさ。

A　ハー。
はい。

D　ユキオロシニ　シャベルガ　ハヤッタノワ　イツゴロデスカ。
雪降ろしに　シャベルが　はやったのは　いつ頃ですか。

B　ハー。
はい。

A　シャベルワー　アレモ　ダイブ　オソイワネ。　ミンナ　コァー　マ
シャベルは…　あれも　大分　遅いよね。　みんな　こう　まあ

オラ　エカン(81)　ナルマデ　コンスキ(82)ダッタスケァネー。
私たち　かなり年になるまで　木鋤だったからねえ。

B　コンスキデシタスケァネー。
木鋤でしたからねえ。

A　シャベルノ　ハヤッタノワ　アルニャ　アッタドモ　ココエラデ　ツカウヨァーン
シャベルが　はやったのは　有るには　有ったけども　ここらで　使うように

ナッタノワ
なったのは、

B　ユキガ　ムコァーエ　エカンスケァ　ダメナ　モンダナンテテネ
雪が　向こうへ　行かないから　だめな　ものだなどと言ってね、

A　ソァーソァーソァーソァー　ハー。
そうそうそうそう、　はい。

B　ツカワンカッタンデスケァー。
使わなかったのですから。

A　アレワネー　ナンダロァーノー(83)。
あれはねえ、　あれだろうねえ。

B　マー　オラガ　ガッコァージダエワ　コンスキバッカデシタ。
まあ　わたしどもの　学校時代は　木剣ばかりでした。

A　コーンスキダッタネー。（B ハー。ない。）ハー　アー　シャベルノ　ハエッテ
木剣だったねえ。（B はい。ない。）はい、ああ　シャベルの　入って

キタノワ　ズット　オソー　ナッテカラダネ。
来たのは　ずっと　遅く　なってからだね。

B　オソー　ナッテカランノデショァーカネー。
遅く　なってからののでしょうかねえ。

A　ハー　オソー　ナッテカラダノー　ハー。ダ(84)　マタ　アノ
はい、遅く　なってからだねえ　はい。しかし　また　あの

コンスキテノワ　マタ　アラー　アレデスモンガ(85)　アノ　ラクダシ
木剣というのは　また　あれは　あれですから、　あの　楽だし、

ムコァーエ　ナゲンニワネー（B ～～～～～～。）ヨケー　エクエニ(86)
遠くへ　投げるにはねえ、（B ～～～～～～。）余計　とぶから、

ハー。マタ　エキテノワ　ホレ　ウエカラ　オトスノワ
はい。また　雪というのは　ほら　上から　落すのは

ハヤェードモ[87] シタヲ[88] スケルノガ ヨァーエデ ネァー。(B シタヲ スケルノガ ヨァーエダ ネァー。)
早いけれども 下を 空けるのが 容易で ない。(B 下を 空けるのが 容易では ない。)

ダッケァー ヤッパシ テマー トッテモ コンスキノ ヨァーナンデ スースーット ムコァーエ ナゲタ ホァーガ…[89]。
だから やはり 手間を とっても 木鋤のような もので すうすうっと 向こうへ 投げた 方が…。

(B ナゲタ ホァーガネ。) ハー。 アラ アノ タエラナ エダネ コァー エガ ツイテルッケ ナゲズレァーヨァーナ モンダドモ ナレルト
(B 投げた 方がね。) はい。 あれは あの 平らな 板に こう 柄が 付いているから 投げにくいような ものだけれども 馴れると

ユート アレ マタ ワリアエニ ハヤェー モンデスワネー ハー。 コンスキ オモニ アッダコテ アノ モトワ ホレ エタヤダッタコテー
いうと あれは また 割合いに 早い もんですよねえ、 はい。 木鋤は 主に あれださ あの 基は ほら いたやだったさ、

コッケワネ (B ハー。) エタヤトカ[90] ブナデ[91] コシャータ[92] (B ブナデネー。)
こちらはね、 いたやとか ぶなで こしらえた、 ぶなでねえ。)

ハー コシャータモンデスコテ。 ドコノ ウケデモ コッレ コンスキノ ヨンケヨァー ヤ ゴケヨァーワ ミンナ モッテタコテネー。
はい、 こしらえたもんですさ。 どこの 家でも これで 木鋤の 四丁や 五丁は みんな 持っていたよねえ。

B ソァー ソァー ソァー ソァー。
そうそうそうそう。

A エマワ アンナ コンスキナンテ ツコァール[93] ウケワ スクノァーテ ホトンド シャベルニ ナリマシタ ハー。
今は あんな 木鋤など 使われる 家は 少なくて ほとんど シャベルに なりました、 はい。

B　シャベルニ　ナリマシタスケァネー。
シャベルに　なりましたからねえ。

A　モトノ　ガッコァーノ　エキホリナンテ　モンワ　ネァカッタ(94)　ネカ。　アラ
昔の　学校の　雪掘りなどという　ものは　なかったではないか。　あれは

ダレカ　タノンデ　ムラデ　タノンデ　ムラデ　(B　ンー　ソラ
誰かを　頼んで　村で　頼んで　村で　うん　それは

ムラデ　タノンダッタンデ　ネァーデショァーカネ。　ヘァー　ガッコァー
村で　頼んだのでよ　ないでしょうかね。　もう　学校の

エキホリニンソク…。(95)　タノンデ　ヤッタンダネー。　アンナ
雪掘人足…。　頼んで　したのぞねえ。　あんな

エキワリナンテッテ(96)　エマミテァーニ　ミンナ　アノ　カクブラク
雪割りなどといって　今みたいに　みんな　あの　各集落

コァータエゴァータエニ　エキホリ　コエナンテ　ネァカッタヨァーダネー。
交代交代に　雪掘りに　来いなどということは　無かったようぞねえ。

B　ネァカッタデスネ。ハー
無かったですね。　はい。

D　ソレデ　コァーガクネンガ　テツダエ　シマシタ。　(A　アコァーガクネンガ
それで　高学年が　手伝いを　しました。　ああ、高学年が

テツダエ　シタネ。)　センセーガ　ンナ　デテネー。　(B　ソァーソァー。
手伝いを　したね。　先生が　みんな　でてねえ。　そう そう。)

A　センセー　デテ…。　エマ　マー　コドモナンカ　アノ　(Dツカエマセンシ
先生が　出て…。　今は　まあ　子供などの　使いませんし。

。)　ツカワンネァースケァネ(97)　ミンナ　～～ドモネー。
使われないからね　みんな　～～けれどもねえ。

B　ガッコァーノ　エキホリテガンワ　ニンソクデ　ヘァー　キマッテタンダノ。
学校の　雪掘りというのは　人足で　もう　決まっていたのだね。

A　キマッテタ。　ダドモ　エマモネー　アノネー　ガッコァーノ　エキホリデ
決っていた。　しかし、　今もねえ　あのねえ　学校の　雪掘りで

マー　アノ　ネンニ　ナンクァエモ　マワッテ　クルガサー　アノー
まあ　あの　年に　何回も　回って　来るがさ　あの

アッダエネ　アノー　コァーシャノ　ア　キョァーシツノ　～ナンカ　ニカエ
あれでよ、　あのう　校舎の　ああ　教室の　など　二階の

タケァノ　オッカネァーエネ　(B　オッカネァー。)　アー。　ソレデ　アノ
高いのは　こわいでよ、　(B　こわい。)　ああ。　それで　あの

アタンデモッテサ　アノ　ナダレドメア　シテ　アルロモサ　アレ
トタン板でさ、　あの　雪崩止めは　して　あるけれどもさ、　あれは

オッカネァーデスデ。　(B　スベルスケァ。)　ア　オンナショモ　セーッタガデ(98)
こわいですぜ。　(B　すべるから。)　ああ、女性も　言ったので(あって)、

エヤ　ワケァーショデモ　オッカネァワネ　ハー。　(B　～～　スケァ。)
いや　青年でも　こわいわね、　はい。　(B　～～　だから。)

コトニネー　ハツヨキン(99)　ドキトカサー　アメアガリノ　ユルンダ
殊にねえ、　初雪の　時とかさ　雨上がりの　ゆるんだ

ドキワ　(B　ストーント。)　サート　ワレテ　オチルスカ
時は　(B　すとうんと。)　さあっと　割れて　落ちるから

オッカネァサネ。　マー　コレカラ　アーユー　コァーキョァー～ノ(100)
こわいですよ。　まあ　これから　ああいえ　公共の

タテモンワ　ヨァーエジャ　ネァーガネ。　ワカエショガ　エランネァシ　(B
建物は　容易では　無いがね。　青年が　居られないし、　(B

ワカエショガ　ホトンド～。)　オンナショバッカン　ナルスケァネー　ハー。
青年が　ほとんど　。)　女性ばかりで　なるからねえ、はい。

キョネン　アタリダッテ　サンクァエグラエ　ホッタロァーカ　ニクァエ……。
去年　あたりだって　三回ぐらい　掘ったなろうか　二回……。

B　ヒナカズツダスケァ(101)　サンクワエグレァー　キタンダ　ネァカナ　ハー。
半日ずつだから　三回ぐらい　来たのでは　ないかな、はい。

A　サンクワエ　グレァー　キタカネー。
三回ぐらい　来たかねえ。

B　ハー。
はい。

A　ダエブ　キマシタコテ。　アレガネー　アノ　マー　アノー
大分　来ましたさ。　あれがねえ、あの　まあ　あのう

チューガッコァーノ　タエーックワンノ　ホァーモ　アッレスドモ(102)　マ　ショァーガッコァーノ
中学校の　体育館の　方も　あれですけれども、まあ　小学校の

タエーックワンワ　アンマリ　アガランデ　エースケァネ　(B アガランデ…。
体育館は　あまり　上がらなくて　いいからね、　あがらないで…。)

アラ　マー　エマノ　ツクリダスケァネ。　ソレカラ　ショァーガッコァーノ
あれは　まあ　今の　造りだからね。　それから　小学校の

アノ　アレデスコテ　アノー　キョァーシツノ　ホァーワ　アラ　マー
あの　あれですさ、　あのう　教室の　方は　あれは　まあ

アノ　タエラダト　エーガネ　タエラダスケァ　ワリアエ　エードモネ
×××××　××××
あの　平らだと　いいがね、　平らだから　割合いに　いいけれどもね、

(B　ソァーデスネー。)　チューガッコァーノネー　(B　アコワ　ターケァー
そうですねえ。)　中学校のねえ、　あそこは　高い

デススケァネー。)　キョァーシツワ　ターケァーカラ　オッカネァーサネ
ですからねえ。)　教室は　高いから　こわいですよ、

ハー。
はい。

B　ネー。
ねえ。

A　コノ　ユキテノガネー　マタ　ナントカ　ナレヤ　エードモ　マー
　　この　雪というのがねえ、　また　なんとか　なれば　いいけれども、　まあ

エチネンニ　アレデショァー　コノ　マー　ユキデ　ツイヤス　ロァードァー
一年に　あれでしょう、　この　まあ　雪で　費す　労働

ジカンテノモ　ソァートァーナ　モンデスデー　（B　ソァーデスネー。）
時間というのも　相当な　ものですぜえ、　（B　そうですねえ。）

アー。　マー　オラナンカモ　コッデ　ユキホリサ　ダレカ　マカッテ　(103)
ああ。　まあ　私なども　これで　雪掘りさえ　誰かが　引き受けて

クレレバ　アノ　フユウチ　ドッカエ　カセギニ　エカレッドモ　（B笑）
くれれば　あの　冬うち　冬うち　どこかへ　稼ぎに　行かれるけれども

マカリテガ　ネァースケァー　（B　マカリテガ　ネァー。）　シカタネァー
引き受け手が　無いから　（B　引き受け手で　ない。）　仕方なく

ウチニ　エルヨァーナ　モンデ…　（B　ソァーデスネ。）　ハー。　ソラ
家に　居るような　もので…　（B　そうですね。）　はい。　それは

マタ　エッテ　アッレスコテ　フユウチニ　カネ　チットグレァー　モロァーテ
また　行って　あれですさ、　冬うちに　金を　少しぐらい　貰って

キタッテ　ガンギ(104)　ツブシタダノ(105)　ゲンカンガ(106)　メァー　ノメッタダノト
来ても、　雁木を　潰したなどの　玄関が　前に　のめったなどのと

エーバ　ソラ　オメァー　カネ　モロァーテ　キタタッテ　ドァーニモ
言えば、　それは　あんた　金を　貰って　来ても　どうにも

ナリマセンスケァネー　ハー。　マー　コノ　ユキノ　マー　アノ
なりませんからねえ。　はい。　まあ　この　雪の　まあ　あの

デ(×)　ソンシツワ　オーキーネ　デッケァーネ。
　損失は　大きいね、　でかいね。

B　デッケァーデスネ。
　でかいですね。

A　ハー，
はい。

D　ソァーデスネ。
そうですね。

A　コレカラ　マー　エーノ　コァーゾァーオ　マー　ケァーネァケレバ　ワケァー
これからは　まあ　家の　構造を　まあ　変えなければ　若い

モンガ　マー　エネァーテ　コトニ　ナレバ　ナオサラダガ　マー
者が　まあ　居ないという　ことに　なれば　なおさらだが、　まあ

ケァーネァケラ　ナンガ(107)　マー　オロシトカ(108)　ツノモン(109)　マー　オラ
変えなければ　ならないが、まあ　「おろし」とか　「つのもん」　まあ　わたしどもの

エンデ(110)　ツノモン　(B　オロシ。)　ユードモ　ソエ　モン
あたりで　「つのもん」と　(　おろし。)　言うけれども、そういう物を

モガンケラ　トッテモ　ヤリキンネァドモ　マー　モグッタッテ　エマ
もがなければ　とても　やりきれないけれども、まあ　もぐといっても　今

ユータヨァーネ　トーフヤ　ダイコン　キルヨァーネ　スパント
言ったように　豆腐や　大根を　切るように　すぱんと

キラレレバ　エードモ　アト　フサゲルニ　ケーヒヤ　カカルシサ
切られれば　いいけれども、あとを　塞ぐのに　経費は　かかるしさ、

ヨァーエダ　ネァーデスコテ　ハー。　ソレト　ユキノ　タメネ　エタム
容易では　ないですさ、　はい。　それと　雪の　ために　いたむ

ヤネネー　コノ　マー　ホ×　アノ　アッラコテ　シューリヒモ　リァートァーナ
屋根ねえ，この　まあ　あの　あれだ　修理費も　相当な

モンデスデ。　(B　ネー，)　エマ　エッケバン　タカク　ナッタノワ
ものですぜ，　(　ねえ，)　今　いちばん　高く　なったのは

コノ　カヤブキダスケァネー。　(B　ソァーデスネ。)　コレワ　マー
この　萱葺きだからねえ。　(　そうですね。)　これは　まあ

カヤジタエガ　ホレ　アノ　アッデスユテ　アノ　テガ　ネァースケァ
茅自体が　ほら　あの　あれですよ　あの　人手が　無いから、

タランスケァ　ターケァー　(B ハー。)　ドコエ　モッテキテ　コンダ
忙らないから　高い　ところへ　こんとは

オメァサン　ジンケンヒガ　ショクニンノ　テガ　タコァー　ナッタデショァー。
あんた　人件費が　職人の　手間が　高く　なったでしょう。

ダカラ　トテモジャネァーガ　ナカナカ　コレデ　ヨァーエジャ　ネァーデス。
だから　とてもじゃないが　なかなか　これで　容易では　ないですよ。

オメァサンタ　ソレデモ　マー　シタノ(111)　ホァー　アノ　シモオ
あんたの所は　それでも　まあ　下の　方　あの　しもやを

モガッタスケァー…。
もかれたから…。

B　ハー　シモオ　モエダスケァ　ズット　アッデスドモネ。(112)　(A コレカラ これからは
はい、しもやを　もいだから　ずっと　あれですけれどそれね。

アンダカラ　ユキニ　タエスル…。)　オラ　ドコワ　ホレネ
だから　雪に　対する…。　わたしの所は　ほらね、

グルグルーット　オロシガ　オレテ(113)　エルデショァー。　(A ハーハー。ほいほい。)(笑)
ぐるぐるっと　「おろし」が　下りて　いるでしょう。

A　ア　ソァー　ア　ソレガネ　ショァーショァー　アノネ　メンセキガ
ああ　そう、ああ　それがね、　少々　あのね　面積が

デッコァーテモネ　ソノ　ツノモンガ　ナケレバ　(B ナケレバ。なければ。)　エーンデスヨ。
大きくてもね、　その　「つのもん」が　なければ　いいんですよ。

ソァー　セバネー(114)　アノ　ホレ　エキホリガ　ラクダ。
そう　すれば"ねえ　あの　ほら　雪掘りが　楽だ。

B　オラガ　オロシカラ　アレノ　コノ　ユッラノ(115)　アワエガ　オラガ
わたしの家の「おろし」から　あれの　この　小面の　間が　わたしの

セーヨリ　ターケァーデスンガ。
背より　高いですから。

A　アーアー　ソァーネ。
ああ ああ　そうね。

B　ソァーシテ　ソレダケ(116)　ネァー　モンニ　ナレバ　(A アーアー。)　ズット
そうして　それだけ　無い　物に　なれば　(ああ ああ。)　ずっと

ラクデスコテー。
楽ですさ。

A　コレオ　コノ　ヤネオ　カエゾァーシテ　マー　エマ　ホレ　アノ
これを、この　屋根を　改造して、　まあ　今　ほら　あの

エロエロ　マ　アノ　オー　エキ　ホルニ　ヨァーエジャー　ネァーテノデ
色々　まあ　あの　おう　雪を　掘るのに　容易では　ないという

モッテ　アノ　クズヤネ　アタン　カブセルノガ(117)　ハヤッテ　クルテ
ので、あの　茅屋根に　トタンを　かぶせるのが　はやって　くれて、

コレガ　マー　アノ　カネモ　マー　ソァートァー　カカルシ　マー
これが　まあ　あの　金も　まあ　相当　かかるし、まあ

ジョアジョァー　アタリマデ　マー　ヤッテモ　エキガ　スクネァースケサ
上条　あたりまでは　まあ　やっても　雪が　少ないからさ

エードモ　ウカワデ　コッデ　ドァー　ユー　モンダカ(119)。　ウシロデモ
いいけれども、鵜川では　これで　どう　いう　ものだか。　後ろでも

サガッテ　エル　シェーワ　エードモ　ソァーデ　ネァケラ　コンドワ
下って　いる　家々は　いいけれども　そうで　なければ　こんどは

コノ　シタエ　オッテ　クル　ユキデ　ナカナカ　コレデ　コレ
この　下へ　落ちて　来る　雪で　なかなか　これで　これを

ヌケルニ(120)　ヨァーエジャ　ネァート(121)　モーテー。
のけるのに　容易では　ないと　思って

(122)
B　ソァーシテ　ナジョァーネカ　カテァーデスト。(ナ　アソァーデショァー。)
そうして　大変　堅いそうです。(ああ　そうでしょう。)

オッタ　ユキワ　カテァーデスト。
落ちた雪は　堅いそうです。

A　ウエカラ　オチルガンネ　ソァーデスコテー。　ソッデ　タショァー　ホレ
上から　落ちるもの　そうですさ。　それで　多少　ほら

トケテ　コッダ　ホレ　アノ　スイブンガ　シタエ　オッテ　クルカラ
溶けて　こんどはほら　あの　水分が　下へ　落ちて来るから

ソレガ、コンダ　コールスケァ　ソラ　マー　カテァー　ワケデスコテ
それが　こんどは　氷るから　それは　まあ　堅い　わけですさ、

(B　カテァーデスト。)　アー。
(堅いそうです。)　ああ。

(123)
B　ダスケァー　ナゼガ　ツケバ　ソレクサ　ヨーサリデモ　ホランケ
だから　なぜれが　突けば　それこそ　夜でも　掘らなければ

ナラン。
ならない。

A　ハーハー。
はいはい。

(124)
B　マー　ミズノ　キク　ドコワ　エーデショァードモネ。
まあ　水の　利く　所は　いいでしょうがね。

A　ハーハー。ソレデ　グルグルト　マー　アタンネ　シテ　ヘーキンニ
はいはい。それで　ぐるぐると　まあ　トタンに　して　平均に

(125)
オチルヨァーニ　シネァケラ　エエーモ　カシガル。
落ちるように　しなければ　家も　化頁く。

B　～～～ネー。
ねえ。

A　ソラネー　ユキノ　チカラテヤ　モノスゴーイ　チカラ　アノ
それはねえ　雪の　力といえば　ものすごい　力　あの

ジューリョァー　アルンデステ。　オラー　アノー　オレヤネー　アノー
重量が　あるんですよ。　わたしは　あのう、　わたしはねえ　あのう

マー　アンマリ　カラダガ　ジョァーブデ　ネァンダスケァー　ニサンネン
まあ　あまり　体が　丈夫で　ないものだから、　二三年

ホランデ　オイタラデスネ　～ダ～　ウシロノ　ホ　ホッタガ　マエノ
振らないで　おいたらですね、　後ろの　方を　振ったが　前の

ホァーワ　エーヨァ　エーヨァッテ　オッタラ(1:26)　エーガ　マッテ　カシガッチマッタ。
方は　いいわ　いいわといって　いたら　家が　まるで　傾いてしまった。

(Dハー。　はい。)　モノスゴー　カシガル。　ダカラ　ヤッパシ　アノネー
ものすごく　傾く。　だから　やはり　あのねえ、

オメタ　アタン　カブセット　シテワ　ゼンブ　カブセネァートユートネー
トタンを　かぶせるならば　全部　かぶせないとねえ、

カタッポァー　アタン　カブセルト　オチルデショァー　カブセネァー
片方　トタンを　かぶせると　おちるでしょう、　かぶせない

ホァーワ　オチネァーカラ　カナラズ　エーワ　カシガリマス。　(B
方は　落ちないから　必ず　家は　傾きます。

ソァーデショァーネー。)　ハー　アレ　ソァートァーノ　ジューリョァーデスカラネー。
そうでしょうねえ。　はい、あれは　材木の　重量ですからねえ。

マー　コッテ　ココニ　トシヨリンバッカン　ナッテモ　マー　エラレルヨァニ
まあ　これで　ここに　年寄りばかりに　なっても　まあ　居られるように

シルニヤ　マー　ヤネサエ　モランケラ　エラレンガネ。　ダカラ
するには、　まあ　屋根さえ　洩らなければ　居られるがね。　だから

ソァー　シンニャー　ユキニ　タイスル　ヤネオ　マー　ドァーユー
そう　するには　雪に　対する　屋根を　まあ　どういう

(127)
フーニ　シルカ　マー　イーワ　イマ　ユータヨァーニ　ツノモン
風に　するか、まあ　家は　今　言ったように　「つのもん」

ソーエ　モンワ　モエデ　シモァーテ　ナルベク　アノ　ウチン
そういう　ものは　もいで　しまって　なるべく　あの　家の

アノー　ヤネオネ　ウエエ　アガランデ　エーヨァーネ　トシ　トッテ
あのう　屋根をね　上に　上がらないで　いいように、年を　とって

カラ　マー　ヤネノ　ウエ　アガレナンテッタッテ　トテモ　トテモ
から　まあ　屋根の　上に　上がれなどと言っても　とても　とても

コラ　オメァサン　アガラレル　モンジャ　ネァー　ハー　(B…ネー。)　タエラナ
これは　あんた　上がられる　ものでは　ない、はい、(ねえ。)　平らな

アガラレル　モンジャ　ネァー　ハー　(B…ネー。)　タエラナ
上がられる　ものでは　ない、はい、(ねえ。)　平らな

(128)
ドコサモッテ　オメァサン　(B笑)　アノ　タガタガ　シテンノガ
所さえも　あんた　あの　たがたがと　しているのが、

オマエ　ヤネ　アガッテ　ユキ　ホレナンテ　エーバ　トテモ　デキネァガ
あんた　屋根に上がって　雪を　掘れなどと　言えば　とても　できないが、

ソァー　セバ　タショァー　ワケァー　ショガ　エナクテモ　アル　テードワ
そう　すれば　多少　若い　人が　居なくても　ある　程度は

マ　ガンバッテ　エラレンダドモ　アノ　ヤーネノ　ユキガ
まあ　がんばって　居られるのだけれども、あの　屋根の　雪が

(129)
ホランネァーヨァーン　ナレバ　コレー　ドァー　シタッタッテ　エランネァテユト。
掘られないように　なれば　これは　どう　したところで　居られないさ。

マ　オエオエ　ユレカラ　マー　アノ　アタン　カブセル　クズヤニ
まあ　おいおいと　これから　まあ　あの　トタンを　かぶせる、茅屋に

アタン　カブセル…　コレカラ　マー　エマ　ホァーボァーデ
トタンを　かぶせる…　これから　まあ　今　方方で

ヤッテルスケァ　ヤルヨァーニ　ナルト　オモーネ。　マタ　アタンノ
やっているから　やるように　なると　思うね。　また　トタンの

ホァーガ　ヤスイ〜〜ハー。　カヤ〜〜ダイタイ　エマネー
方が　安い、　はい　茅　大体　今はねえ

カヤ　カイテァータッテ　ネー　カヤ　ネァーデショァー　ダイタイ　カラン
茅を　買いたくても　ねえ　茅は　無いでしょう、大体　刈らな

モンダモン
いものだから

注記

1. ヒラバ　山間部に対して平野部を言う。

2. ヤマンナカデ…　次に「仕方がない」というような心持の表現が省略される。

3. ダケ［dake·］　ツァーダスケァ＞ダスケァ＞ダッケ＞ダケと変ったか。

4. ヨー［jo:］　せまい［0］　よくのウ音便。

5. アッラコテ　アレダコトイの変化。あれださ、なんださの意。

6. この辺界ではとらえにくい。

7. タイシタ　副詞　たいして。程度の甚しいさま。後ろに打消表現を伴なう。ここではオモワンネを修飾する。本県岩船郡や秋田県福島県宮城県島根にあるように、タイシタが肯定の語句を修飾することはない。またタイシテという形もあるがタイシタより用いられることが少ないという。また連体詞タイシタもある。タイシタユターネァー(たいしたことはない)

8. シミズダニ　清水谷　鉢栃から3Km鶴川の下流にある大字名。鶴川小学校の学区から野田地区の学区に変った。

9. カンジキ　樏　雪の道・雪の山野を歩く時はき物の下に結びつけて雪中に脚が埋まらぬ様にしたり、あるいは雪を踏みかためて雪上の道をつけたりする、木・竹製の小形の輪状の用具。

10. カクマキ　角巻。毛布の防寒具。ここでは四角の毛織物を三角に二つに折り、折り目になわを通し、肩から胴をおおい、頸の所でなわ

を結ぶ。後妻ら女性が用い、安全ピンで前をとめる。刈羽刈内でマワシカッパとも言うという。

11、ユウェ　ウエ（上）の変化。「植える」もエエルとなる。ユウェ（静岡県）エウェ（新潟県北魚沼郡湯沢町・富山県・島根県）エエ（岐阜県・静岡県・志摩紀州・和歌山）

12、ミノボシ〔minobosi〕簑帽子　タツノケ（和名こしのほんもんじすげ）またはクゴ（和名不明）で編み、頭と胴をおおう。長さ1m余りの冬の雨具。その裏側は精巧に編まれた特別の模様がある。近海の寄港地として現在も作られ使用されている。

13、テンボクラ　木・山などの頂上、ここでは体の頂上つまり頭の意。テンボク（滋賀県で頂上）。餅花ではテンボ・テッペンとも言い、木のウラ（うれ・梢）はシンボクとも言う。ラは接尾語。

14、ミチツケル　雪の積ったのを踏みつけて通れるようにすること。ミチ(オ)フムともいい、名詞にユキフミ（雪踏み）ミチフミ（道踏み）がある。上越市ではユキフミ、佐渡郡ではユキフミ・ミチツケ。

15、語尾がはっきりしないが「ンガ」（理由をあらわす助詞）があると文脈上考える。

16、タヤノナダレ　調査地点から5km北、柏崎市大字田尻小字山田（当時刈羽郡野田村に属す）に、昭和2年（1927）2月上旬に起った表層雪崩。一戸を残し八戸が全滅したといわれる。

18、〔migatsu〕当通〔~gwa~〕なのであるがこの場合〔-ga-〕であった。当通弱化したのであろうか。

17、つかみにくい音声がある。話者の主張に従って文字化した。

19、ガンニ　終助詞。「だって、記憶がないもの」と言うに近く、理由を述べて訴える表現となっている。話者は「ガニ」で「ガンニ・ガンネ・アンネ」となって用いられている。「ガ」は格助詞から来た準体助詞、「ニ」は格助詞から来た接続助詞であり、「ガンニ」は逆接の接続助詞として「のに」の意味に多用される。「ヘァー　シヨワーグツモクルガンニ、ヤダノー」（もうお正月も来るというのに、こんなに大雪が降るとはぁいやだねえ）の「ガンニ」やI85の「アンネ」

も逆接の例である。

これが順接の接続助詞となって、「祭りが来るがに、すしを作る」（伊豆利島、〈芸城県はガンニ〉。「日本国語大辞典」による）のように、故に・から・のでの意味に用いられ、越後にもその用法があることを「日本大辞典」（山田美妙著）がかいているという。19の「ガンニ」は利島の例文とちがい、後件を公いて、終助詞となっている。しかし理由をのべる点は同一である。一行とんで前にある同一話者のことば「オラ　エネァカッタンダ　ネァーダロァカ　ソノ　コロ」という判断の理由をここでのべているとみることができる。

といって「ガンニ」を単純に理由の接続助詞とは言えない。

ンダドモ、コノ　エキジャー　マーンデ　ツモルバッカダガンネ。エカンネァーヨァーネ　ナレヤ　カナンスケ　エカーネ。（明治39年生女性）

（然し、この雪ではほんとに積るばかりだもの。行けないようになれば困るから行きますよ。）

もっとゆっくして行けと言われてことわる場合の表現である。形の上で終助詞であるが、心持からは逆接の如く、順接の如く、まことに微妙な表現である。相手の希望にそえぬ理由を逆接的な余情をにじませて訴える終助詞になっている。

20. モン　順接の接続助詞で理由をのべて主張する表現と思われる。理由の助詞「モンガ」とはちがい、「モノ」という名詞から生れた江戸時代語なのであろう。女子用語とは限らない。

21. 発音がはっきりしない。「コァークネァー」のようにもきこえる。話者にたしかめたところ、「クロァークネァー」だと教えてくれた。クラクナイの変化。クラクとその内者便形の混成語形か。

22. オソー　二月下旬の意ではなく、雪は12月ごろから積るのに、2月という遅い時期に降りだしたということ。

23. ナカヤマ　地名　鵜川地区から旧野田村へ通ずる中山峠。

24. エッペァー　八戸だったときいている。

25. ニンゲン　十八人だったときいている。

26. エキホリ　除雪すること。主として家屋の上や側面の雪を掘り落し

たり振りのけたりする作業。「北越雪譜」に説明されている。中越の山間部の用語。上越地方は屋根についてはユキオロシ、道路上や家の側面についてはユキワリ、中越地方平野部でもユキオロシ、佐渡郡と下越地方はユキカキと称し、雪の深浅と対応した用語をきくことができる。参考　山形県ユギオロシ・ユキカギ・ユキハギ
27. シタリ　二人。ユキホリの出来る人が二人いる家はの意で、一人は自宅の除雪に残す必要があること。
28. オマエサマガタ　話者男子Aが五・六歳年長の女性話者BCに向っていう最高の待遇の尊敬代名詞複数。
29. ラッタ　られた　話者Bは自分たちの動作を言うのに敬語を使ったが、Aのことばにひかれてしまって間違ったか、Cを意識してそれを敬うために言ったかいずれかであろう。
30. アンガン　あんな　形容動詞の連体形。「ア(ノ)様ナ」の変化か。Iの24「ソンガン」IVの68「コンガン」参照。アンゲナ（中蒲原郡中越小林存氏による）アンッケナ（中越小林存氏）アケナ・アガイナ（上越小林存氏）アナナ・アンナナ・アンナン（西頸城郡糸魚川市青海町、大塚勝男氏による）アンナ・アンナン・アノンノン（佐渡郡）南魚沼郡湯沢町ではアンゲァノ・アンゲァン。
31. ミンナ　よそではみんなの意。
32. このあたりからBの子守りしている孫娘が飽きてむずかりはじめた。このあとあらわれる泣き声はそれである。
33.「毎日三尺」前述山田の雪崩の時は一丈五尺（約4.5m）の積雪の上に一丈五尺の新雪が積ったと伝えられている。
34. ヒトッキリ　一切りの変化，一時，僅かではない。シトッキリ（南魚沼郡・東京都）シトシキリ（富山県）
35. アワエ　あわい。間。時間や物や場所の間。
36. はっきりしない発音。古い固い雪の上に軟い新雪が積ったために「表層雪崩（アイという）が生じたということだ」ということを簡単に言ったのである。
37.38「ンダガ」を話者は「ガンダモンガ」（のだからの意）と言ってい

ると主張するがそうとは思われない。

39. サ　副助詞「さえ」の変化か。南魚沼郡でも使う。

40. コエラ　ここら・ここいらの変化か、古語「これら」の変化か未詳。

41. ミチフミ　14参照

42. ヤネノユエノアタマ　「屋根の上の頭」で屋根（藁屋根）の最高部のグシ（棟木）の部分をさす。

43. ネァーの治がはっきりしない。ネァーの直後に「ンガ」（からの意）のような音があるようでもあり、又治は「ドァーシャン　ネァーンダ」にもきこえる。

44. オッカネァー　危険で恐ろしい。越後佐渡・関東中部・東北地方。

45. シタガアエテル　平地の雪が少ないため、地上と屋根との高さの差が大きいこと。

46. サスガタツ　サスは古語・建築用語「扠首」民家の「斜め材」「通常むな木をささえる合掌状のものをいう」（「建築用語辞典」）サスガタツとはサスの勾配が強く屋根の傾斜が急で高いこと。

47. アマゴ　雨具の変化。

48. ミノ　ヒロロと藁で編んだものであろう。他にフシンミノ（普請蓑）・マワシミノ（回し蓑？）といって軽い労働に着用するやゝ手のこんだ装飾性の加わったものもあったという。

49. カサ　マンジューガサ・トンガリ笠等色々あったという。清水倉では雪の時ショァーナイ帽子をかぶったという。

50. マッテ　副詞マルデの変化。

51. シム　凍みるのマ行五段活用。頸城地方ではシグ。

52. シンナカ　囲炉裏・地炉。「芯の中」の変化。南魚沼郡湯沢町ジロ。

53. アシタダ　「また翌日履くのだ」の意。

54. フカグツ　藁で編んだ長靴型の雪中の履物。越後に広い。南魚沼郡湯沢町でフンゴミ・フッゴミと言う。

55. シダナ　火棚　囲炉裏の上人丈位の高さの空間に吊した五尺四方位の木を組み合わせた格子状の棚で、冬期その他の季節に、ぬれた物を上にのせたりあるいはこれに吊したりして乾燥させる器具。現在

も使用している家がある。

56. はっきりしない，エンネテソァーときこえる，諸者にただすと「エンネァヂソァー」だという。「入れないでさ」で，深靴の中に藁を入れて敷けば暖くていいのに、それを入れないでさ」の意味になる。

57. アレシタは「履いた」の意であろう。

58. ギョァーサ　行纏・脚絆。行縢・行纏。中魚沼ギョァーサイ、上越地方信濃川、南魚沼郡山形県ギョーサ，

59. トンヂモネァードコハク　慣用句　藁フカグツの奥・先端まで足先を入れて履かずルーズに履くと、靴の底でない縦の筒状の部分までが底のように靴の形が崩れてしまうのをおもしろく表現した。「ヨコッチョァーハク」とも言ったし、前はこれを「ギョァーサガワリー」と表現したのである。

60. ツマガケ　藁製雪靴の一種。爪掛け。ツマカケワラジの略か。次にあるオリカケと同一物か。構造は説明しにくい。　三島郡・鹿沼でもいう。

61. ダイモチ　ダイモジのようにもきこえる。大持・大物。ダイモチヒキ（大物引き）の略か。「修羅に大材木・大石をのせて引くこと」と「北越雪譜」に出ている。

62. オソカケ　ウソカケとも言う。藁製の遠出用の冬の履物。わらじとウリ（足の爪先と手足の上部とを包むためにわらじの上部にかぶせる藁製のもの）とを組み合わせたはき物。現在も春先の山入りにははくという。ウリカケ　中頸城郡・長野県上田　オリカケ新潟県・富山県・長野県。

63. アシノケァーリ　足の返り。軽く歩けること。

64. アシャノ　不明。「足に」か。

65. ワラグツのこと。打たない硬い藁で編むスリッパ状の浅いはきものでかかとの方が露出する。近歩きに使用する。通常にかかとを包むためにシガラをつけた。このクツは現在も使用する。　東北・長野県群馬県も。

66. 踵に当てる雪中旅行用の藁製はき物，シガラミ（柵）又はシブガラ

ミの変化か。「北越雪譜」にシブガラミが出ている。南魚沼湯沢町で
ルシブガラミと言った。

67. このあたりからバイクへ声が入ってくる。

68. アンゲァ アンゲァンのようにもきこえる。注30に出た形容動詞の連用形である。

69. ガンネ 注19参照

70. スカリ 深雪をふんで道をつける時にカンジキの下などに更に重ねてはく円形の雪中用具。ここでは木の輪を縄であんだものとなっているが、他に山竹をU字にまげたもの二つを輪状につなぎ作ったものもあった。二つの(左右)輪の各々の先端に紐をつけ両手でそれを持ちながら歩いた。この話のように紐の両端を結び輪にして首にかけ(手が使えなくてよい)て使うこともできた。「北越雪譜」にも図がある。スカリッツはスカリと言っての意か、スカリと言うものをの意か不明。この人独特の早口なのであろう。

71. コンゲ こんな 連体形 コンガンとも。Iの6k、4の68参照。

72. ワッカ 輪 新潟県、山形県、福島県、秋田県。

73. はっきりしない。話者は「カケッコト シランカッタ」と言ったと説明するが、「掛けること」の意がわからない。

74. 道をつける身振があったのであろう。

75. エワムカエ 上向 家の名。大字折居の中。

76. オリイ 折居 鋳物の属する大字の名。

77. ミチツケ 朝夕集落間の雪をふんで道をつけること、またそれをする人。

78. アサゲ 朝 東北地方新潟県長野県群馬県淡路。

79. コグ コザクとも。抵抗の多い雪の中を漕ぐように歩くこと。水や草木の藪についても言う。全国各地。コザリは魚沼地方頸城地方米沢地方。

80. アエク ありく・あるくの変化。動きまわる、歩きまわる。歩行はアエブ・エーブという。アイク静岡県、南知多長野県・岐阜県。アーク信州鳥取県島根県。

81. エカン　エーカンとも　かなり。エーカン　山梨県奈良田

82. コンスキ　ぶなやいたやの板に柄をつけた除雪用具。「北越雪譜」に図がある。「木の鋤」の変化かあるいは「木鋤」に撥音が添加したか未詳。コエスキ　刈羽郡、コイスキ　柏崎市中頸城郡柿崎町、コスキ　三島郡佐渡郡長野県岐阜県福井県石川県福島県、クシキ　南魚沼郡　ユキスキ　佐渡郡、スコ　佐渡郡小木町。

83. ナンダローノー　刈羽郡刈羽村出身の調査者の妻は、「断定できず半信半疑の時に刈羽村ではこういう表現をする」と言う。

84. ダ　ダドモ（けれども）を省略したものか。

85. モンガ　Iの注97で説明した理由をあらわす接続助詞。ここでは「軽いですから」の意か。中頸城郡和田村（旧称）の用例をここで挙げておこう。「オラトールモンガモッテッテヤル」（私は通るから持って行ってやる」

86. エニ　接続助詞　から・ので　エネとなることもある。Iの注112参照

87. ハヤエ　[hajeː]　早い

88. シタオ　シタエオの様にきこえる。「下へ」といい「下を」と言いなおしたのであろう。下を空けるとは、屋上から家の側面に投げおろした雪を壁面から掘りのけて雪の側圧を除き、かつ戸窓に明かりをとる作業のことで、大きい労力を要する。「雪掘り」という語はこれにふさわしい。

89. ホァーガ…の次に「よい」のようなことばが省略されている。

90. エタヤ　いたやかえでであろう。

91. ブナ　ぶな　植物名

92. コシャータ　こしらえた。終止形はコシャウともコショアーとも。IIの32，IVの29参照。

93. ツコァール　ツカワレル（尊敬）の変化した形か。

94. ナカッタ　村人が割りあてられて無償ですることはなかったの意。

95. …「として特定の者があった」の意味の語が省略されたのであろう。

96. エキワリ　雪割り。道路などの雪を割り除くこと。以前は春になっ

て雪が降り止むと（大抵四月）は鶴川地区全地域から人夫４００人程が出動して部落道・村道・県道の除雪をした。これをユキワリといった。

97、ツカワンネァー　不可能のこと。

98、セーッタガデ　言ったのであっての意か。話者は「ソエッタニモ」（そう言ったけれども）と主張するが、そうはききとれない。中頸城郡では「言う」をセウナ，セッテ、セウ，セーウ、セワン　などと「そう」（副詞）と「言う」を複合した動詞がある。こゝもその影響と考えてよいと思う

99．ヨキ［jɯ］と［jo］の中間の如き音。

100、コァーキョァー　この次に「ジョ」のような音声がかすかにきこえる．土か。

101，ヒナカ　半日　中越地方富山石川県近畿中国四国のことば　終日の意味で本県岩船郡及び広島県。

102、アッレスドモ　「それほど高くなくてよいけれども」の意。

103、マカッテ　引き受けて。ラ行四段のマカルの連用形マカリテの促音便形。マカス（負す）を自動詞化して作った便利な語。負せられて，引き受けての意で保護という意識はない。

104、ガンギ「ガッギ」の感じもする。魚沼地にかけて撥音のところを促音とする地帯である。雁木・縁側。　家屋のザシキ・チャノマ（ヨコザとも言う）、時にはニワ（作業をする部分）の前面に母屋から作り出した庇の下の部分を言う。玄関から上手をカミガンギ、下手をシモガンギと言うことがある。カミガンギは普通巾三尺余りの板敷であり、畳を敷くこともできる。屋内に入る雨や日光を防ぎ、室への通路となり、物を乾したり、子供の遊ぶ場所となったりする。シモガンギは四尺の巾の土間が多く、農具雨具、冬期には野菜・薪などを置く場所ともなる，「北越雪譜」に「江戸の町にいふ店下（たなした）を越後に雁木又は庇といふ」とある。高田長岡新潟市等で店先の庇を人道として通行しているガンギはガンギの発展した形である。「さとことば」によれば西蒲原郡では「庇の土間なるもの」をガンギといった。こうしたガンギは越後佐渡、長野県下水内郡，福井県にあ

る。「越後方言考」によればガキ・ガッキという形もあるという。小林存翁は庇の形が雁の字に似ているからとガンギの語源を説明した。南魚沼郡湯沢町でもガンギと言うが、同地では別にガッギという語があり、これは物体や場所にあるぎざぎざの形状・階段状の上下左右の差を意味する。ガンギの語源と関係があるか。

105. ツブシタ　ツブレタ（自動詞）と言うところを他動詞で強く表現した。「死んだ」というところを「殺した」ということが南魚沼郡湯沢町にあったと思う。

106. ゲンカン　genkwanと言わなかった。

107. ナンガ　ナラナイガの変化　ラ行音はよく脱落する。

108. オロシ　下屋のこと。オモヤ（母屋）とシモヤ（作業場などの部分）との主屋（本家）につけて本家よりひくい屋根を持つ建物の部分の総称。玄関・流し・ガンギ・時には台所・仏壇を置く部分・物置きなどがオロシと言うことがある。次のツノモンも同じものをさす。語源は下ろしである。栃木県神奈川県宮崎県でも言う。

109. ツノモン　ツノモノとも言う。主屋から突き出しているので言うか。ツノモロ（角室）が語源と説明した老人があった。

110. オラエン　私どものあたり。この辺。語源不明　オラエンデとも。Ⅲの注91参照。尾張インデ近隣。

111. シタ　シモに同じ、家屋をほぼ玄関を境として上と下に二分し、座敷・茶の間の方をカミと言うに対し、ニワ（作業する部分）のある方をシモ・シタと言う。カミシモはつながっているが中がやゝちがい屋根のグシ（棟）の高さもちがい、時に床の高さもちがうのが、明治初年までの建て方であった。

112. アッデス　ずっと便利になったの意。

113. オレテ　オリテの変化。

114. セバ　するの未然形＋ば

115. コツラ　屋根の軒の最下端・軒先。「小面」からか。中頸城郡・長野県下水内郡でも言う。雪下ろしの雪の量が多くなれば庇の上はもちろん、コツラまで雪の中に埋まってしまう。除雪して「コツラダ

ス」ことの困難さをここでは説いている。

116. リレダケ　オロシ・ツノモンをさしている。

117. クルテ　クレテの変化。

118. ジョァージョァー　旧上條村　柏崎市上条地区。

119. ウシロ　家の後ろの地面が傾斜して低くなっていて除雪に便利なこと。

120. スケル　のける、除く。

121. オモッテ　思うと言い切らず、余韻を残す表現。

122. ナジョァーネカ　たいへん。どんなにか。叙述の副詞。伝聞したことについて想像してその様をのべる表現である。下に「そうだ」「だと」などの表現がくる。「なにせんにか」から生れたといわれる「ナジョーニカ」の変化。刈羽郡・中頸城郡柿崎地方にある。南魚沼郡湯沢町では「ナジョァーニカ」。

123. ナゼ　なだれ。ナデの変化。県下にはナデ・ナゼ・ナザレが広く分布し、なだれの発生を頸城では「ナゼガツク」（突く）と言い、南魚沼郡湯沢町では「ナゼガデル」（出る）という。「ナデ」という語は東北栃木方言辞典長野県方言山梨にある。

124. ミズノキリ　水を家の周囲に流しため池のように湛えて消雪することのできる地形の家々の意。

125. カシガル　傾く　ラ行五段の動詞。東北地方新潟辞典山梨。

126. オッタラ　この辺界ではよくききとれない。オッタラ、オル（居る）はこの地方は使わぬ言葉だから、「と言っていたら」が極端にちぢまった表現であろうか。

127. イーワ　エーワと言うのが普通の発音であるが標準語化そうとした結果このようになってしまった。

128. タガタガ　副詞　老人病人酒に酔った人などが足もとがたしかでなくふらふらしているさまや仕事などがのろくはかどらぬさま。「名義抄」にある古語である。

129. テコト　テコトダと言っているようにもきこえる。あるいはコトが終助詞的になり強い断定的訴えとなったものか。

5. 冬の楽しみ

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
A	高橋 真	男	大正7年
C	高橋マツノ	女	大正2年
D(話者)	高橋 孝宣	男	大正15年

D マー フユワ ヤッパリ エチバン タノシーノワ ショァーグヴツデショァーシ
まあ 冬は やはり いちばん 楽しいのは 正月でしょうし、

マー ショァーグヴツニ アルノワ ヤッパリ イロイロノ ゴチソァーカラ
まあ 正月に 有るのは やはり 色色の 御馳走から

ハジマッテ ギョァージニャー マー サイノカミダトカ(1) ナンダトカ
始まって、 行事には まあ 賽の神などとか なんだとか

マー イロイロ アリマシタガ ソコラヘンカラ ハナシ ハジメテ
まあ 色色 有りましたが、 そこら辺から 話しを 始めて

クンナセァー(2)。
下さい。

A ソァーデスネ。 マ ヤマン ナカノ コトダスケァー(3) タイシタ アノ
そうですね。 まあ 山の 中の 事だから 大した あの

オモシロエ コトモ ネァカッタドモ(4) (D ハイ。) ムカシワ
面白い 事も 無かったけれども、 (D はい。) 昔は

アレダコテネー アノ フユン ナレヤ マー サッキモ ハナシ
あれですよ あの 冬に なれば、 まあ さっきも 話しが

デタヨァーネ　ナニワブシガ　クルノガ　タノシミグレァーン ～～～(5)
出たように　浪花節が　来るのが　楽しみぐらいの……

エマミテァー　テレビヤ　ラジオワ　ネァーシネー。
今みたいに　テレビや　ラジオは　無いしねえ。

C　ソァーデスネー。
そうですねえ。

A　ホッデ　ホビキテノガ(6)　アッタ。（笑）　オメァサンガタ……。
それで　宝引きというのが　あってね。　あんた方……。

C　オラ　ソノ　ホビキワ　ワカリマセンエネ(7)。
わたし　その　宝引きは　分かりませんですね。

A　ホッカネー　(C ハー。はい)　ハーン。
そうかねえ。　ふうん。

C　ソレデ　アノ　コエキノ　トシニネ　(A ハー。はい。)　キタムケァー(8)ノ
それで　あの　小雪の　年にね、　北向の

ホァーワ　コトシワ　コヨキデ　ダイモチガ(9)　ハヤルテーナンテ　(A
方は　今年は　小雪で　大塔が　はやるなどと

ハー。はい。)　キーテサ　ダッテ　コヨキダケヤ　ダイモチナンテ
聞いてさ、　だって　小雪ならば　大塔など

ヒカンネァーニッテ　ワラワッタ(10)　コトガ　アリマシタ。　(A ンーンーン。うんうんうん。)
引かれないのにと言って笑われた　ことが　ありました。

ソノ　ホビキテノワ（笑）　オラ　ケーケンガ　ネァー…。
その　宝引きというのは　わたしは　経験が　ない。

A　ソァーダ　ホビキノ　コトー　ダエモチ　ユータコテネー。　(B ハー。はい。)
そうそ、　宝引きの　ことを　大塔と　言ったよねえ。

アノ　ムカシノ　ソァー　アノーッ　シカクノ　アナノ　アイタ　ゼンオ
あの　昔の　そう　あの　四角の　穴の　明いた　銭を

エッペァー　コァー　アレダコテァー　ヨシテテサー　マー　エロエロンノガ
たくさん　こう　あれぞさ　寄せておいてさ、　まあ　いろいろのが

(11)
アッタドモ　ホァーテ　ナワ　エッペァー　コショァーテテ　リァーシテ　ヒツケテテ
あったが、　そうして　縄を　たくさん　こしらえておいて　そうして　結びつけておいて

ホァーテ　オヤダナンテテ　ソレオ　オヤン　ナッタ　モンガ　ヒーテ
そうして　親だなどと言って　それを　舳に　なった　者が　引いて

ミナ　シッパッタコテーネー(12)。　ホテ　ダイモケダナンテテ…。
みんなが引っぱったよねえ。　そして　大塔だなどと言って…。

C　ソラ　ンダー　オトッツァン(13)　ハナシ　キキナスッタンデ　オマサン
それは　それなら　おとうさんは　話を　聞かれたので(あって)　あんたは

ヒータ　コトナンカ　ネァーンデショァー。
引いた　ことなど　ないのでしょう。

A　オラ　ドキモ　アリマシタコテ。(C　ソァーデスカ。)　ハー　オラ
わたしたちの頃も　ありましたさ。　そうですか。　はい　わたしどその

ドキ　ホレ　アノ　ホレ　アノ　アコノ　エノスケノ　アノ　オトッ
頃、　ほら　あの　ほれ　あの　あそこの　伊之助の　あの　お父

ツァンヤ(14)　アノ　ショガ　ワケァー　ドキ　アノ(C　ソァーデスネー。)
さんや　あの　人々が　若い　時、　あの　そうですねえ。

オラ　マダ　アノ　マー　ワケァー　ドキダッタ。　ワケァーッテ　マーマー
わたしは　まだ　あの　まあ　若い　時だった。　若いといっても　まあまあ

コドモミテァーナ　マー　ガッコァー　アガッタ　ジブンダガ　マダ　アリ
子どもみたいな、　まあ、　学校に　上った　時分だが、　まだ　あり

マシタコテ。(C　ハー。)　ハー。　マー　アノ　オクノ　ホァーニャ
ましたさ。　はい。　はい。　まあ　あの　奥の　方には

マー　アレガ　アッラコテ　サカンダッタテ　ユータコテー。
まあ　あれが　あれださ　盛んだったと　言ったさ。

C　〜〜〜〜　マデネー，　(A　ハー。)　〜〜〜〜　マシタコテ。
　　までねえ。　(はい，)　ましたさ。

A　マー　アノ　ムカシャ　ホレ　エマト　チゴァーテ　アノ　タイシタ
　まあ　あの　昔は　ほら　今と　ちがって　あの　大した

ソノ　ゴラクテ　モンガ　ネァーカッタスケ　アーエノガ　ユイツノ
その　娯楽という　ものが　無かったから，　ああいうものが　唯一の

アッラコテ　アノ　ゴラクダッタコテ。　(C　ソァーデスネ。)　アー。
なんださ　あの　娯楽であったさ。　(そうですね。)　ああ。

C　ソシテ　アノ　オヤガ　ゾァーリヤ　ワラジオ　エロリノ　ハタデ
　そして　あの　親が　草履や　わらじを　囲炉裏の　はたで

クミナガラサー(15)　(A　ハー。)　アノ　ムカシバナシオネ　(A　ハー。
組みながらさ，　(はい。)　あの　昔話をね，　(はい。

)　シナスッタノオ　(A　ハー，)　アノ　ワタシナンカノ　センパエノ
)　されたのを　(はい，)　あの　わたしなどの　先輩の

シトガ　ミンナ　カタリナスッタ　(A　ハー，)　アー　ユー　ハナシオ
人が　みんな　語りなさった　(はい)　ああ　言う　話を

キータ　オボエガ　アリマステ　(A　アー　ソァーダネ。)　コタツエ
聞いた　記憶が　ありますよ，　(ああ　そうだね。)　こたつに

ハエッテテ。(笑)
はいっていて。

A　ダモ(16)　ムカシノ　ショワ(17)　ヨク　マー　アレオ　トショリショワ(18)　マー
　しかし，　昔の　人は　よく　まあ　あれを　年寄り達は　まあ

アノ　クチズタエデ　マー　ユータンダガ　エロエロナ　コトオ
あの　口伝えで　まあ　言ったのだが，　いろいろな　ことを

シカシ　オボエタモンダネ　ハー。
しかし　覚えたものだね，　はい，

C　ソァーデスネー、
そうですねえ。

A　アレオ　フユン　ナッテ、ショァーグヮツガ　キテ　エテ　ホラ　オメァサン
あれを　冬に　なって　正月が　来て　そして　ほら、あんた、

ウチカラ　デタ　トシヨリショガサ　アノ　トマリー　コラッテ　ホーエテ
家から　出た　年寄り達がさ、　あの　泊りに　来られて、そうして

コタツノ　メグラデサー　モトワ　オエ(19)　ムサドコダナンテ(20)
こたつの　まわりでさ、　昔は　おい　むさ床だなどといって

ゴァーギナガンオ(21)　ヒータ(22)　モンダコテネー　（B　ソァーソァー。
そのすごいのを　散いた　ものさねえ、　そうそう。）

ホエテ　ソコエ　エテ　アノ　ムカシバナシ　ユーテ　カサッシャエ
そして　そこに　居て　あの　昔話を　言って　聞かせて下さ

ナンテ(23)　ユーテ　ユート…。
いなどと　言うと……。

C　マー　ムカシバナシワ　ネダッタ(24)　モンデスコテ。（A　ハー。
まあ　昔話は　ねだったもんですさ。　はい。）

トシヨリノ　カオサエ　ミレヤ（A　ソァーソァーソァー。
年寄りの　顔さえ　見れば　そうそうそう。）ムカシバナシ
昔話を

ネダッタ　モンデス。アノ　ショワ　カタル　ホァー　シナサルシ（A
ねだったもんです。あの　人々は　話る　方を　されるし、

アーアー。）オラ　ソノ　マタ　シタデ　ネラッタ(25)　ホァーデスエネ。
ああああ。）わたしどもはその　まね　下手で、ねだった　方ですよ。

A　アー　ソァーソァーソァー。ホァーデ　デ　キクノガネ　タノシミデー(26)、
ああ　そうそうそう。それで　で　聞くのがね　楽しみで……。

C　デ　サースー(27)ナンテ　ユーテ　キキナガラサ（A　ソァーソァー、
で、さあすうなどと　言って　聞きながらさ、　そうそう。）リノ
その

サースーガ　キコエナク　ナルト　オヤシューワ　ソッデネ　(+ ハー。)
サースーが　聞こえなく　なると、親衆は　それでね　(+ はい。)

アネタナンテノデネ　(+ ハー。)　ハナシ　ヤメナスッタンダ　ハー。
あ　寝たなどというへでね、(+ はい。)　話を　止められそうそ　ない。

A　ソァーソァーソァー。　ハー　ヨー　アッラコテー　アノ…。
そうそうそう。　はい、　よく　あれそ"さ、　あのう…。

D　ソノ　ムカシバナシデモ　キカシテ　クンナセァーネ。
その　昔話でも　聞かせて　下さいよ。

C　ハー。
はい。

A　オラ　モァー　ダイブ　ワスレッケモァータドモ。
わたしは　もう　大分　忘れてしまったかれど"も…。

D　オモイデノノデモ　アリマセンカ。
思い出のよいでも　ありませんか。

A　アノ　ヨク　アレ　アレラ　ネッカ　アノ　ミジケァーノデ　アノ　オラ
あの　よく　あれ　あれでは　気いか、あの　短いので　あのわたし

エマ　カンゲァーテ　ミッ(28)ト　オモシロエカッタト　オモーノワ　アノ
今　考えて　みると、　おもしろかったと　思うのは　あの

ホレ　ヨー　トシヨリガ　アノ　アノー　ウエカラ　ナンダッタカ
ほら　良く　年寄りが　あい　あいう　上から　なんだったか

カミカラカ（笑）（C笑）　アエガ(29)　キタトカ　シモカラ　タエガ
上からか、　あゆが　来たとか、　下から　鮎が

アガッテ　キタトカッテ　エマ　カンガエレバ　タエナンカ　カワン
上って　来たとかいって、今　考えれば　鮎などで　川の

ナカエ　ホンネ(30)　アガッタ　モンダカト　エマデワ　マア
中に　ほんとうに　上ったものだろうかと、　今では　まあ

ムカシバナシダスケァダドモ。　ホエテ　アノ　アエト　タエト
昔話だからだけれども…。　そして　あの　鮎と　鯛と

ケンカシタナンテテネ　ブツカッテ　ナーガ(31)　ヨケネァーガ　ワリートカ
喧嘩したなどと言ってね、　ぶつかって　お前が　よけないのが　悪いとか

オレガ　ヨケネァーガ　ワリートカ　エッテ　ケンカ　シタラ　ヤナギノ
俺が　よけないのが　悪いとか　言って　喧嘩を　したら、　柳の

シタデ　コチガ　ナガメテタトカ　テッテ　(笑)　ホァーテ　タエワ
下で　こち(鯒)が　眺めていたとかと　言って、　そうして　鯛は

アノ　チューサエ　スルドモ　ナカナカ　アノ　オンー　ナカナオリ
あの　仲裁を　するけれども　なかなか　あの　んん　仲直りを

シネァデ　ドー　ショァーモ　ノァーテ　ホァーテ　オレガ　ワリーンダテ
しないで　どう　しようも　なくて、　そうして　俺が　悪いのたと

ユー　オレガ　ワリー(32)　ネァーテテ　ソァーシタラ　アー　コチガ
言う　俺が　悪くないと言って、　そうしたら　ああ　鯒が

ソァーエタナンテッテネ　アエ　タエノ　スル　コト　コチャ　カマエヤ
こう言ったなどといってね、　鮎　鯛の　する　ことは　こちゃ　かまいは

センテ　ユータナンテ　(笑)　ソンガノ　ハナシオ　シトクチバナシ
しないと　言ったなどという、　そんな　話を、　一口話を

キカシテ　モロァータリサ。　(笑)
聞かせて　もらったりさ。

P　ソァーデスカネー。
そうですかねえ。

A　ヨク　ムカシノ　シューワ　シカシ　アー　ユー　ソノネ　ヒトクチバ
よく　昔の　人々は　しかし　ああ　いう　その　は　一口話

ナシダドモサ　ナカナカ　オモシロエ　ハナシ　シタモンダゴテネー。(笑)
だがさ　なかなか　おもしろい　話を　したものだよねえ。

D　ソァーネー。
そうねえ。

A　ナンカ　コァー　エマン　ナッテ　カンガエテ　ミルト　ヤッパリ　ソレ
なんだか　こう　今に　なって　考えて　みると　やはり　それ

ニモネー　ソレナリノ　ソノ　マー　ナンカ　コノ　エミオ　モッテ
にもねえ　それなりの　その　まあ　なにか　この　意味を　持って

エルンダドモネー。（笑）ヤ　ムカシノ　シューワ　ホンネ　アレダ
いるのだけれどもねえ。　やあ　昔の　人々は　ほんとうに　あれだ

アキゴトトカ　ショァーグヴツダンテ　エーバ　エロエロノ　ムカシバナシ
秋祭とか　正月だのと　言えば　いろいろの　昔話を

サッシャッタコテー。(33)
されるさ。

C　ソァーデスネ　ハー。　マー　ヨー　コタツエ　ハエッテ　キカシテ
そうですね　はい。　まあ　よく　こたつに　入って　聞かせて

モロァータ　モンデスコテー。
もらった　ものですさ。

D　エチバン　オモイデン　ナル　フユノ　ヤッパリ　アソビテ　イイマスカ
いちばん　思い出に　なる　冬の　やはり　遊びと　いいますが

タノシー　ヨァーナ　コトテバー　ナンデショァーネ　ソノ　ジブント
楽しい　ような　ことと言えば　何でしょうね。　その　時分と

シマシテワ。
しましては。

A　オラ　コドモン　ドキャー…。オマサンタ　ドァーダッタエ　オンナショーワー。
わたしたちの子どもの　時は…。　あんたがたは　どうでしょ　女の人とは。

C　ガッコァーエ　デテル　コロノ　タノシミテバ　オラ　コラー
学校へ　出ている　頃の　楽しみといえば　わたしどもの　頃は。

スキーガ　アリマシタハ　ナァサー。（A　ソァ　スキーハ　アレ　アッタネ）
スキーが　ありましたからさ。　（A　そう　スキーは　あれ　あったね。）

ハー。（A　アノ　ジブンワネー。）　スキーガ　サカンデシタテ。
はい。　（A　あの　時分はねえ。）　スキーが　盛んでしたさ。

（A　スキーモ　アッタシネー。）　デ　アノー　ムラデ
（A　スキーも　あったしねえ。）　で　あの　村で

ヒャクチョァーグレァー　ジャ　ネァーデショァーカネー　スキー　カーテネー。
百丁ぐらいでは　無いでしょうかねえ　スキーを　買ってねえ。

（A　ソァーソァーソァーソァー。）　ハー　ガッコァーノ　スキーテノガ
（A　そうそうそうそう。）　はい。　学校の　スキーというのが

アリマシタンダエネ。（A　アッタネー　ハンコァー（34）　オシテネー。）
ありましたのですよ。（A　あったねえ。　判を　押してねえ。）

ハー。（A　アッタデスネー　ハー。）　ソレ　ハエテ　ノタノ　サンノァー（35）ノ
はい。（A　あったですね　はい。）　それを　履いて　野田の　山王の

ヤマエ　（A　ソァーソァーソァー。）　スキーノ　レンシューニ　エキマシタコテー。
山へ　（A　そうそうそう。）　スキーの　練習に　行きましたさ。

（A　ホンニ　ソァーダッタネ。）　センシュダナンテ　ナマエ　（A　ハー
（A　ほんとに　そうであったね。）　選手などと　名前を　（A　はい。

ソァーダネ。）　ツケテ　モロァーテ　（＋　ハー。）　アノ　タングツニ（36）
そうそうね。）　つけて　もらって。　（＋　はい。）　あの　短靴に

クツシタ　ハエテサ　（＋　ソァーソァーソァーソァー。）　ソァーシテ　ワタエレオ
靴下を　履いてさ。　（＋　そうそうそうそう。）　そうして　綿入を

ジブンデ　コシアゲ　シテ　ミジッコァ　シマシテネ　（＋　ハー。）
自分で　腰上げを　して　短かく　しましてね。　（＋　はい。）

ホァーテ　ソレオ　キテ　シバラク　アレデスガ　エッシューカンモ
そうして　それを　着て　しばらく　ですが　一週間も

ニシューカンモ　サンノァーノ　スキージョァーエ　カヨッ　カヨエマシテ
二週間も　山王の　スキー場へ　(×××)　通いまして、

グンノ　スキータエクワエガ　アリマシテネ…。
郡の　スキー大会が　ありましてね…。

A　ワリアエニネー　エマヨリモ　カエッテ　アノ　スキーノリナンカワ
割合いにねえ、　今よりも　かえって　あの　スキー乗りなどは

ハヤッテタヨァーダッタネ　ガッコァーデネー、(ソァーデスネー。)ハー　ガッコァ
流行していたようだったね、　学校でねえ、　そうですねえ。　はい　学校

ーデ　アノ　スキータエクワエ　アッタシ　タイソァーノ　ジカンナンテノワ
で　あの　スキー大会が　あったし、　体操の　時間などというのは

ホレ　アノ　スキーノリノ　ジカンガ　アッタンデスコテ　ハー、
ほら　あの　スキー乗りの　時間が　あったのですこと、　はい。

C　フユン　ナレバ　タエソァーノ　ジカンテノワ　ホトンド　ヤマ
冬に　なれば　体操の　時間というのは　ほとんど　山へ

スキーノリニ　～～～～タエネ。
スキー乗りに　～～～～ましょよ。

A　スキーダッタネー　ハー。
スキーだったねえ　はい。

D　ナルホドネー。
なるほどねえ。

A　フユノ　アソビナンテーバ　コドモノ　ドキワ　オマエサンガタ
冬の　遊びなどといえば　子どもの　時は　あなた方

オンナショワ　ナンゴダ。(37)
女の人々は　お手玉で、

C　ハー　ナンゴ　オテダマ　ナンゴテ　エーマシテネー。
はい　なんご、　お手玉を　なんごと　言いましてねえ。

A　オオテダマオ　ナンゴ　ユータネ　ナンゴ　ユータ，ソレカラ
　　お手玉を　なんごと　言ったね，なんごと　言った。それから
ギンナン(38)　エッチョアーノ(39)　アソビガ　アッタ，
銀杏，　いちょうの　遊びが　あった，

C　エッチョアー　フクロニ　エレテ　モッテッテネー。（A　ハー，）ソシテ
　　いちょうを　袋に　入れて　持って行ってねえ。（A　はい，）そして
カンギリナンテッテ(40)　ソレー（A　ハー，）コアー（A　アーアーアー　ソアー，
　　かんざりなどと言って　それを（A　はい，）こう（A　ああああああ　そう，）
ソレ　コアーッテ(41)　トルンデス。ソレ　オトサンデ　トレバ　ミンナ
　　それを　こうやって　とるのです，　それを　落さないで　とれば　みんな
ジブンノニ　ナルンデシテネー。
　　自分の物に　なるのでしてねえ。

A　ヘ　アー　ソンゲンノ　アッタネー。ソンゲノ　アソビ…。
　　へ，ああ，そんなのが　あったねえ。そんな　遊び…。

C　カンギリテ　エーマシタ。
　　かんざりと　いいました，

A　カンギリトカ　ナントカ…。ソレカラ　ホレ　アノ　イ(メ)　マー
　　かんざりとか　なんとか…，それから　ほら　あの　まあ
ナツ　マタ　フユモ　コアー　アノ　ユキン　ナカ　アナ　ホッテテ…
　　夏に，また　冬も　こう　あの　雪の　中に　穴を
アラ　ナンテラカラ(42)…　アナエッチョアー(43)～～。
　　あれは　なんというのかな　穴いっちょう　～～。

C　アナエッチョアーテ　エーマシタネ。
　　穴いちょうと　言いましたね，

A　ソンガノ　アソビダッタネアカネー　ネー，
　　そんな　遊びであったのでありませんか、ねえ，

C　ハー　コァー　キョリ　オエテ　ソコノ　アナエ　コァー　エレルンデ…。
はい、こう　距離を　置いて　そこの　穴に　こう　入れるので…。

A　ホァーテ　エッペァー　ヘァレバ　コッチャ　トル　ソァー　ユー　マー　ルールモ
そうして　いっぱい　入れば　こっちは　取る、そう　いう　まあ　ルールも

アッタシ　ソレカラ　ヒトツダケ　エレレバ　アト　ミナ　トレットカ
あったし、それから　ひとつだけ　入れれば　あとを　みんな　取られるとか

ノー　フタッツ　エレテ　アト　ミンナ　エンネァーヨァーン　セバ
ねえ　二つ　入れて　あと　みんな　入れないように　すれば

ミナ　トラレットカナンテ　ソンガノ　エロエロノ　アレガ　ルールガ
みんな　取られるとかなどと　そんな　いろいろな　あれが　ルールが

アッテ　ソンガソノモ　アッタ　ネカ　オンナショワネー。
あって、そんなのも　あっでは　ないか、女の人達はねえ。

C　ソァーデスネー。　コノ　ジューイチグヴツノ　ミッカン　ナルト　ハンニョァーノ(44)
そうですねえ。　この　十一月の　三日に　なると　拝庭の

ニラエノ(45)　メァーエ　ミンナ　オリーノ　コドモガ　アツマリマシテネー
に朗徳門の　前に　みんな　折居の　子どもが　集まりましてねえ、

(A　ハーハー。)　ソァーシテ　ギンナン　モッテッテ　(A　ギンナン　モッテ
(はいはい。)　そうして　銀杏を　持って行って　(銀杏を　持って

ハー。)　アソビマシタデスコテー。
はい。)　遊びましたですさ。

A　ハー。
はい。

D　ンー
うん。

C　アー　ユーノガ　マー　タノシミデシタネー。
ああ　いうのが　まあ　楽しみでしたねえ。

A　アノ　ジブン　ギンナン　ギンナン　エチゴァー　ゴセンダッタ　ネカネ。
あの　時分は　銀杏　銀杏は　一合　五銭だったのでは ないかね。

サンセンカ　ゴセンダッタ　ネァカネ，
三銭か　五銭だったのでは ないかね，

C　ゴセングレァー　シマシタネ。
五銭ぐらい　しましたね。

A　ゴセングレァーダッタネ　ハー。
五銭ぐらいだったね、　はい，

C　ゴセングレァーダッタデショァーネ。
五銭ぐらいだったでしょうね。

A　ハー。エチゴァーズツ　カカエ　アエッタモンダ。
はい。　一合ずつ　×買いに　歩いたものだ。

C　ナンカ　コメー　エッショー　ギンナン　エッショーデ　カエー　キタナン
なんだか　米　一升　銀杏　一升で　買いに　来たなど

テテネー。(A ハー。)　ナンダ　ギンナンテヤ(46)　ターケァー　モンダナ
と言ってねえ。(そう。)　なんと　銀杏というものは　高い　物だな

ンテ　ユーテマシタドモ…。
ど　言っていましたけれども

A　エマ　ソレ　ギンナン　エチキロ　ナナヒャクエンモ〜〜　コメナンテ
今は　それを　銀杏は　一キログラム　七百円　米など

×アアシモトニモ　オヨバン。　(B 笑)
足下にも　及ばない。

D　コトシワ　センリョーデスト。
今年は　千両ですって。

A　ハー〜〜ギンナンキ(47)　エエナケ(48)　ナラン。(笑)　(B 笑)
はちち〜〜銀杏の木を　植えなければ ならない。

オトコッコドモワ　マー　スキーノリ　フユワ　マー　スキーノリダッタノー。
男の子どもは　まあ　スキー乗り、冬は　また、スキー乗りだったねえ。

スキーノリノヨァーナ　モンダッタノー。　マー　ガッコァージャ　ホレ
スキー乗りのような　ものだったねえ。　まあ　学校では　ほら

ドッジボァールダトカ　（C　ハー　マー　ドッジボァールネー。）
ドッジボールとか、　（はい、まあ　ドッジボールねえ。）

アンナノガ　アッタドモネー　ハー。
あんなものが　あったけれどもねえ、はい。

C　ソァーデスネ。　マー　ソレカラ　ワタシナンカガ　ガッコァーエ
そうですね。　まあ　それから　わたしなどが　学校へ

デタバッカリノ　コロワ　ヒバチガ　トコロドコロニ　フタツカ
あがったばかりの　頃は　火鉢が　所々に　二つか

ミッツグレァーシカ　ネァーカラ　アタル　シトナンカ　ソァー　アタッテ
三つぐらいしか　ないから　あたる　人など　そんなに　あたって

ランネァーデ　（A　ソァーソァーソァーソァー。）　モチロァーブラク
居られなくて、　（そう　そう　そう　そう。）　餅粮部落

キタムカエブラクッテ　コァー　ワニ　ナリマシテネー…。（A　ハー　ハー。）
北向部落といって　こう　輪に　なりましてねえ…。（はい　はい。）

(49)
ソァーシテ　オンナノコデモ　ナンデモ　アシガキダナンテ　カタアシ
そうして　女の子でも　なんでも　足掻きだなどという　片足で

モッテ　ホァーシテ　アエテオ(50)　（A　アシガキガ　アッタネー。）　ハー
もって　そうして　相手を…。　（足掻きが　あったねえ。）　はい、

アレガー　アッデスコテ　ゲンキ　エカッタシ…。
あれが　あれですさ、　元気が　よかったし…，

(50')
A　アシガキテワ　アノ　アンノ　アスビワ…タシカ　アシモチテガ
足掻きというのは　あの、　あの　遊びは…　たしかに　足持ちというのが

アッタコテネー。　ヒトリガ　アシ　モッテ　（C笑）（D　ソァーソァー。）
あったよねえ。　ひとりが　足を　持って、　（そうそう。）

ホァーテ　コァー　コロバス〰〰。
そうして　こう　ころばす。

C　コロバシゴクラ(52)デシタネ。
ころばしごっこでしたね。

D　〰〰〰〰〰〰　マシタネー。
ましたねえ。

A　アノ　ホレ　デッケァー　コドモノ　オメァー　アノ（Dアシ　モタセラレテ
あの　ほら　大きい　子どもの　あんた　あの（足を持たせられて、
笑）アシ　モタセラレテ　ナンギー(53)テ　ナンギテネー。
足を　持たせられて、　苦しくて　苦しくてねえ。

C　ユラユラユラユラ…。
ゆらゆらゆらゆらと‥‥。

A　ユラユラ…。
ゆらゆらと…。

D　アレ　ミンナ　サセラレマシタネー。
あれを　みんな　させられましたねえ。

A　アー　ユー　アスビガ　アッタネー。　アシガキダカ　アシモチダナンテ…。
ああ　いう　遊びが　あったねえ。　足掻きだか　足持ちだなど‥‥。
モットモ　フユダスケ　アッラコテ　アノ　ウンドァージョァニバッカ(54)
もっとも　冬だから　あれださ　あの　運動場にばかり
エタリ　シタスケァ　ソンナ　モンダコテ　ハー。
いたり　したから　そんな　ものださ。　はい。

C　ソシテ　オンナノ　コドモワ　ワー　ツクッテ　ソコデ　オテダマ
そして　女の　子どもは　輪を　作って　そこで　お手玉を

シテマシタシサー。
してしまったしさ。

A ソァーソァーソァーソァー。エマノ コドモwwナンゴナンテ ナンゴナン
そうそうそうそう。今の 子どもは なんごさど なんごさどと

タッテ エマノ コドモ ワカランドァー(55)エ。
言っても 今の 子どもは 分らないぞうね。

C ワカランデショァーネ。
分らないでしょうね。

A ハー。
はい。

C ソァーシテ エマノ コドモワ アーエ モンデ(56) アソビー
そうして 今の 子供は ああいう もので あそびに

デマセンモンネー。
出ませんものねえ。

A ソノ ナンゴダタッテ ミンーナ ジブンデ ツクッタモンダンネー(57)。
その なんごさって みんな 自分で 作ったものだからねえ。

C ソァーソァー。オヤノ ダイジナ アツキ コッソリ(58)(A wwww。)
そうそう。親の 大事な あずきを こっそり

モケダシテ (A ハー。 はい。) ツクッタモンデサーネー。
持ち出して 作ったものですねえ。

A ソァーソァーソァー アツキン(59) ナカエ ンナ エッテネー。ゼンゼン
そうそうそう、あずきを 中に みんな 入れてねえ。全然

アスビガ チガウガネ(60) エマノ アスビトネ。
遊びが 違いますよ、今の 遊びとはね。

注記

1、サイノカミ　賽の神。道祖神の祭り行事。どんど焼き。錦織集落の行事として大人たちの手により子供等も参加して行なわれる小正月行事。まず14日夜に小正月用の小豆を煮るが、その煮えたった時に杓子で小豆を少量すくいとって15日のスミウケの行事の準備をする。当日15日朝大人たちは山に入り、賽の神のためのかなりの大木を切りたおし、話者高橋真氏所有の、道路に近い田の上に運び、この木を心にして孟宗竹（爆音をおこさせるためという）と門松しめ飾り・わらをうず高く積んで用意する。同日夕方これを焼き、書初めをやき、餅を焼き、昔は前夜用意した小豆を賽の神の火・煙に合わせた。火の煙の靡く方向で豊凶を占うことが昔はあったという。煙に合わせた小豆は数人の人々が最寄りの家に立ち寄り、それ(小豆)によって豊凶を占ったということである。これをスミウケ・スミユケと言ったという。隣郡東頸城郡松之山町のスミヌリ（墨塗り）行事との関連やその民俗学的な意味等についてはまだつまびらかでない。

2. クンナセァー　下さい。補助動詞。ナサルはこの地方の標準的尊敬表現。錦織の標準的尊敬の助動詞レル・ラレルには命令形はなく、このナセァーで表現する。

3. スケァー　接続助詞　から、ので。関西の「さかい」の変化。この地方の標準的表現。大正生れのこの話者はもう、理由の接続助詞「エニ」を使わない。

4. ネァカッタ　なかった。ないの終止形[nɛː]に同化されている。

5. mn の終は「モンデ」と言っているのかもしれないが、きこえない。

6. ホビキ [hobiki] hɸではない。遊びの名。宝引。(宝は開音) 中世近世の正月の遊戯「宝引」の地方化したもの。福引きの一種。六本の紐の一本にタマ(昔はいわゆる穴明き銭・現在は五円硬貨など)を多く結びつけ、それを引きあてることを競う。昔は賭博的にも行なったという。今も老人クラブの余興などにすることもあるという。この語は富山岐阜三重和歌山福岡熊本各県とおもにある。語源については「俚言集覧」に、ホウは福の呉音ホクからきたとあるという。秋田県でも福引をホッピギといっている。(「秋田方言」による。)鋳枝のホビキの発音はこの語の語源に示唆をあたえるものがあろう。

7. エ　了解観念を表わす助詞　Iの83参照

8. キタムケァー　小字の名

9. ダイモチ　前出ホビキの別名。宝引きの様子がダイモチ(大持・大物引きVの61参照)の重いものを引くに似ているので、隠語的におもしろく言ったものが。話者はこの隠語を知らず誤解を笑われたのである。

10. ワラワッタ　レ(受身の助動詞連用形)が促音化している。

11. ヒッケテテ [çi]か[ʃi]かはっきりしない。「付けておいて」と思われる。語源は「引き付ける」であろうが、文語動詞他動詞下二段活用ひっつけるの一段活用化したもの。参考 シッツケル(富山県和歌山県)ヘッツケル(岐阜)ヘツケル・ヘッツケル(飛騨)

12. シッパッタコテーネー　ヒッパッタコトイネーの変化 [çi]>[ʃi] コテーについてはIの10、ネーについてはIの83参照。

13. オトッツァン　中年以上の一家の主人を呼ぶことば。大正元年生れの女性Cが大正七年生れのAに対して使っている。79歳の高橋鹿之助氏に対してもAはオトッツァンと呼んでいる。まだ元気で主人として活動しているからであろう。いわば中流以上の家の主人を呼ぶ語である。トッツァン、ツァーツァはこれより品位が下がる。

14. オトッツァン　79歳の高橋鹿之助をこう呼んでいる。

15. クム　草履などをわらで編み作ること。「組む」である。南魚沼郡湯沢

町では草履やわらじについてはツクルと言い、藁靴についてクムと言う。

16、ダモ　ダドモ（だけれどもに相当）の変化。

17、ショ　[ʃɔ]合音、ここでは強い音。

18、トショクショ　[toʃoriʃɔ]

19、オエ　[oe]　おい感動詞。ホレの変化か。「おーい」であれば[ɔe]となると思われるから、ホレの変化と考えておこう。[h]音の脱落はこの方言の特色である。

20、ムサドコ　畳の一種。本床・野郎床に対して、土地産のちがややイワスゲ（和名たぬきらん）で織った畳表を使い、藁の綱縄で締め、前のへりはつけず、「へり目をかく」と言って、単にほつれぬように表の経の部分を編んだ床を言う。現在は作らない。むさ苦しい床の意だと言う。ムサイ（きたない）中頸城郡・佐渡郡・全国各地

21、ゴァーギナガン　すごいもの。ゴァーギダの連体形＋形式名詞ガン
ゴァギの語源は強気・豪気かと言われる。程度のはげしいさまで、ここではわるい意味に使っている。刈羽郡・魚沼地方・三島郡にあり、群馬県・伊豆利島・福井県その他西日本にもある。

22、ヒータ　敷いたの変化。ここは中頸城郡に似てhi>ʃiの変化が多いのだが、これはその逆で誤った回帰。ヒシの混交の少ない柏崎市旧市域も青年まで一般に「布団をヒク」と言っている。

23、カサッシャエ　キカセサッシャレの変化か。あるいは下一段活用にはラッシャルが接続するから、キカセラッシャレの変化とすべきか。言って聞かせるをユーテカセルと言う。サッシャル・ラッシャルは尊敬の助動詞で「ナサル」よりも古いものと思われる。

24、ネダッタ　ダはやや[ra]の感じがある。

25、ネラッタ　ここでは[da]より[ra]に近い。

26、デー　「で」という助詞で終止する。余情を残す表現。抑揚はデー。

27、サースー　昔話の聞き手の合槌のことば。この語は頸城地方と共通である。中魚沼地方はサース・サーシー・サスケ、長岡市や古志郡でサンスケ、南蒲原郡見附市でハーイ、佐渡郡でサーソであるとい

う。佐渡では、合槌を打つことを「サソをつぐ」と言う。
「さそうろう」の変化か。江戸時代語感動詞（幼児語）に「さそう」がある。

28. オモシロエカッタ　終止形を連用形に用いた。

29. アエ　鮎　アユ＞アイ＞アエ　アエは津軽地方秋田県富山県福井県鳥取県島根県岡山県にある。アヨは山形県・富山県。

30. ホンネ　ホンニの変化　本に。

31. ナー　二人称代名詞　同輩以下に対して用いる品位の低い語。中越地方、青森県・琉球で用いられる。古語の残存。

32. ワリー　悪く。終止形を連用形に用いる。ワアリ・ワレ（山形県）ワリ（東北地方、新潟県南伊勢紀州和歌山鳥取県）

33. サッシャル　動詞「する」の尊敬。なさる。「さしゃる」の変化。サレルより新しく、それより敬意が高い。但しサッシャイと命令する場合は敬意は軽くなる。室町江戸期のことば。方言では関東地方北陸地方にきかれる。

34. ハンコァー [hankɔː] 判子は当て字で、語源は版行・板行であるといわれている。[kɔː]の開音は「行」の開音を保存していることとなる。

35. サンノァー　山王　地名　旧野田村にあり、鵜川地区から中山峠を下ったところにある。

36. タングツ　当時ようやく使用するようになったゴム靴の短靴。

37. ナンゴ　お手玉・お手玉あそび。布の袋の中に小豆を入れたもの、ウスタビガの繭の中に小豆三四粒入れたもの、（からからと音がする）、エゴノキの実を布の袋に入れたもの、布の袋に小石を入れたもの（石ナンゴ・男ナンゴと言う）などがあった。またケンポナシの実を入れたものもあったという。その遊びを「シーホートル」と言ったということである。「ひーふー取る」である。「日本言語地図」によれば新潟県中越地方から千葉県までの本を横切って帯状にナンゴという語が分布し、茨城県から福島県にも分布している。江戸から広まった語で、語源は「何個」であろうと言う。

38. ギンナン　銀杏　樹木としては「エッチョァー」（いちょう）より古いことばであると思うと高橋ケエノ氏（明治34年生れ）が言っていた。後

ちょうどいちょうの木を「ギンナンキ」と言っていることはそれを示す一つの例か，南魚沼郡湯沢町では大正初めエッチョアーと言っていた。

39．エッチョアー [ettʃɔ:] いちょう，頸城地方・南魚沼郡もエッチョアー，秋田県エッチョ 岐阜県イッチョ

40．カンギリ 遊戯名 出し合ったいちょうを先ずてのひらにのせ次いでこれを上に投げるや，てのひらをひるがえしていちょうをつかみとり自分の所有とするあそび。語源不明。

41．コアーッテ こうやっての変化か，40で言った動作を身振でしたのであろう。

42．ナンテラカラ ナンテダカナの変化。何と言うのかなの意。

43．アナエッチョアー この会話の中で説明されているあそびの名称。地上多くは雪上に小さい穴を作り，遠くから互に出し合ったいちょうの実を順番に投げ入れて入ったものを自己の所有にする遊び。
江戸時代の同種の遊びに「穴打(穴撃)・穴一」というものがあった。ムクロジ・ぜぜ貝・小石・木の実などを投げ入れて「穴うち」と呼んでいたのが，銭・穴一銭を用いる様になって「アナイチ」と呼ばれるようになった(日本国語大辞典)とか，又一二を争う意味の方へ語の感じが移ったために「穴一」とよばれるようになった(綜合民俗語彙)という語源説がある。この地方ではいちょうの実を使うことが多かったため更に変化して「アナエッチョアー」の語が生れたこととなろう。

44．ハンニョアー 地名 榛庭

45．ニラエ ニロアーエモン 屋号

46．テヤ と言いやの変化か。

47．ギンナンキ ギンナンノキの変化であろう。

48．ユエル ウエルの変化。

49．アシガキ 子供の遊び，片足とびをしながら相手をたおす遊び。「名語記」に出ているという，「日本言語地図」によれば中越地方・魚沼地方の特徴形，南魚沼郡湯沢町ではアシンガキ。

50．アエテ アイテの変化，相手。

50'．タシカ 副詞 タシカニよりやや確実性が弱く推量の心持を持つ表

現。こうした表現は室町時代の狂言の詞から見える。
51、アシモチ　片足とびの揚げている足を他の子供に持たせて遊ぶ遊び。
「足持ち」である。
52、ゴクラ　接尾語　くらべ、くら、ごっこ。「日葡辞書」や江戸の文学にあらわれる語。
53、ナンギーテ　名詞「難儀」を形容詞とし、その終止形を連用形に用いた。
大阪方言に似ている。
54、バッカ　バカリの変化。
55、ドァーエ　ロァーエの変化。ロァーは推量の助動詞。「だ」を合せず活用語の終止形に接する。エは丁寧親愛を表わす助詞。
56、アーエモンデ　あゝいうもので、昔の子供の遊んだナンゴなどを指す。はじめアミモンデのようにききとれたりして分りにくいことばであったが、刈羽郡刈羽村出身の調査者の妻の助力でこのように文字化することができた。
57、ダンネーはダモンネーの変化であろう。
58、アツキ〔atsuki〕語うない、小豆。古音の残存であろう。本草和名・色葉字類抄「アツキ」。アイヌ語「アントゥキ」。島根県アツキ。
預かるも「アツカル」といっている。
59、ンはオの誤りか。
60、ガ　終助詞。ガーと長音化することもある。感動をあらわす。

III. 愛知県北設楽郡富山村中の甲

収録・文字化担当者　山　口　幸　洋

A　収録地点とその方言について

1)地点名。愛知県北設楽郡富山村中の甲

2)収録地点の概観

富山村は、離島を除いては日本で一番小さい村である。昭和51年1月現在の人口は、わずか274人、80世帯である。村が小さいので農協もない。

富山村は、愛知県といっても東北端にあって、長野県天竜村、静岡県水窪町に接する山間の僻地である。昭和12年開通した国鉄飯田線大嵐(オーゾレ)駅から徒歩15分であるから鉄道の便には早くから恵まれたけれど自動車の乗り入れは遅かった。佐久間ダム完成に伴ってできた湖畔道路はかなりの悪路で、自動車によって愛知県の隣村、豊根村と往来できるようになったのは昭和50年の県道「津具――大嵐停車場」線の開通まで待たなければならなかった。

富山村は、佐久間ダムの人造湖の奥部の一角に位置する。大嵐駅は静岡県水窪町地内にあるが、周囲に民家は3戸しかなく、大嵐駅直前の吊橋を渡ったところが、静岡、長野、愛知の三県の県境地点である。村は佐久間ダムによって、その半数が水没しているとはいえ、あまりにも小さいが、それだけ隔絶した存在であるともいえる。これらのことからも、この地点の特異性は想像されるであろう。

この地方には天竜村坂部の「熊谷家伝記」をはじめ、あちこちに似たような書物があることで知られており、富山村にも「田辺年代記」という田辺家伝来の記録がある。それによると、正平元年(1346)に紀州田辺の人、田辺藤四郎国量が最初に市原に住んだ。市原は、同じ富山村となっている。漆島、河内(水没)、大谷等とともに、「熊谷家伝記」に記されている生々しい事件の主舞台となっているが、それらによってわかる通り、この地方は当時の武士達が集団をなして、「世を忍び、名を忍んで」移り住み、切り開いた安住の奥地であった。たとえば現在の富山村在住の全戸が祖先をたどっていけば、150年前

の古い家につながるともいう。見方にもよるが、村の全戸がおそらく南北朝時代の武士の集団の子孫達だといえるかもしれない。

3) 収録方言の特色

① 方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

この地方の方言は「遠三信国境地帯方言」として、ほぼ独立した区画名称を与えて良いと思われるが将来の課題であろう。少なくとも、愛知県富山村、豊根村、長野県天竜村、静岡県水窪町、佐久間町は、ほとんど共通する特色を持ち、この地域を愛知的、長野的、静岡的と三分割するのは容易ではない。又、この地域を一括して三県のどれかに属せしめると結論づけることも不可能である。やや有力な見方としては「非愛知的」であることかもしれないが、富山、豊根を非愛知的というならば、奥三河の広大な地域「北設楽郡」全域も、非愛知的と言わなければならなくなると思う。そのようなわけで区画上の位置を一言でいうのはなかなかむずかしい。

隣接諸方言との関係としては、長野県天竜村坂部と殆ど同一方言と考えられる（坂部方言を詳細に調べていないので決定できないだけである）。次に天竜村平岡。富山村では現在も、動詞過去形の ～ツが健在である点は天竜村より、静岡県水窪町方言の状態に近いと思われる。しかし、～ツが天竜村で比較的使われなくなったのは最近だろうから、この違いは本質的なものではない。富山村方言が水窪と異なり、天竜村に近いという最大の特徴は、「連母音の融合」があるという点である。

② 音韻上の特色

アイウエオ順のモーラ表と、標準的な音声をしめす。

ア	イ	ウ	エ	オ	ヤ	ユ	ヨ	ワ	ウェ (ウォ)	ウャ
カ	キ	ク	ケ	コ	キャ	キュ	キョ			
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ギャ	ギュ	ギョ			
サ	シ	ス	セ	ソ	シャ	シュ	ショ			
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ジャ	ジュ	ジョ			
タ	チ	ツ	テ	ト	チャ	チュ	チョ			

ヅァ　　ヅォ

ダ　　デ　ド

ナ　ニ　ヌ　ネ　ノ　ニャ　ニュ　ニョ　ネェ　ネョ

ハ　ヒ　フ　ヘ　ホ　ヒャ　ヒュ　ヒョ

バ　ビ　ブ　ベ　ボ　ビャ　ビュ　ビョ

パ　ピ　プ　ペ　ポ　ピャ　ピュ　ピョ

マ　ミ　ム　メ　モ　ミャ　ミュ　ミョ

ラ　リ　ル　レ　ロ　リャ　リュ　リョ

ン（撥音）　ッ（促音）　ー（長音）

具体音声について東京語と異なるものを個条書き的に述べる。

まず、母音では、ウ列音の母音が私には異様に感じられる。それは私などのウが〔ɯ〕であるのに対し、当方言のは唇を横に張り気味に強く構える〔ɯ〕（但し、丸めない）であることによるからだと思う。

次に全般にこの方言には、いわゆる母音無声化が少ない。語末あるいは、無声子音の音節の前の、キ、ク、シ、ス、チ、ツ、ヒ、フ、ピ、プの母音が有声音として発音されるわけであるが、その「有声化」が特別に強いように感じられる。これはかなり耳につく特徴であって、同じようにそれが「有声化」するといわれる名古屋方言、大阪方言よりも強いように感じられる。

次にこの方言では／ａｉ，ｏｉ／などのいわゆる連母音が融合する傾向が認められる。その具体的な姿は／ａｉ，ｏｉ／ともに〔ｅ:〕となる場合と、中間的な発音ともいうべき〔æ:〕又は〔ɛ:〕（／ai/の場合）、〔ø:〕（／oi／の場合）となる場合と、更にそれらとの中間的な発音で、表記に迷うような発音とがいろいろにまざって実現する。又、融合しないで〔ai〕〔oi〕と実現することも少なくない。／ai／にくらべて／oi／の方が融合しないことが多い。〔æ:〕〔ø:〕のような発音は、私には、「中途半ぱな回帰」の現象ではないかと思える。もっとも「回帰」という現象が必らずしも新しいかどうかということとは別問題である。〔ai〕〔oi〕とも〔ｅ:〕ともいう傾向がずっと以前からあって、いつでも回帰しうるという「抑え」を持った融合、

それが連母音の融合（広義の連声化）の本質であろうと思う。

そのような現象に類似の融合化（広義の連声化）は、ほかにもある。それは助詞「は」（ワ）、「を」（ウォ）の接続や、用言仮定形における融合発音である。「山は」「山が」が、ヤマーと発音され、「道は」「道を」が、ミチャー、ミチョーと発音され、「行けば」「良ければ」が、イキャー、ヨケリャーと発音される「融合化」も、いつでも、ヤマワ、ヤマウォ、ミチワ、ミチウォ、イケバ、ヨケレバと回帰しうる特性を持った「融合」であるように思われる。ただし習慣上、仮定形はいつも融合形で実現しやすく、「を」の場合は融合しにくいということは、方言的理由によって存在すると思う。

拗音は、そのような「融合形」や、擬音語や、漢語外来語に主として認められる。

なお、〔æ:〕は、アェー、〔Kæ:〕は、カェー、〔ø:〕は、オェー、〔Kø:〕は、コェー、と表記する。〔ɛ:〕と〔e:〕は区別せず、エーと表記した。

馬瀬良雄氏は、論文「天竜村 ― 大河内の方言」（民俗資料報告書『大河内の民俗』所収）のなかで、富山村方言にきわめて近いとみられる天竜村大河内の母音について、／e／は殆ど〔ɛ〕（広いェ）であり、／o／は〔ɔ〕に近いと述べておられる。富山村方言も結局そうではないかと思われるが、確かな観察をしていない。なお、テープで聞いた限りでは、／o:／という音声が、明らかに〔ɔ:〕であると感じられることはある。

当方言の単独の／e／は、語頭において本来〔je〕（本稿においてはイェと表記した）であるが、感動詞や問投助詞のエーは〔e:〕と発音されている。また、「上」「（灸を）すえる」など／ue／という連続においては〔juwe〕〔suweru〕のように〔we〕と発音されることが多い。そのほか「買え」「食え」のようなワ行四段動詞の命令形、「買える」「食える」のようなワ行四段動詞の可能動詞形において〔we〕が実現する。それらは、ウェと表記した。次に助詞「へ」は〔we〕と発音されることが殆く、時には〔uwe〕のよ

うに実現することもある。

次に単独の／o／は、語中で〔wo〕と実現する。〔ʃiwo〕(塩)、〔kawo〕(顔)の如くであるが、これは、音韻としては〔o〕と対立しないから、ウォというモーラを認めることは不適当である。また、助詞「を」がかなりはっきりと〔wo〕と発音されていることも、「語中」という範ちゅうに含まれる事柄だと思う。

モーラとして掲げた、ウャ〔wja〕は、「買えば」に当る、カウャーのような例から拾ったものである。

モーラ表のうち、同様の特殊条件下で実現するものが他に、ツァ〔tsa〕(例、ショーイッツァ(正一こん))、ツォ〔tso〕(例、ゴッツォー(ごちそうっ))、パピプペポ(擬音語等を除き、一般単語では促音の後でのみ実現する)、ラリルレロ(語頭に実現することが一部外来語以外は極度に少ない)等がある。

ガ行音子音は、語頭で〔g〕、語中で〔ŋ〕である。

ハ行音子音は、ハヒフヘホを通じて〔h〕でそれもやや有声気味な場合が多く〔ɦ〕とみられる。当録音中でも〔ɦata〕(畑)、〔ɦitotsu〕(一つ)、〔ɦutari〕(二人)、〔ɦoka〕(ほか)等が観察される。

なお、ハヨリッダデのような濁音の前の促音が数回観察されたのは注目すべきことで今後掘りさげて調査したい。

③文法上の特色

敬語は殆どなく、文末部のネーの使用なども殆ど近年の習得とみられる。文法的な特色は静岡県水窪、佐久間地方とし、意思未来推量のズ、推量のラ、ズラ、伝聞のチョー、過去のツ(ズ)等がある。詳しくは、拙稿「水窪 ── 語法にみる遠州山地方言のサンプル」(「国語学」34所収)にゆずり、ここでは過去形のツについてのみ記しておく。

この方言で、動詞過去形を、行ッツ、見ツ、飛ンズのようにいうことはもっとも注目すべき特徴で、行ッタ、見タ、飛ンダのいいかたと、ある種の区別を持っていることは重要な事実である。又、行ッタッツ、

見タッツ、飛ンダッツという語法もある。私は、この三種類のいいかたについて、それを「過去形」(～ツ)、「完了形」(～タ)、「過去完了形」(～タッツ)であると見て、論文「静岡県方言の過去表現について」(国語学7に所収)に発表したことがある。また、ツとタには他称(ツ)と自称(タ)の区別もからんでいるとみられるふしがある。この見解は、日本語におけるテンスの考察に問題を投げると考えられるが、タとツの区別、更に、タッツの意味については、文言の話手の意識調査がむつかしいので、自然談話の観察から、たくさんの事例を採集して帰納的に解決することがもっとも望ましいので、今回の資料のように、～ツ、～タ、～タッツの事例が沢山採集されたことは、たいへん喜ばしい。

なお、形容詞過去形、指定助動詞過去形、動詞否定過去形については、すべて～カッツ、～ダッツ、～ナンズであるのが本来の姿である。もしそれを、～カッタ、～ダッタ、～ナンダという例があれば、それは、脱方言的な実現の例であり、決して、～ツ(ズ)と文法的に区別されているわけではないと思う。この点を誤解する向きがあるといけないのでこの場でお断わりしておく。

その他、前記拙稿「水窪」に述べなかった特徴としては、「知らないで」「歩かないで」に当るいいかたを、シラデ、アルカデという点をあげることができる。

語法というより、慣用法というべきかもしれないが、ムカシムカシ(昔々)とか、ワラッテワラッテ(笑って〳〵)とか、オーキーオーキー(大きい〳〵)のような「たたみ語法」が非常にさかんである。

次に、語順は決して常に順序正しくない、ということも今後の課題として研究する価値がある。

次に、動詞連用形を用いる名詞的用法がかなり活発である点を指摘したい。タベがワルイ(食事が少ない)、オキがワルイ(早く起きられない)、カミサマオガミ(神様を拝むこと)、オミキアゲ(お神酒をあげること)等の例がみられる。

次に「語法」の特色として、相手の話を聞く人は、しきりに「そう

だそうだ」というあいづちを打つことが多いことをあげることができる。

B　録音内容の概説

近頃の村の老人達は、「見知らぬ顔」の他郷人と話をするときは、すぐ言葉を改めて、てぃぬぃなことばを使い（標準語使用を含む）てしやすい。土地の人に、地のことばで打ちくだけて話をさせることはむつかしい。しかし、なかにはどんな「世間者」が来ようと方言でしか話せないという人や、相手がだまっていても一人でしゃべるというような人もいる。私は、方言のあるがままの飾らない会話の場に遭遇するためには、そのような人を探すことがひとつの方法であると考えていたし、一方、できるだけ硬くならず、又、立せず、話し手の気持に負担をかけない形をとろうということで、機関を頼らない民間ベースで、ひまで達者な老人を探した。そして老人と話すには、たとえ方言が通じないことがあっても、私は私の方言で話をすることが相手に警戒をさせない、ひとつの方法と考えた。

今回は、なにぶんにも話者の選定が幸いしたと思う。第一部は、話好きなおばあさんと、おじいさんという組合せである。このとき私は別のおばあさんを呼びに行っていて席を外していた。

第二部、三部は、この別のおばあさんを加えての三人の話合いである。私は同席していたが、できるだけ黙っていた。なお、新手のおばあさんは盆唄の名手であるとのことなので第三部では特にお願いして唄も入れてもらっている。

第一部～第三部を通じて、特に話題に注文をつけなかったせいか、これといってまとまった「面白い話」は出なかったけれど、家族、近所隣りの、いわゆる日常の身辺雑事の話しあいに終始している。しかし、これはこれなりに「自然」な村の日常生活、村人達の物の考え方をうかがい知るための一面をよく写していると自負するものである。

録音年月日　昭和50年9月6日

録音場所　愛知県北設楽郡富山村中の甲　武田初夫さん宅（全部）

話し手　（第一部）

武田ふさ（女）明治32年　同所生れ農業従事、他所での経験なし。方言保有度かなり強いと思うが、間投助詞ネーの使用は近年の習得か？。言語明晰。

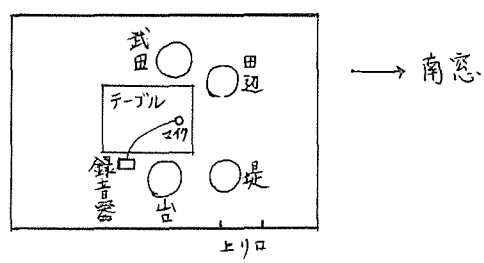
田辺正一（男）明治34年　富山村川上生れ農林業、他所での経験なし。方言保有度申しぶんないと思うが、ことば使いはおとなしく、乱暴ではない。村会議員と、短期間村長の経験あり。今、老人クラブ世話役。

（第二部）（第三部）

武田ふさ、田辺正一　と

堤ふじよ（女）明治39年　富山村市原生れ農業従事、他所での経験なし。現在、中の甲在住。方言保有度申しぶんなく話し好き。性格もほがらかで気さく、歌好きで、盆唄その他古い民謡の名手という。

録音環境　武田ふささんの自宅居間で、きわめて自然な雰囲気のもとで行なわれた。第二部、三部における話者の配置は次のようである。



1. 身辺雑事

話し手

(略号)　(氏名)　(性)　(生年)

A　武田ふさ　女　明治32年　富山村生れ

B　田辺正一　男　明治34年　〃

D　武田初夫　男　大正4年　富山村生れ　〈但し部分的にのみ参加〉

E　武田やす恵　女　大正13年　〃　〈　〃　〉

B　コノ　マゴモ　オレ　サクマノ　ガッコー　デル　トキニ　マー　イ
この　孫も　俺，佐久間の　学校を　出るときに　まあ　今

〜マントコワ　シゴトガ　ネーデ　ヨソイ　デニャー　ナラン　シメ
の所は　仕事が　ないから　よそへ　出なくちゃ　ならない，(しかし)しま

〜ーニャー　オマエ　キテ　クリョー　ヨッチェッテ　イタガ　ソース
いには　お前は　来て　くれよ，て　言って　いたが，(孫は)そう

〜ルデーッテ
するからって（言った）

A　マー　ナガイキョー　セニャー　ソンダッチェッテモ　マー　アン
まあ　長生きを　せねば　損だって言っても　まあ　あん

〜マリ　ソー　アリケンヨーニ　ナルマデ　イキチャー　ガナンイエー
まり　そう　歩けないように　なるまで　生きては　かなわないね

B　マー　ソイデモ　ハチジューグレーマジャー　イキニャー　ソイデ
まあ　それでも　八十　ぐらい　までは　生きねば　それで

〜モ　モッテネー　ハチジューグレーマジャー　マー　ソイデモ　ヒ
も　もってね　八十　ぐらいまでは　まあ　それでも

〜チジューイエー　サンプレーカラノ　アミノメオ　イエー　トッ
七十　ね　三　ぐらいから　の　あみの目を　ね　とっ

～ツイタ　ヒター　ダイゲー　ハナジュー　ノ　コエガ　カカラニャ
ついた　人は　たいがい　ハナの　声が　かからねば

シナンゾ
死なないぜ

A　ホーカイエー　マーオレ　イヤ
そうかね　まあ俺

B　オバーワ　モー　ハナジューノ　ヨニ　ナッタッツラ
おばあは　もう　ハナ　の　余に　なったろう

A　ダレー
誰？

B　スキノ　オバーイエー
杉乃　おばあね

A　ソーダッツライエー　アノオバーワ　オバーモ　オジーモ　イクラ
そうなったろうね　あのおばあは　(いや)おばあも　おじいも　いくら

サッソク　シンダドエ　シタデオジーワ　アノ　オカシー　ゼンソ
なんでも早く　死んだよ　下のおじいさんは　あの　おかしい　ぜんそ

～クッチューダカイエー
くっていうのかな

B　アー　ゼンソクダッツイエー
あ　ぜんそくなったよ

A　コーユー　トコノ　コタツニ　スワッテテ　セーテ　セーテ　ソレ
こういう　所の　こたつに　坐っていて　(せきを)して　せきをして　それ

～ッキリイエー　ヨルー　ソレカラ　シタノオバーモ　アイ　ヒトリ
つきりね　夜，　それから　下のおばあさんも　××　一人

～バカ　シタニ　オイテモ　ショーネーデ　ハツガ　ユウェデ　ツレ
ばかり　下に　おいても　しかたがないから　初夫が　上へ　連れ

～テ　コニャー　ヒオ　アブンネーッテ　ツレテキテ　オイテ　チャ
て　来なくては　火が　危ない　って　連れてきて　おいて　茶

～ンマノ　アノ　ムコーノ　スミニ　ネケーテ　オイテ　ションベー
の間の　あの　向うの　隅に　寝かして　おいて　小便

ヒーテオキ　アノ　ハツ　オキテクリョー　ヨッチューモンダデ　オ
して　起き…，あの　初夫よ　起きてくれっていうので　起

～キテ　ションベン　タレー　モッテキテ　ヒーラシテ　ネケーテ
きて　小便を(するのに)　たらいを　持ってきて　(小便を)させて　寝かして

ヤッタラ　ドーカ　セツナクテ　ショーネーニ　ロクシンガン　ク
やったら　どうか(何故か)せつなくて(苦しくて)　しかたがないから　六神丸　を

～リョー　ヨッチューモンダデ　ソレオ　ノマシタライエー　ソーヤッ
くれっていうので　それを　飲ませたら　ね　そうやっ

～タラ　ヘー　アサ　ヘー　シンダッタエ　アンゲニ　サッソク　シ
たら　もう　朝　もう　死んだって言ったよ　あんなに　早速に　死

～ンデモイエー　サッソク　シンダッタ
んでもね，　早々と　死んだ

B　ハチジュープレーダナ
ハナ　ぐらいだな

A　ドーモ　ハチジュープレー　ナッタモ　シレン　エー　ソレガキ
どうも　ハナ　ぐらいに　なったかも　しれないよ，ねえ，　それが(気性の)

～ツイオバーデ　マズ　アスビーヤナイカ　ムラナカ　アルキヌイツ
強い　おばあさんで　まず　遊びに　など　村内を　歩き　ぬいた

～ガイエ
がね

B　アー　ソーダッツイエー　ソーダッツ
あっ　そうだったね　そうだった

A エー キツイ オバーグッツドイ イェー ソレガ マズ ムカシ
ねえ 気の強い お婆 だったよ ね それが まず 昔

～ッカラ アンマリ ナニカ ヤリツケン オバーダカ ナンダカ
から あんまり 何か やりつけない お婆 なのか 何か

コドモガ アノ オレノ コドモワ ヘー デカク ナッツガ
子供が あの 私の 子供は もう 大きく なったが

リツヨントーモ ミズクニントーモ ショーネー サカリデ イク
リっ代達も みずくに達も 困る さかりで いく

～ラカ アトー オッテ アリッテモ ミリャー エートモヤ ソレ
らか 後を 追って 歩いても 見れば 良いと 思えば それ

～オ ソ ワリヤイ コニ ナラッコネーエ アソビー イク コボ
を × わりあい 苦に ならずに 遊びに 行く, 子

～リー イッテ ポンポン ポンポン イッテシマウ マー メシデ
りに 行って ポンポン(さっさと) 行ってしまう まあ 御飯で

ナケニャー コンダイ
なければ(帰って)来ないよ

B アー ソー ソー ソー ソー
あ そうそう

A アノ コドモー ミツケンデダイ
あの 子供を みつけないからだ(子供の面倒を見ることに慣れていないからだ)

B アー コドマー マクナカッタデイェー
あ 子供は 少なかったから ね

A エー ソイデ ミツケンデ オリャー マタ リッチャントーガ
え それで 見慣れていないから 俺は 又 りっちゃん達が

コケチャー コマル ソレーマタ ミズクリントーモ カタッテ
そそうしては(倒れては)困る それに又 みずくり達も 一緒に

コケチャー　コマルトモッテ　ウチデ　ナンノ　デーモ　ソンナ
倒れては　困ると思って　家で　何に　つけても　そんな

ンコトー　オシエタリイエー　イクラカ　ニヤケオ(1)　ヤッタリセリャー
ことを　教えたりね　いくらか　炊事　やったりすれば

アレダン　ワリヤー　グニ　ナラットケッコー　アサ　オキテ
あれでか　割合　苦に　ならずに　けっこう　朝　起きて

メショー　クッテ　ヨガ　アケルト　メショー　クッテ　ケッコー
飯を　食って　夜が　あけると　飯を　食って　けっこう

スズシー　マニ　アスビー　ポンポン　ポンポン　ガサー　モッテ
涼しい　内に　遊びに　さっさと　傘を　持って

イッチャッテ　ドーモ　コドモワ　グニナランモンダッツエ
行っては　どうも　子供は　苦にならないもんだったよ

B　コドモワ　ヒトリダッタデエー
3次は　一人　だったからね

A　オー　オレガ　ヒトリッキリ　ヒトナッタモンダデサ　ワリエー
うん　私が　一人っきり　成人したので　わりあい

グンナランモンダデ　アノ　ハツオジーノ　オバーワ　ナンダッツ
苦にならないから　あの　初お爺の　お婆は　何だった

～ガエ　コドモ　オトコ　オンナノコワ　ヒトツモ　ナカッチョーモ
よ　3次(といえば)男(いや)女　のほは　一人も　なかったそうがら

～ンダデ　オトコノ　コバッカダッツモンダデ
男の　ばかりだったので

B　アー　ソーダッツガエー
あい　そうだったね

A　エー　ヨッタリトカ　オトコノ　コガ　アッテ　ヒトネタチョーガ(2)
え　四人とか　男の　3次が　あって　育てたそうだ

マズ　ハツガトー　ハツガ　オレオ　ガ　ハツオ　ウンダトキニ
まず　××××××　初夫が　(俺を)×　俺が　初夫を　産んだときに

マズ　ヨーサ　オケーコサマガ　ムコーニ　サンシツッテ　アッテ
まず　夜じゅう　おかいこさまが　むこうに　蚕室って(いうところに)　あって

カッテ　キテ　ミリャー　コー　ヤッチャー　カンゴイ　ネブッチャ
飼って(世話をして)いて　(それをそこへ)行ってみれば　こう　やっては　(子守)篭へ　眠っては

ヘー　コー　ヤッテテモ　オバー　コノコワ　ネーッタデー　オイテ
こう　やっていても　お婆さん　この子は　寝入ったから　そこへ置いて

ネテ　クリョーエ　オレガ　クリャー　カッテ　クリャー　ミルデ
寝て　くれ　よ　私が　来れば　私が(かいこの)飼育して(ここへ来れば)　見るから

イーデッタラ　ウン　ナクテモ(3)　オモイデナーッテ　ソノ　ハツデ
良いからって言ったら　うん　泣いては　重いからなって　その　初お爺

～ノ　オバーワ　メオ　ハナサナンズワ　アカンボーウォ　ソイデ
の　お婆は　目を　離さなかったよ　赤ん坊を　それで

ハツオジノ　オバーワ　マタ　ヒトモ　ケッコナ　オコリバーデー
初お爺の　お婆は　また　人も　良い　怒り婆で

ドージカラ　キタ　オバーダッチュエ　デマズ　ネブ　コーヘー
ドンジ(家号)から　来た　お婆だっていうよ　それで　まず　××　こうも

ヨーサ　ネブッチャー　カンゴノ　ヘチー　アノ　クルミカンゴノ
夜じゅう　眠っては　篭の　ふちに　あの　くるみ篭(子守篭)の

ヘチー　コンナコト　シチャーエー　ネブッツガ　ソレデモ　マン
ふちに　こんなこと　してはね　眠ったが　それでも　ま

ダ　オキテテー　オバー　イーデ　ネテクリョー　オレ　ナキャー
だ　起きていて　お婆さん　良いから　寝てくれ　俺　泣けば

ミルデ　イーデエーッテモイェ　モモイデ　ミルッテ　ドーシテモ
見るから　良いからねって言ってもね　可哀想だから　見るって　どうしても

ネッコネイチー(4)　ミツガ　スゲノオバー　ドーカ　モリオ　ツ　シー
寝ずにいて　ミツ(人名)が　スゲノお婆さん　どうか　子宇を　×　やり

～ツケンデ　イヤダカエー　イヤダカ　サッパシ　ミッコナイ　ビズ
つけないから　いやなのか　ね　いやなのか　さっぱり　みようとしない　ビズ

～クニ　ビズクニヤ　リツヨガ　ショーネーセーッチューエー　ケッ
クニ　ビズクニや　リツ代が　しかたがないさって言う　ね　けっ

～コー　カサー　モッテ　ポッポ　ポッポ　アスビー　イッチャッタ
こう　傘を　持って　さっさと　遊びに　行っちゃった

～ガ　アンキナッタダイ　エー　ハイ
が　気楽だったよ　ね　もう

B　アーソーソーダ
あっ　そうだ

A　ソーヤッテ　アソビー　イッチャッタ　アー　ショーナカッツ
そうやって　遊びに　行ちゃった　どうしようもなかった

ハツオジノ　オバーワ　アスビー　アリカナンズワイエ　アー
ハツお爺の　お婆ーは　遊びに　出掛けなかったよ

チョットモ　アスビー　イク　オバーデ　ナカッツエー　ボンニモ
ちっとも　遊びに　行く　お婆で　なかったよ　盆にも

ドージー　イカナンズワイエ　アー　トシガ　イッタラエ　ムカ
ドージ(家宇)へ　行かなかったよ　年が　行ったらね　昔は

～シャ　ドージー　イッタッツガナ　マー　イマ　ウチデ　オガバー
ドージへ　行ったものだがね　まあ　今　家で　拝めば

イーデ　イカンヨッチュッテ　サッパシ　イカナンズ　イカン　オ
良いから　行かないよって言って　さっぱり　行かなかった。　行かない　お

～バー　ヌッショー　ウチワ　デナンズエ　ハツオジーノ　オバーワ
婆さんだ　～～～～～　家を　出なかったよ　初お爺の　お婆は

B ダガ オンナシュー ウチニ イルト ホント ジゴトバッカシダ
だが 女の人は 家に いると 本当に 仕事ばっかりだ

～デエー ジゴトバッカシダ オンナシューワ
からね 仕事ばかりだ 女の人は

A イエー アノ ケンイッツァントコエー ダレノ カカーンダッツ
ねえ あの 健一さんのところへ 誰の おかあさんになった

～ラエ ソノ ココノ オバート ドージノ オバート キョーデー
ろうか その ここの おばさんと どーじの おばさんと 兄弟

～シューデ ケンイッツァントコエー ヒトリイッタ オバーガア
で 健一さんのところへ 一人行った おばあさんが あ

～ッツチョーワイイエ ケンイッツァントケー(5) ソノオバーガケン
ったそうだよ 健一さんの所へ そのおばあさんが 健

～イッツァンノ カカーガ キタトキンナラチョーガエー マンダ
一さんの おかあさんが 来た時にならだそうだがね まだ

イキテダッチョーガエ オリャー サッパシ シランカ
生きてたそうだがね 俺は さっぱり 知らないかっ

B ソースルト ナミッタサノ ナンダナー
そうすると ナミッタサ(人名)の 何だね

A カカダカエ
おかあさんだかね

B アー ツネサブローサンジャネー アノー ケンイッツァノ オジ
あっ 常三郎さんではない あの 健一さんの おじ

～ニ アタル
に あたる

A ソノヒトガ マンダ ナンダチョーガエ ドッカ ケンドーオ
その人が まだ 何だそうだかね どこか 県道を

トール　ミチミタ＝　ウチガ　アッテー　イエー　アッテー　ソレカ
通る　道下に　家が　あって　ねえ　あって　それか

～ラ　ケンイッツァノ　オバーガ　マンダ　オカーガ　ケンイッツァ
ら　健一さんの　お婆が　まだ　あかみさんが　健一さんの

～ノ　カカーガ　ワカークテ　キタチューモンダデ　ドッカ　コー
あかみさんが　若くて　来たというのに　どこか　こう

ナナメ＝　オリチャー　イッテエー　ソーヤッテ　ナンダチョーワ
ななめに　下りては　行ってね　そうやって　何だそうだ

～イエ　ケンイッツァノ　ウチオ　ヘールトコノ　ミチ　ウチガ　ア
ね　健一さんの　家を　入るところの　道　家が　あ

～ッタラ　ソコニ　トシヨリノ　オバーガ　ココノ　オバーワ　ドン
ったら　そこに　年寄りの　お婆が　ここの　お婆は　どん

～ナ　オバーダシランガ　ソノ　ケンイッツァントコノ　オバーワ
な　お婆が知らないが　その　健一さんの所の　お婆は

マンダ　イキテタッツッチューカイ
まだ　生きていたっていうよ

B　ホホー
ほほう

A　アー　ソーイッテ　ケンイッツァノ　オバーガ　イマハナスガイイエ
あ　そう言って　健一さんの　お婆が　今　話すがね

B　アー　ホーカ
あ　そうか

A　アー　ソイデ　キョーデーダッチョー
あ　それで　兄弟　だそうだ

B　アー　ソーダソーダ
あ　そうだそうだ

A ゴコノ ゴコノ オバート アノ ケンイッツァノ オバート ア
ここの ここの お婆と あの 健一さんの お婆と あ
〜ノシューノ オバーガ ジューヨニン キョーデーシューガ アッ
の家の お婆が 十四人 兄弟家が あ
〜チャーウェ
っては ね

B ソーカイ
そうかい

A アー ソレダモンダデ クロガジャーネー クロゼットカ ナントカ
あぁ それだから クロが ではない クロゼ（地名、狄老勢）とか 何とか
〜カ ユーホーエモ イッタッチョーゼ イフタリモ アー オトコ
いう方へも 行ったそうだぜ 何人も あぁ 男
〜シューノ キヨタッチュー シトモ アッチョーワ
家の キヨタ（人名）っていう 人も あったそうだ

B ウン ソーソーソーソーダ
うん そうだ

A エ ソーユーシトモ アッチョー ジューヨニントカ アッチョー
× そういう人も あったそうだ 十四人とか あったそうだ
キョーデーシューガ
兄弟が

B ソースルト ナニモ ソーダッツラカナー ドコ オーカワイ イ
そうすると 何も そうだったろうかね どこ 大川へ 行
〜クノモ ソイジャー オランドコノトモ イッタッツラカイ ドー
くのも それでは 俺の所のとも 行ったろうか どう
〜モ ソーダッツライヤ
も そうだったろうな

A ソーカソーカ

そうかそうか

B ソノ カネオオバーオ オイテッタダイエー オラントコノモンニ

その カネヨお婆を 置いて行ったんだね 俺ん所の者に

ツイテー

ついて

A ソーカソーカ

そうかそうか

B カクゾオジーノ コダカ ナンカダカデ

カクゾお爺の 子だか 何かで

A ソノ カーカラ(6) コケーダカ コッカラ カーカラダカイ イ

その 川上(家)から ここへだか ここから 川上 だかへ 行

ッタ オバーモ アルッチョーエ

った お婆も あるそうだ

B アー ウチカラ コケー キタダ

あ 家(川上)から ここへ 来たのだ

A コケー キタダカイ ソノ オバーモ ハツガソーユーガ ボヒョーニ

ここへ 来たのかい その お婆も 初夫がそう言うが 墓標に

アルッチューガイ

あるそうだ

B アー アノ オトノ トーン オトノ トン オトノト カイテ

あ あの おとの(人名) おとの おとのと 書いて

イッタモンダエ

行った もんだよ

A エー ソーユー シトガ アノ アッチニ ボヒョーニ アルッチュ

え そういう 人が あの あっちに 墓標に あるって

～ーガイ エー
いうよ ね

B アー ソーソーダ オトーガ ヨワカッタナー ヤエクボノ ソー
あぁ そうだ お父が 弱かったね 八重久保の そう

～ヤッテ ナンダッツゾ アノ イッショー ------
やって 何だったぜ あの 一生

A ソーカソーカ ソーユヤー ハツガ ソノ カーカミカラ キタヒ
そうかそうか そういえば 初夫が その 川上から 来た

～トガ アルフーデ アノ アッチニ ボヒョーニ アルッテ
人が ある様で あの あっちに 墓標に ある、て

B アー ソーソーダ ソレダモンダデ ナウ イコイタデ(ア) ソノ
あぁ そうだそうだ それだから 名は(名をつけるとき) 動いたから その

シタデノ オトノサオ ナンダッツウ アノー オトノッチュッテ(8)
シタデ(家号)の おトノさんを 何だろうう あの おトノっていう

ナオ ツケタッツワイ ココニ イキタ オバーガ イコイタッテ
名を つけたっけ ここに 生きた お婆が よく 動いた、て

～エー ソノ オジーガ アノー カラダン ヨワカッタモンダデ
ね その お爺が あの 体が 弱かったので

ナンショ イコカンデ ショーナカッタダイ ムカシダモンダデ
てルかく 体かなくて 困った よ 昔だから

A アー ソーカソーカ
あぁ そうか そうか

B ゴダイカ ロクダイ サキズライエ
五代か 六代 前だろうよ

A ソーカソーカ ウウー サッパリ ソノ ボヒョーヤナイカ シラ
そうか そうか 俺は さっぱり その 墓標や何か 知ら

ハンガ ハツガ マズ ボンメーッチュヤ ボヒョーウォ キレーナ
ないが 初夫が まず 盆前っていえば 墓標を きれいな

ゾーキンデ ケッコー フイチャーエー マタ マズ カミサマオ
ぞうきんで けっこう 拭いてはね また まず 神様を

ソーダエー カミサマノ オカゲダワエ ケッコー ソノ ナナオ
そうだね 神様の おかげだよ けっこう その ×××

ダナノ ナニョー ケッコー フイテ シマッチャー ボンメーニャ
棚の 何を とうとう 拭いて しまっては 盆前には

ナンショ カミサマー オガム アサモ ドコ イッタトモヤー
とにかく 神様を 拝む 朝も どこへ 行ったと思えば

カミサマ オガミーイク
神様を 拝みに いく

B アー イーコンダ アノー ナンノ ケンチャワ ドーモ マー
あ 良いことだ あのう 何の どうも まあ

ウラントコジャー ヘー ヨメガ マツルコトニ シテルダイ マ
俺の所では もう 嫁が(神様を)祭ること してるんだ (始め

~ツランガ アノー ショテウチャー ヨメガ ネーウチャー オレ
のうちは) 祭らないが、あの 始めのうちは 嫁が (来)ないうちは 俺が

~ガ マツリ ..... サー オレガ オラントキニャー コドモガヘー
祭り ... 俺が 居ないときには 子供が もう

チャント ソーユー クセオ ツケテ アルモンダデ コドモガ
ちゃんと そういう 癖を つけて あるので 子供が

A アー コドモヤ ソレカラ ウラン キンジョデモ オレガ マツ
あ 子供や それから 俺の 近所でも 俺が 祭

~ッタガ イマジャー ハツガ オレデ ナケニャーッテユワーエレ
ったが 今では 初夫が 俺で 無ければって 言うよ

アー　マツルモンダデエー　サー　アタマガ　イテーシ　ヘータイ
あゝ　祭るからね　さあ　頭が　痛いし　兵隊

～ウェ　コドモガ　イッテ　イッペンニ　サンニン　イッタダーエ
へ　子供が　行って　一度に　三人　行ったんだよ

ヘータイウェ　イエー　ソノルスニャー　オジーガ　オレガ　オガ
兵隊へ　ねえ　そのるすには　お爺が　俺が　拝む

～ムッテ　オガミヌイテクレタ　オジーガ
って　拝みぬいてくれた，お爺が

B　アーソーダッツ　アーソーソー
あゝそうだった　あゝそうそう

A　オジーガ　オガミヌイテ　クレタガ　ソレカラ　ナルタケ　イマー
お爺が　拝みぬいて　くれたが　それから　〰〰　今は

オレガ　カミサマグレーワ　オガミエルモンダッテエー　オチャー
俺が　神様ぐらいは　拝むことができるものだってね　お茶を

カエテ　オガムドーッチュヤ　イーッテ　オレガ　オガムデ　イーッテ
替えて　拝むぞって言えば　良いって　俺が　拝むから　良いって

ソーイッテ　ドーシテモ　オガマセエナンズ　（B　イーワ
そう言って　どうしても　拝ませ得なかった　良いよ

～イ）　ウジガミサマヤ　センゾサマヤ　ウブスナサマワ　オレ
氏神様や　先祖様や　産土神さまは　おれ

～ガ　アッチデ　オガムガイ　センゾサマラ　ハツダッタ
が　あっちで　拝むさ　先祖様（のことは）初だったん

B　アー　ソノボーガ　イーダ
あゝ　その方が　良いのだ

A　テメーデ
自分で

B アー ソノトーリ オラントコデモ ヨメガ ハエー ヤルコト=
あぁ その通り 俺の 所でも 嫁が もう やること

A アー ソーダソーダ ドコデモ ソーダデエー
あぁ そうだそうだ どこでも そうだからね

B サッパリ オヤノセワワ ヨメガ ヤラニャー ヘー ドコデモ
さっぱり 親の世話は 嫁が やらねば もう どこでも

ソーダガ ドコデモ ソーダガ オヤノ セワワ ナンダワイエ
そうだが どこでも そうだが 親の 世話は 何だよ

ヨメガ ヤルモンダデエー
嫁が やるもんだからね

A アーアー アタリマエダデー
あぁ 当り前だから

B アー ソーヤリャー マタ トシガ ヨッテ= マタ ヨメニ
あぁ そうやれば 又 年が 寄ってから 親 嫁に

ヤッテ モラウダキダ
やって もらうだけだ

A ソーダソーダ イソコオバーモ ナイカ フジンカイノ ナニョー
そうだ そうだ 磯子お婆も 何か 婦人会の 何を

~セ ヤルトキニャー ナニカヤ コーヤッテテ オレト イソコサ
×
やるときには 何か こうやってて 俺と 磯子さん

~ト コッチジャー ヤッテ ウラントケー ヨー デテキテクレテ
と こっちでは やって 俺のところへ よく 出てきてくれて

デテキテクレテ ガッコイ イッショニ イッテエー ワスレエン
(Retrain) 学校へ 一緒に 行ってね 忘れられない

~ガエ コケー デテキテクレテ ドーユーモンダカ
よ ここへ 出てきてくれて どういうものか

B ナニガ ケツアツガ ケツアツガ タカッツエー
何が 血圧が 血圧が 高いね

A ハヤク コロント シンダダデエー バカナコトン アッタモンダイ
早く ころんと 死んだんだからね ばかなことが あったもんだよ

B ションナイ アノ キョーデー シュー ミナ ジュミョーガ ミジ
しかたがない。あの 兄弟 は みんな 寿命が 短

～カカッツ ソイデ イソワ ナガイキョー シタホーダデエー
かかった。それで 磯子は 長生きを した方だからね

ハタラクシュー ウチジュー ケッコー シンジャッタ
働く衆 けっこう 死んじゃった

アードーモ ------- ドーモ (9)
あいどうも どうも

D オアツォーゴザイマスー
お暑う ございます

B ゴッツォーン ナッテ ……
ごちそうに なって

D ヨクマズ キテクレデイエー
よくまず 来てくれましたね

A キノーノ ヒトガイヤ キノーノ ヒトガ タダ ヒトリデ ヨッ
昨日の 人がね 昨日の 人が ただ 一人で 寄っ

～テ クレタラ オッカナイデ コトワットモッタラ ショーイッツァ
てくれたら 恐いから 断わろうと思ったら 正一さん

～ガ キタ *
が 来た

E オアツーゴザイマス ドーモ
お暑うございます（田口さんに）

B オアツーゴザイマス ……
お暑うございます

D マズ イキルエ キョーワー
まず 温気るね 今日は

B アー イキルエ ウレシカッタ ミンナ ヨンベ シンジンセテ
あゝ 温気るね うれしかった みんな 昨夜 信じして

クレタラ アメガー ギノー ガエルジブンニャー クルニャー
くれたら 雨が 昨日 帰る 頃 には 来るには

ナンダッツガ
何だったが

E キタッツガ
来たっけ

B マーズ オッツキサマデ コリャ フリャセンゾ ナンチュッテ
まず お月夜 で これは 降りゃしないぞ などと言って

ナーニ ジューニジジブンカラサー ハジメテ フットイテイェー
なに 十二時頃から 始めて 降っておいてね

D アー オッツキサマダッツガエ ソーイェ オレモ カイエ(11) ヘー
あゝ お月夜 だったがね そうさ 俺も 給桑に 入る

〜ルトキニャー マーズ ホシバッカダン マズ コリャ オシメリャ
時には まず 星ばかりだが まず これは お湿りは

ヘー ナイダチャートモッテ ガナシューデ イタライヤ ナニ
ないんだなと思って 悲しんで いたらね 何

ハルカ サンシツ イテ デレルン ナッタライェ ナンカ オチ
長く 蚕室 に いて 出られるようになったらね 何か 落す

〜ダスワイェ
だすんだね

B 「ア」ー ソ」ーダッツ「ラ」イェー
あゝ そうだったろうね

D 「ジュー」イチジ 「チョ」ットスギニ キ」タッツ
十一時 ちょっと すぎに(雨が)来たった

B アー 「ジュー」イチジ チョ」ットスギダッツ オレ 「ジュー」ニジント
あゝ 十一時 ちょっと すぎだった 俺 十二時の時

〜キニ 「オ」キタラ ドーモ 「フ」ッツデ
に 起きたら どうも 降ったから

D 「アー ソ」ーカソ」ーカ ……. *
あゝ そうか そうか

A 「ナ」ニカ ガッ「コー」ノ キュ「ーリョ」ーシツ 「ナ」ンチューダカ アノー
何か 学校の キューリョー室 何というのか あの

「ウ」シロニ ベ「ンジョダカ ナ」ンダカ 「タ」ッタ 「タ」ッタエ」ー マ」タ「ー」
後に 便所だか 何だか 建てた 建てたね また

ガッ「コー」ノ
学校の

B 「ホ」ーカエ
そうかね

A 「ア」ー アノー 「ナ」ニ 「シューカイジョ」ッチューダカ ツ「ク」ッタトコ
あゝ あの 何 集会所っていうのか 作った所の

〜ノ 「ウ」シロエ ヨ「ソ」ノダ」イクサダ「ダ」イ 「ソ」ージャネーカ「エ
後へ 他所の 大工 さんだよ そうじゃないか?

B 「ホ」ーカエ
そうかね

A 「オ」ー 「マ」ズ 「ナ」イカ ベ「ンジョダカ」 オ「チャー ワカスト」コダカ
うん まず 何か 便所だか お茶を わかす所だろ、

ツクッタワイエ
作ったよ

B アボーカ オレナニショキョネンナンニーウンドーカイ
ああそうか 俺 なにしろ 去年 何に 運動会

イッタキシイキソメンダ
行ったきりで 行きつけないのだ

A ウンドーカイイェー
運動会ね

B アージューガツノイッカダカ (A アーソーカ ああそうか)

A マーコトシャーイキャーシエンドエアノーヨコバヤシノ
まあ 今年は 行くことも できやしないよ あのう 横林の

ヒコーキオロストコダチョーッチューデ
飛行機を おろす所(ヘリ発着所)だそうにていうから

B アーソコジャーショアラメートショーリシューワイキャー
あぁ そこでは 仕方あるまい 年寄り衆は 行きは

～シンドー
しないぜ

A トシヨリャーコショーモカケテーガアツイトコニャイーエ
年寄りは 腰でも かけたいが 暑い所には 居ることが

～ンデエー
できないからね

B ソーソーダアー
そうだそうだ

A ネードーモ
ねえ どうも

B アー トテモ アソコジャー シヨーネーワイ

あい とても あそこじゃ しかたがないよ

A イキャー シーエンイェー コッチナラ スズシートコン アルガ

行くことができやしないよ こっちなら 涼しい とこが あるけど

～エー ドーモ

ね (あそこでは) どうも

B ソーダソーダ トシヨリャー スワルトコ ナケニャー トテモ

そうだそうだ 年寄りは 坐るとこが なければ とても

カナワン

かなわない

A イエー イキャーシエンドイ

ね 行くことができやしないよ

B トテモトテモー

とても とても

A イクラ ハコンデ クレテモ ソー コショー カカルモノカラ

いくら (私を) 運んで (連れてって) くれても そう 腰を かける ものから

スズシーモノマデッチャー ネーデエー

涼しい 施設 まで (同意せよ) とは (頼め) ないからね

B ソーソーダ トテモ シヨンナイ

そうだ とても しようがない

A ソノ ヒコーキ オロストコニャ アノ ヘリコプター オロスト

その 飛行機を おろす所には あの ヘリコプターを おろす時

～キニャ ソノ カゲン ナルモノン アッチャー ジャマン ナッ

には その 影に なるような ものが あっては (ヘリの) じゃまに なっ

～チャウワケデエー

てしまう わけだからね

B ソーソー　ユーガタニモ　チート　ナニョーセル　ウチョー　タッ
そうそう　夕方にも　少し　何をする　家を　建て

ヘテサー　アノー　ヤスムトコ　オチャー　ワカスダカ　ナンダカ
てさ　あの　休む所　お茶を　わかすのか　何だか

セルトコン　アルワイエ　アー　ソレデ　ソレダモンダデ　トテモ
する所が　あるよ　あぁ　それで　それだから　とても

ソリャー　ナンダデ
それは　何だから

A コノ　ケンドーカラ　シタイ　アルカイ
この　県道から　下に　あるか？

B アー　ケンドーカラ　シタイ　ヒロイ　ミチョー　ツクッテ　ソノ
あぁ　県道から　下に　広い　道を　作って　その

シタイ　イッテ　-----　モトノ　アノ　ダンボノ　アトイヤェー
下に　行って　もとの　あの　たんぼの　後にね

A サー　コノコロデ　イカンモンダデ　サッパシ　ドコガ　ドーダッ
さあ　この頃は　行かないので　さっぱり　どこが　どうだっ

ヘチェーコトー
ていうことも

B ムカシノ　アリャー　ナンダイ　タノ　ヨッサマノ　タンボダエー
昔の　あれは　何だよ　タノ　ヨッサマ（人名）の　田んぼだよ

オームカシワエー
大昔はね

A タノ　ヨシサマ
タノ　ヨシサマ

B ブラジルイ　イッタッツワイエー
ブラジルへ　行った　よ

A イッチャッタカイ

行っちゃったの？

B ブラジルイ イッタッツワイ アノー マキノシマカラ キテイル

ブラジルへ 行った よ あの マキノシマ(地名)から 来ている

ムコガ オラヨリャー ウエダッツライ アノー タノ ヨシサノ

婿が 俺よりは 上だろうよ あの タノ ヨシサの

コニ オンナノコガ アッテ ムコ ムコガ キタッツワイ オラ

よに 女の子が あって 婿 婿が きたっけ 俺

ヨリ ドーモ ガッコーウ ユウエダッツラトモーヨ

より どうも 学校は 上だろうと思うよ

A ホー

ほう

B ナオ ナオ ナンツッツカ オベーワネーガ マー マキノシマカ

名を 名を 何と言ったか 覚えは ないかつ まあ マキノシマ か

ラ キテ アノー ソーダ マキノシマカラ ムコガ キテ ソレ

ら 来て あの そうだ マキノシマから 婿が 来て それ

カラ ブラジルイ イッチャッタエー

から ブラジルへ 行っちゃったね

A ブラジルッチュヤ アノー ナニモ ブラジルッチュー トコイ

ブラジルって言えば あの 何も ブラジルっていう 所へ

イッタッテカエ アノー ヨシミサノ コダケド タケルサ エー

行ったってかね あの ヨシミさんの 子だけど タケルさん ね

アノヒトモ イッタッチョーチュー エー

あの人も 行ったそうだっていうね

B アーソーソーダ

ああそうそう

A アノヒトモ イッタチョーチュー エー
あの人も 行ったそうだというね

B アー イッペン キタッチュッテエー
あい 一度 来たって言ってね

A キタッチョーエー イケーナ(12) コン ナニョーシテ クラス シラ
来たそうだね どんな こと 何をして 暮すか 知ら

～ンガ タケ
ないが タケル

B イッタトキャー エラガッタダイ ゲンシリンッチュッテ マー
行った時は たいへんだったのさ 原始林って言って まあ

フツー キッタコトン ネートコエー イッテサ ソリョー キリ
通常 切ったことの ない とこへ 行ってさ それを 切り

～ハラッテ ナンダナー ドッカエ ソノ ブラジルデモ イー マ
払って 何だね どこかへ その ブラジルでも 良い

～チーオ ヒトトコエー ベッソーオ カットイテイヤ ソレー ナ
町を 一ケ所ね 別荘を 買っといてね それへ と

～ンショ アノー ヤスミー イッチャー クルゲナドイ ハイッタ
にかく あの 休みに 行っては まるそうだよ。入った

トキャー エラガッタダイ カイコンセニャー ナランモンダデエー
時は たいへんだったよ 開墾しなければ ならないからね

A アー ソーカソーカ コッペーコイタダエー
あい そうかそうか 苦労したんだね

B アー ソーヤッテ ナニシロ アッチノホーワ キューリョー ヤ
あい そうして なにしろ あっちの方は 給料が

～スイモンダデ アー ソノー トチノ ヒトー ツカッチャーイヤイ
安いので その 土地の 人を 使ってはね

ヤルダーエー　アー　ヤスイ　キョーリョーデエー　ソーダ　アレ

やるんだね　あい　安い　給料　でね　そうな　あれ

ダケ　ハナレテモ　トバヤマ　ワスレタコトー　ネーチュッツゾー

だけ　離れても　富山　忘れたことは　ないって言うんだぞ

キテエー

(家に)来てね

A　デリャー　コドモノ　シューワ　ワスレンダイ

出れば　子供　は　忘れないよ

B　アー　ソー　ソーダ

あい　そうな

A　ソーイッテ　ヤッタ　ハナシダッツワイ

そう言って　やった　話　だったよ

2．うわさ話など

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)	
A	武田 ふさ	女	明治32年	富山県生れ
B	田辺 正一	男	明治34年	〃
C	堤 ふじよ	女	明治37年	〃
〈Y	山口 孝洋	男	昭和11年	静岡県新居町生れ〉

C　　----　ゴザイマス
　　ございます

B　オアツー ゴザイマス
　　お暑う　ございます

C　ネトッテ　ネダボケテ　ハイッテキタ
　　寝ていて　寝ぼけて　入ってきた

A　ヨク　キテクレテ　イーアンバイデ　ゴザイマス
　　よく　来てくれて　良い案配で　ございます

B　イーアンバイデ　ゴザイマス　ソラソラ　ゴクローダッタ
　　良い案配で　ございます　それはそれは　ごくろうさまでした

C　アノ　チョット　カゼケダモンデネー　ネビエオ　シテヨー
　　あの　ちょっと　風邪気だからね　寝冷えを　してね

B　ア　ホホ=
　　あ　本当に！（そうですか！）

C　ケサ　ハラガ　イタカッタ
　　けさ　腹が　痛かった

B ……コッチョー チョット ……ショーエ
こっちを 少し しかさいよ

C アノ ハラガ イタカッタモンダイ モーチョット ネテオッテネ
あの 腹が 痛かったので もう少し 寝ていてね

エー ネトーッテ ネーットッタラ オバーチャ ドーモ ソイジャ
ええ 寝ていて 寝入っていたら お婆ちゃん どうも それでは

ネー マー ドッコモ ヤメルジャ ナイシ ソリャ チョットアイ
まあ どこも 痛むのでは ないし それは 少し

カジッテ(13) コストモッテ
かじって(つまあて)来ようと思って

B オー ソリャ ソリャ ナニヨリダッタ
おう それは それは 何よりだった

C ナンショ コノ アシノ グアイガ ワルクテネー カシマレンデ
とにかく この 足の 具合が 悪くてね 正座できないから

B アーア
うん

C チョット カシマーッテモ コレ チョットコー カシマーレル
少し 正座しても これ 少しこう 正座できる

ンドモ ヤーットカシマッテ オレン
けれども 長く 正座して いられない

B アーア ショーネーワイ アノ アシガ イテー トテモションナイ
うん しかたがないよ あの 足が 痛い(のは) とても困る

C トシガ イリャー ロクナコト ナイワイ ケサモ ロージンノ
年を とれば ろくな事 ないよ 今朝も 老人の

コトーネー ヤッ テレビデ ヤットッワイネ
事をね ×× テレビで やとったよ

B アーア ソー ソー ソー ソー ソーダ アソコノ トーカイ トーカイ
ああ そうだ あそこの 東海 東海
～シノ ロージンホーム
市の 老人ホーム
A フジヨサ イソガシカッツう
ふじ代さん 忙しかったろう
C イソガシクネー ネトッツ(14) ワシャー ネトッタ ネトッタ
忙しくない (私は)寝とった 私は。 寝とった 寝とった
A ネテ オッタ
寝て いた
C チョット ネズトモッテネー チョット ネビエダカ ナンダネー
ちょっと 寝ようと思ってね ちょって 寝冷えか 何かね
ケサ ハガ イタカッタモンデ シラン イシャイ イッテキタモ
今朝 歯が 痛かったので 知らない 医者に 行ってきたの
～ンダイネー
ね
A ワリー
すみません
C ソンナコタナイ
そんなことはない
B マー ラクニ ラクニ オイデ ----
まあ 楽に 楽に おいで(下さい)
A ワリーネ ソリャー
すみませんね それは
C ナニ トシガ イッタラ ズクガ ワルクテ タダ ネブクテ
何 年が 寄ったら 電気が 悪くて ただ 眠くて

ショーガネー
どうしようもない

B マー ラクニ …… アシガ イタクテ ショーネーニ
まあ 楽に 足が 痛くて しかたがないから

C コサオサガ ナニ ナニカ ケンサガネー キョー ヤッテクル。
房夫さんが 何 何か 検査がね 今日 やってくれる。

～テー
て？

B ウンウン
うんうん

C ユッテー ゴハンモ タベテ クウー キリー イクッテーネ
言って ごはんも 食べて 薬を 切りに行くってね

B ホー ジュージ ジュージカラダトモッタエ
ほう 十時 十時からだと思ったよ

C エー アノ クジ ゴジュープンデ
ええ あの 九時 五十何分で

A ドコイ イッタッテネー
どこへ 行ったって？

C イッタ— オイシャサマエネ
行ったよ お医者さまへね

B シンルイズラ
親類だろう

C ダレネー
だれが？

B シンルイズラ
親類だろう

A ダレネ

誰ですか？

C アノ フサ ゴハン タベルト クワー ヒトショイ ショッテ

あの フサ ごはん 食べると 桑を 一籠い 背負って

キテーデー アスカラ ケンサオ ヤッテ クレルッテヨ

来てだよ 明日から 検査を やって くれるってよ

B ソノー サキー ハチガツ ヤッタトキノ ケンサノ ケッカデ

その さきに 八月に やった時の 検査の 結果で

アーユーフーニ ナッタ

あの通りに なった

C ソーダソーダ コノサキモ オフササト フターリデネーエ

そうだ そうだ このさき(以前)も おフサさんと 二人でね

A エー

え？

C アノー オフササト フターリデ ヤクバデ モラッターネー

あのう おフサさんと 二人で 役場で 会ったよね

A ヤクバデ ナンテネー

役場で 何と？

C フターリデ イッタッツネー

二人で 行ったっけ

A イツネー

何時(いつ)ですか？

C ワスレターア

忘れたの!?

B ハチガツー

八月

C ハチガツ ハチガツノ オワリダッタカネー
八月 八月の 終りだったかね

B アー ハチガツダ マイトシ シンタイケンサ
あぁ 八月だ 毎年 身体検査

C シンタイケンサジャネー アノ ケンカラダカ アノキテクレテヨ
身体検査じゃない あの 県から だか あの 来てくれて

ナニカ オハナシ キーテ クレタッタネ
何か お話 聞いて くれたっけ

A アホーカネ
あ そうかね

C イロイロノコト キーテ クレテーネ シャシンオ オクッテ
いろいろの こと 聞いて くれてね 写真を 送って

クレタッタ ネ アルヨ ソノ シャシンガ
くれたっけ あるよ その 写真が

A ソーダッタ
そうなった

C ワスレタ
忘れたの!

A イツイネー
いつですか?

C オツサガ ワスレタ
おつさんが 忘れた

A エー
え?

C イマ ナンネンモ マエダ= ヤクバイ コイッテ イッテネー
今(からは)何年も 前ですよ 役場に 来いって言ってね

ソーイッテ　クレテヨ　ムカシノコトー　キーテクレテネー　ソー
そう言って　くれてね　昔のことを　聞いてくれてね　そう

シテ　ナンダワイネ　ゴクローダッタッチュッテ　アノー　チャーント
して　何ですよ　ご苦労だったって言って　あの　ちゃんと

A　アノ　ヒロシサンガ　ソンチョー　ヤルジブンダエー
あの　弘さんが　社長を　やる頃だね

C　ソージャ　ナカッツウ　ハヤシサン　ナッタッチューワケデ　ヒロ
そうは　なかったろう　林（宇市）さんがなったって言うわけで（それとも）弘

～シサンダッツウカネー
さんだったろうかね

B　アー　ヒロシサダッツウ
あぁ　弘さんだったろう

C　シャツ　シャシンオ　ツット　ウツイテ　オクッテ　オクレダウェ
×××　写真を　×××　写して　送って　くれたよ

アルニ　シャシンガ
あるよ　写真が

A　ソーダッツカネー
そうだったのか

C　ナツダンネ　エー　コンナフーシテ　ウツットルデ
夏だかね　ええ　こんな風して　写っているから

A　ホー　ヘー　ワスレタ
ほう　へぇ　忘れた

C　オフササ　ワスレダー　ソレダケ　トシガ　ワカカナイ
おフサさん　忘れた！　それだけ　年が　若くはない

A　ムカシノ　コダー　タント　ワスレタッテ　ソリャ　ワスレタ
昔の　ことは　多く　忘れたって　それは　忘れた

C サブチャンテノ
さぶちゃんて訪の…

A (15) ボン オドリニ コイッチュッテ バンナノ セーネンノシューノ
盆 踊りに 来い、て言って みんなの 青年の衆の

アソコエ ボンウタ ウタウヨーニ コイッチュッテ アソコエワ
あそこへ 盆唄 唄うように 来いって言って あそこへは

イッタ ワ オボエタガネー フクシマヤエ レコードイ フキコ
行った(こと)は 覚えているがね 福島屋(家)へ レコードに 吹き込

(16)
ンデ クリョーテーネ ソノトキニャー イッタ オボエタカ
んで くれってね その時には 行った(ことを) 覚えているか

ヘー ソコノ ヤクバイワ ワスレタ
もう そこの 役場へ(行ったことは) 忘れた

C ナニ ヤクバエ イッテネー フターリデヨー イッテー ソレー
何 役場へ 行ってね 二人でね 行って それに

ヒロニーントコエ キタッツネ ヒロニーントーモ ナニカネー
弘兄 の所へ 来たけ。 弘兄達も 何かね

イカダノトキノ ハナシガネー キテ ソイデアノー イカダノリ
筏の時の 話がね。(県の人が)来て それで 筏乗り

ウタ ウタッタリ ナニョー シテネー ホイデ
唄を 唄ったり 何かを してね それで

A ドーモ ヤークバイ イッタワ ワスレタ アスコノ フクシマヤノ
どうも 役場へ 行ったことは 忘れた あそこの 福島屋の

ニケーウェ イッテ
二階へ 行って

C ----- オバサンダッツカネー
おばさんだったかね

B アー ソーダソーダ
あっ そうなそうな

C ソレダケ トシダワイネ
それだけ 年だよ

A ヘー トシヨリダデ ワスレタダカネー ムカシノコトウォ ワス
もう 年寄りだから 忘れたのかね (私は) 昔の事を (ふっと)忘

～レンガ ヘー ソレオ
れないけど もう それを

C シャシンガ アルワケダデ オフササ コンナ アルデ チャント
写真が あるわけだから おフサさん こんなに あるから ちゃんと

A ホー ソーカソーカ ドーモ ソノ ヤクバウォ ヘー
ほう そうか そうか どうも その 役場を もう

ナニョー トッテ クレネー ヒトツ
何を(お菓子を)取って くださいよ ひとつ

C ハイ イタダキマス
はい いただきます

A ヤクバウォ ワスレタワイネー
役場(の事を) 忘れたよ

C ワスレター ワスレタワイネ
忘れた!! 忘れたんだね

A ヤクバ オレ フントワ キズカイダデ イ イ エッコロヨーガ
役場は 俺 本当は 気苦しいから × × よほど 用事が

ナケニャー イカンデネー ヤクバノシューウォ キズカイセテ
なければ 行かないからね 役場の衆を (私は) 気遣いして

カナワン ヤクバノシューワ
たまらない 役場の衆は

C　ヤ「クバノシュ」ーカネ
　　役場の象かね

A　キ「ズケ」ーナ
　　気遣いな

C　キ「ズカ」イニモ　ナイ「ワ」イ
　　気遣いでも　ないよ

A　キョ　「キョ」ク
　　×　局

C　シ「タノ」シ　シ「タノ」ニネ」ー　アノ　シュ「クチョ」クシツデ　ヤッタッタ」
　　下のに　下のにね　あの　宿直室で　やった

～デ　「ナ」ニカ　キーテクレタッタデ
　　から　何か　聞いてくれたから

A　「キョ」クノホー「ガ」　キズ「ケーネ」ーガネ」ー　アリャ　カ「ネコサンガ
　　局　の方が　気遣いね　あれ　金子さんが

シタ」ニ　イタカゲンダカ　「キョ」クノ　ホ」ーワ　キズク」ネーデ　エー
　　下に　いた　ためか　局の　方は　気遣いないで　良い

～ガネ」ー　「ナニ」カ　コナイダ　コノコロ　ナン　「ビ」ラー　クレタデ」ー
　　けどね　何か　このありだ　この頃　××　ビラを　くれたから

～ネー　イ「ラン」ヘ　「ヨ」ミエンダデ　「ヨ」ミエンデ　イ「ラン」ッチュッタ
　　ね　いらない　もう　読めないから　読めないから　要らないって言った

～ラ」ネ」ー　オ「バ」ー　ソ「ンナバ」カナコトー　ユ「ージャ」ーネ」ー　「モ」ッテケ
　　でしょうね　お婆が　そんな豆腐なことを　いうんじゃない　持ってくけ

～ー」ッテ　イ「ラン」　「ド」ーシ」テモ　シーテショーガネ」ー　ヘ　モ「ラッタケ」
　　って(いっても)　要らない　どうしても　強いて　しようがない　もう　貰ったけれ

～ド　アリャー　ア「ンナモ」ノ　モラッタッテ　アリャー　チョ「キンウ」ォ
　　ど　あれは　あんなもの　貰ったって　あれは　貯金を

ツバヤー　リソクウォ　ヨコセル　ナンチュー　コトー　キクガ
積めば　利息を　よこす　なんて言う　ことを　聞くが

C　ロージンノ　シューガネー　ロージンガーノ　シューガ　アノネー
老人の　家がね　老人側の　家が　あのね

アノ　オカネウォ　モラヤー　イマ　イチジネー　アノ　ツムト
あの　お金を　貰えば　今　一時ね　あの　積むと

アノ　リシオ　リシガ　オーキーチュッテ
あの　利子を　利子が　大きいと言って

A　リソク　エー　ソイデ　オリャー　ヨミエンデ　イランッテュッタ
利息　ね　それで　俺は　読めないから　要らないって言った

～ガネー
けれどね

C　フツーノ　シューニ
ふつうの　家に

A　ナンデモ　クレタガッテ　クレタガッテ　ホイデ　モラッテキタン
何でも　くれたがって　（Repetition）　それで　貰って来たが

ヨバャー　センダイ
読みは　しないよ

Y　エーコトン　ガイテ　アッタダニネー　キット
良い事が　書いて　あったのにね　きっと

A　アレ　ユエニ　ガネコサンガ　ハルカ　シタニ　イタダカ　カゲン
あれ　上に　弟子さんが　長く　下に　いたのか　その加減

～ダガネー　キョクノホー　コバヤシサン　ヤクバノホー　イクト
なのかね　局の方　小林さん　役場の方　行くと

ヨーガ　アルッキリウォ　シャベッテ　アーシテテ　アリガトゴザ
用が　あるだけを　しゃべって　あゝして　ありがとう　ござ

～イマシタッチュッタッキリデ　マー　シャベッタ　コター　ナイ
いましたって言ったっきりで　まあ　しゃべった　ことは　ない

ヤクバノホー　キズケーナ　メッタ　ヤクバイワ　イカン　キズケ
役場の方が　気遣いな(ので)　めったに　役場には　行かない　気遣

～ーナ　ヨッコロ　ヨーガ　ナケニャ
いだ。　よっぽど　用が　なければ

C　ソイデアノ　クニフサノ　オバーサ　オバーチャン　オシガイ
それであの　邦房さんの　お婆さん　お婆ちゃん　押しが　良

～ーチューデ　オバー　オシガ　イーヨッチュッチャー
いっていうが　お婆　押しが　良いよ，て言っては

A　ヤクバノホー　キズケーナ　キョクノホーガ　キズケーガ　ナェー
役場の方が　気遣いだ　局の方が　気遣いが　ない

～ガネー　キョクノホーワ　アノ　ナンチューダカ　ナカヤノムス
けどね　局の方は　あの　何ていうか　ナカヤ(屋号)の息

～コヤナイカワ　アノ　アソコノ　オカーサント　イッショニ　オカ
子などは　あの　あそこの　お母さんと　一緒に　お母

～ーサンワ　トヨカワイ　イッチャッタガネー　イッチャッタカ
さんは　豊川へ　行っちゃったがね　行っちゃったか

B　ガッコー　イッショダッツエー
学校　一緒だったんね

C　イッショダッツカネ
一緒だったかしら

B　アー　イッショダッツ　トシガ　ヒトツ　アレダガ　--------
あ　一緒だった　年が　ひとつ　あれだけで

ガッコー　イッショダッツ
学校は　一緒だった

C アー ソーダカモ シレン

あぁ そうかも しれない

A ダガ ナニョー オバーサンガ ナカヤノ オバーサンガ アノー

だけど 何を お婆さんが ナカヤの お婆さんが あの

カミゲートノ(17) オバーサンウォ マメナカッテ キクガ マメナカ

カミゲイトの おばあさんを 元気かいって 聞くが 元気か

～ッチューデ マメニャー ネーッテ ユッテ クリョーッテ ユヤ

っていうから 元気(健康)では ないって 言って くれって 言え

～ー コナイダ アノ ウイッツァニモ ダイテ ソンチョーサンニ

ば このあいだ あの 宇市さん(相撲)にも 出して 村長さんに

～エ マメナカイッチューデ コンダ ボタモチョー モッテ イッ

ね 元気かいって言うから 今度は ボタ餅を 持って ー

～ペン コイエッタラ ヤスイコトー イエッテ アノシトモ タン

度 来いよって言ったら お安いご用が って(言った) あの人も(客が)沢山

～ト チガワット ガッコイ イッタデネー

違わずに 学校へ 行ったからね

C ゲンキ エージャナイカ アノ オバサンワネー ハツミワ ゲン

元気 良いじゃないか あの おばさんはね ハツミは 元気

～キナ ワシノ ニーサンナン ダメナゼ

だ。私の 兄さん 駄目だよ

B イクラダカ コンダ サキョー ヤメソウ ネコンダカ

今度は 酒を やめたろう 寝こんだか

C サキャー ヤメチャッタッテ ヤメチャッタガ ナンショ シャベ

酒は やめちゃったって やめちゃったが とにかく しゃべ

～ルコトネー アノー ハナスコトー キライナ ニーサンダモン

ること ね あの 話すことを きらいな 兄さんだから

～ダデヨー　ナンショ　ハナショー　センチュー＝　タント　ゴハン
ね　とにかく　話を　しないっていうのに　沢山　ごはん

タベルッテ　ゴハンモ　タベルシネ
食べるって　ごはんも　食べましね

A　ダレネ
誰が？

C　アノ　ニー
あの　兄さん…

A　ヨクナッタッテカイ
よく　なったって　かい

C　ヨクナッテ　キタモンデネー
よくなって　来たのでね

A　ハー　ウレシーネー
はあ　うれしいね

C　オカゲデ　ヨクナッタッテ　キトルヨ　……　コナイダモ
おかげで　良くなったって（言って）来ているよ　こないだも

イッタラ　タイポイ　イチンチ　アソンダ　アノ　オキトッタッチェ
行ったら　たいがい　一日　遊んだ　あの　起きていたって言

～ッタ　マサヤ　オジガ　アソビー　イッテ　クレタッテ
った　政弥　おじさんが　遊びに　行って　くれたから

A　ヨカッタネー
よかったね

B　アノ　タイカクジャー　モー　アノ　サケデ　ナニセリャー　ソイ
あの　体格では　もう　あの　酒で　何すれば　それ

デ　スムヨーナ　コッジャネーワ　……　タイカクワイーデエー
で　済むような　事では　ないよ　体格は　いいからね

C タイカカー イーガネー

体格は 良いがね

B ナ=シロ サケガ スキデ

なにしろ 酒が 好きで

A アンナヒトガ ヤムナンチャー モー コリャ ムリダッテ ヤリ

あんな人が 病気なんて言えば もう これは むりだって やり

～ソーナ=ガッコーヤナイッカワ オカネヤナニャー カマワッコ

そうなのに 学校なんかは お金や何かは 構わず

～ネー アレー デテデテ デスエテ ネー

あれに 出て 出て 出尽して 以

C オサケガ スギルデ

お酒が 過ぎるから

B サケガ スギルデ イカン アノー ソノ ナニャー アンナ タ

酒が 過ぎるから いけない あのう その 何は あんな 体

～イカクナラエー ソリャー フントー オニニ カナボーッチュ

格 なら ねえ それは 本当に 鬼に 金棒っていう

～ーヨーナ タイカクダゾ アリャー マー フント エー タイカ

ような 体格だぞ あれは まあ 本当に 良い 体格

～クダー

だよ

C イー タイカクダナー

良い 体格だなあ

A ヨークテ キタカイネー

(病院から) 良く(なって) 来たのかしら

B アー ヨクテ キタ ドーモ サキャー ヤマルト チョーシガ

あ 良くて 来た。でも 酒は 止まると 調子が

イーダ　アレデ　サキャー　ヤマルト　チョーシガ　イーダーノ
良いのだ　あれで　酒は　やまると　調子が　良いんだなあ

C　アノ　ノマントチョーシガ　イーダーネ
あの　飲まないと　調子が　良いんだね

B　アー　ノマントチョーシガ　イーダ
あ　飲まないと　調子が　良いのだ

C　アノー　イヤダッテ　チットモ　ホシクナイッテ　ユーンナ
あの(酒は)いやだって　少しも　欲しくないって　言うがな

B　ホイデ　ヤメタカ
それで　やめたか

C　チットモ　ノムノ　ホシカナイヨッテユー
少しも　飲むの　欲しくけないよって言う

B　ホンター　ソレダトヤー　マタ　ハチジューグライマデ　イキルナ
本当は　それだとね　又　ハナ　ぐらいまで　生きるな

～ー　オジーマデワ　サキマデ
お爺さんまでは　将来

C　ハチジューマデワ　イキャーシンワネー
ハナ　までは　生きやしないよ

B　イキルゾ　アレデ　ヤメリャー
生きるぞ　あれで(酒を)やめれば

C　ソレー　ハイルラカネー　ハナスコトガ
それに(テープレコーダー)入るだろうかね　話すことが

Y　ウン　オバサンニネー　ウター　ウタッテ　ウター　ウタッテ
うん　おばさんにね　歌を　歌って　歌を　歌って

モウウートモッテ
貰おうと思って

C ウター カネ マズ コマル
歌を かね それは 困る

Y ウタカ ウマイチューデ
歌が うまいっていうから

C ウタウ マズ トシガ ダメダネー コトシ ボンニ ウタッテ
歌うことは まず 年が(寄ったから) だめだね 今年 盆に 歌って

バタッツカネー コンキーヨ
みな けれど 疲れるよ

A コンキーカイ ショーチューノ イッパェーモ ノバャー ウタイ
疲れるかい しょうちゅうの 一杯も 飲めば 歌うことが

～エルカ
できるか、

C ショーチューナン ノバャー ヨケー ダメダヨ ウター スキダ
しょうちゅうなど 飲めば よけい だめだよ 歌は 好きだ

～ガネー ワシャー スキデヨー アノー ヨルネー ネドコエ ア
がね 私は 好きでね あの 夜ね 寝室へ あ

～ノー イマノネー ナンチュー テー テープジャナイ アノー
のう 今のね 何というか ××テープじゃない あの

プレヤーオヨー モッテットイテ イマノ シンシキノ ウタウォ
プレヤーをね 持ってるといて 今の 新式の 歌あ

～ネー カケチャーヨー ネブタクナル マー ネムタスギテ マー
ね かけてはね 眠たくなる(まで) まあ (それが) 眠たすぎて まあ

ソレモ サンマイブライ ヤルト タダ ネー…チャウヨ
それも 三枚ぐらい やると ただ(自然に) 寝入っちゃうよ

Y エーワ ウター キキナガラ ネリャー ネー ウター キキナガラ
良いね 歌を 聞きながら 寝れば ね 歌を 聞きながら

ネリャー　ソンナ　ゴショーラクッチューカ　キモチガエーワネー
寝小は　そんな　後生楽っていうか　気持が良いね

C　キモチガ　イーモノ　ナンニモ　ホカノコト　カンガエンラ
気持が　良いもの　何にも　ほかのこと　考えないでしょう

B　ソーソーソー　ソレデイーダイネ
そうそうそう　それで良いんだよ

C　ソレシカ　カンガエンダ
それしか　考えないのな

B　ソーソーソー　ソレデ　イーワイネ
そうそう　それで　良いよ

C　ジブンワ　イーワイネ　ソースルト　パット　アサネ　メガアク
自分は　良いよ　そうすると　パット　朝ね　目があく

ハイ　ナンショ　ゴジハンニャー　メガアクネ　イマノトコ　チョ
もう　とにかく　五時半には　目があくね　今の所　なっ

ットネムクナッタネ
と　眠くなったね

Y　ソレデ　ダレノ　ウタガ　スキダン　イマワ　イマノヒトワ
それで　誰の　歌が　好きなの？　今は　今の人は

C　エッヘッヘ　ジュンニ　カッテキテ　クレルモンダイネー　アノ
えっへっへ　秋に　買ってきて　くれるもんでね　あの

ニシカワミネコノ　ウター　イマー　イートモッテ　キクダン
西川峰子　の　歌を　今は　良いと思って　きくのだけど

ソンナニ　アノ　ウマカー　ウタヤヘンニ
そんなに　あの　うまくは　歌いはしないよ

B　ソリャー　ソーダイ
それは　そうだよ

Y ソリャー アノヒトラミタイナ ワケニ イカンケドネ
そりゃあ あの人達 みたいな わけに いかないけどね

C トッテモ ウタヤシンニ ソリャ ショーバイニネー ソレー ツ
とっても 歌いは しないよ それは 商売にね（する人とはね） それに っ

～イチャー ウタットリャー アノ ウタウワネ オモシロイナー
いて 歌って おれば あの 歌うよ 面白いなあ

トモッテ キクダケノコトデ
と思って きくだけの ことで

A ソーダソーダ オモシレーナートモッテ ホント キクダケ
そうだそうだ おもしろいな と思って 本当に きくだけで

C キクダケヨ
きくだけだよ

Y テレビノ アノ エヌエイチケーノネ ノドジマンオ ミトル
テレビの あの NHK のね のど自慢（大会）を 見ていますか？

オヒルニ ヤルノー
お昼に やるのを

C アリョー ミヌキヨ
あれを 見続けているくつですよ

B ニチヨー
日曜

C アリョー タノシミヨ イッシューカンネー マズ ホント ニチ
あれを 楽しみなくつですよ 一週間ね まず 本当 日

ヨーニ タノシミ ワシャー ハイ シロートノドジマントネー
曜に 楽しみ 私は もう しろうと のど自慢 とね

アノー カゾクウタガッセンヨ アリョー ミナンゾコターナイヨー
あの 家族歌合戦 ね あれを 見なかったことは ないよ

マイシュー
毎週

Y アーユー シロウトノネー ウタッテ ナガニャー オバーサントカ オジーサンガネー
あいう しろうとのね 歌って ながには おばあさんと か おじいさんがね

C ソーヨ
そうですよ

Y イッショーケンメー ナッテ ウタウナー ホントニ ミトルト
一生懸命 に なって 歌うのは 本当に みていると…

C オモシロイネ オモシロイヨー ホント (B イマノ ニチヨーニモ)
おもしろいね おもしろいよ 本当 今の 日曜にも

B ハチジューニダカニ ナルヒトガ ウタッテ
八十に かに なる人が 歌って

ワカイ フーオシテ ウタッタゾー
若い 恰好をして 歌ったぞ

ハチジューニダ オドロイタッタナー カオツキガ ワカスギテ
八十に だ 驚いた なあ 顔つきが 若すぎて

マー ウタウ
まあ 歌う…

C イッカイ ウタウェソーナトモッテモ ドーモ ウタウェンネー
一度 歌えそうだと思っても どうも 歌えないね

ウタッテミテー ウチ ソンナ オーキー オト ダイテ ウタヤ
歌ってみて (私の)家 (では) そんな 大きい 音 出して 歌いは

~ーセンシネー ナニモカモ マタ ウタッテ オリャー ソリャー
しないしね 何もかも また 歌って いれば それは

イクラカ　ウタエルガネー
いくらか　歌えるけれどね

Y　マー　ウタモ　エーモンダ　ホントニネー　ウタモ　エーモンダ
まあ　歌も　良いものだ　本当にね。　歌も　良いものだ

B　ソーソーソー　ソー
そうそう

C　ウタガ　イー(18)ニ　ワシャ　ダイスキ　ワシ　ソイデ　アノナー
歌が　良いですよ　私は　大好き　私　それで　あのね

オレガ　シンデモ　ナイテ　クレンナヨ　コドモガ　クルト　ソー
俺が　死んでも　泣いて　くれるなよ　子供が　まると　そう

ユー　ナイテ　クレンナヨ　ナクノー　ダイキライッダシ　オレガ
言う。　泣いて　くれるなよ　泣くのは　大嫌いだし　俺が

シンダラ　ウター　ウタッテ　クリョーッチュート　ソイジャー
死んだら　歌を　歌って　くれよ　っていうと　それでは

ウター　ウタッテーネー　チューガネ　ボチコノ　ウタッテクリョ
歌を　歌って(やるよ)ね　というよ　坊子の(……が)。　歌ってくれ

～ーッチュー　ワシャー　ソノホーン　ウレシー
っていう　私は　。　その方が　うれしい

B　マーネー　ハナジューカラン　ナリャー　イーゾイ
まあね　ハナからに　なれば　いいぞ

C　ワシャー　ナクノー　ダイキライッデナー(19)ッテ　シンダラ　マー
私は　泣くのが　大嫌い　だからなって　死んだら　まあ

ウター　ウタッテクリョー　オレ　ダイスキダデッテ　ユーガネ
歌を　歌ってくれ　俺　大好だからって　いうよ

ソノホーガ　イーヨー　ナイタリナンカ　イヤダヨ　ワシ　ソイデ
その方が　良いよ　泣いたりなんか　いやだよ　私　それで

ネー　ウチモ　ソーダヨ　ソノトーリ　アノ　ユイアッテナー

ね　家(のことでも)　そうだよ　その通りな　あの　言いあってね

イヤナコト　ユーノン　キライダデネー　エー　イチバン　ワシャ

いやなことを　言うのが　きらいだからね　えい　一番　私は

〜ー　ソリョー　キライダイ　エー　イェーゴー　ヤルノン　イチバ

それを　きらいだよ　えい　(?)　やるのが　一番

〜ン　スキダデ　ソー　イッチャーネー　イチバン　ソレガ　イーデネ

好きだから　そう言ってはね　一番　それが　良いからね

A　ウタニモ　アルデネー　ワシャー　ワタシャ　ウタズキ　ウタワニャ

歌にも　あるからね　私は　私は　歌好き　歌わにゃ

ネー　オラン　ワシガ　シンダラ　ウタデ　ヤレッチューコト　ユー

おらぬ　私が　死んだら　歌で　やれっていうこと　言う

ヘデネー　ネー　ソイデ　ウタニ　スキナシター　ウタガイーダーネ

からね　ね　それで　歌に(対して)　好きな人は　歌が　良いんだよ

C　ウタガ　イーダイネー

歌が　良いんだよね

B　ナニシロ　ハチジューカラ　スギリャー　ウタ　ウタッテモ　ナ

なにしろ　八十から　すぎれば　歌を　歌っても　な

ヘンデモソー　ウチノシュー　ナントモ　オモワンダイ　ホントノ

人でも　そうだが　家の衆は　何とも　思わないさ　本当の

コトー　ユッテ

ことを　言って(家の者は老人のことを何も気にはしていないの意)

C　ホントニ　ソリャー　オモワンダッテ

本当に　それは　思わないさ

B　……ワー　アノ　ハチジューカラ　ナリャ　マー　ソレカラ　ヨ

あの　八十から　になれば　まあ　それから　余

～ブンニ　イキタダキャー　ソリャー　モーケモンダガネー　マー

分に　生きただけは　それは　儲けものだがね　まあ

ハチジュー　サカオ　キョー　イガクジャー　コサニャー　モ

八十の　坂を　今日の　医学では　越さねば　も

～ッテネー　トモーナー　ワシノ　オモーニャー

っないない　と思うな　私の　思うには

C　オラノ　オッキー　オバー　ワ　ハチジュー　ハチジュー　ニダケ　シ

俺の　大きい　お婆は　八十　八十に　かも　ね

～レン　ナクナッタガネー　センダコー　ヤルデモ　ナンデモ　ウタ

ネてない。もうなくなったがね　洗濯を　やるのでも　何でも　歌

～バッカリ　チョーシデネ　ムカシャーネー　イシノ　イウェデ

ばかり(歌う)　調子(づけの為)でね　昔はね　石の　上で

フンダダー

踏んだんですよ

B　ソー　ソー　ソー　ソー　ソー　ソー　ソー

そうそう

C　イシノウウェデネー　イドニ　コンナ　フミイシン　アッテヨ　ソ

石の上でね　井戸に　こんな　踏石が　あってさ　そ

～イデアノー　ソレー　アコー　カケテヨ　ソイデ　フンダダー　ゴ

ネで　あの　それへ　反対を　かけてさ　それで　踏んだんですよ　ご

～サゴサゴサ　フンダ　コーヤッテ　コーヤッテ　アシデネ　フムト

サゴサ　踏んだ　こうやって　こうやって　足でね　踏むと

タダ　オチルダ　テデ　アノ　モヤンダッテネー　ムカシャー　ソ

自然に　落ちるのだ　手で　あの　揉まなくても　ね　昔は　そ

～ンナ　アノー　モメンモノ　ナェーダモン　アノ　ナンダモンダイ

んな　あの　木綿物　ないのだもの　あの　何だかだ

エー　ゴサゴサゴリ　フンデ　ソイデハイ　チート　モミチラカイ
ね　ごさごさ　踏んで　それで　もう　ちし　揉みつけて

〜テ　ソーヤッテ　ホイタダガ　ソーヤルニモ　ウタ　アノ　オバー
そうやって　干したのだが　そうやるにも　歌！　あの　おばあ

〜サンワ　ムギソデ　ムギフミキカイニ　ハジメルトネ　オーキー
さんは　麦（？）　麦踏み機械に（よって仕事を）はじめるとね　大きい

オト　ダイテ　ソノ　チョーシガ　コトダッテ　マズ　ウタ　ダス
音　出して（仕事には）その　調子づけが　必要だって　まず　歌を　出す

〜ワイネ　ホント　オモシロカッツガ　ソイデ　ナガイキョーシタニ
よ　本当に　おもしろかったが　それで　長生きをしたよ

ソノオバーワ　ソノオバーサンワ
その お婆は　その お婆さんは

A　アレノ　オミトサッチュー　ハチジューハチノ　オバーガ　ナンダ
あれの　おミトさんっていう　八十八の　お婆が　何だ

〜チョーワネ　オメー　ボンウタ　イマデモ　ウタウチョーワネ
そうだよ　お前　盆唄　今でも　歌う　そうだよ

メワ　リョーホー　メーンデ
目は　両方　見えないでいて

C　ウタウラ
歌うだろう

A　アノ　ユッチャー　ワルイガ　ヨーサ　ヤカマシスギッチョーネッ
あの　言っては　悪いが　夜　やかましすぎる　そうだね

〜テーネ　ミンナン　イゴイテ　クルニ　ミンナガ　イゴイテキテ
て　みんなが　仕事をして　（帰って）くるのに　みんなが　仕事をしてきて

ネーラットモーニネー　ボンウタウォ　ヨーサ　ウタウッテ　ソー
寝入ろうと思うのにね　盆唄を　夜　唄うって　そう

(20)

ユー トシヨリワ ヨセター ユウェンッテーネー ボンウター
いう 年寄りは よせ とは 言えないってね 盆唄を

ウタウ
唄う

B ヤッパリ ナガイキョー セルクレーナラ ソーダナ
やっぱり 長生きを する ぐらいなら そうだ(それでいいのだ)な

A ヨーサ ハルカ ウタッツナ ヒトツヤ フタツナラ イーガネー
夜 長く 唄ったな 一つや 二つなら 良いがね

マタ ハルカ ウタッテ ショーガネーッテ カツオサン ヤルヨ
また 長く 唄って 困る,て 勝雄さんが(言っている)(唄を)

~ーナッテ ココエ キテ アーユーノ オモシロエーラカッテ ユ
やるようだって(勝雄が)ここへ 来て あゝ言うの 面白いだろうかって 言

~ーダ クニナランコトガ アルラド ナンニモ クニナランダワイヤ
うのだ。苦にならぬことが あるだろうよ 何にも 苦にならんのさ

C アノ スキジャー ナカッツッテナー アノ オバーサン ワカイ
あの 好きでは なかったってね あの おばあさん 若い

~トキニャー ウタワ スキジャー ナカッツワッチューワイネ
時には 歌は 好きでは なかったというよ

カツオサン オカシナモンダイ
勝雄さん(がそういう) おかしなもんだよ

A オカシナ ボンウタ ハルカ ウタッテ ションナイチューガエ
おかしなことだ。盆唄を 長く 唄って しかたがない というがね

ソリャー マー ショーネーナーッテ オレ ユッタガ ホントニ
それや まあ しようがないな,て 俺 言ったが 本当に

ショーネーナーグライダ ウラ ユーダガイ カツオサガ マズ
"しようがない"というほどのことさ。俺 言うんだよ 勝雄さんが まず

トッテモ　バルカ　ウター　ウタッテ　ショーネーッテ

とっても　長く　唄を　唄って　しようがないって

Y　ヨナカニ　ウタットルダネ　ヨナカモ　ヒルマモ　ナイダネー　オ

夜中に　唄っているんだね。夜中も　昼間も　ないんだね　お

～バーサンジャー

ばあさんでは

A　クニモ　ナルコトガ　ネーデ　ヨケー　ウタウダイ　アノ　メガ

苦にも　なること　ないから　よけい　唄うんだ。あの　目が

メーンジャー　カナシーガ　ハラセー　ヨケリャー　イーデッチュッテ

見えないのでは　悲しいが　腹さえ　良ければ　良いがって言って

C　ソイデモ　ソンナガ　イーダガネー　マズ　メガ　ワルイッテ　(それを)

それでも　そんなのが　良いんだけでね　まず　目が　悪いって

クニシテネー　ナンショ　コマルホーダッタネ

苦にしてね　とにかく　困る方だったね(それよりはずっとましだ)

B　ソーダソーダ

そうだ　そうだ

A　コマルトモッテ　クニセリャー　ヨケー　ショーガナイデイェー

困ると思って　苦にすれば　よけい　困るからね

B　アーソーソーソーソー

あい　そうそう

A　ナツデモ　フユデモ　コンナ　チーサイ　ウル　カシワモチョー

夏でも　冬でも　こんな　小さい　××　柏餅を

スキデ　フユデモ　ナンデモ　ミサクボイ　イキャー　カシワムチョ

好きで　冬でも　何でも　水窪へ　行けば　柏餅

～ー　カッテキテ　クリョーヨッテ　マ　ナンシロ　ソンナコトガ

を　買ってきて　くれよって　まあ　なにしろ　そんなことが

クニナルフーナラ …… フユヤナイカ カシワモチノ ウリ
芳になるようなら （良いさ）（でも） 冬 など 柏餅の 売

〜ヤエー ネーダニ イッタラ カシワモチョー カッテ ソーイッ
店ね ないのに （水屋へ）行ったら 柏餅を 買って（と）そう言っ

〜チャー チューモンセルッテ ソンナコトガ クニナルダケダダイ
ては 注文するって （まあ）そんなことが 芳になるだけだよ

イエー ネタケリャー ネル オキタケリャー オキル ハチジュ
ねえ 寝たければ 寝る 起きたければ 起きる ハナ

〜ーハチダッテ トヤマジューデ イチバンノ トシウエダチョエ
ハ だって 富山じゅうで 一番の 年長 だそうだよ

ソイデ ボンウター ウタウ ソイデ ヨーサ ハルカ ウタッテ
それで 盆唄を 唄う それで 夜中に 長く 唄って

〜カラ キテー カツオサン ヨショートモ ユエズエー トショリ
（勝雄さんが）来て よせ とも 言えずね 年寄り

〜ダデ ソー ‥‥
だから そう

C ワリヤイ イマノ トショリワ ナンダネー トシ アノー シロ
わりあい 今の 年寄りは 何だね ×× あの しろ

ウトノドジマンデモ イマノ ハヨリノ ウターウタウジャーナイ
うとのど自慢でも 今の 流行の 歌を 歌うではないかね？

Y ウン ソーダネー
うん そうだね

A ホンジャ カミノナオッツァン ハヨリズラカ チンカラカクヨー
それでは かみの 直さん 流行だろうか 庁跳するよう

〜ナ オドリョー アソコデ オドッテ タマランガ リョーホー
な 踊りを あそこで 踊って たまらないけど

アミョー　ソロサン
足を　揃えない

B　ヒョイト　ミチャー　デテッテ　ヨカッツガー　マタ　デテ　キタ
ないて　見ては　出てって　良かんが　また　出て　来た

ヘッツダノー
んだね

C　イマー　マタネー　キツクナッタヨーダ
今は　また　強くなったようだ

B　セントウチャーエー　ネテバッカシダッツゾー　ホラ　アレ　イマ
先週はね　寝てばかりだっけ　ほら　あれ　今

C　キツク　ナッタズラ
強く　なったんだろ

A　バカニ　アルキタッタイ(21)　コーユート　ハダー　ノイジャー
ばかに　歩くようになったね　こういうと　肌を　出しては

B　ウノガモリダ
ウノ(人名)が守りだ

C　エー　モリッテ　ソイデ　ゴハンニ　アサハヤク　ナンショ　ウチ
そう　それで　ごはんに　朝早く　とにかく　家

ヘノシュー　オコスッテーネ　ソコラー　アケテネート　アケタリ
の衆を　起すといってね　そこらが　あけてないと　開けたり

タッタリシテ　オコスッター　イッソマー　ネレンテネ　ツカッテ
閉ったりして　起こすと言った　ぜんぜん　あ　寝られないとね。(仕事に)使

ヘモ　ワカリャシンワネー　ヤセマーッテ(22)　ソイデ　アノ　ソノトキ
っても　わかりゃしないよ　やせてしまって　それで　あの　その時

ハイ　ゴハン　タベンダーネ　タベルガガ　マタハー　ウノサガ
もう　ごはんを　食べるんだね　食べるくだけで　また　ウノサ(人名)が

アノ　ビョーニンガ　アトオキテ　タベルト　マタ　オゼンオ　ダイ
あの　病人が　あと起きて　食べると　又　お膳を　出し
～チャーネー　マタ　ナンダッテヨ　クリョーチュッテネ　クリョー
ではね　又　何だってよ　くれ、って言ってね　くれ
～ター　ユワンガ　アノー
とは　言わないが　あの

B　ダス
出す

C　ソノネー　オワンオ　ダスッテヨ　アノマー　コンダ　ニーワ　ナ
そのね　お椀を　出すってよ　あのまあ　今度は　兄は　何
～ンダゾー　オロスダゾー　ソンナナー　タベルトマタ　オナカー
だぞ　(戸棚から)おろすんだぞ　そんなのは　食べると又　おなかを
コワスト　コマルッテ　ユートネー　ソレカラ　ショーガナエーッ
こわすと　困る、って　いうとね　それから　しようがないっ
～テ　キゼワシナイコトー　シテ　イマサラ　マイオ　カッテモ
て　気忙しない事を　いい　今更　繭を　飼っても
ソンダイタナー

A　タシカニ　コノゴロ　キゼワシナク　ナッチャッタイ　ソーヤッテ
たしかに　この頃　気忙しなく　なっちゃったよ　そうやって
オカシー　チンカラカクヨーナ　オドリ　アリャー　オリャー
おかしい　片足跳をするような　踊り　あれは　俺は
イマ　ハヨリズラカッチャー　ソリョー　ミルワイ
今　流行だろうかって　それを　みるよ

B　マー　ヤッパリ
まあ　やっぱり

A ムカシタ チガウ オドリョー オドルデ

昔とは 違う 踊りを 踊るから

B エーデモ ネテ バッカシ イッガイ エーデモ ネテバッカシ

家でも 寝て ばかり いたよ 家でも 寝てばかり

イッガ イマー キックナッテ キタ

いちが 今は 強くなって 来たよ

Y イマノ チンカラカクトワ ドーユーコト

今の チンからかくとは どういうこと?

A イッポー アシデ タッテ イッポン アシデ アゲテル イマノ ハ

一本足で 立って 一本足で 上げてる 今の 流

ヘヤリノホーガ オカシー オドリガネー チガウネー ムカシノ

行の方が 可笑しい 踊りがね 違うね 昔の

オドリタ

踊りとは

C ソーソー チガウネー

そうそう 違うね

A イエオ ミテモネー

絵を みてもね

Y アーソーカ チンカラガイテー ソイデ オドルカシ

あ そうか チンからカイテ(片足跳で) それで 踊るかね

A オドリガ チガウ ムカシャー リョーアシデ タットイチャー

踊りが 違う 昔は 両足で 立ってあいては

テデ ヤッツガエー コーヤッチャー ナンダカ オトコシューン

手で やんがね こうやっては 何だか 男の人が

アノシター イーガ キガチガッテルデ イーガ ナンダカ オカ

あの人は 良いけど 気が違ってるから 良いが 何だか おか

ヘジーヨーナモンダネー　ヘータイ　イッテキタ　ジブンニャー

いいような もんだね　兵隊に　行ってきた(帰った) 時には

ジューオ　コー　キリツヨク　カタ　カッグ　マネオ　シツガ　イ

銃を　こう　規律よく　××　かっぐ　真似を　しちが　今

ヘマ　ヤラン　ソンナフーニ　ジューオ　カツガン　キリツヨク　ピ

やらない　そんなふうに　銃を　かつがない　規律よく　ぴ

～ントコー　カツイジャー　イマ　ヤラン　ソリョー　ヤラン

ーと　こう　担いでは　今　やらない　それを　やらない

ソレヨリ　ナンショコー　オドルマネオ　セルネー　アレオ

それより　とにかく　こう　踊るまねを　するね　あれを

イェオ　ミルラカネー　ネー　アレ　イクラカ　ミン　ミンヨーナ

絵を　みるだろうかね　ね　あれ　いくらか　××　見ないような

フーシテ　ミルダイネ　ネー

振りをして　みるんだね　ね

3．盆唄のこと，亡き夫のこと

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)	
A	武田ふよ	女	明治32年	宮山生れ
B	田辺正一	男	〃 34年	〃
C	堤ふじよ	女	〃 37年	〃
〈Y	山口幸洋	男	昭和11年	新屋町生れ〉

C エー シンゾーガ ナンダネー ヨワルダカネー ナンダカ
えー 心臓が 何だね 弱るのかね 何だか

コエガ ツズカンエー
声が 続かないね

A イマデモ オドルラネー オーギヲオ モッテ オドルヤツモ
今でも 踊るだろうね 扇を 持って 踊るのも

ソーレソレ
〝ソーレソレ〟(唄の名)

C ソーレソレネー
ソーレソレね

Y ソノ オーギオ モッテ ヤルノモ ソレモ ボンニ オドル
その 扇を 持って やるのも それも 盆に 踊る？

C (唄う)〝ソーレソーレ ヨーイトセー オンド トルコガ トリク
〝それそれ よいとせ 音頭 とる子が とりく

~タビレタ ヒロイ オニワデ ソージョーマクラ コラ ソーレソ
たびれた 広い 庭で 神を 祀 こら それそれ

～ーレ　ヨーイトセ〃ツ　チャー　ソレ　ヤルダネー
よいとせ〃　と　いって は　それ　やるんだね

(唄う)〃カイナサレヨ　ウタイナサレ　ウタデ　ゴキリョーガ
〃がいなされよ　歌いなさし　歌で　ご器量が

サガリャセヌ　コレソーレソーレ　ヨーイトセ〃ッテ　ヤッタネ
さがりゃせぬ　これ　それ　それ　よいとせ〃　って　やったね

(唄う)〃ボンニャ　オイデヨ　ヒチガツァ　オイデ　コリャ
〃盆にゃ　おいでよ　七月は　おいで　こりゃ

シンダ、ホトケモ　ボンニャ クル　ホリャ　ソーレソーレ　ヨーイ
死んだ　仏も　盆にゃ　くる　ほりゃ　それ それ　よい

トセ〃
とせ〃

Y　ムカシノヨーナ　ウタダネー　ソリャー
昔のような　歌だね　そりゃ

C　(唄う)ソロタ　ソロタヨ　オドリコガ　ソロタ　イネノ　デホヨ
〃揃った　揃ったよ　踊り子が　揃った　稲の　出穂よ

～リャ　マダソロタ　コレ　ソーレソーレヨイトセ〃
りゃ　まだ揃った　これ　それ それ　よいとせ〃

〃ア　イネノ　デホニワ　デモラガ　アルガ　コラ　ソロタ　オドリコ
〃稲の　出穂には　出むらが　あるが　こりゃ　揃った　踊り子

ヘニャ　モラワ　ナイ　コリャ　ソーレソーレ　ヨーイトセ〃
には　むらは　ない　こりゃ　それ それ　よいとせ〃

ウタワニャー　オモシロイガ　コンキスギテ　ウタヤシン(23)　コドモ
歌わにゃ　面白いが　疲れすぎて　歌えない　子供

～モ　ミンナト　サソッテ　ウタウトキャ　オモシロク　コトシモ
も　みんなと　誘って　歌う時は　面白く　今年も

ボンニ　イッテ　オドッタダ
盆に　行って　踊ったよ

A　コンキードコジャ　ネーヤレ
疲れる　どころじゃ　ないよ

B　アノ　ヒトラジャー　コエガ　ツズカンデ　エライワイ
あの　一人では　声が　続かないから　大変だよ

C　ウチャー　ヨメヤナイ　トテモ　イキャシンガイ　カタマチダッテ
家は　嫁なんか　とても　行きはしないがね　固まったし

オラ　ボンドコジャネーッチュヤ　オレ　イッテイッテ　オドッタ
俺　盆どころじゃない　って言えば　俺　行って（Ref）　踊った

～リシテ　オドッタガイ　クタビレルコダー　クタビレタッタ
りして　踊ったよ　疲れることは　疲れたっけ

キョネンワ　ヨバンガヨバン　イキヌイタダン
去年は　四晩が四晩　行き遂げたんだけど

A　ヨクネー
よくぞ

C　マー　ダイブ　ダメダニ　ヨワッテネー　ヒチジューニ　ヒチジュ
まあ　だいぶ　駄目だよ（体が）弱ってね　七十に　七十

～ーニモナリャー
ルも　なれば

B　マンダズラ　ハチダ
まだだろう（六十）八だ

C　ハチジャ　ナインネ　マー　ニガツノ　ムイカガ　クリャー　マン
八じゃ　ないですよ　まあ　二月の　六日が　くれば　満

ヒチジューダ
七十だ

B ソンネニ ナルカ
そんなに なるか

A ヒチジュー
七十？

C ヘー イマダネー ニガツノ ムイカッチュヤー
もう 今だね 二月の 六日って言えば

B ソーカネ
そうかね

A ワカイワネー
若いわね

B ウン ワカイ
うん 若い

C ワカカ ナイニ マーハイ オトーサンニ ハヤク ナクナラレテ
若くは ないですよ まあもう お父さんに 早く 死なれて

A コッペー コイタデ
苦労 したから

C ヨンジューノ トシニ ナクナラレタ
四十の 年に 死なれた

B ヨンジューダッツカイ アー ナンギオ シタナー
四十だったか あぁ 難儀を したな

C ホント ナンギオ シタデ ワシャー ホント ドンナコトデモ
本当に 難儀を したから 私は 本当に どんなことでも

ガマンガ デキルッチュ コトイネ エー
我慢が できるっていう ことですよ ね

B ソリヤ ソーダ
それも そうだ

B　ソリャ　オンナダデ　ヤリヌイタガ　オトコシュージャ　ヤリヌケ
　　それは　女だから　やり抜いたが　男　では　やり抜け
　～ンゾ
　　ないぞ

A　コッペー　コイタデネー
　　苦労　したからね

C　ソイデ　ゴーモ　ワカンガネー　ゴーガ　ワカンダー　ガマンガ
　　それで　腹も　たたないけれどね　腹が　たたないんだ　我慢が
　デキルモンダイネー
　　できるのでね

Y　オトーサンワ　マタ　ドーシテ　ソーユー　ハヤク　ナンカ　ケガ
　　お父さんは　又　どうして　そういう　早く　何か　怪我
　～カ　ナンカダッタ　ビョーキダッタ
　　か　何かだった？　病気だった

C　オトーサンワ　ショーズラカッタガネ　アノ　コドモガネー　アノ
　　お父さんは　運悪かったんですよ　あの　子供がね　あの
　～ー　センソーニ　イッテヨー　アノー　ムスコガネー　イッテ　ア
　　戦争に　行ってね　あの　息子がね　行って　あ
　～ノー　ゲリノ　ビョーキニ　トッツカレタネー　トッツカレタヨ
　　の　下痢の　病気に　とりつかれたのね　とりつかれたよ
　ソイデ　ワシニ　ドーカ　アー　ジブンデ　アーナル　カゲンダカ
　　それで　私に　どうか　××　自分で　あゝなる　加減なのか
　ワシニ　アノー　トヨハシノ　アノ　ガッコーエ　ニューインシト
　　私に　あの　豊橋の　あの　学校へ　入院して
　～ルデ　アノー　ツツミクンガ　ニューインシトルデ　メンカイニ
　　るから　あの　堤君が　入院しているから　面会に

キテ　クリョーッテ　ユーモンデ　マー　ワシニ　イッテコイッテ
きて　くれって　いうので　まあ　私に　行ってこいって
ユッテ　イッテキテ　クリョー　コンドナー　タイインスルトキャ
言って　行って来て　くれ　今度ね　退院する時は
～ー　オレ　イッテクルデ　イッテクリョーッテ　ヨシ　ホイジャ
俺　行ってくるが　行ってくれって　よし　それでは
ワシ　イッテクルッテ　ワシ　イッテ　キタッツガネー　コンド
私　行ってくるって　私　行って　きた　がね　今度
タイインダッチューモンダデ　ソイジャー　オレ　コンダ　イッテ
退院だっていうので　それでは　俺　今度　行って
クルデナーッチューッテ　イッテ　ニモツウオ　ショッテキタッツワ
くるからなって言って　行って　荷物を　背負ってきたっけ
～イネ　ソレニ　イクラカ　バイキンガネー　キタッツカナンダカ
それに　いくらか　バイ菌がね　来た　か何だか
オトーサン　ヨワカッタモンデ　チョーノ　ヨワイ　タチダモンデ
お父さん（体が）弱かったので　腸の　弱い　性質だから
～ネー　サー　ソレニ　トッツカレテネー　ゲリニ　ナッテヨー　ソ
ね　さあ　それに　とりつかれてね　下痢に　なってね　そ
レガ　モト　ロクマクオ　ヤンダッタモンダデ　アレ　シンガ
れが　もと　肋膜を　病んだことがあるので　あれ　芯が
ジョーブニ　ナカッタモンデネー　タダ　ホント　ナンダニ　メオ
丈夫で　なかったのでね　ただ　ほんとに　何ですよ　目を
アケタナリ　ケッコー　マンジャッタッツガネー
あけたっきり　とうとう　済んじゃったけどね
ソノコロ　コレガ　アッタダネ　デンシャワ
その頃　これが　あったんですね　電車は

C デンシャ ナガッタモンダデ ワシャネー アノ サカベッチュー
電車 なかったので 私はね あの 坂部っていう

トコイ マズ ダンレモ ソンナ ビョーキダモンダデネー キチャ
所へ まず 誰も そんな 病気だからね 来ては

クレンラ ダンレモ キチャ クレン ソノトキャー オーアレガ
くれないでは 誰も 来ちゃ くれない その時は 大荒れが

シテヨー デンキモ ケーチャッテ ナイモンデネー ナクテ ホ
してね 電気も 消えちゃって ないのでね なくて

ヘントー カナシー メオ シタ= ソーヤッテ アノー チューシャ
本当に 悲しい 目を しましたよ そうやって あのう 注射

ヘデモ ヤッテ ヤラニャー ショーガ ナイモンダイネー ワシャ
でも やって やらねば しようが ないのでね 私は

サカベー イッテヨー アノー ムカシャー アノー ウォースギ (2x)
坂部へ 行ってね あのう 昔は あの 大杉

ヘー イッテ
へ 行って

A エー オースギー
ええ 大杉に

C オトーサン コーヤッテ オレニャー ワシ イッテ チューシャ
お父さん こうやって 居れなければ 私 行って 注射

アノ リンゲル アレ ナンチューダカイ カンフルダカイ アレ
あの リンゲル あれ 何ていうのかな カンフル かな あれ

ヘオ ヤッテ ヤルデー アノ モラッテキテ ヤッテ ヤルダイッ
を やって やるから あの 貰ってきて やって やるよって

ヘタラ ハヤク イッテキテ クリョーッチューモンダイ ワシャー
言ったら 早く 行ってきて くれっていうので 私は

アノ サカンベマデ イッター ニリ アルカイ コッカラ ソコ
あの 坂部 まで 行ったよ 二里 あるかな ここから そこ
～イ イッテ モラッテキテヨー ウチーヌイテ ヤッタッツガネー
へ 行って 貰ってきてね (洗濯を)うち続けて やった けどね
マー ジューゴンチ ネナシニ ヨルヒル ネナシニ ワシャーア
まあ 十五日 寝ずに 夜昼 寝ずに 私は あ
～ノ オカイコモ アッツモンデネー エー ネナシニ オッテ
の お蚕も あったのでね ええ 寝ずに 居て
カンビョーシテ ヤッタラ アノ マンダ オンナノコガ ヒトリ
看病して やったら あの まだ 女の子が 一人
イマ オンナノコワ タスカッタガネー タスカッタッタン アノ
今 女の子は 助かったけでね 助かったが あの
～ー =オウナヨ アノ =オウナ オカーサンノ ワシャー アノ
体をこわすなよ あの 体をこわすな お母さんの 私は あの
～コロ ハラウォ ニカイメ= シジツシタトキダイ トテモアノ
頃 腹を 二回目に 手術 した時だよ とても あの
オッカチャンノ カラダガ ツズカンデナー =オウナヨッテ ア
お母さんの 体が 続かないからね 体をこわすなよって あ
～ノー ユッツワイネ ユッツガ アノー ソイデモ ミチコワ
の 言ったよ 言ったが あの それでも 美子は
タスカッタガ ソノ オトーサンワ ナクナッタ ソイデ カンフ
助かったが その お父さんは なくなった それで かんふ
～ル ヤッタケド ワシャー マー ソノ ソノジブンニャ チョット
やったけど 私は まあ その その頃には ちょっと
～モアノ タベルモナナイモンデネー オトーサンワ タベエンモン
もあの 食べるものはないのでね お父さんは 食べられないの

ダイ ショーナイデ コムギウォネー コムギノ トッタ ヤツォー
しかたがないから 小麦をね 小麦の 取った やつを

アノ オクイノ コノシタノ オジーサンガー シンセキン アッ
あの 奥の この下の おじいさんが 親戚が あっ

～タモンダデ アノー ザイショイ イッチャー クンデキテ クレ
たもんで あの 在所(里方)へ 行っては 交換してきて くれ

～ルモンダデヨ コーカンシテ クレルモンダイ ソノ リンゴウォ
るのでね 交換して くれるので その リンゴを

～ネ ユカキー コンナ ユカキー イッパイ モッテキテ オトー
ね ざるへ こんな ざるへ いっぱい 持ってきて お父

～サン タクサン タビョーネ アノー ワシアノ コレオ コレナ
さん たくさん 食べなね あの 私 あの これを これな

～ラ タベレルッタラ マズ オマエ ソンナ ナニョーマズ ドー
ら 食べられるって言ったら まず お前 そんな 何を まず どう

～セルツモリダッテ オカネオ ドーセル ツモリダッテ ソリョー
する つもりだって お金を どうする つもりだって それを

シンパイガッソウイネ アンジャーナイ アノー オトーサンワ
心配 したよ 心配 ない あの お父さんは

チットモ ゴハンワ タベリャシエンダモン ナンニモ タベリャ
ちっとも ごはんは 食べることはできないんだもの 何にも 食べれば

シエンダモンデ コデモカエシ テオカヤシ ソーヤッタッツガネー (25)
し得ないのだから 粉でも返し 手を返し そうやったけれどね

アノ タベテ モウッタッツガ ソーヤッテ ナンシロ ジューゴ
あの 食べて 貰った が そうやって なにしろ 十五

～ンチ エー ヨルヒルナシト ミットモナイ ソノヒガネー
日 えっ 夜昼 なし × みっともない(なりふりかまわぬ) その日がね

エー ジューゴンチ カンビョーシテ ヤッタラ マズヨク オカ
えっ 十五日 看病して やったら まずよく お母
～ーサンノ アノ オッカチャンノ ミガラワ ツズクッツッワネ
さんの あの お母さんの 身は 続くって言ったよ
～ー カラドガ ツズクッテ ユッツワイネ ユッツガネー ジュー
体が 続くって 言ったよ 言ったがね ナ
～ゴンチノ バンガタネ ナンツー タダ メオ アケタッキシネ
五日の 晩方ね 何というか ただ 目を 開けたままね
タダ ビヤクガ トマッチャッテヨ ソノ バンガタ オカシカッ
自然に 脈が 止まっちゃってね その 晩方 おかしかっ
～ツワイネ アノ ハイ オーアレガ シタトキモ ミズガ デチャ
たよ あの もう(娘が)大荒れが した時も(川の)水が 出ちゃ
～ッテネー
ってね
B アーアー ソーダッタネー
あっ そうだったね
C ミタイッチューモンダイ ソレオ ハハッテデテ ミタンネ
見たいっていうので それを × 這って 見た人です
ソリョー コーヤッテ ハッテ デテミルトサイニ マズ オーキ
それを こうやって 這って 出てみると まず 大きい
～ー ミズダナーッテ ユッテ …… コリャ タダ コー デチャ
水だなあって 言って (不明) これは 自然に こう(小便が)出
～ッタッチューモンデネー アノー ソーユヤー ワシン ツイテ
ちゃったっていうのでね あの そう言えば 私が 付いて
ヤルデッタラ マー オリャーノー ソンナアノ キレーニシテ
やるからって言ったら まあ 俺はね そんな あの きれいにして

クレンデモ イーッチューラー コイデ オリャ キレーニシテ
くれなくても 良いっていうでしょう これで 俺は きれいにして

クレンデモ イーッチュードー ソノトキカラ チョットモ シラ
くれなくても 良いっていうぞ その時から 少しも (気が)つか

～ンダーネマーキレーナコター イランデナー チョット フイトイテ
ないんだよ まあ きれいな必要は ないからな 少し 拭いといて

クリョー ソノトキ ユッタワイネ アノナー イマ ナンニモ
くれ その時 言ったよ あのな 今 何にも

ナイトキダン イチバン オレノ イーキモノワ イーキモノワ
ない時だから 一番 俺の 良い着物は 良い着物は

アノー オトサンニ ヤッテクリョーッテ ウチノ アトノ カカ
あのう お父さんに やってくれって 家の あとの かかり

～リオナーエ アリャー ウーサンニ ヤレヨー ミチコガ ヨクナ
をね あれは ウーさんに やれよ ミチ子が よくな

～ッタラ アノー オンナノコガ ネコンドッツガ ヨクナッタラ
ったら あの(ミチ子とは)女の子が 寝こんでいたが (その子が)よくなったら

アノー イッツモ ジョーカイニ キテクッ……ツァイニャ
あの いつも 常会に 着て行く と

アリャー アレニ ウエト シタノ モンペート フワニ コシャ
あれは あれに 上と下の モンペと 簡単服に こしら

～ッテ ヤレヨッテ ユッテ チョット ユイオキダッケガネー
えて やれよって 言って(それが) ちょっとした 遺言だったかね

ソリョー チョットモ オリャー ユイオキダター オモワンダ
それを 少しも 俺は 遺言だとは 思わないんだ

ヨクダモンデネー
慾だものだからね

A アー ソーダワイイェー
ああ そうだよ

C ソーヤッテネー コレ イノマニ オニ サタデ ココエチーット (26)
そうしてね これ 居間に ? 佐太で ここへ ちょ

ノコットッタイネ マー トテモ オマエモ カラドガ ツズカン
残っていたよ まあ とても お前も 体が 続かない

〜デ ココニ ネヨッテ チョットモ ネゾメンデ ココニ ネオッ
から ここに 寝よって ちょっとも 寝つけないで ここに 寝よっ

〜テ ユッツガ トオトッツァ チョットモ オレ ネブカー ナ
って 言ったが お父さん ちょっとも 俺 眠くは な

〜イデ イッショーケンメーダデ オリャー ヨクナッテ モラワニャ
いから 一生懸命だから 俺は よくなって 貰わにゃ

〜ー コマルデッテ ワシ ユッテネー ユッテヨ ソーシテ (27) イノ
困るからって 私 言ってね 言ってさ そうして 居

〜マイ イッテ ナニカ シトッタラ ホイカラ フサガ オッカチャ
間に 行って 何か していたら それから ふさが お母さん

オッカチャ ハヤキテ ミョー オトッチャ アノ メオ メオ
お母さん 早く来て みよ お父さん あの 目を 目を

アケテ オルガ ミヤクガ ナイッチューラ キテミタラ ソーダ
あけて いるが 脈が ないって言うでよ。 来てみたら そうだ

〜ッツ タダ スートット ミャクダケ トマッチャッタ ヨワッチャ
った ただ すうっと 脈だけ 止っちゃった。 弱っちゃ

〜ッタ コーヤッテ マズ オッカチャガ ナンダゾー シンセツニ
った こうして まず お母さんが 何だよ 親切に

アノー ダレガ コンニニ シンセツニ シテクレルモノガ
あの 誰が こんなに 親切に してくれる者が

「アラッチャ　オカゲニ　ヨクナルドーッチュッチャー　ウレシガッ
あろうか　おかげで　良くなるよって言っては　嬉しがっ

～テネー　ソー　イッテ　オッテ　シンジャッタ　ナンニモ　オンニ
てね　そう言って　いて　死んじゃった　何にも　俺に

ユイヨキモ　ナンニモ　ユヤーヘンデネー　ヨクナルトモッタモン
言い置きも　何にも　言わないでね　良くなると思ったので

デ

A　ワカクテ　シンダデネー　ワカクテ　シンダ
若くて　死んだからね　若くて　死んだ

B　ジューガツ　ジューガツ　ハツカダッツナー
十月　十月　二十日だった

C　ヨンジューシデ　シンダ
四十四で　死んだ

B　アー　ソーダッツう　キータダケニ　ヨンダッチュッチャー　バン
あい　そうだったろう　聞いただけで　呼んだって言っては　みん

～ナニ　ホメラレタデ　ソイデモ　オリャー　コドモニ　ソーイッテ
なに　ほめられたから　それでも　俺は　子供に　そう言って

マー　アンナー　チカラガ　カナシーコター　カナシーガ　アノー
まあ　あんなのは　力が　悲しいことは　悲しいが　あの

オトッチャンワ　ナンダドー　アノー　シニバナン　サイタト　ユ
お父さんは　何だよ　あの　死に花が　咲いたと　言

～ーモンダ　アンナヒダー　ヒトノ　ワルイヒトダデ　ナンダー　ア
うもんだ。　あんな人は　人の　悪い人だから　何だよ　あ

～ノー　アレン　ナルワ　アタリマエダッテ　ユワレルト　アンナ
の　あれに　なるのは　当り前だって　言われると　あんな

イッショー サワバズ ヒトノ イーヒトダ ウラー フント タ
一生 人の 良い人な 俺は 本当に 食
ベモノガ タベレナンズッテ ミナ ユッテクレルガ ナー ヒト
べものが 食べられなかったって みな 言ってくれるが ね 人
ニ ユワレタター アノナー ターヘンナ チガイダ アレ アレ
に 言われた とは(言われるよりは) あのね たいへんな 違いだ あれ あれ
ガ シニ シニバナガ サイタト ユーモンダデ コドモニ チカ
が 死に 死に花が 咲いたて 言うので 子供に カ
ラー オトスナヨ ショーガナイデナーッテ オレ ユッタッツガ
を 落すなよ しかたがないんだからなって 俺 言ったが
ネー ホント ソーダデネー ミンナ ソーイッテクレテ マー
ね 本当に そうだからね みんな そう言って くれて まあ
タベモノガ タベレナンダッテ アノシトガ シン ナクナッタッ
食べものが 食べられなかったって あの人が 死ん… なくなった
テ ユッタラ タベモノガ タベレナンダッテ ソーイッチャー
て 言ったら 食べものが 食べられなかったって そう言っては
クレツモンダイネー ワシワ ソレダキャー ソレダキャー ソノ
くれたのでね 私は それだけは それだけは その
ウレシカッタドーッチューッテ ワシン ソイデ コノフミデモネー
うれしかった ぞって言って 私が それで この組でもね
ショージキデ アノー シトノイー シトダッタン タダ ヒッコ
正直で あの 人の良い 人だったが ただ (?)
ミチョーウォ アレ チョードアレネー ナニカノ ハイキュー
を あれ丁度 あれね 何かが 配給
ジブンデイネ ショージキナ ヒトデッチューッテ ニネンダッツカ
の頃でね 正直な 人でって言って 二年だったか

サンネンカ　ヤラシテ　クレテネ　オラマー　ソーイッタ　オトッ
三年か　やらして　くれてね　俺まあ　そういった　お父さ

～チャ　トテモ　ウチガ　タマランデ　ヤッテケレンデッタラ　アノ
ん　とても　家が　たまらないから、やって行けないからって言ったら　あの

ナンダイ　コノ　クビノ　シューワ　ウチガ　ヤレニャー　アノ
何ですよ　この　紐の　象は　家が　やれなければ　あの

イッテ　アンノミヤイ　イッテ　ヤッテ　ヤルデー　シゴトワー
行って　天の宮(屋号)へ　行って　やって　やるから　仕事は

ナンシロ　ヤッテ　クレニャー　ショーガナイッチューデ　タダ
なにしろ　やって　くれなくては　しようがないって言うから　ただ

ミンナガ　ソーイッテ　オシツケラレテ　マタ　ヤルヨーニ　ナッ
みんなが　そう言って　押しつけられて　また　やるように　な

～タッチュッチャー　ソー　イッツワイヤ　マー　ソイデモ　ソレナ
たって言っては　そう　言ったのさ　まあ　それでも　それな

～ラ　ケッコーダッチュッテ　ワシモ　ソーイッテネー　ムリニ　ワ
ら　けっこうだって言って　私も　そう言ってね　無理に　私

～シモ　ソーワ　イワナンダン　マズ　マタ　オトッチャ　コトシ
も　そうは　言わなかったが　まず　又　お父さん　今年

モライ　イッタラ　ミンナガ　ソーイッテ　クレルデッテ　マー
貰いに　行ったら　みんなが　そう言って　くれるからって　まあ

ソイデモ　ソイダモンデ　ウレシカッツガネー　エー　ワシャー
それでも　それだから　うれしかったけどね　ええ　私は

ハイ　コドモニ　ソーイッテ　ユイキカシタニ　ショーガナイデ
もう　子供に　そう言って　言い聞かせたんですよ　どうしようもないから

ヨ　アー　イクネーモダッツ　オレヨリ　ヒトツ　シタデ
あ　いく神(人名)もだった　俺より　ひとつ　下で

C ヒトガイーデ ヒトガイーデッテ アノ ショージキダッツ
人が良いから 人が良いからって あの 正直だった

B アー タダシャー ヒト ノンキナ ヒトダッツデエー
あ 人、 のんきな 人だったからね

A コッペコイタネー スミオキッチャー スミオ ヤイタデネー
苦労をしたね 炭を切っては 炭を やいたからね

C ヤッパリ ナンショ コンナキワ ヨキデ スミオヤイッチャーネ
やっぱり とにかく こんな木は 斧で 炭を やいてはね

エー ヨキデ ウケワチョー キラニャー キレンラ ソイデ
ええ 斧で ウケワケを わらねば 切れないでしょ、それで

ヨルガ ヨナカデモ ワシャー ハイ ジューニジハンデモ イチ
夜が 夜中でも 私は もう 十二時半でも 一

ジデモ グット オーキナ ヤマイヨー ムカシャー アカツ
時でも ぐっと 大きな 山にね 昔は ×××

アカショー ツケチャー アリクデエー
松明を つけては 歩くからね

A エー アカショー ツケテ
ええ 松明を つけて

C ソコ アブンナカ ナイッテネー アカショー ワットイチャー
そこ 危なくは ないってね 松明を 割っといては

ツケテ
つけて

B ヤッパリ ソノ ランプワ ハイ センジチェー
やっぱり その ランプは もう 戦時中

A ランブナンテ モッテナガッテ ツケサセナンダデネー ムカシノ
ランプがなくて もったいながって つけさせなかったからね 昔の

シュ ー ワ
家は

B ソリャ センジチューダッタモンダデ ナンシロ エーカン ナカ
そりゃ 戦時中だったので なにしろ 良い加減(かなり) なか

ヘッ ツゼ
ったよ

C ソイダモンダデ ヨルガ ヨナカデモ ソノ ケブトメイカニャー
それだから 夜が 夜中でも その 煙止め に行かなくては

ナランダ カマエネ トッテモ トーイ イチリモ アル ヤマー
ならないのだ 釜へね とても 遠い 一里も ある 山を

A ヒトノ イカンヨーナ ホーダネー エー
人の 行かないような 方だね ええ

B ソーダソーダ
そうだ そうだ

C ソレ ヤリヌイタデネー
それ やり抜いたからね

A オカシーホーダデネー コノ
おかしい 方 だからね この

B ニジュー
二十

A ハシンダノ オクノホーダネー
ハシンダ(地名)の 奥の方だね

B ニジューネンノ ソレデ ナンシロ ジューガツノ イツカダカニ
二十年の それで なにしろ 十月 の 五日だかに

オーマーマギガ キタッツガ ソレオ ミタトキナー
? が 来た が それを みたときにね

C ソレオ ミタワケ エー
それを みたわけだ ねえ

B アノジブン オーキナ コイオ トレ トレルダケデ ワシラン
あの頃 大きな 鯉を ×× とれるだけで 私らが

オーキナ コイオトッタ チョードビョーキガ ワルイッチュー
大きな 鯉をとった 丁度 病気が わるいっていう

ワケデ アンタントコ カクリオ シテキタッツデ
わけで あんたの所の 隔離を してきたから

C エー ソイダモンデ サーテ ソレオ アトデモ ヒトッテ マズ
えい それだから さて それを あとでも 一人で まず

ショードク ヒトッテデ ヤッテヨー アノ
消毒 一人で やってさ あの

B ウーン ソーダッタダー
うん そうだったのだ

C フントニ ホント ワリアイ ホカノ シューガ ナンチューダカ
本当に 本当 わりあい ほかの 家が 何というのか

ドージョーシテ クレルモンダイネー ソイデ ワシャー フント
同情して くれるのでね それで 私は 本当

ヒトッテ ショー ショードクヤナンカオ ヤッテ カナシミオ
一人で ××× 消毒 など を やって 悲しみ を

シタデネー ソイデ ナニガ アッテモ ホレダデ フントニ
したからね それで 何が あっても それだから 本当に

ワルイ ビョーキガ アリャー ソノシトントコイ オリャー
悪い 病気が あれば その人の所へ 俺は

イッテミテ ヤリタイ ソーユーダネ ソイデ ドンナ コトデモ
行ってみて やりたい そういうんだよ それで どんな ことでも

オリャー　ガマンガ　デキルゾー　ソー　イッチャー　ユーガネー
俺は　我慢が　できるよ　そう言っては　言うけどね

A　コッペー　コイツデネー
苦労　した　からね

C　ソイデモ　イマー　オカゲデネー　ウンガ　イーゲネ
それでも　今は　おかげでね　運が　いいわ

A　ソーソー
そうそう

C　トテモ　イマワ　ウンガ　イー
とても　今は　運が　良い

B　アー　ウンガ　イー　イマー　イー
あ〜　運が　良い　今は　良い

C　ヨメモ　イーシ　エー　アノ　フサモネー　マーエー　イマモ　ウ
嫁も　良いし　ね　あの　フサもね　まあね　今も　家

〜チニ　チート　アノ　チョイ　ヘヤガ　ナケニャ　ショーガナイッ
に　少し　あの　ちょっとした　部屋が　なければ　困る　っ

〜テ　ダッテクレテ　マー　コドモガ　ソレオ　オバーチャン　ウン
て　連れてくれて　まあ　子供が　それを　おばあちゃん　運が

〜ガ　イーデ　ナガイキョー　セニャー　ダメダッチューワイ　アノ
良いから　長生きを　しなければ　だめだっていうよ　あの

ナニョー　ヤリ　モジニ　ヤルジャー　ナイシネ　ワシン　マタ
何を　××　？　やるのでは　ないしね　私が　また

ホント　ワカイシェーノ　キニイランヨーナコト　ユーコト　イ
本当に　若い衆の　気に障らないようなことを　いうことが　い

ヘヤナモンダデネー　マズ　ユーナリニ　ナットルデネー　ホントニ
やだものだからね　まず　いうなりに　なってるからね　本当に

B ウン ソリャー マー トシガヨリャー ソレガ イチバンヨイダニ
うん それは まあ 年が 寄れば それが 一番 良いんですよ

C ソレガ イチバンダモノネー エー アー ドケー ナニョー イ
それが 一番なものね えっ あっ どこへ 何を 極

～ウェルダカ チョットモ シランチェヤ イモートガ ソレオネ
える のか 少しも 知らないといえば 妹が それをね

マズ ホントニ イーナー アネントー アンキナモンダッチェー
まず 本当に 良いなあ 姉さん達は 気楽なもんだっていう

～ガ ソレデ ナケニャー ウマカー イカンヨッテ ユーダーホレ
が それで なければ うまくは 行かないよって いうんだよね

ウラワ ホント シンセツニ ダイジニシテ モラヤ マー ダイ
俺は 本当に 親切に 大事にして もらえば まあ 大事

～ジニ ベツニ シテモラワンデモ イーガ フツーニ シテモライ
に 別に(大事に)してもらわなくても 良いが ふつうに して貰え

～サイセリャー ウレシートモットルチェーガネー
さえ すれば うれしいと思っているっていうけどね

B マー ヒャクショーオサー アノ ウチウチジャ マンダ ヨメガ
まあ 百姓 どさ あの 家々では まだ 嫁が

ナシダニ ……ガ チート ヤルヨーニ ナリャー マー ヘタナ
何だよ 少し やるように なれば まあ 下手な

クチオ ダサットソーダンガ アリャー ソーダンシテヤル
口を 出さないで 相談が あれば 相談してやる

ホカノコトー
他のことは

C ソーダソーダ ソーダソーダエー
そうだ そうだ

B　マー　ソノヘンガ　イチバン　エーニ
まあ　そのへんが　一番　良いですよ

C　イチバン　エーニ　ソイデ　チョットモ　イマントコジャー　オリャ
一番　良いですよ　それで　少しも　今んとこでは　俺

ヘー　フントニエー　アノー　クナコトモ　カナシーコトモ　ナイ
は　本当にね　あの　苦なことも　悲しいことも　ない

チョットモ　エー　ソイデ　ウチガ　イチバン　ヨクテ　ウチガ
少しも　ね　それで　家が　一番　よくて　家が。

マズ　ザイショガ　アソコダガ　トマッタコター　ナイデネ　イッ
まず　在所(里方)が　あそこだが　止ったことは　ないからね(里へ)行っ

テ　ウチガ　イー　ウチガイー　ハイ　ウチー　イットキャーハイ
て　家が　良い　家が良い　もう　家へ　行くときは　もう

トコー　ノベテ　クレチャー　アルシ　マゴガ　ハイ　ソコイ
床を　のべて　くれては　あのし　孫が　もう　そこへ

ヤクバノシタイ　マゴガ　デトルガネー　オンナノコワ　アノコガ
役場の下に　孫が　出ているがね　女の子は　あの子が

ハイ　トコーマズ　ノベテクレテ　オバーチャン　ハイ　ネルカイ
もう　床をまず　のべてくれて　おばあちゃん　もう　寝るかい

ノベテクレン　マタ　アゲテクレル　トコーマズ　ヤリヌイタデネ
のべてくれる　また　上げてくれる　床を　まず　やりないたからね

ヘー　アノコワ　ハイ　ソーユーヨーナ　モンダイ　ワシャーマー
あの子は　もう　そういうような　ものだよ　私は　まあ

ドコイ　イッテモ　トマッタコター　ナイ　ウチー　トマッタコタ
どこへ　行っても　泊まったことは　ない　家に　泊ったことは

ヘー　ナイダデネー　マー　ホンナ　マゴガ　トコー　ノベテアル
ないんだからね　まあ　そんな　孫が　床を　のべてある。

～タッテ イージャナイカッチュッチャー ニーガ ユッタッテモネ
て言ったって 良いじゃないか っていっては それが 言ったってね

～ー オリャーマー ウチガ イチバン イーデ イクヨッチュッチャ
俺は もう 家が 一番 良いから 行くよって言っては

～ー スグ キチャッタ トマッタコター ナイ ソネーナラ ホイ
すぐ 来ちゃった 泊ったことは ない そんな風なら それ

～デモ ウチノ ネーサンラ ウレシーライッチュッチャー ミンナ
でも 家の 姉さんら 嬉しいだろう って言っては みんな

～ン ユッチャー クレルガネー
が 言っては くれるがね

B ウン ソーダイ
うん そうだよ

C ソリャ ウチホド イートカナイゾイッチュッチャー
それっ 家ほど 良いとこは ないぞ って言っては

A アニガワ オトナシー コダイエー
長男は おとなしい 子だね

B マゴガエ ウン イーコダ
孫がね うん 良い子だ

C マゴガネ マゴモ オトナシー コダ アノカー マー ツイマー
孫がね 孫も おとなしい 子だ あの子は まあ つい まあ

ズーット ナニ ユッタコター ナエー
ずうっと 何(ひとつ) 言ったことは ない

A オトナシー コダエ
おとなしい 子だね

C オトナシー コダ アレカ
おとなしい 子だ (?)

B サー コリャ マー コレデ ナンダカネ アノー ヤッパリサ

さあ これも まあ これで 何だかね あの やっぱりさ

コーデモ

ここでも（山口に、この座談会を終るようにうながすことば）

A ウレシカッタネー ヤタラノ ヒトガ オリャー ウタイエン

うれしかったね やたらの 人が 居れば 歌うことは出来ないのに

B オカイコーサ カッテルシサ

お蚕をさ 飼ってるしさ

C マー ロクニ ウタヤーシンダ

まあ ろくに 歌いはしないよ

A ソイデモ イクラカ ウタッテ クレリャーネー イーダデネー

それでも いくらか 歌って くれれば ね 良いんだからね

B ホントニ ウレシカッタ

本当に うれしかった

Y オヒルン ナッチャッテ マー ホントニ ユックリネー シテ

お昼に なっちゃって まあ 本当に ゆっくりね して

イタダイテ アリガトーゴザイマシタ

頂いて ありがとうございました

B ココーサ カイコン ナッタデ マタ クワトリーイカニャーナラン

ここはさ かいこ に なったから 又、桑取りに 行かねばならない

Y モーシワケアリマセンデシタネー イツマデモ チョイトアノー

申し訳ありませんでしたね いつまでも ちょっと あの

ナマエオネー ユッテクダサイ ジブンデ ユッテクレン オハサ

名前をね 言って下さい 自分で 言って下さい おばさ

ヘンカラ

人から

A ワシノ ナオカネ
私の 名をかね

Y ウマレタトシオ ウマレタトシ
生れた 年を 生れた年

A ワシャー ワシノナワ ユワンデモイーガ コノオバサンノナウォ
私は 私の名は 言わないでもいいが このおばさんの名よ

C ユヤー イージャン オフササ
言えば 良いじゃない おフサさん

A ワシカネ ワシャー メージサンジューニネンノ クガツノ ツイ
私かね 私は 明治32年の 9月の 1日

～タチ ウマレタ コノ オバサンガ ダイショーダモンダデ オバ
(に) 生れた。この おばさんが (歌の方の) 大将 だから おば

～サンノ ナダワイネー
さんの 名(をきくのが先)だよ

Y ソイダケド オバサンノネー
だけど おばさんのね

C ユッテ クロー ッテ
言って くれって

Y ナマエオ ジブンデ ユッタ コエオネー ココエ トリタイワケ
名前を 自分で 言った 声をね ここへ 取りたいわけ

C ソーイッタ ナマエオ ユヤー エーワ オフササ
そう言った 名前を 言えば 良いよ おフサさん

A ワシャーマー ドーデモ イーガ
私は まあ どうでも 良いが

B マー ナマエオサエ ユヤー イーダ タケダフサ
まあ 名前を さえ 言えば 良いのだ 竹田フサ(と)

Y オバサンノ ナマエワ ナンチューダネ
おばさんの 名前は 何というんだね

A タケダツサ
武田ふさ

Y ソイジャーコンダ オジサン
それでは 今夜は おじさん

B ワシワ メージサンジューヨネンウマレノ サンガツヨーカウマレ
私は 明治34年生れの 3月 5日 生れ

タナベ ショーイチダンネ
田辺 正一 だがね

Y サンガツ ヨーカデスカ ソイジャー オバサンワ
3月 8日ですか それでは おばさんは

C メージネー メージサンジューキューネンノ メージサンジュー
明治ね 明治39年の 明治3年

キューネン ニがつ ムイカウマレダガネー ツツミ フジヨ
2月 6日 生れだがね 堤 ふじよ

Y アリガトーゴザイマシタ ミンナ ココワアノー セーレキニワ
ありがとうございました みんな ここは あの 正式には

カミナカノコーッテユーウケ シモナカノコートカ
上中の字って いうわけ? 下中の字とか

B エーダダ ナカノコーデス アザワネ ナカノコーデス
ええ ただ 中の字です 字は私 中の字です

注記

1. ニヤケの語源は「煮焼き」つまり「煮たり焼いたり」だという。
2. ヒトナルは「成人する」，ヒトネンは「育てる」に相当する。
3. 「泣いては」の意味でナッテモといっていることは確かであるが，このいいかたは武田ふささん独特のものだろうと，田辺さんはいう。
4. 「買わずにいて」をカワッコネイテ，「行かずにいて」をイカッコネイテという。カワッコナイイテ，イカッコナイイテの変形だろう。
5. このあたりのケーは［kɛː］のように母音エは広く感じられる。
6. 「川上」は大字の名称であるとともに，田辺正一さんのお宅の家号でもある。
7. 「仕事をする」「働く」事をイゴク（動く）という。
8. どこかにトノという名のよく働いた女の人がいるところから，生れた子供にトノという名をつけた話である。生れる子に，どこかの長生き婆さんの名をつけるとか。これに類する習慣は富山村には，ちょいちょいある。
9. この時，武田ふささんの息子夫婦，初夫さんと，やす子さんが外から帰ってきた。
10. 「直した」をトーイタと通常いう。トエタ或いは，トエータは，その融合形。
11. 畝に創（麦の葉）をやることをも，カウという。
12. ケーの母音エは，かなり広い。
13. コズと言っているのかもしれないが，コスときこえた。
14. このネトッソは，提さん自身の（自分の）動作であるゆえに疑問がある。田辺さんに伺ってみると，確かに，ツと言っているが，「言いまちがい」に近い言い方であって，それゆえにそのあとで，ネトッタネトッタとくりかえして「言いなおして」いるのだという。そしてこのように「言いまちがえる」ことは提にはありうるという。
15. この個所には，は，きりと発音上の区切りがつけられた。
16. このオボエタは，オボエツと言いかえることはできない。

17. カミガイトは「上垣津」と書き、武田ふささん宅の家号である。
18. このイは、中舌的にきこえた。
19. この促音も、ダデのダ[dä]の母音が落ちたしのと思うが、ラシグ的なものと考えてよいかどうかわからない。
20. このセは[ʃi]に近くきこえる。
21. 「はじめて歩くようになる」ことをアルキタツ、赤ん坊が「はじめてしゃべるようになる」ことをシャベリタツという。
22. 「やせる」を強調気味に、また、やや侮蔑気味にいうヤセマールの中止形。「しゃべる」に対するシャベリマール、「食べる」に対するタベマール等がありうる。
23. ウタヤシンは、本来「歌いはしない」の意。ここでは「歌えない」の意味になっている。
24. ウォースキのように語頭で[wo]があらわれたことは不可解。
25. ソーの発音は[sɔ:]のような母音がうかがわれる。
26. 富山村地内の水没した部落の名。親戚のことか。
27. [sɔ:]のような発音。

(付) ↓と示した符号は、特に著しいイントネーションの感じられる下降を意味する。

下降調の文末助詞ナー、ネーがつく場合、その直前の拍がいかなる場合(たとえば長音拍であっても)でも卓立する。このような文末アクセントは、遠州、三河山村地帯の特徴的事項である。

昭和55年 1月

国立国語研究所

東京都北区西が丘3丁目9番14号
電　話　東京（900）3111(代表)

国立国語研究所刊行書一覧

国立国語研究所報告

1	八丈島の言語調査	秀英出版刊	品切れ
2	言語生活の実態 ——白河市および付近の農村における——	〃	〃
3	現代語の助詞・助動詞 ——用法と実例——	〃	2,000円
4	婦人雑誌の用語 ——現代語の語彙調査——	〃	品切れ
5	地域社会の言語生活 ——鶴岡における実態調査——	〃	〃
6	少年と新聞 ——小学生・中学生の新聞への接近と理解——	〃	〃
7	入門期の言語能力	〃	〃
8	談話語の実態	〃	〃
9	読みの実験的研究 ——音読にあらわれた読みあやまりの分析——	〃	〃
10	低学年の読み書き能力	〃	〃
11	敬語と敬語意識	〃	〃
12	総合雑誌の用語（前編） ——現代語の語彙調査——	〃	〃
13	総合雑誌の用語（後編） ——現代語の語彙調査——	〃	〃
14	中学年の読み書き能力	〃	400円
15	明治初期の新聞の用語	〃	品切れ
16	日本方言の記述的研究	明治書院刊	〃
17	高学年の読み書き能力	秀英出版刊	〃
18	話しことばの文型 (1) ——対話資料による研究——	〃	〃
19	総合雑誌の用字	〃	〃
20	同音語の研究	〃	〃
21	現代雑誌九十種の用語用字 (1) ——総記および語彙表——	〃	〃
22	現代雑誌九十種の用語用字 (2) ——漢字表——	〃	〃
23	話しことばの文型 (2) ——独話資料による研究——	〃	〃
24	横組みの字形に関する研究	〃	〃
25	現代雑誌九十種の用語用字 (3) ——分析——	〃	〃
26	小学生の言語能力の発達	明治図書刊	2,100円
27	共通語化の過程 ——北海道における親子三代のことば——	秀英出版刊	品切れ
28	類義語の研究	〃	〃

29	戦後の国民各層の文字生活	秀英出版刊	400円
30-1	日本言語地図 (1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
30-2	日本言語地図 (2)	〃	〃
30-3	日本言語地図 (3)	〃	〃
30-4	日本言語地図 (4)	〃	〃
30-5	日本言語地図 (5)	〃	〃
30-6	日本言語地図 (6)	〃	〃
31	電子計算機による国語研究	秀英出版刊	450円
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) ——親族語彙と社会構造——	〃	品切れ
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	350円
34	電子計算機による国語研究(II) ——新聞の用語用字調査の処理組織——	〃	品切れ
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) ——マキ・マケと親族呼称——	〃	450円
36	中学生の漢字習得に関する研究	〃	5,000円
37	電子計算機による新聞の語彙調査	〃	品切れ
38	電子計算機による新聞の語彙調査(II)	〃	2,800円
39	電子計算機による国語研究(III)	〃	700円
40	送りがな意識の調査	〃	1,500円
41	待遇表現の実態 ——松江24時間調査資料から——	〃	900円
42	電子計算機による新聞の語彙調査(III)	〃	1,200円
43	動詞の意味・用法の記述的研究	〃	5,000円
44	形容詞の意味・用法の記述的研究	〃	3,000円
45	幼児の読み書き能力	東京書籍刊	4,500円
46	電子計算機による国語研究(IV)	秀英出版刊	700円
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3) ——性向語彙と価値観——	〃	700円
48	電子計算機による新聞の語彙調査(IV)	〃	3,000円
49	電子計算機による国語研究(V)	〃	900円
50	幼児の文構造の発達 ——3歳～6歳児の場合——	〃	品切れ
51	電子計算機による国語研究(VI)	〃	1,000円
52	地域社会の言語生活 ——鶴岡における20年前との比較——	〃	1,800円
53	言語使用の変遷 (1) ——福島県北部地域の面接調査——	〃	2,500円
54	電子計算機による国語研究(VII)	〃	1,000円
55	幼児語の形態論的な分析 ——動詞・形容詞・述語名詞——	〃	品切れ
56	現代新聞の漢字	〃	3,000円

57	比喩表現の理論と分類	秀英出版刊	6,000円
58	幼児の文法能力	東京書籍刊	5,500円
59	電子計算機による国語研究(Ⅷ)	秀英出版刊	1,300円
60	X線映画資料による母音の発音の研究 ——フォネーム研究序説——	〃	2,500円
61	電子計算機による国語研究(Ⅸ)	〃	1,300円
62	研究報告集 (1)	〃	1,700円
63	児童の表現力と作文	東京書籍刊	6,000円
64	各地方言親族語彙の言語社会学的研究 (1)	秀英出版刊	2,000円

国立国語研究所資料集

1	国語関係刊行書目 (昭和17～24年)	秀英出版刊	45円
2	語彙調査 ——現代新聞用語の一例——	〃	品切れ
3	送り仮名法資料集	〃	〃
4	明治以降国語学関係刊行書目	〃	〃
5	沖縄語辞典	大蔵省印刷局刊	3,500円
6	分類語彙表	秀英出版刊	1,800円
7	動詞・形容詞問題語用例集	秀英出版刊	1,700円
8	現代新聞の漢字調査 (中間報告)	〃	500円
9	半店雑談 安愚楽鍋用語索引	〃	1,500円
10	方言談話資料(1) ——山形・群馬・長野——	〃	6,000円
10-2	方言談話資料(2) ——奈良・高知・長崎——	〃	6,000円

国立国語研究所論集

1	ことばの研究	秀英出版刊	品切れ
2	ことばの研究 第2集	〃	〃
3	ことばの研究 第3集	〃	〃
4	ことばの研究 第4集	〃	1,300円
5	ことばの研究 第5集	〃	1,300円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭和24年度	品切れ	12	昭和35年度	350円
2	昭和25年度	〃	13	昭和36年度	160円
3	昭和26年度	160円	14	昭和37年度	220円
4	昭和27年度	160円	15	昭和38年度	250円
5	昭和28年度	品切れ	16	昭和39年度	品切れ
6	昭和29年度	200円	17	昭和40年度	250円
7	昭和30年度	品切れ	18	昭和41年度	300円
8	昭和31年度	〃	19	昭和42年度	300円
9	昭和32年度	〃	20	昭和43年度	品切れ
10	昭和33年度	〃	21	昭和44年度	〃
11	昭和34年度	〃	22	昭和45年度	〃

23	昭和46年度	450円	27	昭和50年度	700円
24	昭和47年度	450円	28	昭和51年度	非売品
25	昭和48年度	品切れ	29	昭和52年度	〃
26	昭和49年度	600円	30	昭和53年度	800円

国語年鑑 秀英出版刊

昭和29年版	品切れ	昭和42年版	品切れ
昭和30年版	〃	昭和43年版	〃
昭和31年版	〃	昭和44年版	1,500円
昭和32年版	〃	昭和45年版	1,500円
昭和33年版	〃	昭和46年版	2,000円
昭和34年版	〃	昭和47年版	2,200円
昭和35年版	〃	昭和48年版	2,700円
昭和36年版	〃	昭和49年版	3,800円
昭和37年版	〃	昭和50年版	3,800円
昭和38年版	〃	昭和51年版	4,000円
昭和39年版	〃	昭和52年版	4,500円
昭和40年版	〃	昭和53年版	4,600円
昭和41年版	〃	昭和54年版	4,800円

日本語教育教材

1 日本語と日本語教育	国立国語研究所 文化庁	共編	大蔵省印刷局刊	650円
2 日本語と日本語教育 ——文字・表現編——		〃		850円
3 日本語の文法（上） ——日本語教育指導参考書4——		〃		450円
4 日本語教育の評価法 ——日本語教育指導参考書6——		〃		450円
高校生と新聞	国立国語研究所 日本新聞協会	共編	秀英出版刊	280円
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会 国立国語研究所	共著	金沢書店刊	品切れ
国立国語研究所三十年のあゆみ	——研究業績の紹介——		秀英出版刊	1,500円

日本語教育教材映画一覧

（各巻16ミリカラー，５分，日本シネセル社販売）

巻	題名	プリント価格
第１巻	これはかえるです――「こそあど」+「は～です」――	30,000円
第２巻	さいふはどこにありますか――「こそあど」+「が～ある」――	〃
第３巻	やすくないです，たかいです　――形容詞とその活用導入――	〃
第４巻	なにをしましたか　――動詞――	〃
第５巻	しずかなこうえんで　――形容動詞――	〃
第６巻	さあ，かぞえましょう　――助数詞――	〃
第７巻	うつくしいさらになりました　――「なる」「する」――	〃
第８巻	きりんはどこにいますか　――「いる」「ある」――	〃
第９巻	かまくらをあるきます　―移動の表現――	〃
第10巻	おかねをとられました　――受身の表現１――	〃
第11巻	どちらがすきですか　――比較・程度の表現――	〃
第12巻	もみじがとてもきれいでした ――「です」「でした」「でしょう」――	〃
第13巻	きょうはあめがふっています ――「して」「している」「していた」――	〃
第14巻	そうじはしてありますか――「してある」「しておく」「してしまう」――	〃
第15巻	おみまいにいきませんか　――依頼・勧誘の表現――	〃
第16巻	なみのおとがきこえてきます　――「いく」「くる」――	〃

（第１巻～第３巻は，文化庁との共同企画・VTR価格1/2インチオープンリール21,000円，3/4インチカセット20,000円）

NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE PUBLICATIONS

SOURCE X-III

TEXTS OF TAPE-RECORDED CONVERSATIONS IN JAPANESE DIALECTS

(Volume 3)

CONTENTS

Foreword

Purpose and Outline

Text

Part 1 : AOMORI PREFECTURE (Hamlet Usitate, City Aomori)

Part 2 : NÎGATA PREFECTURE (Hamlet Motirô-Orî, City Kasiwazaki)

Part 3 : AITI PREFECTURE (Hamlet Nakanokó, Village Tomiyama, District Kitasitara)

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
TOKYO JAPAN

1980